ソ連邦共産党史 2



●ソ連邦共産党史翻訳委員会訳

国民文庫＝435b

大月書店

国民文庫

435b

ソ連邦共産党史

最新版

（2）

ソ連邦共産党史翻訳委員会訳



大月書店

История Коммунистической партии Советского Союза
(Издание четвертое, дополненное)
издательство политической литературы
Москва · 1972

凡例

一　本書は、『ソ連邦共産党史』(増補第四版)、モスクワ、政治文献出版所、一九七二年刊の翻訳である。

一　本教程の共同執筆者はつぎのとおりである。

編集責任者　ベ・エヌ・ポノマリョフ(アカデミー会員)、故イ・エム・ヴォルコフ(教授)、エム・エス・ヴォーリン(歴史学博士)、ヴェ・エス・ザイツェフ(歴史学博士)、ア・ペ・クチキン(歴史学博士)、イ・イ・ミンツ(アカデミー会員)、エリ・ア・スレポフ(歴史学博士)、ア・イ・ソボレフ(哲学博士)、ベ・エス・テリプホフスキー(歴史学博士)、ア・ア・チモフェエフスキー(歴史学博士)、ヴェ・エム・フヴォストフ(アカデミー会員)。

一　本訳書では、原書を三冊に分けて刊行する。本書はその第二分冊である。

一　本文中に引用されているレーニンの著作の参照ページは、原書では第五版全集によっているが、本訳書では、読者の便宜を考えて、大月書店版の邦訳全集によってあげてある。

一　原書でゴチック活字で組んである箇所は本訳書でもゴチック体にし、原書でイタリック体のものは本訳書では傍点付にし、イタリック体を隔字で組んだものは、訳文では傍丸をつけてあ

る。

一　本文中に〔　〕でかこんで六号活字で組んであるものは、訳者のつけた注である。

目次

第一一章　国を社会主義的に工業化し、農業の全面的集団化を準備するための党の闘争　(一九二六—一九二九年)

ソ連邦共産党史（1）目次

ソ連邦共産党史（3）目次

第八章　社会主義革命の発展とソヴェト権力の強化をめざす党の闘争

（一九一七年一〇月—一九一八年）

1　ソヴェト国家の創設のためにたたかう党。最初の社会主義的改革

十月社会主義大革命が勝利し、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）が樹立された結果、ロシアのすべての階級と住民層の立場には根本的な変化が生じた。プロレタリアートは支配階級になった。プロレタリアートを中心に、都市と農村の勤労大衆、まず第一に貧農が結束した。人民の大多数を占める、労働者、兵士、勤労農民は、ソヴェト権力に味方していた。この強大な陣営を指導したのは、ボリシェヴィキ党であった。一方、ソヴェト権力の敵の陣営は、打倒された地主、資本家、富農、彼らの利益の代弁者である帝政派、カデット、エス・エル、メンシェヴィキ、無政府主義者、ブルジョア民族主義者からなっていた。

十月革命は、共産党の活動の状況と性格を一変させた。共産党は、世界最初の労働者・農民の社会主義国家の支配政党となった。党は、新しい歴史的な課題を負わされた。ソヴェト国家を建

設し強固にすること、社会主義の原則にもとづいて社会を改造すること、敵対する資本主義の包囲からの国土防衛を組織すること、他の国々のプロレタリアートとのむすびつきをかため、これに援助をあたえることが、それであった。

ロシアのプロレタリアートは社会主義の建設をきわめて複雑かつ困難な情勢のもとではじめようとしていた。社会主義革命が勝利をおさめていたのは、一国だけであった。社会主義への道がきりひらかれるのは、史上はじめてのことであった。ロシアは経済的には比較的おくれた国で、農民人口が大多数を占めていた。戦争はつづいていた。戦争は国を荒廃させ、疲弊させていた。プロレタリアートのなかには、国家を統治し経済を運営する準備のできた基幹活動家はほとんどいなかった。打倒された搾取者の地主と資本家は、プロレタリア独裁（ディクタトゥーラ）に必死になって抵抗した。国際資本が、彼らを支持していた。

ロシアのプロレタリアートは、多数の敵の反抗を断固として鎮圧していかなければならなかった。これらの敵は、ソヴェト権力とたたかうために、陰謀や暴動をくわだて、サボタージュや中傷や挑発やあやふやな動揺分子の買収に訴えた。十月革命が勝利した直後早々に、反革命派はソヴェト権力を打倒しようとくわだてた。ペトログラートから北部戦線地区に逃げだしたケレンスキーは、カザック部隊をかき集め、クラスノフ将軍を先頭にたてて首都に進撃させた。クラスノフはガッチナを占領し、一〇月二八日、ペトログラート攻撃を開始した。一〇月二九日、エス・エル右派やメンシェヴィキのつくった「祖国および革命救済委員会」と偽称する反革命組織が、ペトログラートで士官学校生徒の暴動をおこした。それと同時に、士官学校生徒がモスクワで暴動をおこした。反革命派は、ソヴェト権力にたいして武力闘争を開始したのである。

ソヴェト権力は、敵の反抗を武力で鎮圧しなければならなかった。党とソヴェト政府は、すばやく、断固とした行動をとった。反ソヴェト暴動はその日のうちに鎮圧された。一日おいて一〇月三一日、プルコヴォ付近でクラスノフ将軍のカザック部隊が撃破された。一一月二日の夜半、白衛派の反徒にたいするモスクワ労働者の勝ち戦はおわった。ソヴェト権力を武力で倒そうとする反革命派の最初のくわだては、粉砕された。

ケレンスキーとクラスノフの反ソヴェト反乱の最中に、鉄道従業員組合全ロシア執行委員会（ヴィクジェリ）の先頭に立っているエス・エルとメンシェヴィキは、いわゆる「社会主義統一政府」をつくることを要求した。彼らは、ソヴェト権力を一掃するために、この「政府」内で多数をにぎろうと目論んでいた。

ボリシェヴィキ党中央委員会は、ヴィクジェリと交渉することに同意した。レーニンの考えでは、この交渉は、ケレンスキーにたいする軍事行動の外交的なカムフラージュとなり、党がソヴェト権力の敵を粉砕するために革命勢力を組織する時をかせぐ余地を、あたえるはずであった。協定の条件として持ち出されたのは、エス・エルとメンシェヴィキがソヴェト権力をみとめ、第二回ソヴェト大会で選出された全ロシア中央執行委員会に政府が責任を負うのをみとめることであった。中央委員会は、この交渉に、カーメネフを団長とする代表団を派遣した。だが、カーメネフは党の指令にそむいた。彼はエス・エルとメンシェヴィキの要求に譲歩して、ボリシェヴィキには取るにたりない役割しかあたえられていなかった「社会主義統一政府」をつくることに賛成し、政府首班の地位にあるレーニンを更迭することにも反対しなかった。

カーメネフの行動は、大多数の中央委員の憤激を買った。しかし、中央委員会にはカーメネフ

の同類もいた。ジノヴィエフ、ルィコフ、ノーギン、ミリューチンがそうであった。カーメネフとジノヴィエフの降伏主義は、十月革命前の彼らの裏切り方針の続きであった。カーメネフ、ジノヴィエフ、ルィコフとその支持者たちは、社会主義革命の成功と、ロシアで社会主義の勝利が可能なことを信じていなかった。彼らは、すでに打倒されたエス・エルやメンシェヴィキの反革命諸党に降伏することを提案したが、これは、ソヴェト権力を放棄して、ブルジョア議会制度に、資本主義に復帰することを意味していた。

ヴィクジェリとの交渉は、レーニンの正しさを裏書きした。ヴィクジェリは、口先では中立を声明していたが、実際にはケレンスキーを支持し、ソヴェト政府の革命的な方策をサボタージュしていた。ヴィクジェリと交渉をつづけることは、党とソヴェト権力に損失をおよぼしかねなかった。

一九一七年一一月のはじめに、党中央委員会は、「社会主義統一政府」をつくることで、エス・エルおよびメンシェヴィキと協定をむすぶことをきっぱりと拒否した。党中央委員会は、カーメネフ―ジノヴィエフ一派に犯罪的な活動をやめるよう要求した。しかし反対派は、中央委員会の大多数の意志にしたがわず、全ロシア中央執行委員会の会議の席上で、交渉を中止するという中央委員会の決定に公然と反対投票して、不法にも党規律に違反した。そこで、レーニンを先頭とする中央委員会は、反対派に組織破壊活動をやめるよう要求して、最後通告をつきつけた。これに答えて、カーメネフ、ジノヴィエフ、ルィコフ、ノーギン、ミリューチンは、党の政策に不賛成なので中央委員会から脱退する、と声明した。これと同時に、ノーギン、ルィコフ、ミリューチン、テオドローヴィチは、政府から脱退した。

ひとにぎりの降伏主義者や臆病者が、党と国家の重要な地位から逃亡したことは、敵の陣営を狂喜させた。敵はソヴェト権力の没落を予言した。だが、彼らの期待ははずれた。党中央委員会は、降伏主義者の脱走行為を断固として非難した。ボリシェヴィキ派の提案で、カーメネフは全ロシア中央執行委員会議長の職をとかれ、全ロシア中央執行委員会議長にはヤ・エム・スヴェルドロフが選出された。中央委員会は人民委員会議を強化した。人民委員会議にはゲ・イ・ペトロフスキー（内務人民委員）、ア・ゲ・シリフテル（食糧人民委員）、ペ・イ・ストゥチカ（司法人民委員）、エム・テ・エリザロフ（交通人民委員）の、不屈なボリシェヴィキ古参党員がはいった。地方の党組織は、中央委員会が降伏主義者にたいしてとった強硬措置を、こぞって支持した。中央委員会は、全党員とロシアの全勤労階級にたいするアピールのなかで、「ロシアにはソヴェト政府以外の政府は存在してはならない」と、厳然と声明した（全集、第二六巻、三一一ページ）。

十月革命が勝利した直後の数ヵ月は、社会主義革命が巨大な勝利をおさめた時期であった。ソヴェト権力は日ましに強固になっていき、ブルジョアジーの必死の反抗と反革命派の行動を断固として鎮圧した。一九一七年一一月の後半、水兵と兵士の革命部隊は、ソヴェト政府の命令を受けてモギリョフで旧軍隊の最高総司令部を一掃した。一一月末には、ペトログラートでカデットの反革命陰謀が一掃された。ドンと南ウラルでおきたカザック上層部の蜂起も首尾よく鎮圧された。反革命派は人民大衆のあいだに足場をもっていなかった。ソヴェト権力は比較的たやすく搾取者の反抗を鎮圧し、国内戦線で勝利をおさめた。広大な国土にわたる社会主義革命の勝利の行進を、レーニンは「ソヴェト権力の勝利につぐ勝利」と呼んだ。

反革命派を鎮圧し、降伏主義者を粉砕しながら、党は、他方では、新しいソヴェト国家を創設するために大々的な活動をおこなった。この事業は困難なものであった。党にはソヴェト国家の行政機関、経済機関、軍事機関その他の機関の具体的な組織形態の知識がなかった。経験をかりてくる当てはなかった。このような国家が創設されるのは、これが最初であった。

党は、精力的にこれらの困難の克服に当たった。党は、戦闘的で、団結していた。党は国内で、ソヴェト国家の先頭に立つ能力のある唯一の力であった。党組織は、すべての県の中心地、大多数の郡庁所在地、大工場、いくつかの村にあった。党は、自分のすぐれた人材をソヴェト機関内に送った。共産党員は、中央や地方のソヴェト権力機関、人民委員部、政府諸機関の先頭に立った。

革命とソヴェト国家の建設とをつうじて、レーニンの政治家として、組織者としての天才が、特にめざましく発揮された。人民委員会議議長として、彼は、中央機関の創設を直接に指導し、全国にわたるソヴェト機関の建設を軌道にのせた。レーニンは新しい型の政治家を具現していた。彼は、人民大衆の創造力を深く信じ、彼らと固くむすびついていた。「大衆の生きいきとした創造力こそ、新しい社会の最大の要因である」と彼は言っている(全集、第二六巻、二九三ページ)。

十月革命は、広範な人民大衆をめざめさせ、自主的な政治生活に立ちあがらせた。彼らの革命的な積極性は、数多くの大会や会合や集会にはっきりあらわれた。レーニンは、勤労者の春の流れのようにわきあがる集会民主主義を、彼らが新しい生活条件を討議する端緒的な形態であり、自分の国家を建設し、これを統治するうえでの第一歩であると呼んだ。全ロシア・ソヴェト大会、

県・郡のソヴェト大会や、会合や集会で、ボリシェヴィキは、十月革命の歴史的な意義や、ソヴェト権力の本質、ソヴェト権力の政策と法令を説明した。大衆の政治的啓蒙のために、党は新聞『プラウダ』、『イズヴェスチャ』、『デレヴェンスカヤ・ベドノター』を広く活用した。

党は、大衆の革命的エネルギーと創造的活動を、ソヴェト国家建設の方向へむけていった。ブルジョア・地主の旧国家機構（警察機構、官僚機構、軍事機構、司法機構）は破壊され、それにかわって、新しい国家機構、すなわちプロレタリア国家機構が創設された。革命直後に、ブルジョア臨時政府の省は廃止された。ソヴェト権力は、人民委員部を創設した。臨時政府の手先は更迭され、旧権力の地方機関である、市議会やゼムストヴォ参事会は、解散された。労働者・兵士・農民代表ソヴェトがいたるところで、全権をもった唯一の国家権力機関となった。古い裁判所やブルジョア民兵のかわりに、ソヴェト人民裁判所や労働者民兵がつくられた。反革命やサボタージュとたたかうために、全ロシア非常委員会が設置され、エフ・エ・ジェルジンスキーがその長にすえられた。

帝政派、カデット、エス・エル右派、メンシェヴィキその他の反革命分子は、ソヴェト国家の建設とソヴェト国家機関の仕事を、あらゆる手段でぶちこわそうとした。彼らはもとの省、銀行、郵便局、電信局その他の官吏のサボタージュを組織した。ブルジョアに買収され、彼らと固くむすびついている官吏と高級職員とは、ソヴェト権力に服従することをこばんでいた。彼らのサボタージュのため、さらに新しい困難がくわわった。党は大衆に呼びかけて、何千というすぐれた労働者、水兵、兵士を国家機関に参加させ、人民委員部の機構を創設した。官吏のサボタージュは粉砕された。

至難な事業は、新しい武装兵力を創設することであった。旧軍隊は、その兵士がソヴェト権力の味方になったにもかかわらず、外敵から国家を守ることを保障できるものではなかった。長期の戦争に疲れはてた軍隊は、はやくからその戦闘力をうしなっていた。兵士は帰心にかられていた。軍隊内の革命的秩序をたもち、講和がむすばれるまで戦線を維持するために、ソヴェト権力は軍隊の民主化をおこなった。あらゆる階級と称号は廃止され、指揮官を全部兵士が選挙する制度その他が実施された。一九一八年一月から、旧軍隊の復員がはじまった。一九一八年一月一五日、人民委員会議は『労農赤軍について』という布告を採択した。赤軍は志願制にもとづいて創設されることになった。新しい革命的軍隊の中核となるのは、ソヴェト権力を死守する覚悟のある労働者と貧農であった。赤軍にはいるのは、勤労者のなかのもっとも自覚した人々であった。赤軍を組織し編成する仕事には、エヌ・ヴェ・クルィレンコとエヌ・イ・ポドヴォイスキーのはいっていた全ロシア委員会があたった。レーニンを先頭とする党は、ソヴェト共和国の武装兵力を創設する事業全体を指導した。

十月革命は、社会主義的諸課題の解決に当たるとともに、ついでにブルジョア民主主義革命を完遂した。どのブルジョア革命も、ロシアの十月社会主義革命のしたように断固として徹底的に封建的秩序を粉砕したものは、これまで一つもなかった。ボリシェヴィキ党に指導されるプロレタリアートは、権力を獲得すると、並はずれた早さと大胆さで、中世の遺物を一掃してしまった。土地についての布告は土地所有における農奴制の遺物を根こそぎにした。身分上の区分や身分上の呼び名（貴族、僧侶、商人、小市民など）はすべて廃止され、万人に共通の名称、すなわちロシア共和国市民という名称がさだめられた。ソヴェト権力は、信教の自由を宣言した。教会は国

家から分離され、学校は教会から分離された。婦人は社会生活のすべての分野で男性と同権をもつようになった。

十月革命は非ロシア民族の抑圧と不平等をおわらせた。イ・ヴェ・スターリンを長とする民族問題人民委員部がつくられた。一九一七年一一月二日にソヴェト政府によって公表された『ロシア諸民族の権利の宣言』は、ロシアのすべての民族の自由な発展と完全な同権を法制的に確立した。すべての民族には、分離して独立の国家を創設することをもふくむ自決権が保障された。一九一七年一二月、ソヴェト政府は、ウクライナとフィンランドとの国家的独立を承認した。ツァーリ政府と臨時政府が他国と締結した不平等条約は、すべて破棄された。人民委員会議は、『ロシアと東方のすべての回教徒の勤労者へ』というアピールで、回教徒の民族的文化施設、その慣行と信仰を自由で不可侵であると宣言し、回教徒に自分たちの生活をきずいていくうえでの完全な自由を保障した。こうしてソヴェト権力は、諸国民間の関係における原則的に新しい政策——諸国民の完全な平等の政策——を宣言し、これによって、国際帝国主義と植民地主義に強力な打撃をあたえた。

ブルジョアジーとその手先であるメンシェヴィキとエス・エルとは、当時、ボリシェヴィキはロシア国家を破壊しているとか、すべての民族がボリシェヴィキから離れていくとかとわめいていた。これはボリシェヴィキ党にたいする中傷であった。党は、ソヴェト国家を、自由な民族共和国の自由意志による同盟にもとづいて創設することに当たっていたのである。ロシアの解体をめざしていたのは、勤労者とソヴェト権力の凶悪な敵であるブルジョア民族主義者であった。彼らは、ロシアに住んでいる民族同士を反目させようとねらっていた。だが、ロシアのすべての民

族の労働者と農民は、十月革命を歓迎した。彼らは自分の手に権力をにぎるやいなや、ソヴェト政府との連帯感とこの政府を支持する決意とを、ソヴェト政府に表明した。

一九一七年一二月、ハリコフで第一回全ウクライナ・ソヴェト大会がひらかれ、ウクライナをソヴェト共和国と宣言した。ブルジョア民族主義的な中央ラーダは法律の外におくと宣言された。大会は、ソヴェト・ウクライナはソヴェト・ロシアとの緊密な同盟をうちたてる、とおごそかに声明した。ソヴェト・ウクライナは、最初のソヴェト民族共和国であった。一九一八年三月までに権力がソヴェトにうつったのは、ベロルシア、エストニアであり、ラトヴィアのうちドイツ軍に占領されていない部分、クリミア、モルダヴィア、バクー市、ヴォルガ沿岸地方の少数民族地区、トゥルケスタン、さらにカザフスタンの大部分であった。

ロシアの少数民族地区の人民大衆の闘争を指導したのは、ボリシェヴィキ組織であった。ボリシェヴィキ党は、ロシアに住んでいるあらゆる民族の勤労階級のすぐれた分子を党に吸収して、彼らを社会主義とプロレタリア国際主義の事業に献身的な革命家にそだてあげた。ウクライナではエフ・ア・セルゲーエフ（アルチョム）、ゲ・イ・ペトロフスキー、エヌ・ア・スクルィプニク、ヴェ・ヤ・チュバーリ、ア・ゲ・シリフテル、アゼルバイジャンではエム・アジズベコフ、アルメニアではア・エフ・ミャスニコフ（ミャスニキャン）、エス・ゲ・シャウミャン、グルジアではペ・ア・ヂャパリッゼ、エフ・イ・マハラッゼ、ゲ・カ・オルヂョニキッゼ、エム・ゲ・ツハカーヤ、ラトヴィアではペ・イ・ストゥチカ、リトワニアではヴェ・エス・ミツキャヴィチュス－カプスカス（ミツケヴィチ－カプスカス）、カザフスタンではア・テ・ヂャンギリヂン、エストニアではヴェ・エ・キンギセップ、ダゲスタンではウ・デ・ブイナクスキー、その他多く

の働き手がそれである。これらの人たちは、闘争できたえられ、勤労者の厚い信頼を得ていた党活動家であった。

党とソヴェト権力は、人民のもっとも切実な経済的必要と文化的欲求を満足させた。資本家と地主を収奪することによって、労働者・農民の生活条件は即時できるかぎり改善させられた。ソヴェト権力は、食糧業務をその手におさめ、まず第一に労働者とその家族に食料品を保障した。公営事業はソヴェトの運営にうつされた。何十万という労働者家族がじめじめした地下室やきゅうくつなバラックから、これまでブルジョアや地主のものであった設備のととのった家にうつった。労働者・農民とその子弟は、自由に教育を受けられるようになった。学校教育と医療は無料になった。ツァーリや金持の大邸宅は人民の財産となり、人民集会場、サナトリウム、博物館にあてられた。労働者の労働条件や労働保護は改善された。八時間労働日が実施され、労働者や職員が病気になったり、労働能力をうしなったり、失業したりしたばあいの保険法令が発布されたのである。

ボリシェヴィキ党は、勤労農民に、労働者階級がもっともたよりになる同盟者であり、指導者であり、また彼らの利益の擁護者であることを実際に証明した。プロレタリアートは権力を獲得すると、革命的な速さと熱心さで、農民のもっとも切実な経済的要求を実現した。農民は地主の土地をただで手にいれ、地主や資本家の圧制から解放された。農民大衆は、土地についての布告を実施することは、自分たちが断固としてソヴェト権力を支持し、都市労働者と同盟し、ソヴェト内で彼らと協力することにもとづいてはじめて可能であるという、自覚をますますいだくようになった。労働者階級と貧農の同盟は、強固になった。ソヴェト権力は、ますます勤労者の大多

数の共感と支持を得るようになった。

一九一七年末、ペトログラートで農民代表ソヴェト臨時大会と同第二回全ロシア大会とがひらかれた。これらの大会でエス・エル右派は、農民代表をボリシェヴィキに対立させようとした。だが、それは徒労で、ボリシェヴィキは、エス・エル右派が勤労農民の利益の裏切者であることを暴露した。大会は、ソヴェト政府の布告と政策を承認し、農民代表ソヴェトと労働者・兵士代表ソヴェトを統合することに賛成した。単一のソヴェトの創設は、プロレタリアートの非プロレタリア勤労大衆にたいする政治的指導とソヴェト権力の強化とを保障していた。ボリシェヴィキの提案と農民大会の要請にしたがって、エス・エル左派の代表（コレガーエフ、プロシャン、シテインベルク）が人民委員会議にはいった。ボリシェヴィキ党はエス・エル左派がぐらつきやすいことを知っていたが、農民のかなり多くのものがまだ彼らを信頼していることや、彼らがソヴェト権力を支持すると声明していることなどを考慮して、彼らを政府に参加させた。これによってソヴェト権力の反対者の力はよわめられ、エス・エル右派とメンシェヴィキの反ソヴェト政党は打撃をこうむった。

党は、憲法制定議会の力をかりてソヴェト権力を打倒しようとする反革命派の企みを挫折させた。憲法制定議会の選挙は、十月革命前につくられた政党別名簿によって、一九一七年一一月におこなわれた。この選挙は、人民のかなり多くのものが、まだ社会主義革命の意義を理解するようになっていない状況のもとでおこなわれた。エス・エル右派はこれに乗じて、首都や工業中心地から離れた地方や県で、大多数の票をあつめるのに成功した。

憲法制定議会がひらかれる前夜、全ロシア中央執行委員会は、レーニンの作成した『勤労被搾

取人民の権利の宣言』を採択した。宣言は、国内のすべての権力がソヴェトに帰属すると声明し、平和についての布告、土地についての布告、その他の布告を確認し、ソヴェト政府がとっている対外政策に賛同した。全ロシア中央執行委員会は、一九一八年一月五日にひらかれた憲法制定議会に、この宣言の採択を提案した。しかし、憲法制定議会内で多数を占める反革命派は、宣言の審議を避け、ソヴェト権力や人民の大多数の意志に公然と敵対し、その反ソヴェト的な本質を暴露した。一月六日、全ロシア中央執行委員会は、憲法制定議会を解散した。人民はこの措置に賛成した。

憲法制定議会にたいする党と政府の政策は、一九一八年一月一〇日にひらかれた労働者・兵士代表ソヴェト第三回全ロシア大会に支持された。この大会には、この時ひらかれていた農民代表ソヴェト第三回全ロシア大会が合流した。統合された全ロシア・ソヴェト大会は、ソヴェト政府の政策に賛同し、『勤労被搾取人民の権利の宣言』を採択した。大会は、十月社会主義革命の獲得物であるソヴェト制度の創設を確認した。宣言にはこうのべられている。「ロシアを労働者・兵士・農民代表ソヴェト共和国と宣言する」。ロシア・ソヴェト共和国は、各民族ソヴェト共和国の連邦として、自由な諸民族の自由な同盟にもとづいて創設された、と。

『勤労被搾取人民の権利の宣言』は、世界史のもっともすばらしい文書の一つである。これは、ブルジョア革命の宣言とは原則的にちがっている。一八世紀のフランス・ブルジョア革命期の『人および市民の権利宣言』は、自由、平等、友愛を宣言した。だが実際には、ブルジョアジーの権力が強化し、資本主義が確立し、人民大衆の搾取がつよまったのである。勤労者には、自由も、平等も、友愛もあたえられなかった。十月社会主義革命によって布告された『勤労被搾取人

民の権利の宣言』は、史上はじめて、勤労諸階級の真の意志を表明し、彼らの権力を確立し、そして人間による人間の搾取を廃絶し、社会主義を建設し、階級を廃止するという目標をかかげたのである。

革命はひろがり深まっていった。党は、ソヴェト国家制度の創設に当たると同時に、社会の社会主義的改革をめざす労働者階級の闘争を指導していた。十月革命の結果、官有の（地主と資本家の国家にぞくしていた）企業は人民の財産になった。社会主義的経済制度がうまれた。しかし、ソヴェト権力が樹立された直後には、生産手段の大部分は、いぜんとしてブルジョアジーの手中にあった。社会主義生産を組織するためには、プロレタリアートは、国家権力を獲得したのち、ブルジョアジーから銀行、鉄道、工場、炭鉱、鉱山をとりあげて、これを全人民の財産にしなければならなかった。

一九一七年一一月の中ごろ、ソヴェト権力は、国立銀行をその手におさめ、ついで私営銀行を国有化し、銀行業が国家の独占であることを布告した。ブルジョアジーの経済力は大いに弱められた。同時に、ツァーリと臨時政府がむすんだ外債はすべて破棄された。他の国家にたいするロシアの債務は、およそ一六〇億金ルーブルにのぼっていた。ロシアの勤労者は、国際資本への金融的隷属から解放された。

至難な事業は、資本主義的所有を社会主義的所有に変えることであった。資本家は、ソヴェト権力の経済施策に必死になって抵抗した。彼らは、工場の操業を停止したり、原料や製品のストックをかくしたり、労働者の賃金支払をおくらせたりした。彼らは生産を混乱させたり、経済的破局をおこさせたりしようとやっきになった。資本家をおさえ、彼らのサボタージュを粉砕する

必要があった。これは、彼らを即時収奪することによってなしとげることができた。しかし、権力をにぎったとき、プロレタリアートには経済運営の経験もなかったし、国の経済生活の指導を即時自分の手におさめることのできる経済機関もなかった。そこでソヴェト権力はいきなり、工業全体の国有化を布告するようなことはせずに、資本家の所有していた企業で労働者統制を実施した。

一九一七年一一月一四日、ソヴェト政府は、『労働者統制令』を発布した。この法令の実施は、工場委員会に負わされた。一九一八年のはじめまでに、労働者統制はほとんどすべての工業企業で実施された。ブルジョアジーのサボタージュを打破し、工場を反革命の足場にしようとするブルジョアジーのくわだてにうちかつことができた。労働者は、企業の経営活動を研究し、生産を管理することをまなんだ。彼らのなかから、組織者である経営活動家が輩出した。工場委員会は、労働者統制を整備するとともに、企業家の管理活動や経営活動にますます干渉するようになり、彼らを企業の首脳部から排除して、生産の管理をその手におさめた。

一九一七年一一月末、ソヴェト権力は資本主義的大工業の国有化に着手した。資本主義的諸関係は根本的に破壊された。国有化された企業は、ソヴェト国家の所有となり、社会主義的企業となった。一九一八年の春までに、資本主義的大工業、すなわち石炭産業、鉄鋼業、石油産業、化学工業、機械工業、繊維工業の大部分と、製糖業全体が国有化された。運輸、商船隊、外国貿易も国有化された。これは、レーニンの適切な言葉によると、「資本にたいする赤衛軍的攻撃」であった。ブルジョアジーの経済力は根底から破壊された。ソヴェト国家は、国民経済の中枢を掌握した。

生産の社会主義的社会化を指導するため、また国民経済を国家管理するために、一九一七年一二月一日、人民委員会議のもとに最高国民経済会議がつくられた。一九一七年一二月いらい、州、県、郡に国民経済会議がつくられはじめた。その設立には、労働組合が積極的に参加した。これらの国民経済会議は、徐々に経済の運営をその手に集中し、ソヴェト国家の経済組織者としての機能をはたすようになった。最高国民経済会議が創設され、銀行、鉄道、大工業が国有化されたので、ソヴェト権力は、新しい社会主義的な国民経済の建設にとりかかることができるようになった。

党は、幾百千万の勤労大衆の創造力を自由に発揮させて、彼らを自覚ある歴史的活動に立ちあがらせた。十月革命が勝利した直後の数ヵ月は、地主と資本家の圧制を脱した人民大衆のなかに、力と革命的エネルギーの無尽蔵のたくわえがひそんでいることをしめした。いたるところで、面目を一新しつつある生活がわきたっていた。国家を統治することができるのは金持だけだという、何世紀にもわたって搾取者の広めてきた、ばかげた偏見はうちくだかれた。ソヴェト国家を創設した労働者・農民は、国家を統治することを根気づよくまなんだ。革命の炎のなかで、ソヴェト権力の基礎である、労働者階級と勤労農民大衆の同盟が強固になっていった。党は、自分の力にたいする確信を大衆にいだかせた。一九一七年一二月に、レーニンはつぎのように書いた

――

「勝利は、被搾取者の側にあるだろう。なぜなら、彼らの背後には生活があり、数の力があり、大衆の力があり、自己犠牲的な、主義主張をもった、誠実な、前方をめざす、かつ新しいものの建設にめざめつつあるすべての人々のくみつくせない泉の力があり、いわゆる

『庶民』の、労働者・農民のエネルギーと才能の膨大なたくわえの力があるからである」（全集、第二六巻、四一三ページ）。

2　戦争離脱のための闘争。ブレスト講和。ロシア共産党（ボ）第七回大会

ソヴェト国家の安定は、国内の階級間の力関係にかかっているだけでなく、国際情勢にもかかっていた。ソヴェト権力の強化をなによりもさまたげていたのは、ドイツとの戦争状態であった。党は、ソヴェト権力のうまれた最初の日から、平和のためのたたかいを積極的に展開した。平和についての布告は、すべての交戦国に全面的な民主主義的講和――無併合・無賠償の講和を締結するよう提案した。しかし、協商国（イギリス、フランスその他）も、アメリカも講和交渉を拒否したので、全面講和の締結は不可能になった。そこでソヴェト政府は、民意にしたがって、ドイツおよびその同盟国との講和交渉にとりかかった。

交渉は、一九一七年一一月二〇日、ブレスト－リトウスク（ブレスト）ではじまった。一二月二日には休戦協定が調印された。しかし、講和条約の交渉中に、ソヴェトの国に略奪的・屈辱的な講和を押しつけようとするドイツ帝国主義者の意図があきらかになった。彼らは、ドイツ軍が占領したポーランド、リトワニア、ラトヴィア・ベロルシアの一部を隷属させようとねらっていた。彼らは、ウクライナ・ラーダとひそかに気脈をつうじて、ウクライナをソヴェト・ロシアからひきはなし、ウクライナ人民を隷属させるつもりでいた。

国内情勢と国際情勢は、強力で危険な侵略者であるドイツ帝国主義の前から後退し、苛酷な講和条件にもおうじるよう命じていた。荒廃した国と、疲れきった軍隊には、戦争をつづけることはできなかった。労働者と農民の大多数には、革命戦争をおこなうために必要な、士気の高揚はなかった。祖国と革命を救うには、ソヴェト権力を強化し、帝国主義的侵略者から国を守ることのできる赤軍をつくるために、平和な息つぎを必要としていた。戦争継続をのぞんでいたのは、ブルジョアジーと地主、白衛派の将軍と士官であった。帝政派とカデットからエス・エルとメンシェヴィキにいたる、あらゆる色合いの反革命派は、講和交渉に反対してきちがいじみた扇動をおこなっていた。ソヴェト共和国をドイツ帝国主義との戦争にかりたてようとした内外のブルジョアジーは、革命の息の根をとめて旧制度を復活させるために、ソヴェト権力の敗戦に乗じようと思っていたのである。

党は、戦争と平和の問題に早急に解答をくださなければならなかった。

一九一八年一月八日、レーニンは、党中央委員と第三回ソヴェト大会ボリシェヴィキ代議員の会議で、併合主義的単独講和の即時締結の問題についてのテーゼを発表した。しかし、レーニンは多数票を得なかった。事態は一連の地方の党委員会（モスクワ地方委員会、ウラル地方委員会、ペトログラート委員会その他）がドイツとの講和交渉をうちきるように提案したので、いっそう厄介になった。多くの党活動家は、革命的空文句にふけって、帝国主義ドイツにむかって革命戦争を布告するよう主張した。彼らは、国内の反革命との闘争でソヴェト権力がおさめた最初の成功に有頂天になっていて、これが彼らの気分につよい影響をあたえていた。レーニンは、講和条約の問題で最初は党中央委員会でも大多数の票を得ていなかった。トロツキー、ブハーリンとそ

一九一八年一月二七日、ドイツ側代表は、ドイツ軍の占領地域をロシアからうばいとることを規定した講和条約に調印するよう、最後通告として要求してきた。当時ソヴェト講和代表団の団長となっていたのは、トロツキーであった。彼は、交渉を極力引きのばし、最後通告をつきつけられたばあいには、即時講和条約に調印するという明確な方針を、レーニンからあたえられていた。一月二八日、レーニンは、特別電報で講和条約締結の必要をもう一度指摘した。だが、トロツキーは、人民委員会議議長の指令にそむいた。彼は、一月二八日(二月一〇日。以下新暦)、ドイツ代表にむかって、ソヴェト政府はドイツのもちだしてきた条件で講和条約に調印することを拒否する、と声明した。トロツキーはまた、ソヴェトの国はドイツとの戦争を停止して、自国軍隊の動員を解除する、と通告した。これは、ソヴェト共和国にとって危険きわまる結果をはらむ、裏切り声明であった。

ドイツ政府はトロツキーの声明に乗じた。一九一八年二月一八日、休戦条件に違反して、ドイツ軍司令部は、全戦線にわたって攻撃をはじめた。旧軍隊の残存部隊は、敵の大軍の圧力に対抗できなかった。ドイツ軍は大した抵抗も受けずに、数日間で、ラトヴィアとエストニアの全部、ウクライナの大部分を占領し、ドヴィンスク、ミンスク、ポロツク、プスコフその他を占領した。敵はペトログラートをおびやかした。

レーニンがこのようななりゆきを予想していたのは正しかったことがわかった。ドイツ軍の攻撃は、ドイツ帝国主義者がソヴェト権力を倒して、ロシアを自国の植民地にすることを目標としていることを示した。ソヴェトの国には、極端な危険がせまってきた。一九一八年二月二一日、人民委員会議は、レーニンの書いた『社会主義の祖国は危険にさらされている!』という、檄(げき)を

の支持者たちは、ドイツがもちだした講和条件の受諾に反対し、ドイツ軍は攻撃することはできないだろうとか、ごく近いうちにドイツでは革命がおこるだろうとか、主張した。

党内には、きわめて困難な情勢が生じた。党の幹部に、息つぎを得るために苛酷な講和条件を受けいれる必要があることを証明し、冒険主義的でソヴェト共和国を破滅にみちびく、トロツキーとブハーリンの戦術を暴露するためには、レーニンの最大の自制力と不撓不屈が必要であった。レーニンは、こう説明した——

「根本的な変化は、いまではロシア・ソヴェト共和国が創設されていることである。すでに社会主義革命をはじめたこの共和国を維持することが、われわれにとっても、国際社会主義の見地からしても、すべてのものに優先している。いまロシアが革命戦争のスローガンをかかげることは、空文句や空いばりを意味するか、さもなければ、客観的には帝国主義者がわれわれにしかけたわなにかかることにひとしいだろう。帝国主義者は、いまのところまだ微々たるものにすぎないわれわれを、帝国主義戦争の継続にひきずりこんで、できるだけ安あがりな仕方で若いソヴェト共和国を粉砕しようとのぞんでいる」(全集、第二六巻、四六二ページ)。

講和交渉の決裂を未然に防ぐために、レーニンは、党中央委員会で、講和交渉を極力引きのばすという決定を採択させ、また第三回ソヴェト大会に、戦争と平和の問題の解決にあたってソヴェト政府に無制限の権限をあたえた決定を採択させた。中央委員会でレーニンの立場を支持したのは、ヤ・エム・スヴェルドロフ、エフ・ア・セルゲーエフ(アルチョム)、イ・ヴェ・スターリンその他であった。

国民に布告した。中央委員会とソヴェト政府は、ソヴェト共和国を守るよう、全党員、全労働者、全農民に呼びかけた。

党とソヴェト政府の呼びかけは、勤労大衆のあいだの革命的エネルギーを奮い立たせた。この数日間に赤軍には、何万という先進的な労働者や復員兵士が、志願兵としてくわわった。新しく編成された部隊は、ただちに敵をむかえて、歯まで武装したドイツ軍の強襲をねばりづよく撃退した。プスコフ、レヴェリ、ナルヴァ付近では、激戦がくりひろげられた。これらの戦闘にくわわっていたのは、若い赤軍の最初の連隊、ペトログラートとエストニアの赤衛兵、バルチック艦隊の水兵、またラトヴィアの狙撃兵がはいっていた旧軍隊の革命的部隊であった。

人民の革命的な力を動員し、ドイツ帝国主義の大軍の侵入から十月社会主義革命の獲得物を英雄的に守った日々は、赤軍誕生の日となった。この大功績を記念して、ソヴェトの国では毎年二月二三日をソヴェト軍の日として祝っている。

ドイツ軍が攻撃してきたとき、レーニンは、党中央委員会内で講和の締結を決定させるために、奮闘した。おもな反対者は、トロツキーとブハーリンで、後者は当時、「共産党左派」という彼のつくった分派を指導していた。ドイツ軍の攻撃がソヴェト共和国にとって最大の危険であることを、この攻撃がこのうえなくはっきり示していたにもかかわらず、「共産党左派」は、自分の政策を左翼的な空文句でカムフラージュしながら、戦争の継続を要求した。レーニンは、「共産党左派」にたいし、ソヴェト権力を破滅にみちびく彼らの政策にたいして、容赦なくたたかった。はやくも一九一八年二月一八日、党中央委員会は、レーニンのつよい要請にしたがって、ソヴェト共和国は講和条約に調印する用意があるという決定を採択していた。ドイツ政府には電報

今度はラトヴィアとエストニアの全土を要求した。ソヴェトの国は、ドイツに巨額の賠償金を支払い、その軍隊の動員を解除しなければならなかった。ウクライナはドイツに従属する国家となり、ドイツ帝国主義者に隷属することになった。

二月二三日、党中央委員会は、ドイツの新しい最後通告を審議するために会議をひらいた。レーニンは、その条件を即時受諾するよう提案した。「共産党左派」(ブハーリン、ウリツキー、ロモフ、ブブノフ)はまたしても異議をとなえた。党中央委員会の大多数は、講和条約に即時調印するというレーニンの提案に賛成した。「共産党左派」は、中央委員会内で少数派になった。

中央委員会で敗北をなめたブハーリン一派は、党と国家の全活動を攪乱する道をえらび、党を分裂させる方針をすすめた。「共産党左派」(ロモフ、オシンスキー、サプローノフ、ストゥコフその他)からなるモスクワ地方ビューローは、講和締結後はどのみち外形だけのものになるソヴェト権力を放棄する場合もあることをみとめるのが国際革命のためには目的にかなっている、という奇怪な主張を内容とする決議を採択した。レーニンは、この決議を「奇妙かつ奇怪な」ものと呼んだ。レーニンは、「共産党左派」を断固として論難し、そのはげしい諸論文で、彼らの冒険主義的な政策を暴露した。レーニンは、「たとえ苛酷きわまる講和ではあっても、即時講和に反対する者は、ソヴェト権力をほろぼす者である」と書いている(全集、第二七巻、二六ページ)。

一九一八年三月三日、ドイツとの講和条約が調印された。ところが、「共産党左派」は党攻撃をやめなかっただけでなく、さらにそれをつよめた。彼らは、ブレスト講和をぶちこわすよう公

然と呼びかけた。「共産党左派」の分裂主義的な反党活動は、エス・エル左派に、ソヴェト政府の顔ぶれを変える望みをいだかせた。彼らは、レーニンを人民委員会議議長の地位から更迭し、エス・エル左派と「共産党左派」の代表者からなる新しい政府を樹立するよう、ブハーリンに申しいれた。ブハーリンはエス・エル左派の提案を受けいれはしなかった。しかし、彼らがブハーリンに呼びかけたことは、敵が「共産党左派」の分派闘争を自分のために利用しようとしていたことをしめしている。

レーニンは、「共産党左派」をドイツ帝国主義とロシア・ブルジョアジーとの共謀者として暴露した。レーニンはこう書いている。「新しい条件が、ブレストの劣悪で、苛酷で、屈辱的な条件よりも、いっそう劣悪で、苛酷で、屈辱的なものであること、この点でわがえせ『左派』のブハーリン、ロモフ、ウリツキーの一派は、大ロシア・ソヴェト共和国にたいして責任をおっている」（同、七五ページ）。

レーニンは、「共産党左派」およびトロッキーと党との意見の不一致が一見したところよりずっと深いことをしめした。彼らは、一国で社会主義の勝利が可能であることを否定し、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）と十月革命の獲得物をロシアで維持することは、世界社会主義革命が勝利するばあいにだけ可能であって、世界帝国主義との戦争によってこの世界革命を促進する必要がある、と声明していた。

「共産党左派」を暴露して、レーニンはこう説明した。彼らの国際革命「促進」論は、マルクス主義とは縁もゆかりもない。マルクス主義は、革命の発展が資本主義諸国の内部の階級矛盾の成熟にかかっているとおしえている、と。一国で社会主義の勝利は可能であるということから出

発してレーニンは、プロレタリアートの独裁（ディクタトウーラ）の勝利した最初の国であるソヴェト・ロシアの労働者階級が革命の獲得物を守り社会主義を建設するために、自分の独裁（ディクタトウーラ）を維持し強化するなら、彼らはなににもまして自分の国際的な責務をはたすことになる、と考えていた。

レーニンは、ソヴェト国家が帝国主義者と協定をむすぶことは、国際革命の利益からいってゆるされないとか、ソヴェト国家は資本主義の包囲のもとでは存立しえないとかいう、「左翼」反対派のもう一つのばかげた論拠をも暴露した。彼はこう書いている。「このような見地からすれば、帝国主義列強にかこまれた社会主義共和国は、どのような経済的条約をも締結することができないし、月世界へでも飛んでいかないかぎり存続することができない」（全集、第二七巻、六二ページ）。社会体制をことにする国家の共存は、レーニンの社会主義革命理論から、社会主義の勝利がはじめは少数の国、それどころか、ただ一国でも可能であるということから生じていた。党は、ソヴェト共和国が経済をととのえ、武装兵力をつくりあげるならば、国際帝国主義の圧迫に対抗することができるし、自国の自主性と独立を守りぬき、平和な息つぎをかちとり、社会主義の建設を保障することができる、と考えていた。

ブレスト講和条約をぶちこわそうという「共産党左派」の方針は、失敗した。ソヴェトの国をおびやかしている滅亡から国を救うためには、「共産党左派」との闘争にしめされた、レーニンの洞察力、粘り強さ、情熱が必要であった。レーニンがいだいていたような、大衆にたいする確固不動の信頼が必要であった。党員大衆と先進的な労働者は、講和締結を断固として支持した。党中央委員会とソヴェト政府の講和条約問題にかんする政策は、モスクワ市とペトログラート市の党会議、その他一連の地方党組織の賛同を得た。

平和の問題を最終的に解決するために、第七回臨時党大会が召集され、一九一八年三月六日から八日までペトログラートでひらかれた。これは、党が国家の指導的地位についてから最初の大会であった。大会には議決権をもった四六名の代議員と評議権をもった五九名の代議員が出席していた。大会はおよそ一七万の党員を代表していた。そのころ党員数は三〇万あまりであったが、大会が臨時に召集されたため、多くの党組織は代議員を送ることができなかった。

大会の審議した問題は、中央委員会の報告、戦争と講和の問題、綱領改正と党名変更の問題であった。大会でレーニンは、中央委員会の政治報告をおこない、綱領改正と党名変更の問題その他の問題について発言した。中央委員会の政治報告のなかで、レーニンは、戦争と講和の問題をあらゆる面からあきらかにした。

大会では、ブレスト講和の賛否両論者のあいだに激闘がくりひろげられた。「共産党左派」は敗北をなめた。党は、レーニンの方針の正しさを確認し、ドイツとの講和条約を批准することが必要であるとみとめた。戦争と講和についてのレーニンの決議案は、賛成三〇票、反対一二票、棄権四票で採択された。大会は、労働者と農民大衆の自己規律と規律を高めるために、また社会主義革命の獲得物を固め守るうえで、すべての勤労者組織の創意を発揮させるために、断固たる措置をとることが、党とソヴェト権力の緊急な課題であると指摘した。赤軍の建設を促進し、勤労者の全般的軍事訓練を実施する必要が強調された。

その後の出来事は、平和のためのたたかいでレーニンがとった方針が唯一の正しいものであったことを証明した。この政策は、ソヴェト共和国が秩序ただしく後退するのを可能にし、また帝国主義者の新しい襲撃を撃退する準備をととのえるのを可能にした。

第七回大会は、党綱領と党名改正についての決議を採択した。十月革命とプロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）の樹立との結果、最初の党綱領は遂行された。新しい綱領を作成するために、大会は小委員会をえらび、小委員会はレーニンのつくった草案を討議の基礎にした。レーニンの提案にしたがって、大会は、新しい党名、ロシア共産党（ボリシェヴィキ）を採択した。レーニンは、大会でつぎのようにいった。「共産」党という名称は、ただ一つ正しい名称である。

「社会主義的改革をはじめるにあたって、われわれは、これらの改革がめざしている終局の目標、すなわち、共産主義社会をつくりだすという目標を、はっきりとかかげなければならない」（全集、第二七巻、一二五―一二六ページ）。

党の中央機関を選出するさい、大会はふたたび、「共産党左派」の攪乱行為にであった。彼らの指導者は、選挙にもくわわらないし、中央委員会にもはいらない、と声明した。レーニンは、彼らの下劣なふるまいを糾弾した。大会は、党の統一をおびやかす分裂活動をやめるよう、「共産党左派」に要求した。

ロシア共産党（ボ）第七回大会は、歴史的にきわめて重要な課題をはたした。大会は、ソヴェトの国を戦争からぬけださせ、ロシアの諸民族に平和をあたえた。のちにレーニンはこう書いている。「最初のボリシェヴィキ革命はこの地上の最初の一億人を、帝国主義戦争から、帝国主義世界から救い出した」（全集、第三三巻、四四ページ）。

大会は、レーニンの仕上げた、党とソヴェト権力の対外政策の基本原則を承認し、社会主義建設における党の当面の課題をさだめた。大会は、党の統一を破り、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）を破壊しようとした党攪乱者――「共産党左派」とトロツキーを粉砕した。大会は、レーニンの

政策にもとづいて党を団結させた。

「共産党左派」の立場には多くの有力な党活動家が立っていた。ヴェ・ヴェ・クイブィシェフ、エス・ヴェ・コシオル、イェ・エム・ヤロスラフスキー、その他がそうであった。「共産党左派」との闘争がきわめてするどい性格をおびていたにもかかわらず、レーニンは、党内にできあがっていた規範を堅持し、誠実さを発揮し、説得の方法をもちいた。実生活は、ブレスト講和の問題におけるレーニンの政策の正しさをしめした。そこで同じ一九一八年に、「共産党左派」は、自分たちの誤りを公然とみとめて、党活動と国家活動に積極的にくわわった。

第七回党大会ののちまもなく、ソヴェト政府と中央委員会は、モスクワにうつった。モスクワは、ソヴェト国家の首都になった。一九一八年三月一四日、モスクワで第四回臨時全ロシア・ソヴェト大会がひらかれた。大会は、ブレスト講和条約を批准した。ウクライナ・ソヴェト中央執行委員会の代議員団も、条約の批准に賛成した。批准に反対したのは、エス・エル左派であった。彼らは、人民委員会議から脱退した。ソヴェト政府内での協力にかんするエス・エル左派との協定は破棄された。

ブレスト講和の締結は、巨大な国際的意義をもっていた。全世界の勤労者に、途方もない困難にもかかわらず帝国主義戦争からぬけだしたソヴェト共和国の手本がしめされたのである。

ブレスト講和の締結は、ソヴェト権力を強固にした。息つぎがかちとられた。この息つぎは、国の経済をととのえ、赤軍を創設し、プロレタリアートと勤労農民大衆との同盟を固めるために、時をかせぐのを可能にした。ソヴェト国家の生活には発展の新しい時期がひらけてきた。

3 社会主義経済の基礎を建設するレーニンの計画。最初のソヴェト憲法

一九一八年の春、ソヴェト共和国は、経済を復興し社会主義の原則にもとづいて国の経済生活全体を再編成することに、力をそそいだ。共産党は、国の管理を組織立てるという、新しい任務に直面した。一九一八年四月、レーニンは、党中央委員会に委任されて、テーゼを作成した。このテーゼの含蓄のある内容は、彼のすぐれた労作『ソヴェト権力の当面の任務』のなかで、あきらかにされている。この著書その他一連の著作のなかで、レーニンは、社会主義経済の基礎を建設する計画をたてた。党の活動を総括して、レーニンはこう書いている――

「われわれボリシェヴィキ党は、ロシアを説得した。われわれは貧乏人のために金持の手から、勤労者のために搾取者の手から、ロシアをたたかいとった。いまやわれわれはロシアを管理しなければならない」(全集、第二七巻、二四四ページ)。

レーニンは、マルクスの学説を発展させ、資本主義から社会主義への過渡期についてのきわめて重要な命題を基礎づけた。過渡期の国家は、プロレタリアートの独裁(ディクタトゥーラ)の国家である。過渡期の経済は、いくつかの社会経済制度の要素を兼ねそなえている。資本主義から社会主義へ移る形態と方法は、いろいろの国で社会主義への前進がはじまる具体的な条件にかかっている。

ソヴェト・ロシアでは、社会主義への過渡は経済が多くの経済制度からなっているという状況のもとでおこなわれた。国の経済には、五つの社会経済制度の諸要素が存在していた。(一)家

父長的制度（すなわち、いちじるしく現物的な農民経済）、（二）小商品生産（穀物を売る農民の大多数がこれにはいっていた）、（三）私経営的資本主義、（四）国家資本主義、（五）社会主義の諸要素がそれであった。ロシアでは、資本主義を存続させ復活させる基盤となっていた農民の小商品生産が優勢を占めていた。都市と農村では、幾百万の小経営主や商人が投機をしていた。人民の困窮に乗じてとくに大もうけをしていたのは、穀物の投機をしていた富農であった。この小ブルジョア的自然成長性が、ソヴェト権力と社会主義にとって主要な危険を呈していた。任務は、小ブルジョア的自然成長性に打ち勝ち、社会主義的経済制度を強化し、それを支配的な制度にし、ついで、これをただ一つの、全体を包括したものにすることである、とレーニンは指摘した。

社会主義経済の基礎の創設は、戦争とブルジョアジーの支配とがひきおこした、信じられないような経済的崩壊のもとですすめられた。国の生産力を復興し、国民経済の大綱をととのえるためには、すべての自覚した労働者と農民の絶大な努力が必要であった。働く人民にふりかかった苦悩と困窮を軽減することができるのは、プロレタリアートだけであった。プロレタリアートだけが、小ブルジョア的自然成長性に打ち勝ち、正常な経済生活を軌道にのせ、国の社会主義への前進を保障することができた。そうするためには、労働者階級の広範な大衆が、革命によって自分たちにおわされた歴史的な任務を、はっきり理解することが必要であった。ところが、ある一部の労働者は、新しい情勢にすぐ順応することができず、支配階級であるということがなにを意味しているかを理解していなかった。彼らは、人民の財産になった工場での労働に昔どおりの態度をとり、余分な重荷をまぬかれたり、仕事をのがれようとしたり、「できるだけたくさん取りこんで、姿をくらます」習慣のままにくらしていた。こうした気分は、戦時中に工場にきた一部

の労働者のあいだに、とくにつよかった。党は、寄食者、なまけ者、我利我利亡者とたたかい、社会主義的秩序をうちたてるうえで、先進的な労働者を援助した。レーニンは、会計をきちんとおこない、節約して経営し、なまけず、きびしい労働規律を守るよう、労働者におしえた。これが当面の主要なスローガンであった。これを実行にうつすことは、経済的崩壊を切りぬけ、正常な経済生活を再建し、社会主義へ移るためにもっとも重要な条件であった。

社会主義の経済建設の分野で第一位におしだされたのは、物資の生産と分配にたいする計算と統制を組織することであった。レーニンはこう指摘した。これなしには、生産の管理にうつり、国民経済の全部門の秩序だった活動を保障することはできない。ソヴェト権力は、資本家の収奪を中断せずに、計算と統制を組織することに重点をうつさなければならない、と。これらの任務は、ソヴェト、国民経済会議、消費組合、工場委員会におわされていた。小ブルジョア的自然成長性をおさえ、全国家的な規模で計算と統制を軌道にのせるために、レーニンは、専売制とくに穀物専売制を整備し、貨幣流通にたいする国家の統制をつよめるよう指示した。外国資本にたいして国の経済的自立性をまもるためには、外国貿易を独占することが必要であった。

レーニンは、社会主義へ移るにあたって国家資本主義が重要な意義をもつことをみとめていた。彼は、国家資本主義が農民経済よりも経済的に高度であり、ソヴェト国家にとって危険ではない、と考えていた。この国家資本主義の体系には、資本をもった個人が参加させられている各種のソヴェト株式会社、ソヴェト国家の統制のもとにある企業家とブルジョア協同組合員がはいるはずであった。彼らの活動を統制する仕事は、ソヴェト権力の諸機関におわされた。国家資本主義は、ソヴェト権力が小ブルジョア的自然成長性とたたかうのをやりやすくし、農民生産との経済関係

を調整するために、生産物の一定の部分を国家資本主義的企業から手にいれる可能性をソヴェト国家にあたえ、国の生産力の増大を促進するものであった。消費協同組合も、この目的に役だつはずであった。協同組合のたすけをかりて、ソヴェト国家は、生産物交換を規制し、生産物の実現にたいする統制をおこなうことができた。その当時、多くの協同組合機関は、ブルジョアジーの影響のもとにおかれていた。だが、このような事情も党と労働者階級をおじけづかせるはずがない、とレーニンは言った。プロレタリアートの権力のもとでは、ソヴェト国家によるブルジョア協同組合員の利用は、かちとった地歩を固め、協同組合機関からブルジョア分子を徐々に駆逐していくことをソヴェト国家に可能にする、と。

社会主義革命の根本的な任務の一つは、資本主義のそれよりも高い労働生産性を達成することである、とレーニンは説明した。高度の労働生産性を確保するためには、まず第一に、重工業を、すなわち燃料と金属の生産、機械工業、化学工業、電機工業を発展させる必要があった。レーニンは、ソヴェト共和国には、「ルーシを貧しく無力な国でなくし、ほんとうの意味で力づよく、ゆたかな国にする」(全集、第二七巻、一六〇ページ）のに必要なものが、すべてそなわっていることをしめした。ロシアには、これを達成するのに十分な天然資源と人力の莫大な予備があったし、人民大衆の創造力は大革命によって呼びさまされて大々的に発揮されていた。

レーニンは、住民の文化水準を高めることも、労働生産性を高め、生産力を復興し発展させる重要条件であると考えていた。ソヴェト権力は、文化と科学のもたらすすべての利益を、全人民の資産であると宣言した。広範な人民大衆は知識を熱望した。レーニンは、資本主義の蓄積した科学技術上の成果をすべて社会主義に役立てるよう呼びかけた。「社会主義は」と彼は言った。

「最新の科学の最新の知識にもとづいてきずかれた大規模資本主義的技術なしにはありえない」（全集、第二七巻、三四三ページ）。レーニンはこう指摘した。社会主義だけが科学からブルジョアのかせを取り除き、真の科学的基礎にもとづいて生産を組織する可能性をあたえ、労働を軽減し、すべての勤労者に福祉を保障するだろう。科学のすべての達成にもとづいてのみ、社会主義を順調に建設することができる、と。レーニンは、国の産業を再編成し、経済復興をはかる計画を作成する課題を、科学アカデミーに負わせた。この計画にはいっていたのは、工業を合理的に配置して、これを原料資源に近づけること、工業・運輸の電化と農業における電気の応用、ソヴェトの国の経済的自立性の保障であった。

大工業は、知識と技術のいろいろな部門の専門家なしにはありえない。当時プロレタリアートには、自分の技術要員がなかった。専門家の大多数は、ブルジョア専門家であった。レーニンは、彼らを注意ぶかく取り扱うことを教えた。彼は、これら専門家のブルジョア的生活様式のために、彼らが全部、一挙に社会主義革命の意義を正しく理解するわけではない、と警告した。彼らを辛抱づよく再教育し、自分の知識を広く応用する機会を彼らにあたえ、他よりも高い労働報酬をさだめることに応じる必要がある。それと同時にレーニンは、人民のあいだの組織者的人材を根気よく発見していき、実践家の組織者を労働者・農民のなかからいっそう大胆に抜擢して、国家の責任ある部署につけ、彼らが国家を統治し経済を管理する技術を身につけるのをたすけるよう呼びかけた。

レーニンは、ソヴェト経済を運営する上での民主主義的中央集権制の原則を仕上げ基礎づけた。大規模な機械制工業は、数百、数千の人々の労働を指導しようとする意志の統一からうまれる、

厳格きわまる秩序がなくては、的確にはたらくことができない。レーニンは、こう教えている。社会主義の利益は、大衆が労働過程で指導者の単一の意志に絶対服従することを要求している。そこで経済の運営は集中されなければならず、企業のかしらには、ソヴェト権力の任命する企業長が立っていなければならない。国家の中央集権的な指導と単独責任制は、経済生活への大衆の積極的・意識的な参加とむすびつき、下からの多種多様な統制とむすびついていなければならない、と。

「真に民主主義的な意味に理解された中央集権制は」とレーニンは書いている。「地方的特性を発揮させるだけでなく、地方的発意、地方的創意を発揮させ、共通の目標をめざして前進する多種多様な方途、方法、手段をも完全かつ自由に発揮させる、歴史上はじめてうまれた可能性を前提とする」(同、二一一ページ)。

経済の面での主要課題の一つは、——とレーニンは指摘している——競争を組織することである。社会主義だけが、勤労者の真の大衆的な競争の条件をつくりだす。ソヴェト体制のもと、人民の財産になった土地と工場で、搾取をまぬがれた勤労者が、はじめて、自分の能力をのばし、創意と大胆な企画力を発揮することができるようになった。競争は、国の経済体制を社会主義の原則にもとづいて再編成し、生産を模範的に組織し、労働生産性を引き上げる重要手段になる。模範的な企業の実例が大衆に感化をおよぼし、教育上の意義をもつようになるために、レーニンは、競争の幅広い公開性を要求した。この点で大きな役割を演じなければならないのは、出版物である。出版物は、模範的な企業の成果を紹介して、先進的な経験、生産組織のよりよい形態の研究にたいする関心をおこさせなければならない。

レーニンは、労働者とすべての勤労者の新しい、自覚した同志的な規律を養うこと、彼らの自主活動と責任感を高めることを、重視していた。これには、人々を再教育するための、ねばりづよい長期の活動が必要であった。この目的を確実にとげる手段は、なまけ者や我利我利亡者にたいする社会的制裁、出来高払制の実施、賃金画一主義の廃止、物質的奨励の原則の厳重な実施である、とレーニンは考えていた。労働者の賃金は、レーニンの考えによると、彼自身の生産する生産物の量にも、企業の活動の総結果にもしたがって、これをさだめなければならない。先進的な集団は奨励を受けなければならない。

レーニンは、極力プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）を強化し、ソヴェト組織を発展させるよう呼びかけた。プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）は、まず第一に、打倒された搾取者と旧社会のすべての腐敗分子の反抗を鎮圧するために必要である。それは、新しい社会主義社会の創出に必要である。もっとも先進的な、自覚した、規律正しい階級であるプロレタリアートだけが、勤労者の大多数を自分の味方につけ、動揺している層がソヴェト権力の立場に立つのをたすけ、搾取者の反抗を鎮圧し、小ブルジョア的無組織状態の自然成長性に打ち勝ち、社会の社会主義的改革の先頭に立つことができる。

レーニンの労作『ソヴェト権力の当面の任務』は、巨大な歴史的意義をもっていた。この労作は、党の目標を、社会主義革命の組織上の任務を解決することに、国の管理を組織立てることにむけた。この労作には、国の経済体制を社会主義の原則にもとづいて再編成する、科学的根拠のある計画があたえられ、資本主義から社会主義への過渡期におけるプロレタリア国家の経済政策の基本原則がのべられていた。

ソヴェト権力の当面の任務についてのレーニンのテーゼは、中央委員会によって審議され、その賛同を得、党と労働者階級の完全な支持を得た。一九一八年四月二九日、このテーゼは、全ロシア中央執行委員会によって承認された。レーニンは、その会議で報告をおこなった。

レーニンの計画に反対したのは、メンシェヴィキとエス・エルであった。ブハーリンを先頭とする「共産党左派」も、まちがった立場をとった。彼らは、左翼的な空文句でカムフラージュしながら、企業における規律の実施と単独責任制の採用、ブルジョア専門家と国家資本主義の利用は、ブルジョア方式への復帰を意味する、などと声明した。実際には、「共産党左派」は、小ブルジョア的自然成長性と無政府的野放し状態の、富農、投機者、なまけ者の弁護者であった。党は、「共産党左派」に断固たる反撃をくわえ、全人民的な計算と統制を整備し、社会主義的生産を組織立てることに力をそそいだ。

新しい任務を解決するためには、ソヴェト国家ではたす党の指導的な役割をつよめること、勤労者の国家的団体その他の社会団体と党との正しい相互関係をつくりあげることを必要としていた。一九一八年の春までに、プロレタリア国家権力の機構はだいたいできあがっていた。プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）の体系にはいるものとしては、党、ソヴェト、労働組合があった。とくに重要な意義をもっていたのは党とソヴェトとの正しい相互関係を確立することであった。党は、国家権力機関としてのソヴェトに自主活動の余地を十分にあたえると同時に、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）の体系内で党が指導的な役割をはたすのを保障するような形の相互関係をつくりあげた。党は、ソヴェト国家に方向をさししめす指導力であった。党は、ソヴェト国家の政策をさだめ、また、ソヴェト制度を強固にし社会主義の原則にもとづいて社会を改革するためにたたかう

上で、勤労者のすべての社会団体を協力させた。党は、共産党グループをつうじて、ソヴェトや労働組合に政治的な影響をあたえ、党の指令を実行にうつした。

党は、国家建設や経済建設の要求と密接に関連させながら、党建設の問題の解決に当たっていた。党の指導機関の構造は、当時存在していた国の行政区画（県・郡・郷）に適応させられた。全県的な党委員会がつくられ、郡や郷の党組織も結成された。党機関には、何千という新しい活動家が抜擢された。党は、党の構成の改善に、また新党員採用のさい党内に異分子がはいりこみにくくなるような、規約上の規定の作成に、大きな注意をはらった。一部の地方党組織は、入党者のために候補期間を設け、党同調者のグループをつくった。

党建設は、国の少数民族地区とドイツ軍の占領地域でもすすめられていた。一九一八年六月、トゥルケスタン自治ソヴェト共和国のボリシェヴィキ組織第一回大会は、ロシア共産党（ボ）の構成部分としてトゥルケスタン共産党を創立することを宣言した。一九一八年七月、ウクライナ共産党（ボリシェヴィキ）第一回大会がひらかれた。プロレタリア国際主義の原則を忠実にまもって、大会は『党について』という決議のなかで、ウクライナ共産党（ボ）は単一のロシア共産党の一部となる、とのべている。一九一八年一〇月、ヴィリノ（ヴィリニュス）でリトワニア共産党第一回大会が非合法にひらかれた。

ソヴェト共和国では、青年運動が急速に発展していった。一九一八年一〇月から一一月にかけて、労農青年同盟第一回全ロシア大会がひらかれ、ロシア青年共産同盟の創立を宣言した。共産青年同盟の創立とその活動は、最初から党とレーニンの指導のもとにおこなわれた。コムソモールは、党のしっかりした支柱であり、予備軍であった。

経済建設では、党はなによりも、社会主義工業の組織に留意していた。国有化された部門を管理するために、最高国民経済会議のなかに総管理部とトラストが設置された。工業と全国民経済との管理を組織立てるうえで重要な意義をもっていたのは、一九一八年五月末に党中央委員会の提唱で召集された国民経済会議第一回全ロシア大会であった。六月二八日、人民委員会議は、大工業全体の国有化についての布告を採択した。この布告を実施することによって、大工業と中工業の国有化はだいたいおわった。秋までに国有化された工業企業の数は三〇〇〇以上にのぼった。

党は、文化建設を広くおこなうために息つぎを利用した。国民教育の根本的改革がおこなわれた。ソヴェトの学校の建設は、共産主義の精神に立って青少年を教育し、学習を実生活と、社会的に有用な労働と密接に結びつけるという原則にもとづいていた。上級の学校には、まず第一に労働者と貧農の子弟が入学させられた。成人の文盲撲滅がはじまった。教師をソヴェト権力の味方につけるために、いろいろなことがやられた。一九一八年の夏、教師の全国大会が二回ひらかれ、その席上レーニンが発言した。彼は、社会主義教育の主力になるよう教師に呼びかけた。

大衆のあいだでの政治活動は、大規模なものになった。都市では、多くの大衆集会や会合がひらかれた。モスクワの集会では、しばしばレーニンが発言した。党は、農民のあいだの政治活動につよい関心をはらっていた。都市の党組織は、何千というアジテーターを農村に派遣した。レーニンは再三彼らに指令をあたえた。一九一八年八月、モスクワに社会科学社会主義アカデミーが開設された。

レーニンの社会主義建設計画の実施は、異常に困難な状況のもとですすめられていた。一九一八年の春のおわりに、ソヴェトの国では食糧難が激化した。都市の住民は飢えていた。その結果、

不満が大きくなりはじめた。反革命派が頭をもたげてきた。ソヴェト権力の敵は、ひどい食糧事情の責任をボリシェヴィキに転嫁しようとくわだてた。しかし、飢えがおこったのは、大量の余剰穀物をにぎっていた富農が、穀物を公定価格でソヴェト国家に売るのをこばみ、穀物専売を妨害し、投機をことしていたからである。国内には約二〇〇万の富農経営があった。彼らは、国内反革命派と外国帝国主義者のおもな支柱となっていた。富農はソヴェト権力をにくんでいた。レーニンは「富農は、他の国々の歴史上、地主、皇帝、坊主、資本家の権力を一度ならず復活させた、もっとも凶悪な、もっとも不法な、もっとも野蛮な搾取者である」と書いている（全集、第二八巻、四七ページ）。ソヴェト共和国の多くの県で、富農は他の反革命分子とともに、外国帝国主義者の支持を得て反ソヴェト暴動をおこした。彼らは、飢えに乗じて最初の社会主義的改革の実施を妨害しようと、死活にかかわる重要な戦線である、穀物のための闘争の戦線で労働者国家に攻撃をくわえることにした。

富農の反抗を容赦なく鎮圧し、富農から穀物をとりあげる必要があった。穀物のための闘争は社会主義をめざす闘争と一体になった。レーニンは、「これはたんに穀物のための闘争のように見えるかもしれないが、実は、これは社会主義のための闘争なのである」と説明している（全集、第二七巻、四八五ページ）。農村では、貧農と富農との闘争がはげしくおこなわれていた。富農は、地主の土地をとりあげ、貧農を圧迫した。貧農は、富農の圧制にたいして頑強にたたかってはいたが、組織性がたりなかった。

党中央委員会とソヴェト政府は、富農をおさえ、飢えの苦しみをやわらげるために、思いきった処置をとった。ソヴェト権力は、穀物専売が確固不動のものであることを確認し、食糧業務を

集中した。党は、富農とたたかう貧農に援助をあたえるために、農村への大規模な遠征を組織せよ、と先進的な労働者に呼びかけた。この呼びかけには数万の労働者がこたえた。工場では、労働者部隊がつくられ、その先頭には共産党員が立っていた。このような部隊が、何千も国の各地に派遣された。先進的な労働者の部隊は、貧農を啓蒙し、彼らを団結させて、富農の反抗を鎮圧するのをたすけた。

「十月革命すなわちソヴェト革命の最大の不滅の事業の一つは」とレーニンは書いている。「先進的な労働者が、貧農の指導者として、農村の勤労大衆の首領として、労働の国家の建設者として、『人民の中にはいっていった』ことにある。ペトログラートは、何千何万という優秀な労働者を農村にあたえ、その他のプロレタリア中心地も農村にあたえた」(同、四〇九ページ)。

一九一八年六月一一日、ソヴェト全ロシア中央執行委員会は、レーニンの提案にしたがって、農村に貧農委員会を組織する布告を採択した。貧農委員会は、各地の党組織の指導のもとに、ソヴェト国家制度の枠内につくられた。貧農委員会の活動は、一九一八年の夏と秋にひらかれた県党会議や郡党会議の中心問題であった。中農もはいっていた貧農委員会はほとんどすべての村にあった。一九一八年一一月までに、その数は約一〇万以上に達した。

貧農委員会は、農村におけるプロレタリアートの独裁(ディクタトゥーラ)の拠点であった。貧農委員会は、富農から余剰穀物をとりあげ、都市の住民と赤軍に食糧を確保するために大々的な活動をおこなった。貧農委員会をつうじて、農民のあいだで土地の再分配がおこなわれ、富農から役畜と農具が没収されて貧農にあたえられた。富農から五〇〇〇万ヘクタールの土地がとりあげられ、貧農と

中農にひきわたされた。これによって、農村ブルジョアジーの経済力は大幅に切り崩された。だがすべてこうしたことも、まだ富農の階級を一掃したことを意味するものではなかった。

貧農委員会が組織されたことは、農村で社会主義革命がさらに進展し、ソヴェト権力が強固になったことを意味していた。貧農委員会は、貧農を労働者階級のまわりに結束させ、ソヴェト国家が富農の反抗をうちやぶるのをたすけ、中農をソヴェト権力の味方につけるうえで重要な役割を演じた。多くの貧農は経営をもつことができるようになった。農村は中農的農村になっていった。貧農委員会は、農民のなかから赤軍を補充するのをたすけた。

貧農委員会は、農村における社会主義的改革を促進した。農業コンムーナその他の農民の生産団体がうまれた。一九一八年末には、その数は一五〇〇以上になっていた。農村では、党細胞が急増した。これらの党細胞は、貧農のもっとも先進的で自覚した部分を吸収していた。一九一八年末、負わされた任務をはたした貧農委員会は、郷ソヴェトおよび村ソヴェトに合併された。社会主義建設における地方ソヴェトの役割と重要性はたかまった。

一九一八年七月四日、モスクワで第五回全ロシア・ソヴェト大会がひらかれた。大会は、共産党の影響力と威信が大衆のなかでいっそう増大したことを反映していた。大会代議員の約三分の二が、共産党員であった。エス・エル左派の影響力は、急速におとろえていった。エス・エル左派は、執拗にブレスト講和をぶちこわそうとし、ソヴェト権力と貧農委員会の食糧政策とのたたかいをつづけ、富農擁護の行動をとっていた。彼らは反ソヴェト陰謀を準備中であった。大会がひらかれていた七月六日に、エス・エル左派は、ドイツを挑発して戦争をおこさせようとたくらみ、ドイツ大使を殺害して、モスクワで反ソヴェト暴動をおこした。外国の外交団は、こっそり

暴徒を支持していた。ソヴェト共和国は、あやうくドイツとの戦争にまきこまれるところであった。

ソヴェト権力のすばやく断固とした行動によって、モスクワにおけるエス・エル左派の暴動は、数時間で鎮圧された。挑発された対ドイツ紛争は、解決された。エス・エル左派の冒険は、彼らが勤労大衆の支持をうしなった反ソヴェト政党であることを最終的に暴露した。第五回ソヴェト大会は、ソヴェト政府のとった、エス・エル左派の暴動を一掃する断固たる措置を全員一致して承認し、エス・エル左派の党代表をソヴェトから除名する決定を採択した。

大会は、最初のソヴェト憲法であるロシア社会主義連邦ソヴェト共和国憲法を採択した。憲法は、十月社会主義革命の偉大な獲得物である、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）の形態としてのソヴェト権力、資本家・地主の私的所有の廃止、ロシアに住むすべての民族の同権、その他を法的に確認した。憲法は、ロシアのすべての勤労者が国家統治に参加することを保障し、搾取者から選挙権を剝奪した。

レーニンはこう指摘している。「選挙権を制限する問題は、ある民族の独特な問題であって、独裁（ディクタトゥーラ）の一般的な問題ではない。選挙権を制限する問題は、ロシア革命の特殊な条件、ロシア革命の発展の特殊な道を研究するときに、これを取りあつかわなければならない」（全集、第二八巻、二七一ページ）。他の国々でのきたるべき革命がブルジョアジーの選挙権の制限をかならずおこなうと、前もって断言するのはあやまりであろう。「これは必須の条件として、独裁（ディクタトゥーラ）の歴史的・階級的概念のなかにふくまれるものではない」（同）。

ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国憲法は、外国語に翻訳されて、外国で広く反響をよんだ。

資本主義諸国の勤労者は、ソヴェト憲法のなかに自分たちの念願がいいあらわされているのを知って、これを熱烈に歓迎した。ブルジョアジーはその反対に、憎悪の念で憲法をむかえた。カウツキーと第二インタナショナルのその他の指導者は、ブルジョアジーの味方であった。カウツキーは、敵意にみちた態度で、プロレタリアートの独裁(ディクタトゥーラ)を確立したボリシェヴィキが「民主主義を破壊している」といって非難した。

レーニンはその著書『プロレタリア革命と背教者カウツキー』のなかで、カウツキーにきっぱりと反論した。レーニンは、カウツキーが国家とプロレタリアートの独裁(ディクタトゥーラ)についてのマルクスの学説を改ざんし、ソヴェト権力の本質とロシア共産主義者の経験とを不法にもゆがめていることを暴露した。敵対する階級に分裂している社会でのいわゆる「純粋民主主義」を擁護するカウツキーの言辞を、レーニンは、ブルジョア民主主義を擁護して労働者を愚弄(ろう)するブルジョア自由主義者の空疎で嘘八百の文句とよんだ。

レーニンは、十月社会主義革命が勝利して、ロシアにプロレタリアートの独裁(ディクタトゥーラ)が樹立された結果として、世界史上はじめて、民主主義の新しい、いっそう高度の型であるプロレタリア民主主義、ソヴェト民主主義がうまれたことをしめしている。

「プロレタリア民主主義は」とレーニンは書いている。「あらゆるブルジョア民主主義の**百万倍**も民主主義的である。ソヴェト権力は、もっとも民主主義的なブルジョア共和国の百万倍も民主主義的である」(全集、第二八巻、二六二ページ)。

プロレタリアートの独裁(ディクタトゥーラ)は、人民大衆のために民主主義を大幅に拡大した。ソヴェト権力は、勤労大衆を国家統治に実際に参加させた世界最初の権力である。ソヴェト権力が樹立された

最初の日から、勤労階級である労働者・農民は、ソヴェト民主主義のすべての利点にあずかりはじめた。ソヴェト権力のつよみと強固さは、もっとも広範な大衆のための民主主義と搾取者にたいする革命的独裁(ディクタトゥーラ)とを一体化したところにある。

レーニンは、著書『プロレタリア革命と背教者カウツキー』のなかで、国際プロレタリアートに社会主義革命の新しい理論と戦略戦術をあたえた共産党の経験の世界史的意義をあきらかにした。共産党は、プロレタリアートの独裁(ディクタトゥーラ)の思想が現実になったことを、全世界のまえで実証した。ロシアの労働者と貧農は、党の指導のもとに、地主と資本家の反抗を鎮圧し、絶大な困難を切りぬけて、かちとった権力を維持することができたばかりでなく、それを強固にし、新しいソヴェト民主主義をつくりあげ、実際に社会主義の実現に着手することもできた。だからこそレーニンは「ボリシェヴィズムはすべての国の戦術の模範として役だつ」（同、三一三ページ）と言明することができたのである。

要約

十月社会主義革命は、プロレタリアートの独裁(ディクタトゥーラ)を樹立した。労働者階級は支配階級となり、共産党は支配政党となった。戦争と経済的崩壊の苦境のもとで、党は、国の前途にたいする責任をおった。党は、経済的破局と民族的破局から国を救い、帝国主義的略奪者による金融的隷属と植民地的隷属の危険とを国から取り除き、勇敢に、確固たる態度でソヴェト国民をみちびいて、社会主義建設という未知の道をすすんだ。

一九一七年一一月から一九一八年後半にかけての短い期間に、共産党は、労働者階級と勤労農民との広範な大衆を、革命的な創造活動に立ちあがらせ、一連の根本的な民主主義的改革と社会主義的改革を、国内で実現した。中世の遺物はすべて完全に一掃され、ロシアのすべての民族の完全な自由と平等が宣言された。地主的土地所有は、永久に根絶された。地主から没収された土地は、無償で農民の用益にゆだねられ、国内のすべての土地の国有化が実現された。ブルジョア・地主の旧国家機構は倒されて破壊され、そのかわりに、ソヴェト国家機構がつくりだされた。新しい社会主義型の国家がうまれた。ソヴェト共和国では、民主主義の新しい、いっそう高度の、プロレタリア的形態――勤労者のための、人民の大多数のための民主主義――が確立された。労働者階級は、共産党の指導のもとに、ブルジョアジーから生産手段を収奪し、工場、鉄道、土地、銀行を全人民の財産に、社会的所有にした。政治的支配を確立し、資本主義を粉砕したプロレタリアートは、国の経済の中枢をにぎり、新しいソヴェト国民経済の基礎をすえ、社会主義建設を広くおこなうための条件をつくりだした。新しい社会主義的文化の建設がはじまった。レーニンは、社会主義建設の基本的な形態と方法を仕上げた。

党は、降伏主義者カーメネフ、ジノヴィエフとその一派、ついでブレスト講和と革命的・社会主義的方策に反対した、トロツキーとブハーリンを先頭とする「共産党左派」とを暴露し、思想的に粉砕し、孤立させて、自分の隊列の統一をかためた。ソヴェト国家統治の任務におうじて、党は、組織上の構造をたてなおし、地方組織を強化した。

十月社会主義革命を発展させ、ソヴェト権力を強化するための闘争のなかで、メンシェヴィキ、エス・エル右派、エス・エル左派の反革命的本質が、最後的に暴露された。彼らは大衆から孤立

した。これらの小ブルジョア政党は、みな反ソ的となり、ソヴェト権力に鋒先をむけた。

党は、プロレタリアートを中心に貧農を結集し、先進的な労働者の部隊と貧農委員会の援助をうけて、反革命的な富農の凶暴な反抗をうちやぶり、中農をプロレタリアートの味方につけ、労働者階級と貧農の同盟にもとづいてソヴェト権力の強化を保障した。十月社会主義革命の偉大な獲得物は、第五回ソヴェト大会の採択したロシア社会主義連邦ソヴェト共和国憲法のなかで、法的に確認された。

共産党は、平和のための積極的なたたかいによってロシアを戦争からぬけださせ、赤軍を編成しレーニンの計画にもとづく社会主義建設を広くおこなうために、かちとった息つぎを極力利用した。党は、新しい生活の意識的な創造に人民大衆を立ちあがらせた。

第九章　外国の軍事干渉と内戦の時期における党（一九一八—一九二〇年）

1　外国の軍事干渉と内戦のはじまり。党による干渉軍と白衛軍にたいする反撃の組織

ソヴェトの国は平和な息つぎをやっとかちとったが、それがつづいたのは短期間にすぎなかった。ソヴェト国家の内外の敵は、ソヴェト国民に戦争をむりじいして、平和な社会主義建設を中断させた。

労働者と農民が権力をにぎっていて、その模範によって資本主義諸国の勤労者に革命的な影響をおよぼす国があるのは、外国の帝国主義者にはがまんならないことであった。独占資本家は、ツァーリ政府とブルジョア臨時政府に借款としてあたえた何十億ルーブルという金をうしないたくはなかったし、また、彼らがロシアで手に入れていた莫大な利潤を手ばなしたくもなかった。

ロシアが戦争からぬけだしたことは、協商国の帝国主義者につよい不安をいだかせた。これまでロシア軍はドイツ軍の半数以上を牽制していたからである。その上、帝国主義者は、ソヴェト・ロシアの平和政策が、他の国々の勤労者に、にくむべき戦争をおわらせる模範をしめすのをおそ

れていた。

十月革命の直後から、イギリス、フランス、アメリカ、日本の帝国主義者は、ソヴェト・ロシアに強盗的におそいかかる準備をととのえてきた。一九一七年一二月、イギリス、フランス両国政府は、アメリカの了解と同意を得て、軍事行動の分担について秘密協定をむすんだ。フランスは、ウクライナ、クリミア、ベッサラビアで、イギリスはドン、クバン、カフカースでソヴェト権力とたたかうことをひきうけた。フランス、イギリス、アメリカの支援をえて、ブルジョア・地主のルーマニアは、一九一八年一—二月にベッサラビアを占領した。ブレスト講和が締結され、ドイツ軍をつかってソヴェト共和国の息の根をとめようという野望がだめになってしまうと、アメリカ、イギリス、フランスの帝国主義者は一九一八年の春ムルマンスクに陸戦隊を揚陸した。日本帝国主義者、それにつづいてアメリカ、イギリスの帝国主義者がヴラヂヴォストークに部隊を揚陸した。

協商諸国は、ソヴェト権力とたたかうのに、ロシアにいたチェコスロヴァキア軍団を利用した。捕虜になったか、オーストリア軍からロシア側に自発的に投降してきたチェコ兵とスロヴァキア兵で、戦争中に、四万人あまりの軍団が編成されていた。ドイツとの講和が締結された後、これらのチェコスロヴァキア兵は、シベリアと極東をとおってフランスに行く許可を得た。だが干渉組織者たちは、その輸送列車がヴォルガから太平洋までのびていたチェコ兵とスロヴァキア兵に、ソヴェト権力にたいする反乱をおこすようそそのかした。

チェコ兵とスロヴァキア兵の捕虜のあいだには共産主義者がいた。彼らは軍団のなかにもいた。一九一八年五月にチェコ兵とスロヴァキア兵の共産主義者の創立大会がひらかれた。多くのチェ

コ兵やスロヴァキア兵が、赤軍にはいり、全世界の勤労者の祖国であるソヴェト国のためにたたかった。

軍団の一般兵士は、ソヴェト国民にたいして武器をとるつもりはなかった。だが協商国の帝国主義者は、ソヴェト権力反対の行動をおこすことについて軍団の司令部と話合いをつけた。軍団司令部は、ソヴェト政府がチェコスロヴァキア兵をオーストリア＝ハンガリーにひきわたそうとしているという、挑発的なうわさをながして、兵士たちをあざむいた。一九一八年五月末、反乱がおこった。反徒には、ロシアの将校、将軍、カザックの上層のなかから数千人の白衛派が合流した。反徒は装備の優秀な六万の将兵からなる大勢力となった。

チェコスロヴァキア軍団の行動は、国内の反革命派をはげました。打倒された搾取階級は内戦を開始した。カデット、エス・エル、メンシェヴィキ、ブルジョア民族主義者の諸党は、帝国主義者と結託した。彼らは、外国の侵略者に広大な領土を渡すことに同意し、勤労者の手から権力をうばいとるためでさえあれば、ロシアを植民地にしてしまうことすらはばからなかった。シベリアや、ウラルや、ヴォルガ沿岸地方で、富農の行動がはじまった。干渉軍の援助をうけたチェコスロヴァキア軍団の反乱に影響されて、ばらばらな反ソヴェト行動は、全ロシアにわたる反革命の一つの流れに合流した。チェコスロヴァキア兵は、国内の反革命勢力と協力して、シベリアとウラルのかなりの部分を占領し、サマラ、カザンその他、ヴォルガ沿岸の一連の都市を奪取した。

こうして、ソヴェト共和国にたいするたたかいで、外国の干渉軍とロシアの白衛軍との二つの反革命勢力が一体となった。

敵にうばわれた地区では、ソヴェト権力機関が一掃され、反革命「政府」が樹立された。オムスクではシベリア「政府」、サマラでは憲法制定議会議員委員会（コムウチ）、等々がそれであった。これらの「政府」では、エス・エルとメンシェヴィキが大多数を占めていて、民主主義についてのにせのスローガンで、ブルジョアジーの公然たる独裁をカムフラージュしていた。

干渉軍と白衛軍は、国の他の地区でも攻勢に出た。彼らはムルマンスクからペトロザヴォーツクにむかって前進して、ペトログラートをおびやかした。干渉軍の艦船は白海にはいった。アルハンゲリスクが奪取された。

日本軍とアメリカ軍は、チェコスロヴァキア軍団と白衛軍を援助して、ヴラヂヴォストークを奪取させ、ついで極東全体を占領させた。イギリス帝国主義者はトゥルケスタンに侵入し、その領土の一部を占領した。ザカフカースでは、イギリス軍が白衛軍部隊と協力してバクーを奪取し、アゼルバイジャンのソヴェト権力の指導者たちを逮捕したが、そのなかには、エス・シャウミャン、ペ・チャパリッゼ、エム・アジズベコフ、イ・フィオレトフ、ヤ・ゼヴィンといった、すぐれた党活動家がいた。彼らをふくめて二六人のバクーのコミサールは、イギリス帝国主義者の指令で銃殺された。干渉軍はアゼルバイジャンでムサヴァト派の反革命政府を強化し、グルジアではメンシェヴィキの、アルメニアではダシナキ派の反革命政府を強化した。

バクーが奪取されるとともに、ソヴェト共和国のまわりにめぐらした敵の包囲環はとざされた。干渉軍が軍事上の成功をおさめたのは、赤軍が創設の途についたばかりで、その兵力も少なく、戦闘の経験ももたなかったことによるものであった。

ソヴェト権力の難局は中農の動揺のためにいっそうはなはだしくなった。中農は、勤労者でも

あれば所有者でもある。十月革命後、農民がプロレタリアートの手から土地を受けとると、中農はソヴェト権力を歓迎した。だがソヴェト権力が余剰穀物を公定価格で国家に売り渡すよう農民に要求すると、所有者として中農は不満を示すようになった。彼らは、地主やブルジョアジーが権力を失ったことに甘んじるものではなく、土地と自由を彼らから守りぬく必要のあることを理解していなかった。反革命派はほかならぬ中農の動揺に乗じたのである。

干渉軍が奪取したのが、この国のうちで労働者のあまりいなかった非工業的な辺境地方や、住民が雑多な民族からなっていて、民族主義的反革命派が横行していた地区であったという事情も彼らが一時成功をおさめた原因であった。

干渉軍と白衛軍は、国の中心部でも反ソヴェト闘争を展開しようとした。一九一八年七月には、ロシア駐在のフランス大使ヌランスの指示で、エス・エルがヤロスラヴリを奪取し、他の二〇の都市で暴動の準備をしていた。モスクワで一掃されたエス・エルの行動は、この陰謀の一環であった。ヤロスラヴリの暴動は二週間で粉砕された。その他の都市では、勤労者や全ロシア非常委員会の警戒心のおかげで、陰謀を未然に摘発することができた。ロシア・プロレタリアートの大多数が集中していて、住民が同じ民族からなっている中部諸地区は、終始ソヴェト権力の難攻不落のとりでであった。

ソヴェト国家にたいする闘争には、ドイツ帝国主義者も積極的にくわわっていた。ソヴェト・ロシアの内政に干渉しないというブレスト講和条約の諸条件に違反して、彼らはフィンランドを奪取して同地の労働者権力を一掃し、バルト海沿岸地方、ベロルシア、ウクライナを占領しただけでなく、ドン地区にも侵入し、ロストフ－ナ－ドヌーを奪取し、グルジアのメンシェヴィキの

同意をえてグルジアを占領した。地主とブルジョアジーは狂喜してドイツ軍をむかえた。彼らは、つい半年まえには、「祖国」を救うためにドイツとたたかえと人々に呼びかけていたことを、「わすれて」しまった。有産階級は、彼らにとっては彼らの資本のあるところこそ祖国なのだということを、いま一度確証したのである。

ウクライナではドイツ軍は、ツァーリの元将軍、ゲトマンのスコロパツキーに権力を引き渡した。ドンでは、ドイツ軍はアタマンのクラスノフに武器を供給し、彼が軍隊をつくるのをたすけた。アタマン・クラスノフのひきいる白系カザック軍は、一九一八年の夏、ツァリーツィンにむかってすすんだが、これは、ヴォルガ左岸の反革命派に手をさしのべ、単一の戦線をつくってモスクワに進撃するためであった。ドイツは事実上協商国と共同行動をとっていたわけである。バルト海からカフカースにいたるまで、ソヴェトの国は、ドイツ帝国主義の脅威を受けていた。

ソヴェト共和国は、並はずれて困難な状態におちいった。敵は国の広大な部分を占領していた。干渉軍は、占領諸地区で前代未聞の恐怖政治をしいた。すこしでも抵抗した労働者・農民は、何万人となく容赦なく殺された。北部では、侵略者が徒刑監獄をつくり、わざわざ植民地からつれてきた絞刑吏をそのかしらにすえた。北部のムヂューク島とヨカンガとにあった干渉軍の監獄では、前代未聞の残虐と言語道断な拷問がおこなわれていた。

極東とシベリアでは、アメリカ帝国主義者が、ロシアの反革命派に大々的に武器弾薬を供給していた。アメリカ帝国主義を特徴づけてレーニンは、同帝国主義が帝国主義の血なまぐさい歴史にとくに悲惨な一ページをひらいた、と指摘している。アメリカ軍は、日本軍と共同して、対パルチザン作戦にくわわり、平和な住民に迫害をくわえ、彼らを処刑した。侵略者は人民の財産を

かすめとり、木材、小麦、金を、代金を支払わずにはこびだした。

干渉軍は、ソヴェト共和国から国のもっとも重要な食糧資源と原料資源を遮断した。バクーの油田と、当時は唯一の石炭基地であったドンバスは失われた。企業は燃料がないためにとまっていた。都市にはあかりがなかった。運輸機関は、貨物の輸送をはたせなかった。民衆は飢えていた。パンの配給は一日八分の一フント（五〇グラム）に減らされ、それさえいつも支給されたわけではなかった。人々は発疹チフスでたおれていった。そのうえ、干渉軍の手先が各地で暴動や破壊活動や陰謀をくわだてた。

一九一八年の夏、イギリスの外交代表ロックハートがフランス大使ヌランスとアメリカ大使フランシスの協力をえてくわだてた陰謀には、すべての帝国主義列強の諜報機関がかかりあっていた。陰謀者たちは、人民委員会議の全員を逮捕し、レーニンを殺害するつもりだった。

こうしてロシアには、国内の反革命派と共同して外国の帝国主義者のおこした武力干渉と内戦がはじまり、一九二〇年の末までつづいた。

「この戦争がわれわれにおしつけられたものであることは、だれでも知っている」とレーニンは書いている。「一九一八年のはじめには、われわれはそれまでの戦争をおえており、しかも新しい戦争をはじめてはいなかった。白衛軍が西部で、南部で、東部でわれわれにむかってきたのは、……協商国の援助があったからこそだということは、だれでも知っている」（全集、第二九巻、五三ページ）。

プロレタリア詩人デミヤン・ベードヌイは、当時、情勢をつぎのように言い表わした。

同志よ！　おれたちは砲火にとりまかれた！

あらゆるけだものがおれたちめがけておそってくる。
祖国には暴圧者の徒がたむろしている。
おれたちにのこされた運命はただ二つ、
たたかいに勝つか、いさぎよくたおれるか。

共産党は祖国戦争に人民を立ちあがらせた。それはプロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）と社会主義を、国際プロレタリアートのとりでであるソヴェト共和国をまもるための戦争であった。レーニンに指導される中央委員会は、戦争のもっとも重要な問題をすべて解決し、戦略計画をきめ、また作戦を保障し、予備軍を創設し、資源を動員し分配するためにさまざまな措置をとった。

党の配慮はおもに、赤軍を編成することにむけられていた。一九一八年の夏までに、約五〇万人の志願兵が入隊した。これは、地主とブルジョアジーを鎮圧するには十分な兵力であったが、内外の反革命派を相手にして、長期にわたる戦争をおこなうには、あきらかに不十分であった。ソヴェト権力は、義務兵役制度にうつるという決定を採択した。赤軍は、階級的原則にもとづいて建設された。それは労働者と勤労農民で編成された。いたるところで、赤軍の部隊が急速に編成された。すぐれた党活動家が軍隊におくりこまれた。彼らは、組織性と共産党の思想をもちこんだ。共産党員は、厳格な規律をもった正規軍を創設することをめざし、部隊内で大がかりな宣伝活動をおこない、干渉軍と白衛軍のもくろみを暴露し、ソヴェト国民の祖国戦争が正義の戦争であることをあきらかにした。戦闘で共産党員は、赤軍将兵にみずから模範を示した。

都市では、労働者・農民出身の指揮官を養成する講習会がひらかれた。旧軍隊の兵士や下級指

揮官のなかから、幹部将校が大勢うまれた。共産党員や人民のなかから、ヴェ・ア・アントノフ－オフセエンコ、ヴェ・カ・ブリュッヘル、エス・エム・ブヂョンヌイ、カ・イェ・ヴォロシーロフ、エス・エス・ヴォストレツォフ、オ・イ・ゴロドヴィコフ、ペ・イェ・ドィベンコ、ゲ・イ・コトフスキー、エス・ゲ・ラゾ、ア・ヤ・パルホメンコ、ヴェ・エム・プリマコフ、エム・エヌ・トゥハチェフスキー、イ・ペ・ウボレヴィチ、ヤ・エフ・ファブリツィウス、イ・エフ・フェヂコ、エム・ヴェ・フルンゼ、ヴェ・イ・チャパエフ、エヌ・ア・シチョルス、イ・エ・ヤキルのような内戦の英雄と司令官が輩出した。

赤軍には、旧軍隊の将軍や将校であった軍事専門家も徴集された。彼らの多くは、赤軍が祖国と人民の利益との防衛にあたっていることを理解していたので、誠実に自分の責務をはたした。そうした人々のうちには、ア・イ・エゴーロフ、エス・エス・カーメネフ、デ・エム・カルブィシェフ、ベ・エム・シャポシニコフ、ア・ヴェ・スタンケヴィチ、ア・ペ・ニコラーエフがいた。この最後の二人は、その後白衛軍の捕虜となり、ソヴェト権力に忠誠を守ったために絞首刑に処された。だが、軍事専門家のなかには、祖国を裏切って、軍事上の機密を敵にもらし、敵側に寝返ったような者も、多かった。

赤軍内部には、軍コミサール制度が設けられた。これは、共産党とソヴェト権力の全権委員であった。コミサールは、軍事専門家を監督して、軍隊の力をよわめたり敵をたすけたりしようとするくわだてを、すべて容赦なくくいとめた。軍隊内の共産党員に依拠して、彼らは、赤軍の内部や住民のあいだで党の政治活動を大々的におこない、共産党細胞の結成に当たった。軍コミサールは、軍の中心人物で、兵士や指揮官を結束させ、革命的責務をはたすよう彼らをはげました。

党の政治活動と文化啓蒙活動をおこなうために、各方面軍、各軍、各師団に政治部がつくられた。

ソヴェト軍にくわわって多くの外国人労働者や捕虜だった人たちがたたかっていた。ポーランド人、チェコ人、スロヴァキア人、ユーゴスラヴィア人、ハンガリー人、中国人、ドイツ人、朝鮮人、ルーマニア人、その他の民族に属する人々から、国際部隊が編成された。彼らは、世界最初のソヴェト共和国をまもることを自分自身の責務と考えていた。

党はすべての勤労者に、国防活動をつよめ、警戒心をたかめるよう呼びかけた。一九一八年六月の全ロシア中央執行委員会の決定によって、エス・エル右派とメンシェヴィキは、白衛軍と干渉軍を支持しているかどで、ソヴェトから除名された。

一九一八年の夏には、決定的な戦線は東部戦線で、ここでは、チェコスロヴァキア軍団の反乱と富農の反ソヴェト行動とが合流していた。最大の危険はここからきていた。ここでは敵は、準備のととのった大兵力をもっていて、最短距離をとおってモスクワを攻撃しようともくろんでいた。そのうえチェコスロヴァキア兵は、中部諸県から国の重要な穀倉である、ヴォルガ沿岸地方とシベリアを遮断した。レーニンは、「ロシア革命だけでなく、国際革命にとっても救いの手は、チェコスロヴァキア戦線にある」と言った（全集、第二八巻、七七ページ）。

ヴォルガ流域では激戦がくりひろげられた。一九一八年七月二九日、党中央委員会は、東部戦線の情勢を討議して「革命の前途は、いまヴォルガ流域とウラル地方で決せられようとしている」と指摘した。中央委員会は、共産党員の東部戦線への動員を強化し、すべての部隊に党細胞をつくる活動をくりひろげるよう、すべての党組織に呼びかけた。

党は、東部戦線を強化する緊急措置をとった。前線各軍内での軍事上の指導的な活動にあたる

ために、経験にとんだ党活動家、エス・イ・グセフ、エム・エス・ケドロフ、ヴェ・ヴェ・クイブィシェフ、ア・エフ・ミャスニコフ、ヴェ・イ・メジラウク、ペ・カ・シテルンベルクその他が、派遣された。モスクワ、ペトログラートその他、中部諸地区の大きな党組織は、その党員の五分の一を前線におくった。一九一八年の末、ヴォルガ沿岸地方やウラル地方の党組織は、党員のほとんど全部を前線におくった。ここでは二ヵ月のあいだに、五つのソヴェト軍が編成された。東部戦線の軍隊内の党組織には、約二万五〇〇〇人の党員がいた。ここでは二ヵ月のあいだに、五つのソヴェト軍が編成された。北部戦線には第六軍が生まれた。その他の戦線ではさらに一〇個軍が徐々につくりあげられた。レーニンは、毎日、東部戦線の軍隊の行動や、それへの新しい兵力の補充状態を見まもっていた。彼は、前線に派遣される何百人もの共産党員に、みずから訓令をあたえた。

中央委員会と党組織がとった措置のおかげで、東部戦線は強化された。赤軍は、チェコスロヴァキア軍と白衛軍との圧迫にたえぬいた。敵のモスクワへの道はとざされた。

これと同じころソヴェト軍は、国の中部諸地区や、さらにツァリーツィン地区への突破をくわだてたドンの白系カザック軍の攻撃を、首尾よく撃退した。ツァリーツィン地区の部隊は、東部戦線の右翼を援護していたのである。ツァリーツィン防衛の主力は、ウクライナから進発した労働者部隊と第十軍を構成していた同市の労働者であった。北カフカース軍管区の軍事会議が設置され、イ・ヴェ・スターリン、カ・イェ・ヴォロシーロフ、エス・カ・ミーニンがそれにはいった。ツァリーツィンが英雄的に防衛されたので、東部戦線の状態も緩和した。

そのころ反革命派は、ソヴェト国民に手いたい打撃をあたえた。エス・エルが、レーニンの生命に危害をくわえたのである。八月三〇日、レーニンは、ミヘリソン工場（現「ヴラヂーミル・

イリイチ」工場）の大衆集会から帰ろうとしていたとき、毒をぬった銃弾を二発受けて、重傷をおった。同じ日に、エス・エル右派は、ペトログラートでエム・エス・ウリツキーを殺害し、そのまえ〔六月二〇日〕にはヴェ・ヴェ・ヴォロダルスキーを殺害した。

レーニンが負傷したという知らせは、全国に憤激の嵐をまきおこした。勤労者は、敵を撃滅するために全力をつくすと誓いを立てた。赤軍の兵士は、イリイチが危害をこうむったことに復讐の念に燃えながら、戦闘に出ていった。ソヴェト国民は、党を中心にいっそう固く団結し、軍隊にたいする援助をつよめた。

一九一八年九月二日、ソヴェト共和国は単一の戦陣であると宣言された。反革命派のテロルにこたえて、ソヴェト権力は赤色テロルを実施した。白衛派の組織に所属する者、陰謀や暴動の参加者は、銃殺に処せられることになった。このころ、エフ・エ・ジェルジンスキーに指導される全ロシア非常委員会は、帝国主義者の手先に一連の致命的な打撃をあたえた。とりわけ、ロックハートの陰謀が一掃された。

赤軍は東部戦線で攻勢に転じ、チェコスロヴァキア軍と白衛軍の連合兵力を撃破した。一九一八年九月、赤軍はカザンとシンビルスクを解放し、一〇月はじめにはサマラを解放した。赤軍の戦闘行動の経験を概括して、党中央委員会はこう書いている。「東部戦線で九月におさめた戦果は、まず第一に、党員がコミサール、指揮官、赤軍の一般兵士として東部戦線でおこなった精力的で、断固たる、献身的な活動のたまものである」。

武装兵力を創設するための党の活動と、共産党員の勇敢で献身的な闘争とは、きわめて短い期間に成功で飾られた。すでに一九一八年の秋には、赤軍にはおよそ一〇〇万人の戦士がいた。

2 ソヴェト・ロシアにたいするドイツの干渉の失敗。協商国の干渉の強化

ドイツとオーストリア＝ハンガリーの占領軍は、ウクライナ、ベロルシア、バルト海沿岸地方、ザカフカースの勤労者に、はかりしれない災厄をもたらした。彼らに占領された地区は略奪をこうむった。侵略者は、祖国防衛に立ちあがった愛国者に、残虐な制裁をくわえた。占領軍をたすけていたのは、あらゆる種類の民族主義政党といわゆる「民族政府」とに代表されるブルジョア民族主義者であった。しかし、敵は、占領軍にたいする人民の急激に高まる怒りにたいしては無力であった。ウクライナ、ベロルシア、バルト海沿岸地方、ザカフカースでは、党組織の指導のもとに、ドイツ干渉軍にたいする勤労者の祖国戦争が展開された。一九一八年一〇月、モスクワでロシア共産党（ボ）中央委員会が積極的に参加して、ウクライナ、ベロルシア、ポーランド、ラトヴィア、リトワニア、エストニアの各共産党代表者会議がひらかれ、これらの党の活動を調整する中央ビューローが設置された。

ドイツ軍指令部は、西部戦線から大兵力をひきあげて蜂起した人々とのたたかいに投入しなければならなかった。ロシアにやってきたドイツの兵士たちは、ソヴェト権力が勤労者の権力であることを確信するようになった。兵士たちは、西に帰るさい、革命思想を身につけていった。

一九一八年の秋、協商国の軍隊は、ドイツ軍の抵抗を打ちやぶった。後者は、戦争で消耗し、占領地区のパルチザン部隊の打撃や、ソヴェト・ロシアの革命的影響によってよわめられていた

のである。

九月にはブルガリアに兵士の反乱がおこり、一〇月にはオーストリア＝ハンガリーに、一一月にはドイツに革命がひろがった。これは、ソヴェトの国の状態をいちじるしく楽にした。一九一八年一一月一三日、全ロシア中央執行委員会は、ブレスト条約の破棄を宣言した。同条約はながつづきしないだろうというレーニンの見通しは、完全に裏付けられた。

ドイツ帝国主義の侵略政策が破綻したことにうながされて、占領軍とブルジョア民族主義者にたいするウクライナ、ベロルシア、バルト海沿岸地方の勤労大衆の闘争が、あらたに盛りあがった。赤軍は蜂起した人々の援助におもむいた。ソヴェト軍とパルチザンとの打撃を受けて、オーストリア＝ドイツ占領軍は、ウクライナ、ベロルシア、バルト海沿岸地方から早々に逃げだした。ウクライナ、エストニア、ラトヴィア、リトワニア、ベロルシアの各ソヴェト政府は、活動を開始した。ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国の人民委員会議は、新しい民族ソヴェト共和国の独立を承認し、極力それに援助をあたえた。

しかし、ドイツの敗北は、非常に不利な結果をもともなっていた。協商国の帝国主義者は、その軍隊をソヴェト共和国にたいしてもちいることができるようになったのである。彼らは、オデッサ、ヘルソン、セヴァストーポリ、ノヴォロシースクに、大部隊を揚陸した。ムルマンスクとアルハンゲリスクには、イギリス兵とアメリカ兵が四万人以上も上陸した。日本とアメリカは、極東にアメリカ軍と日本軍がそれぞれ一万人の兵力を揚陸することについての協定に調印した。ところが、実際には日本は一〇万に近い兵力を揚陸した。同時に協商国は、ロシアの占領地区に軍隊を残留させるよう、ドイツに申し入れ、ドイツ帝国主義者は、よろこんでこれに応じた。

ソヴェトの国の内政にたいする国際干渉の歴史を分析して、レーニンはこう述べている——

「第一の段階は、協商国にとって当然、比較的やりやすく、容易なこと、すなわち自国の軍隊の力でソヴェト・ロシアをかたづけようとしたことであった」（全集、第三〇巻、二〇一ページ）。

帝国主義者は、国内の反革命派にたいしても援助を強化した。エス・エルとメンシェヴィキは、国のいくつかの地区で軍事独裁を樹立するための地ならしをした。シベリアでは、一九一八年一一月に、イギリスの干渉軍がツァーリの提督コルチャックを「最高統治者」にすえた。南部では、協商国が、デニーキン将軍の指揮のもとに、ドン軍と志願軍とを合同させた。デニーキンには装備や弾薬が補給されはじめた。

ソヴェト政府は、干渉にたいして再三抗議を表明するとともに、協商国側列強に講和を締結するよう申し入れた。一九一八年一一月はじめにひらかれた第六回臨時全ロシア・ソヴェト大会は、ソヴェト・ロシアと交戦している国の政府に、講和交渉をはじめようという提案をかさねておこなった。だが、干渉者はソヴェトの提案を無視した。彼らは、是が非でもロシアのソヴェト権力をたおそうと、決意していた。

おそるべき危険に直面してレーニンは、三〇〇万の軍隊を創設する課題をかかげた。干渉軍と白衛軍を撃滅するために、党、労働者階級、人民大衆の全力をかたむけ、国の全資源をあてる必要があった。この目的で、一九一八年一一月三〇日、レーニンを議長とする労農国防会議が設置された。

軍事情勢は、党活動を立てなおして党が敵にたいする反撃に勤労者を十分動員できるようにす

ることを必要とした。厳重な中央集権主義と鉄の規律、ソヴェト権力の勝利と強化のための英雄的、献身的な闘争が、党の全生活と全活動の特徴になった。党は、内戦の戦線へ共産党員を何回も動員した。

銃後を固めることに大きな注意がはらわれた。党の県委員会、郡委員会には、スパイ行為や破壊活動とたたかい、企業、鉄道、倉庫をまもるために特務部隊がつくられた。党組織の活動で重要な地位を占めていたのは、党員の軍事訓練であった。

党は、大衆のあいだでの政治的扇動と宣伝に特に留意した。個人およびグループによる扇動がつよめられた。兵営、赤軍部隊、工場、個々のアパートには、扇動家が配属された。前線臨接地区には、全ロシア中央執行委員会の扇動列車や扇動汽船が送られ、有数な党活動家やソヴェト活動家がその責任者になっていた。汽船「赤い星」号では、エヌ・カ・クルプスカヤがはたらいていた。ヴォロリーニンであった。たとえば列車「十月革命」号を指導していたのはエム・イ・カリーネン、タムボフ、ウフィム、ツァリーツィン、シンビルスク、ドン各県委員会は、その地方の扇動・宣伝列車、同汽船、個々の宣伝・扇動車を組織した。大衆的政治活動の新しい形態である党外会議が広く普及した。レーニンはこの会議を高く評価していた。会議は、党が大衆との結びつきを固め、大衆の質問にこたえ、すぐれた活動家を国家機関に登用するのを助けた。党組織の政治的大衆活動は、白衛派や干渉軍とのたたかいに国民を動員するうえで非常に大きな役割をはたした。

ソヴェト権力は勤労者全体から支持された。中農の気分も一変した。中農は、反革命の恐ろしさを身をもってあじわい、敵が勝利すれば、地主が帰ってきて農民の土地をとりあげるうえに、

国の独立も失われるということをさとって、ソヴェト権力のほうに急転換した。ボリシェヴィキは、この事情を考慮にいれた。はやくも一九一八年の秋、レーニンは、中農の中立化というスローガンから中農との強固な同盟に移るよう、党に呼びかけた。

ソヴェトの国は、優勢な敵の勢力と独力で戦争をおこなっていた。国の資源はひどく消耗していた。すべてこうした事情のために、ソヴェト権力の経済政策には、変更をくわえないわけにいかなくなった。戦争は、干渉軍と白衛軍を撃滅する任務に全工業を従わせることを必要としていた。ソヴェト政府は、一歩一歩、大工業ばかりでなく、中工業や小工業をも国有化していった。工業の管理は厳重に中央に集中された。

異常に緊迫していた問題は、食糧問題であった。一九一八年一〇月、農耕者から現物税を徴収する法律が採択された。だが、悪戦のためにこれを実施することができなかった。赤軍にはたえず食糧を補給する必要があったし、労働者階級を餓死から救う必要もあった。一九一九年一月、『国家に譲渡さるべき穀物および飼料の生産県別割当てについて』という布告が採択された。この布告にもとづいて、ソヴェト権力は、国家の需要をみたすに必要で、各生産県に割当てられて公定価格で農民から買い上げられる穀物と飼料の数量を決定した。

「包囲された要塞にいたわれわれは」とのちにレーニンは言っている。「軍隊の戦闘力を維持し、工業を完全に崩壊させないためだけに、割当徴発制を実施する以外には、すなわち農民からありさえすればいっさいの余剰をとりあげ、ときには余剰だけでなく、農民にある程度必要な分さえとりあげる以外には、持ちこたえることができなかった」（全集、第三二巻、三〇八ページ）。

食糧割当徴発制の実施は、プロレタリア国家をまもるために命じられたものであった。食糧は、まず第一に富農から徴集された。全般的労働義務制が実施された。「働かざる者は食うべからず」という原則が実現された。ブルジョアジーを義務的な肉体労働に服させたので、プロレタリアートは、前線のためのいっそう重要な仕事に従事することができるようになった。

こうして、「戦時共産主義」という名称で歴史に記されている経済政策ができあがった。戦時共産主義の政策への移行は、一九一八年の夏からはじまって、一九一九年の春まで、およそ一年のあいだに徐々におこなわれた。戦時共産主義は、社会主義革命の避けられない発展段階ではなかった。それは、一時的なもので、外国の軍事干渉と国内の経済的崩壊によって必要とされたのである。当時はこの政策がただ一つ可能なもので、完全に正当なものであった。だが、戦時共産主義すなわち社会主義に通じる道と考えるのは、正しくない。のちに、レーニンは、戦時共産主義を実施したことはソヴェト権力の功績とみなければならないと指摘しながらも、同時につぎのようにのべている。

「だが、この功績のほんとうの度合を知っておくこともこれにおとらず必要である。『戦時共産主義』は、戦争と荒廃によってやむなくされた。それは、プロレタリアートの経済的任務にふさわしい政策ではなかったし、またそうではありえなかった。それは臨時の措置であった」（同、三六九ページ）。

党と政府がいろいろな措置をとり、勤労者がこれを献身的に支持したおかげで、赤軍は干渉軍と白衛軍の攻撃を持ちこたえることができた。

一九一八年末、南部戦線の形勢が険悪になった。一一月に党中央委員会は、情勢を討議して、

戦線を強化することにした。党中央委員会の指示にもとづいて、南部戦線には経験にとんだ軍コミサールが派遣され、モスクワ労働者師団、インザ部隊、ウラル部隊などの新しい増援軍がおくられた。はやくも一九一八年一二月には、南部における干渉軍と白衛軍の攻撃をくいとめることができ、一九一九年一月のはじめには反攻に転じることができた。南部戦線の軍隊は、クラスノフのドン軍を撃滅した。多数のカザックは、ボリシェヴィキの扇動や戦線での敗北に影響されて、各自家路についた。

南部から赤軍の兵力をそらそうとして、協商国は北部で攻撃をくわだてた。コルチャックは、東部戦線の北部戦区にかなりの兵力を移動させた。これは、およそペルミ—コトラス間の地区でイギリス部隊およびアメリカ部隊と合流し、単一の戦線をつくってモスクワに進撃するためであった。白衛軍は、ソヴェト第三軍を敗走させ、一九一八年一二月の末にペルミを奪取することに成功した。

しかし、敵は、計画を実現することができなかった。ソヴェト軍は、戦闘で白衛軍部隊を消耗させた。党中央委員会がとった措置のおかげで、第三軍は、はやくも一九一九年一月に攻勢に転じることができた。第三軍の戦闘力をたかめるうえで大きな役割をはたしたのは、エフ・エ・ジェルジンスキーとイ・ヴェ・スターリンからなる、ロシア共産党（ボ）中央委員会と国防会議の党査問委員会で、この委員会は、東部戦線の軍隊の組織にあった欠陥を摘発し一掃する措置をとった。ソヴェト軍は、東部戦線の他の戦区でも攻撃に転じて戦果をおさめた。一九一八年一二月にはウファが解放された。一九一九年一月には、西からとトゥルケスタン側面からのソヴェト軍の共同攻撃によってオレンブルクが解放された。南部戦区では、赤軍はウラリスクに突入した。

赤軍は各所で攻勢に出ていた。帝国主義者の軍隊は戦闘力を失っていった。彼らは、ドイツ軍との戦争をつづけるためというふれこみで、ロシアにおくられてきていた。だが、ドイツ兵には一人も出くわさないので、兵士たちはこのぺてんをさとりはじめた。ロシアでは権力が人民の手ににぎられており、労働者と農民が搾取を知らない新しい社会を建設しつつあることを、兵士たちはその目でみた。この点で大きな役割を演じたのは、敵の後方の共産党員であった。党中央委員会と地方委員会は、党の地下組織をつくることに多くの注意をはらっていた。ドンとクバンでの活動を指導していたのはドン・ビューローであり、ウラルではウクライナ共産党（ボ）中央委員会の戦線後方ビューローであった。広い網の目のような地下の党組織がシベリアで活動していて、ロシア共産党（ボ）シベリア・ビューローがそれを指導していた。地下組織は住民のあいだだけでなく干渉軍のなかでも活動していた。オデッサでは、勇敢なボリシェヴィキ、イ・エフ・スミルノフ（地下活動の呼び名はニコライ・ラストチキン）に指導される党地方委員会が、干渉軍兵士のあいだで扇動をおこなうために「外国人委員会」をつくった。スミルノフやフランス婦人ジャンヌ・ラブールブその他をふくめて、大勢の共産主義者が、絞刑吏である干渉軍の手にかかって非命にたおれた。

敵の後方でのボリシェヴィキ党の活動は、効を奏した。黒海のフランス艦隊では反乱が勃発した。軍隊内には動揺がはじまった。兵士は本国帰還を要求した。一九一九年の春には、干渉軍は、ソヴェトの国の一連の地区を放棄せざるをえなくなった。

「イギリス軍とフランス軍に撤退を余儀なくさせた点でわれわれがおさめたこの勝利は」とレーニンは言っている。「協商国にたいしてわれわれがおさめたもっとも重要な勝利であ

った。われわれは、協商国からその兵士をうばいとったのである」(全集、第三〇巻、二〇三ページ)。

3　第三共産主義インタナショナルの結成。第八回党大会。党の第二の綱領

ソヴェト権力にとって大きな支援となったのは、西ヨーロッパにおける革命的高揚であった。多くの資本主義国で、労働者の大衆的ストライキはブルジョアジーとの武力衝突になった。ハンガリーとバイエルンでは、一九一九年の春にソヴェト共和国が成立した。植民地人民の民族解放闘争が広がりはじめた。

十月革命は、国際労働運動内の情勢を一変させた。第三インタナショナル創設のためのたたかいは、新しい段階にはいった。一九一八年一月、ペトログラートで社会主義諸党の左派の会議がひらかれ、国際主義者の国際会議を招集することをきめた。一九一八年中に、いくつかの国で共産党がうまれた。

一九一八年一二月末から一九一九年一月はじめにかけて、ドイツ共産党の創立大会がひらかれた。同党の創立者は、ドイツの労働運動と国際労働運動のすぐれた活動家であるカール・リープクネヒト、ローザ・ルクセンブルク、フランツ・メーリング、ヴィルヘルム・ピークであった。リープクネヒトとルクセンブルクは、その後まもなくドイツ帝国主義の手先どもの手で惨殺され

た。アルゼンチン、フィンランド、オーストリア、ハンガリー、ポーランドに共産党が創立された。多くの資本主義国に共産主義者のグループや左派社会主義者の組織がつくられた。第三共産主義インタナショナルを創立するというレーニンがかかげていた課題が、ついに実現できるようになった。一九一九年一月、ペトログラートで国際主義者の代表者会議がひらかれた。レーニンの提唱で、同会議は、共産主義インタナショナルの創立大会に参加するよう、共産党と左派社会主義グループに呼びかけた。

一九一九年三月はじめ、三〇ヵ国の共産党および左派社会主義組織の代表がモスクワの大会にやってきた。大会を指導したのは、世界プロレタリアートの首領ヴェ・イ・レーニンであった。諸国共産党の第一回大会は、第三共産主義インタナショナルを創立し、ブルジョア民主主義とプロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）についてのレーニンのテーゼに賛同し、コミンテルンの政綱を承認し、全世界のプロレタリアにあてて、すべての国でプロレタリア独裁（ディクタトゥーラ）のため、ソヴェトの勝利のために断固としてたたかうよう呼びかけた宣言を発表した。コミンテルンの創立は、社会改良主義にたいするマルクス＝レーニン主義の偉大な勝利であった。国際プロレタリアートの最良の革命勢力はみな、共産主義的国際主義の旗のもとに結集した。

一九一九年三月一八日から二三日まで、ロシア共産党（ボ）第八回大会がひらかれた。大会は三〇万人以上の党員を代表していた。大会は、中央委員会の報告、ロシア共産党（ボ）綱領草案、軍事情勢と軍事政策、農村における活動の問題、および組織問題を審議した。

第八回党大会は、レーニンの指導のもとに仕上げられた新しい、第二の党綱領を採択した。綱領には、プロレタリアートの世界解放運動の踏みこえられた段階が総括されていた。ソヴェトの

国にプロレタリアートの独裁が樹立されるとともに、最初の党綱領のかかげていた基本的な任務は解決された。いまや党は別の任務、労働者階級の独裁の国家を強固にし、社会主義社会を建設するという任務に当面していた。新しい綱領には、ロシア社会民主労働党の最初の綱領にもはいっていた、独占以前の資本主義のマルクス＝レーニン主義的分析とともに、資本主義の最高の段階である帝国主義の分析もあたえられており、ロシアにおける十月社会主義革命の必然性と合法則性が基礎づけられていた。

新しい綱領は、資本主義から社会主義への過渡期全体にわたる党の任務をさだめていた。綱領は、最高の型の民主主義としてのソヴェト民主主義の全面的な特徴づけをふくんでおり、ブルジョア民主主義の階級的本質とその欺瞞性があばき出されていた。

経済の分野では、新しい綱領は、国の生産力を極力発展させることが、ソヴェト権力の経済政策全体を規定する主要かつ決定的なものとみていた。ブルジョアジーの収奪を徹底的に遂行し、生産手段と流通手段を全人民の所有に変え、単一の全国家的な計画にもとづいて国の全経済活動を統合するという要求がかかげられていた。綱領は、地方工業とクスターリ工業の協同組合化をさらにおしすすめること、国家がこれらの工業に財政的支持をあたえること、これらの工業を総合的な原料・燃料供給計画のなかにふくめることを、さだめていた。すべてこうしたことは、これらのものがいっそう高度の機械制大工業に移っていくのを容易にするはずであった。綱領には、社会主義的生産様式は、勤労者の同志的な規律、彼らの最大限の自主活動、責任感、労働生産性の相互監督をもとにしてはじめて確立できる、と指摘されていた。新しい社会主義的な規律をつくりだすうえで、主役は労働組合にあたえられていた。科学を広く発展させ、それを生産に近づ

けること、ソヴェト権力の監督のもとにブルジョア専門家を利用することが　さだめられていた。

農業の分野では、大規模な社会主義農業を組織することをめざした方策が勧告されていた。(一)ソヴェト農場の設立、(二)共同耕作の団体や組合をつくり、それを援助すること、(三)すべての休閑地に国家の手で作付すること、(四)農作を向上させるために農業技術者を全員動員すること、(五)大規模な共同経営を目的とする農耕者の完全に自発的な団体として、農業コンムーナを支持すること、がそれである。

小規模な個人農民経営がこんごもなお長期間存続することを念頭において、党は、勤労農民に改良種子や肥料を供給したり、農具賃貸所や試験場を設置したり、農学上の知識を普及したり、ソヴェトの作業場で農具を修理したり、農具賃貸所や試験場を設置したり、土地改良工事をおこなったり、等々することによって、個人農民経営の生産性をたかめることが必要であると考えていた。

労働保護と社会保障、住宅問題、国民保健、国民教育の面でも、具体的な方策が立てられていた。

綱領の討議にあたって、ブハーリンとピャタコフは、綱領に、独占以前の資本主義と単純商品経済の特徴づけをふくめることに反対した。彼らの反対は、実質上、レーニンの社会主義革命理論に反対する闘争の続きであった。彼らの考えでは、帝国主義は資本主義の発展における一段階ではなく、別個の社会経済構成体であった。帝国主義は独占以前の経済諸形態とは両立しない、とブハーリンとその支持者は言った。この反レーニン的な「純粋帝国主義」理論から出てくる結論は、帝国主義時代には「純粋」のプロレタリア革命だけが可能であり、その革命ではプロレタリアートはただひとりブルジョアジーと対立していて、そこには反封建運動も民族解放戦争もな

い、というのであった。ブハーリンとピャタコフは、社会主義革命や社会主義建設ではたす農民の役割を否定するメンシェヴィキ的＝トロツキー主義的な立場を出発点としていた。実際には、この立場は、プロレタリアートに同盟者を失わせ、結局のところプロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）を否定することを意味していた。

レーニンは、ブハーリンとその支持者に反対した。彼はブハーリンの提案のもたらす政治的な害を指摘した。

「資本主義という基礎をもたない純粋の帝国主義などは」とレーニンは言った。「かつて存在したことはなく、いまどこにも存在してはいないし、今後もけっして存在しないであろう」（全集、第二九巻、一五二ページ）。

綱領の討議にあたって重大な意見の相違をひきおこしたのは、民族問題であった。ブハーリンとピャタコフは、国家としての分離をもふくむ民族自決権を承認することに反対した。レーニンは、この反ボリシェヴィキ的な提案を暴露して、このような提案がどんな致命的な結果をもたらすかをしめした。党とソヴェト権力は、正しい民族政策によって、地主とブルジョアジーの植民地的抑圧がうみだした民族間の不信の克服に当たってきて、民族友好の基礎をきずいた。ところが、ブハーリンとピャタコフの提案は、民族間の不信がふたたびひきおこされることにつうじるものであった。こうした提案は、ソヴェトの国の国際的な影響にも害をながすものであった。なぜなら、帝国主義者は、ソヴェト・ロシアに民族を抑圧し征服する以前の政策が復活しつつあるかのように中傷しはじめるだろうから。

「だが」とレーニンは言った。「民族自決の原則を否定する立場をとれば、そういう結果に

なりかねない。現にあるものを承認しないわけにはいかない。それはいやおうなしに自分を承認させるであろう。プロレタリアートとブルジョアジーとの分離は、国がちがえば独特の道をすすんでゆく。この道では、われわれはきわめて慎重に行動しなければならない。さまざまな民族にたいして慎重にふるまうことがとくに必要である。民族の不信ほど、悪いことはないからである」(同、一六二一—一六二二ページ)。

大会は、帝国主義の性格と民族問題についての反レーニン的な提案をしりぞけて、レーニンの党綱領を承認した。そのなかでは、十月社会主義革命と世界の舞台での階級勢力の配置の結果はじまった時代の、新しい型の国家としてのプロレタリア国家の、資本主義から社会主義への過渡の主要合法則性の、特徴づけがあたえられていた。これは、世界史上最初の社会主義社会建設綱領であった。

大会のもっとも重要な問題の一つは、中農にたいする態度の問題であった。この問題について報告したのは、レーニンであった。彼は、中農との強固な同盟という政策を提唱した。十月革命の結果、中農は農民のなかでもっとも数の多い層になった。彼らにたいしては特別な近づき方が必要であった。地主と資本家は完全な収奪をうけ、富農にたいしてはその反抗を鎮圧する政策がとられていたが、中農にたいしては暴力は絶対にゆるされない。彼らとは仲よくくらし、その信頼をかちとり、動揺を克服し、社会主義建設に引きいれる必要がある。「中農にたいする暴力は、このうえなく有害である」とレーニンは言った(同、二〇二ページ)ソヴェト共和国が成立した当初、中農が動揺していたころには、中農を中立化させる政策がただ一つ正しい政策であった。だが、反革命派の最初の襲撃が撃退され、ソヴェト権力が確立し、社会主義建設の任務が解決の

途についていた新しい状況のもとでは、中立化政策はすでに不要になっていた。中農は、ソヴェト権力のほうに転換していた。中農を社会主義社会の創出に参加させることが必要であった。社会主義を建設していくことは、当時農民の大多数を占めていた中農と同盟してはじめて可能であった。

「われわれは、社会主義の建設において」とレーニンは言っている。「つぎのような段階にはいっている。それは、中農にたいしては強固な同盟に立脚するために……われわれの指針としなければならない基本的な規則や指示――農村における活動の経験でたしかめられた規則や指示を、具体的に、細部にわたって作成しなければならない、そういう段階である」(全集、第二九巻、一三〇ページ)。

大会は、レーニンの報告にもとづいて、富農とたたかうため、ソヴェト権力のすべての階級敵とたたかうため、社会主義建設のために、貧農に依拠しながら中農と強固な同盟をむすぶ政策にうつる、という決議を採択した。大会は、党とソヴェトのすべての活動家に、中農が必要としていることに注意ぶかい態度をとり、中農と富農とを区別する能力をやしない、富農との闘争を終始一貫つづけるとともに、社会主義的改革の実施方法を決定するうえで中農に譲歩することによって、中農を徐々に計画的に社会主義建設にひきいれるよう要求した。

レーニンは、プロレタリアートと中農の同盟へ方向転換する意義をつぎのように定式化している。

「プロレタリアートの独裁(ディクタトゥーラ)は、勤労者の前衛であるプロレタリアートと、多数からなる非プロレタリア勤労者層(小ブルジョアジー、小経営主、農民、インテリゲンツィア、その

他)、つまり、勤労者の大多数との階級同盟の特殊な形態であり、資本に反対する同盟、資本を完全に打倒し、ブルジョアジーの反抗と彼らの復古のくわだてとを完全に鎮圧するための同盟、社会主義を最終的に建設し確立するための同盟の特殊な形態である」(同、三八二ページ)。

レーニンは、プロレタリアートの独裁(ディクトゥーラ)の理論をゆたかにし、農民問題における党の理論と政策を前進させた。

中農、すなわち大多数の農民と同盟するという大会の決定は、干渉軍および白衛軍とのたたかいのため、社会主義建設をめざすたたかいのためにすべての勤労者を団結させるうえで、きわめて重要であった。レーニンは、中農との同盟を樹立することについてのべるさい、大会でこう強調した。「われわれはこの任務をなしとげるであろう。そうなれば、社会主義は絶対不敗のものになるであろう」(同、二〇七ページ)。

大会の議事で大きな地位を占めていたのは、軍事問題であった。国は四方からの凶暴な襲撃を撃退することができたとはいえ、協商国が新しい進攻をくわだてる危険がとりのぞかれたわけではなかった。それどころか、大会は、干渉軍と白衛軍が東部から新しい攻勢に出たという情報を、すでに手に入れていた。

大会では、いわゆる「軍事反対派」があらわれた。この反対派のなかには、かつての「共産党左派」も何人かはいっていた。彼らは、軍事問題でも党の政策に反対を唱えていたのである。「軍事反対派」のなかには、「共産党左派」となんの関係もなかった人たちもはいっていた。反対派は、軍隊内に鉄の規律をしくことに反対し、旧来の軍事専門家の経験を利用することに反対し

ていた。反対派は、軍隊の指揮や用兵のうえでパルチザン的な仕方を存続させることを主張していた。

「軍事反対派」は、軍隊内の党活動の問題についてもあやまった見解をいだいていた。彼らは、軍隊内の初級党組織の権限を拡大し、これに戦闘活動全体の指導をゆだね、政治機関を廃止し、軍隊の党委員会をつくるよう提案した。「軍事反対派」は、赤軍が志願兵制であった時期、パルチザン部隊と地域組織の時期の党活動の経験を、厳重な中央集権制と鉄の規律を基礎とする正規軍の条件に機械的に転用していた。彼らの提案は、軍隊の軍事力の強化をもたらすものではなく、その弱化をもたらすものであった。

代議員たちは、「軍事反対派」の提案をしりぞけると同時に、トロツキーの方針にも抗議を表明した。トロツキーは、軍隊内の党指導をおろそかにし、旧来の軍事専門家のあいだには明白な裏切者もいたにもかかわらず、彼らを盲信していたのである。代議員たちは、階級的選抜をせずに、無差別に軍隊に動員するやりかたに反対した。こういうやりかたのため、一部の部隊が政治的にぐらついていることも、めずらしくなかった。

レーニンは「軍事反対派」にはげしく反対した。彼は、党中央委員会が重要な軍事問題をすべて決定し、それについて適当な決定をくだし、決定の遂行を監督している、と指摘した。一九一八年のツァリーツィン防衛者の比類のない英雄精神を述べるとともに、レーニンは、第十軍司令部のおかした誤りをも指摘した。この誤りは、軍事専門家を蔑視する態度をとったこと、パルチザン主義とのたたかいに欠け、それが大きな損失をもたらしたことにあった。レーニンは、鉄の軍規なしには強力な赤軍はありえず、ロシアのような農民国ではとくにそうである、と言った。

レーニンは、ブルジョア兵術の成果を利用し、軍事専門家をくわえることを主張すると同時に、彼らの活動にたいする政治的な監督を強化する必要があることを指摘した。

大会は軍事問題についての決議を全員一致で採択し、軍の建設と活動の主要原則は、党が国のすべての武装兵力を指導することであると指摘した。大会は、中央集権的な指揮系統と高度の軍規とをもつ正規軍に、パルチザン部隊を対立させようとするこころみを非難した。

決議は、軍コミサールの役割を強調して、こう述べている。

「軍隊内のコミサールは、ソヴェト権力の直接の代表者であるばかりでなく、なによりもまず、わが党の精神と規律の担い手でもあり、かかげられた目標の実現のための闘争における党の確固不抜と勇気の担い手でもある」(『ソ連邦共産党決議集』、第二巻、一九七〇年刊、六五ページ)。

赤軍内での党の政治活動全体を指導するために、共和国革命軍事会議の政治部を設置することが決定された。

決議の実践的な部分に、大会はつぎのように書きいれた。富農その他の寄生分子は特別の労働大隊に編成し、勤労者だけを軍隊に動員するという階級別動員の原則を厳守すること、軍事専門家を参加させ、コミサールをつうじて軍事専門家にたいする党の政治的監督を不断におこなうこと、プロレタリアと半プロレタリアを指揮官団にいっそうくわえること。これらの項目は、トロツキーが党の軍事政策をゆがめていることに鋒先を向けていた。

党建設についての決定では、大会は、党中央諸機関を強化する措置をきめ、中央委員会の内部構造をさだめた。党中央委員会の政治局、組織局、書記局が設置された。中央委員会には、党の

社会的構成を注意ぶかく監視し、労働者・農民以外の分子の入党については厳選方針をとり、社会的構成の悪化をふせぐように指示されていた。何万という党員が国家機関にはいったことを念頭において、大会は、これらの党員が大衆から遊離し、官僚主義にそまる危険と断固としてたたかうよう指示した。全党員の登録をおこなうことが決定された。実際には、これは党の粛清をおこなうことを意味していた。党規律の向上に大きな注意がはらわれた。「現在の時期にあっては、党内には正真正銘の軍規が必要である」と、決議には述べてあった。

党建設で重大な意義をもつようになったのは、少数民族地区の党組織であった。一九一八年の後半から一九一九年のはじめにかけて、トゥルケスタン、ウクライナ、リトワニア、ベロルシア、ラトヴィア、エストニアの各共産党、ベッサラビアの地方組織が結成された。これにともなって、少数民族地区の党組織はどういうものとしてロシア共産党にはいるか、という原則的な問題が現われた。

レーニンの方針は、これらの組織が単一のロシア共産党に構成部分としてはいるべきだというにあった。第八回大会は、独立した共産諸党の連合をつくることにきっぱり反対し、党活動全体を指導する単一の中央委員会をいただいた単一の中央集権的な共産党が存在しなければならない。各民族ソヴェト共和国の共産党の中央委員会は、地方委員会の権限をもち、ロシア共産党（ボ）中央委員会に従属する、と強調した。この決定にもとづいて、一九二〇年にザカフカース——アゼルバイジャン、グルジア、アルメニア——のボリシェヴィキ組織が、それぞれ共産党になった。

ロシア共産党（ボ）の構成部分として各民族ソヴェト共和国の共産党が創立されたことは、プロレタリア国際主義というレーニンの原則にもとづいて同党を建設するうえで新しい段階をしめ

すものであり、多民族社会主義国における党建設の模範であった。

『組織問題について』という決議で、大会は、ソヴェト国家における党の指導的役割を否定していたサプロノフーオシンスキーの日和見主義的グループに反撃をくわえた。決議は、ソヴェト内で献身的に活動することにより、ソヴェトの部署に忠実な共産党員を登用することによって、党は、ソヴェト内で完全な政治的支配をかちとらなければならない。すべてのソヴェト機関内には、党規律を厳守する党グループをつくらなければならない、と強調している。「党は、ソヴェトにとってかわろうとするものではなく、ソヴェトの活動を指導することにつとめる」と決議は述べている（『ソ連邦共産党決議集』、第二巻、七七ページ）。

大会は、第三共産主義インタナショナルの創立を歓迎し、その政綱に全面的に賛成した。

ロシア共産党（ボ）第八回大会は、巨大な意義をもっていた。大会が採択した新しい党綱領は、社会主義建設の綱領であった。大会の諸決定は、プロレタリアートと農民の軍事的・政治的同盟を強固にし、赤軍の強化を促進した。

新しい党綱領は、労働者と農民に社会主義建設のはっきりした見通しをあたえ、人民大衆を新しい社会制度の勝利をめざす献身的な闘争に奮い立たせた。

綱領は、社会主義革命はどのようにして勝利したか、それはなぜ避けられないか、その力はどこにあるかという、全世界の勤労者の疑問に答えていた。レーニンは、こう強調している——

「われわれの綱領を翻訳しただけで、世界プロレタリアートの一部隊であるロシア共産党はなにをなしとげたかという質問にたいする最良の答となるであろう。……われわれの綱領は、宣伝扇動用のもっとも有力な資料となるであろうし、それにもとづいて労働者が『ここ

にいるのはわれわれの同志、われわれの兄弟だ。ここでなしとげられつつあるのは、われわれの共通の大業だ』というような文書となるであろう」(全集、第二九巻、二二四ページ)。

一九一九年三月、すぐれた党活動家ヤ・エム・スヴェルドロフが亡くなった。党は、全ロシア中央執行委員会議長の部署にエム・イ・カリーニンを起用した。彼は、革命的プロレタリア闘争の多年の経験と農村の生活の深い知識とを兼ねそなえていた。

4 内戦の戦況の根本的な転換。コルチャックとデニーキンの撃滅

第八回党大会の議事がおわるのと時を同じくして、協商国と白衛軍の新しい侵攻がはじまった。干渉軍に援護され、その援助を受けて、ロシアの反革命派は、大軍隊の編成をつづけていた。反革命派はとりわけシベリアで地歩をかためた。ソヴェト権力に敵意をいだく勢力はみなシベリアのコルチャックのもとにあつまった。コルチャックの手には、ウラルとその産業がにぎられていた。コルチャックのやってくる地ならしをしたエス・エルとメンシェヴィキは、彼を支持していた。イギリス、フランス、日本、アメリカの帝国主義者は、白衛軍に兵器、弾薬、被服を間断なく大量におくっていた。

コルチャックの攻勢は、南部、西部、北部の反革命軍に支援された。これらの反革命軍は、それはそれで、干渉軍の援助と支持を受けた。主要な打撃をくわえたのはコルチャック軍で、ヴォルガまで前進し、そこでデニーキンと合流して、共同してモスクワに攻撃をくわえるつもりでい

た。

一九一九年三月はじめ、コルチャック軍は攻勢に転じた。ソヴェト軍の戦線は突破され、赤軍はウファを放棄した。白衛軍はヴォルガへの進路を切りひらいていった。南部では、デニーキンがドンバスの一部を奪取した。国は石炭基地をうしなった。五月には、敵はペトログラートめざして攻勢に転じた。バルト海沿岸地方でも、白衛軍は、イギリス艦隊の援助を受け、ドイツ軍部隊に頼りながら、同様に攻勢に転じた。協商国の補給をうけていたポーランド軍は、リトワニアとベロルシアに侵入した。北方からは、ミレル将軍の軍隊と、イギリス、アメリカ、フランスの干渉軍部隊とが攻撃してきた。こうして、反革命の全兵力が攻勢に転じた。

ソヴェト・ロシアはまたしても敵の包囲環におちいった。一九一九年四月一一日、中央委員会は、レーニンの書いた『東部戦線の情勢についてのロシア共産党(ボ)中央委員会のテーゼ』を承認した。テーゼは、共和国の軍事・政治情勢に評価をくだして、東部戦線が決定的な意義をもっていることを強調していた。中央委員会は、党組織と労働組合組織に、全力をそそいで、労働者階級の広範な層を国の積極的防衛に参加させるよう呼びかけた。

東部戦線には一万五〇〇〇人をこえる共産党員が派遣された。コムソモールは、同盟員の第一次全国的動員を宣言して、三〇〇〇人以上の同盟員を戦線におくった。労働組合は六万人以上の労働者を動員した。ペトログラート、モスクワ、イヴァノヴォ－ヴォズネセンスク、トヴェリの労働者を主体とする共産党員が到着したことは、軍隊を勇気づけた。党細胞と政治部は強化され、兵士の政治教育は改善された。

党中央委員会の呼びかけにこたえて、労働者階級は、大衆的な労働の英雄精神を発揮した。生

産部面での共産党員は、労働の偉業の提唱者であり、組織者であった。労働者大衆のあいだに、社会的労働の新しい形態である共産主義土曜労働がうまれた。一九一九年四月一二日の土曜日、モスクワ操車場の機関庫の共産党員鉄道労働者たちは、党細胞議長イ・イェ・ブラコフの提案で残業して機関車三両を修理した。最初の共産主義土曜労働を組織した共産党員の創意は、機関の労働者に受けつがれた。五月一〇日、モスクワ－カザン鉄道の一保線区の共産党員と党支持者の総会の決定で最初の大衆的な共産主義土曜労働がおこなわれた。党は労働者のこの発意を支持した。共産主義土曜労働は全国にゆきわたった。

レーニンは、共産主義土曜労働を偉大な創意と呼んだ。彼は、土曜労働が勤労者の自覚した、自発的、英雄的な労働であり、共産主義の事実上の端緒であると評価した。銃後における労働者の献身的な労働のおかげで、赤軍にすべての必要物資、まず第一に兵器と弾薬を保障することができた。

党中央委員会と政府の指示によって、司令部は赤軍の反攻計画を立案した。決定的な打撃をくわえたのはエム・ヴェ・フルンゼ指揮下の東部戦線南部方面軍であった。南部方面軍の革命軍事会議の委員は、ヴェ・ヴェ・クイブィシェフであった。伝説的な勇名をはせたヴェ・イ・チャパーエフ師団は同方面軍に属していて、デ・ア・フルマノフが同師団のコミサールであった。一九一九年四月末、南部方面軍は反攻に転じて、敵に致命的な敗北をなめさせた。コルチャックを完全に撃滅し、ウラルとシベリアを解放する条件がつくりだされた。

コルチャック軍を撃滅する計画の実現はおわりに近づいた。このことは、軍隊の一部をペトログラート付近と南部戦線に移動させることを可能にした。こういう決定的な時機に、共和国革命

軍事会議の議長トロツキーは、東部戦線司令部に、攻勢を中止するよう命じた。このことは、コルチャックに軍隊を再建する機会をあたえることになったであろう。レーニンの介入が必要になった。彼は、冬までにぜひともウラルを解放するよう要求した。中央委員会は、トロツキーの指令をしりぞけて、攻勢の継続を指令した。赤軍は東部戦線の全線にわたって攻勢に転じた。一九一九年の夏の末には、主要な危険としてのコルチャック軍の脅威はなくなった。

シベリアと極東では、パルチザンが白衛軍と干渉軍に息つくひまをあたえなかった。彼らは、激戦をまじえ、鉄道線路を爆破し、列車を脱線させ、捕虜となった赤軍将兵を奪還した。パルチザン運動も、コルチャックの後方における労働者のストライキも地下の党委員会によって指導されていた。

すべてこうしたことは、赤軍が成果をおさめるたすけとなった。

反革命派は、東部戦線における赤軍の攻勢を挫折させようとして、ペトログラート付近に攻撃をくわえた。白系フィンランド軍とエストニア白衛軍部隊とに支援されたユデーニッチ軍は、市のまぢかにせまった。

ロシア共産党（ボ）中央委員会は、ペトログラート防衛措置を講じた。共産党員、コムソモール員、労働組合員をペトログラート戦線に動員すること、ペトログラートの共産党員の東部戦線派遣をとりやめることが、命じられた。しかし、ジノヴィエフを委員長とするペトログラート防衛委員会は、万全の措置をとらず、ペトログラート防衛のために働いていた諸工場の疎開命令をだし、艦隊を自沈させる問題さえ討議していた。国防会議は、レーニンの指示にもとづいて、ペトログラートから企業や軍需品を疎開させることを厳禁した。

白衛軍司令部は、戦線での攻勢を後方からの打撃で支援しようとした。クラスナヤ・ゴールカ、セーラヤ・ローシャチ、オブルチョフの諸堡塁に、協商国の手先たちの準備した反乱がおこった。反徒はクロンシタットにむかって砲火をひらいた。反乱鎮圧のために編成された部隊は、バルチック艦隊の支援を受けて、これらの堡塁を攻撃した。反徒は壊滅した。ユデーニッチのペトログラート攻撃は失敗した。

一九一九年八月、レーニンは、コルチャックにたいする勝利にさいして労働者と農民に手紙をおくった。彼は、コルチャック支配がくりかえされる危険から国をまもるために、この勝利からくみとらなければならない主要な教訓として、つぎの点をあげた。(一) 強力な赤軍が必要である。(二) ソヴェト国家は穀物がなければ軍隊や労働者をやしなうことができない。この穀物は農民がソヴェト国家に貸しつけなければならない。(三) 革命的秩序を守り、ソヴェト権力の法律や命令を誠実に履行することが必要である。(四) コルチャックが出現するのをたすけ、また公然と彼を支持したものがメンシェヴィキとエス・エルであったことをわすれるのは、犯罪にひとしい。(五) 敵に勝利するには、労働者と農民の強固な同盟が必要である。「資本にたいする容赦ない闘争と勤労者の同盟、農民と労働者階級の同盟——これこそ、コルチャック支配の最後の、もっとも重要な教訓なのである」とレーニンは書いている(全集、第二九巻、五七六ページ)。

ソヴェト共和国の敵を撃滅するうえで絶大な意義をもっていたのは、ソヴェト権力の民族政策であった。国が危険にさらされるやいなや、敵とのたたかいのために力を合わせようという独立したソヴェト諸共和国の熱望はつよまった。党中央委員会はこの創意に賛同し、レーニンの提案

にもとづいて、ソヴェト諸共和国の軍事的統一についての決定を採択した。一九一九年六月一日、モスクワに全ロシア中央執行委員会の盛大な会議がひらかれた。それにはすべてのソヴェト共和国の代表が出席していた。全ロシア中央執行委員会は、軍事同盟を結んで統一司令部を設け、国民経済会議や、運輸や、労働人民委員部を統合するという決定を採択した。

ソヴェト諸民族の総力を合わせたことは、国の威力を高め、干渉軍と白衛軍にたいする闘争をつよめることを可能にし、ひいては彼らの撃滅を保障した。

コルチャックの敗北も、干渉をやめさせはしなかった。一九一九年の後半に、干渉軍と白衛軍は、たたかいの重点を南部にうつした。こんどはデニーキン軍が、主要打撃をくわえるはずであった。

イギリスの陸軍大臣チャーチルは、ソヴェトの国にたいする「一四ヵ国の遠征」を組織したと自慢していた。

ソヴェト・ロシアは、またもや危険きわまる情勢のもとにおかれた。シベリアのかなりの部分は奪還されたが、南部全体が、主要な燃料地区であるドンバスとグローズヌイが、デニーキンの手にあった。バクーでは、干渉軍とムサヴァト派がわがもの顔にふるまっていた。一九一九年六月三〇日、ツァリーツィンが陥落した。デニーキンはその軍隊にモスクワ進攻を指令した。彼は、ソヴェトの後方で活動していた反革命組織「民族中央部」の援助を当てにしていた。陰謀者どもは、敵軍がモスクワにせまりしだい、暴動をおこすつもりでいた。

中央委員会は、レーニンの書いた手紙『すべてをデニーキンとのたたかいに！』を出して、全党、全国に呼びかけた。この手紙には、敵を撃滅するために人民の総力を動員する具体的なプロ

グラムがしめされていた。南部戦線には、党とソヴェトの指導的活動家が派遣され、また赤軍の新兵力がおくられた。七月末、南部戦線の軍隊は、デニーキン攻撃の準備をはじめた。

反攻は、一九一九年八月のはじめに予定されていた。ツァリーツィンの方向に打撃をくわえる予定であった。こうすれば、第一に、デニーキンにヴォルガをわたってコルチャックの南部軍と合流する機会をあたえることはなかったし、第二に、ツァリーツィン地区に東部戦線から援軍を移動させることは容易であったし、第三に、この打撃はモスクワ進撃中のデニーキン軍の側面をおびやかし、ソヴェト軍部隊が敵の後方に突入することを可能にした。

しかし、攻勢は決定的な成果をおさめなかった。トロツキーの指導する軍管庁の諸機関が敏活を欠いていたため、攻勢をはじめるのがかなりおくれた。デニーキンは、南部戦線司令部のなかに手先をもぐりこませていたので、攻勢が準備中であるのを知って、それをぶちこわす措置をとった。そのさい大役を演じたのは、白衛軍のマモントフ騎兵隊が南部戦線の後方にくわえてきた急襲であった。この急襲を一掃するために、戦線から多くの部隊をひきあげなければならなかった。そうしているあいだにデニーキンは、突撃隊を編成することができ、これをモスクワにむけて投入した。彼は、クールスクとオリョールをうばい、トゥーラをおびやかした。一九一九年の秋ほど、白衛軍が国の中心部近くにせまったことはまだ一度もなかった。

それと同時に、反革命の全兵力が攻勢に転じた。彼らは、赤軍部隊を南部戦線からわきにそらそうとした。まだ息の根をとめられていなかったコルチャック軍は、攻勢を開始した。北部では、ミレルがヴォログダとペトロザヴォーツクにむかってすすんできた。ユデーニッチは、またもやペトログラート周辺に突入した。ブルジョア＝地主のポーランドの軍隊はミンスクを占領した。

デニーキンがモスクワをめざして前進してきたので、南部戦線が主要な戦線になった。こういうきわどい時機にあたって、党は、南部戦線を強化する新しい措置をとった。九月に中央委員会総会はレーニンの提案にしたがって、できるだけ多数の党活動家を軍事活動にふりむけることを決定した。中央委員会の決定で、南部戦線は南部戦線と東南戦線の二つに分けられた。モスクワ防備地区防衛委員会がつくられた。南部戦線には新手の予備軍がおくられた。党中央委員会は約三万人の党員を戦線に派遣した。コムソモールは、第二次動員で、一万人のコムソモール員を派遣した。ソヴェトの後方で暴動がおこるだろうというデニーキン派の期待は、水泡に帰した。「民族中央部」の陰謀が摘発されて、一掃されたのである。

党の隊列を補充するために、党は、党週間を発表した。国の中部諸地区だけで、二〇万人をこえる労働者と農民がロシア共産党（ボ）に入党した。野戦軍でも、党週間は非常ないきごみでおこなわれた。野戦軍のすぐれた戦士が入党した。ソヴェトを解散し、ボリシェヴィキをみなしばり首にするというデニーキン派の威嚇に、ソヴェトの国の勤労者はこうこたえたのである。このことは、党の政治的大勝利であり、人民大衆が共産党員にしたがっていることをはっきりしめしていた。ロシア共産党（ボ）中央委員会は、その報告につぎのように書いている。「こういう状況のもとでは、わが党の党員証は、ある程度、デニーキンの絞首台ゆきの資格証を意味していた。われわれの敵のあらゆる予言をくつがえして、党週間は、どこでも、まったく予想外の、並はずれてすばらしい成功におわった」。

ツァリーツィンから主要な打撃をくわえるという以前の計画は、当面の課題にこたえるものではもうなかった。一〇月一五日、党中央委員会政治局は、つぎのような決定を採択した。「トゥ

ーラ、モスクワおよびそれへの進路を敵にわたさず、冬のあいだに総攻撃の準備をおえること。……東南戦線では、（イ）デニーキンをウラルのカザックと合流させず、（ロ）トゥーラとモスクワの防衛に一部の兵員をさくために、一時防衛に転じること」。他の戦線については、政治局は、「まず第一にモスクワ＝トゥーラ地区の、ついでペトログラートの安全をはかる見地から」北部戦線と西部戦線を検討するよう、総司令部に指示した。

赤軍は、ハリコフードンバスーロストフ－ナ－ドヌーの線に主要な打撃をくわえた。赤色カザック騎兵旅団、軍事学校学生、ラトヴィア師団のなかから編成された、ソヴェト軍の突撃隊は、志願将校から成っていた白衛軍精鋭部隊を撃滅する任務をあたえられた。一〇月一〇日から三〇日にわたるクロームィーオリョール地区の戦闘で、突撃隊は白衛軍を撃破した。赤軍はオリョールを解放した。同時に、ブヂョンヌイ騎兵軍団は、ヴォローネシ付近で、シクーロ＝マモントフ軍団の主力を撃滅した。一〇月二四日、ソヴェト軍はヴォローネシを解放した。このころ、ブヂョンヌイ騎兵軍団は第一騎兵軍に拡大され、エス・エム・ブヂョンヌイがその司令官に任命され、カ・イェ・ヴォロシーロフが軍事会議委員に任命された。

ソヴェト軍の成功の結果、全戦線にわたって攻勢にうつることができるようになった。ウクライナと北カフカースが敵の手から解放された。後方からはパルチザンがデニーキン軍を襲撃した。デニーキンにたいする勝利にさいして、一九一九年一二月末、レーニンは、ウクライナの労働者と農民に手紙をおくった。コルチャックとのたたかいの教訓に注意をうながして、レーニンは、国のすべての民族が同盟しなかったなら、ソヴェト権力の勝利はえられなかったであろうと指摘した。彼はこう書いている。「大ロシアとウクライナの労働者・農民の統一ともっとも緊密な同

盟とをやぶる者は、コルチャック派、デニーキン派、あらゆる国の略奪者の資本家をたすける者である」(全集、第三〇巻、二九六ページ)。レーニンは、共産主義者が完全な信頼と友誼的協力とにもとづく諸民族の自発的な同盟をめざしていることを説明している。

赤軍は、ペトログラート付近でも勝利をおさめた。ユデーニッチ軍は撃破された。その大部分は捕虜になった。

一九一九年一二月、第八回党協議会がひらかれた。この協議会は、党を強化し、党と大衆とのむすびつきをつよめるうえで大役をはたした。協議会は、第八回党大会の決定にしたがって中央委員会の準備した、権力をにぎった党の最初の規約を採択した。規約には、党組織の基礎は党細胞であり、党細胞は三名以上の党員がいるばあいに承認されるという条項がくわえられた。すべて入党者にたいしては、党の綱領と戦術に通じるため、個人的資質をたしかめるために必要な候補期間が設けられた。ソヴェト機関や党外団体内の党グループについての章が設けられたことも、規約の新しい点であった。

とくに重要な意義をもっていたのは、『ウクライナにおけるソヴェトの政策について』、『ウクライナのソヴェト権力について』という協議会の決定であった。レーニンが書き、協議会で確認された中央委員会の決議は、こう強調している。「民族自決の原則を終始一貫守っている本中央委員会は、ロシア共産党がウクライナ社会主義ソヴェト共和国の独立を承認する立場をとっていることを、かさねて確認しておく必要があると考える」(『ソ連邦共産党決議集』、第二巻、一二四ページ)。

決議は、帝国主義とたたかううえですべてのソヴェト共和国が緊密な同盟をむすぶ必要がある

ことを強調するとともに、この同盟の形態は、ウクライナの労働者と勤労農民が自分で決定するであろう、と述べている。その当時、ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国とウクライナ社会主義ソヴェト共和国とは、連邦関係を結んでいた。

決議は、土地政策の遂行にあたっては、貧農と中農の利益に特に留意すること、すなわち、デニーキンの復旧させた地主的土地所有を一掃すること、土地は土地のない農民と土地の少ない農民とに引きわたすこと、ソヴェト農場の設立は農民の利益を考慮にいれて絶対必要な範囲にとどめること、農民をコンムーナ、アルテリなどに統合するさいには、けっして強制をもちいてはならないこと、を勧告した。党は、貧農と中農をもっと広く国家統治に参加させること、また、ウクライナ語とウクライナ文化との自由な発展をおさえている、あらゆる障害をとりのぞくことを要求した。

ウクライナのソヴェト権力についての第八回協議会の決議は、ウクライナの共産主義者の大きな助けになり、諸民族の友好を強固にした。

一九一九年一二月、第七回ソヴェト大会がひらかれた。大会は、イギリス、フランス、アメリカ、イタリア、日本の政府に、各国いっしょにであれ個々別々にであれ、講和交渉をただちにはじめるようかさねて提案した。ソヴェト政府は、小国には、それらの国の独立を承認するという条件で講和交渉を提案した。エストニアが、ついでラトヴィアとフィンランドが、講和交渉をおこなうことに同意した。

デニーキンが撃滅されたので、ソヴェトの国をとりまく反革命の包囲圏の、他の環も一掃することができるようになった。コルチャック軍は決定的に撃滅され、「最高統治者」自身は捕虜に

なった。コルチャックは裁判にかけられて、銃殺された。トゥルケスタンの諸戦線の掃蕩はおわった。

赤軍の勝利は、ザカフカースの勤労者が干渉軍とたたかうのをたすけた。一九二〇年の春、カフカース戦線の赤軍部隊は、ザカフカースの国境に近づきはじめた。アゼルバイジャンの労働者は、赤軍の接近を知るやいなや、アゼルバイジャンのブルジョアジーに反対して立ちあがった。一九二〇年二月、バクーでアゼルバイジャン共産党（ボ）第一回大会が非合法にひらかれた。大会は、ブルジョアジーにたいして武装蜂起をおこなうという決定を採択した。蜂起したアゼルバイジャンの勤労者には、彼らの要請にしたがって、赤軍部隊が救援にかけつけた。一九二〇年四月二八日、バクーはソヴェトの都市となった。干渉軍を駆逐し、国内の反革命勢力を撃滅し、アゼルバイジャンにソヴェト権力をうちたて確立するうえで指導的な役割をはたしたのは、党のレーニン的方針を遂行したゲ・カ・オルヂョニキッゼ、エス・エム・キーロフ、ア・イ・ミコヤン、エヌ・エヌ・ナリマノフであった。一九二〇年一一月には、アルメニアの労働者と農民が蜂起した。一九二一年二月には、グルジアの勤労者がメンシェヴィキを打倒した。ザカフカースはソヴェト・ザカフカースになった。「一四ヵ国の遠征」は失敗した。

詩人マヤコフスキーは、ソヴェト国民の気持ちをいいあらわして、干渉軍と白衛軍の失敗した冒険を痛烈に嘲笑している——

協商国のおばさんたちは、
封鎖線をきずいて、
ペトログラートに押しかけた、

上陸部隊の歌をうたった。……
志願軍もやってきた、
フォン・デル・ゴルツ軍もきた、
マモントフ軍も、シクーロ軍も、
ちっちゃなペトリューラ軍もやってきた、……
タンクをもらい、
シリングやフランをもらい、……
国際連盟の補給をうけた。
だが、なんにもならなかった。

5　第九回党大会。地主＝ブルジョア的ポーランドの軍隊とヴランゲリ軍との敗北。干渉と内戦の終結

ソヴェト国家は、干渉軍と白衛軍を撃滅して、一時的な息つぎをかちとった。協商国は、封鎖を解かざるをえなかった。協商国最高会議は、一九二〇年一月、ソヴェト・ロシアとの通商を許可した。バルト海沿岸諸国との講和の締結と封鎖の解除とは、ソヴェトの国の経済状態を緩和した。
党とソヴェト政府は、一時的な息つぎをソヴェトの国と資本主義諸国との永続的な平和共存に変えようと、ねばりづよく努力した。レーニンは、平和の状況のもとでは、ソヴェトの国は、資

本主義にたいする優越性を明示し、他の国々の勤労大衆に影響をおよぼして彼らを革命化することが、いっそうできるようになるだろうと指摘した。

「帝国主義者は戦争によって勤労大衆をあざむき」とレーニンは言っている。「戦争を利用してソヴェト・ロシアについての真実を隠してきた。したがって、どんな平和でもわれわれの影響力に百倍も大きく広い道をひらくだろう」（全集、第三〇巻、四六八ページ）。

短い息つぎを利用して、党は経済建設により多くの人手をまわし、内戦を勝利におわらせる準備をととのえることができた。帝国主義者が新しい軍事的攻撃をしかけるおそれはのこっていた。だから、ソヴェト国家は、なお、膨大な赤軍を維持しないわけにはいかなかった。党は、兵団を経済建設に参加させるという決定を採択した。ウクライナ、ウラル、北カフカース、ペトログラード付近、ヴォルガ中流地方に労働軍が創設された。軍隊内のボリシェヴィキは、ドンバスを復興し、グローズヌイ、バクー、エンバ（ウラル）の石油の輸送を円滑にするためのたたかいの組織者となった。軍の機関は、炭鉱夫や石油労働者に配給する任務をひきうけ、炭鉱や油田を整備した。党中央委員会は、運輸の仕事に五〇〇〇人の共産党員を派遣した。

レーニンは、ソヴェト制度には、軍事上の勝利をおさめるためにも、社会主義建設の困難を切り抜けるためにもつきることのない力の源があると考えていた。一九二〇年のはじめに、彼は、一〇年ないし二〇年でロシアを電化する大胆な、しかも厳密に科学的な計画を立てた。

「さあ、仕事にとりかかろう、そうすれば一〇年から二〇年でわれわれは、工業も農業もふくめて、全ロシアを電化するだろう、というはっきりした、生きいきとした（完全に科学的な根拠のある）展望で大衆の心をひきつけるために、いますぐ、目に見えるような、わか

りやすい形で大衆むけにそういう計画をあたえるべきだ」とレーニンは書いている（全集、第三五巻、四七六ページ）。

一九二〇年三月、人民委員会議は、ゲ・エム・クルジジャノフスキーを議長として、ゴエルロ（ロシア電化国家委員会）を創設することを承認した。この委員会は、総出力一五〇万キロワットにのぼる三〇の大発電所の建設を予定した計画を立案した。ゴエルロ計画は、ソヴェトの国の経済建設の最初の長期計画であった。レーニンはこれを第二の党綱領と呼んでいた。

新しい息つぎの時期の社会主義建設の見通しを立てたのは、一九二〇年三月二九日から四月五日までひらかれた第九回党大会であった。大会には、六〇万人をこえる党員の代表が出席していた。党は、戦争で多くの党員を失ったにもかかわらず、第八回大会以後の一年間にその隊列を二倍にした。このことは、党の政策が正しく、党と労働者階級、勤労大衆とのむすびつきが強固なことをはっきり立証していた。

大会の主要な問題は、経済建設の当面の任務の問題と労働組合の問題であった。これらの問題は、レーニンのおこなった中央委員会の報告のなかであきらかにされた。大会の決議『経済建設の当面の任務について』では、単一の経済計画を終始一貫実行することが国の経済復興の主要な条件であり、そういう経済計画の基礎は国の電化でなければならない、と強調されていた。決議は、この計画の課題を解決する順序をしめした。（イ）運輸の状態を改善し、穀物・燃料・原料を輸送し、ぜひとも必要なその予備をつくること、（ロ）運輸のための、また燃料・原料・穀物を手にいれるための機械製作、（ハ）日常消費物資の生産のための機械製作を極力発展させること、（ニ）日常消費物資を増産すること。大会は、工業プロレタリアート全体を生産活動にひき

いれ、労働義務制にもとづいて大量動員を組織し、経済を戦時態勢におき、経済戦線に軍隊を広く使用するよう指示した。競争を組織することが、特に留意された。工業管理の分野では、大会は、中央集権化を維持・発展させ、単独責任制を強化する必要があることを指摘した。それと同時に、中央から遠くはなれていて、独特の経済条件をもつ大きな地区には、国民経済地方ビューローをつくり、工業の管理にいっそう広範に大衆を参加させることが指示された。戦争がまだおわっていなかったので、経済建設についての大会の決定は、戦時共産主義の政策を基礎としていた。

経済建設における党の方針にたいして、「民主主義的中央集権派」（テ・サプロノフ、エヌ・オシンスキー、ヴェ・スミルノフ）が反対した。「民主主義的中央集権派」は、旧来の専門家を活用することに反対し、企業指導上の単独責任制に反対し、無制限な合議制を主張していた。「民主主義的中央集権派」は、党の基本的な組織原則である民主主義的中央集権制を侵害しようとしていた。大会でこの誤った、有害な立場を支持したのは、ルィコフとトムスキーであった。彼らも単独責任制を否認し、合議制を最高国民経済会議から工場管理部にいたる工業指導の唯一の原則と考えていた。大会はこれらの反党的な提案をしりぞけた。

労働組合についての決議では、大会は、経済建設に勤労者が積極的に参加する必要があることを指摘し、すでにはじまっていた労働意欲の高揚を、労働組合の援助を得て、できるだけ広範な勤労大衆におよぼすことを、党組織の義務とした。

第九回党大会の決定にもとづいて、労働者は国民経済の復興にとりかかった。企業では、労働規律が向上した。運輸の活動が改善された。土曜労働の考えがうまれたモスクワ―カザン鉄道は、

らしく盛り上がらせた。第九回党大会が全ロシア土曜労働日と宣言した一九二〇年のメーデーには、この盛り上がりがとくにあざやかにあらわれた。モスクワでは約五〇万人、ペトログラートではほぼ二〇万人が土曜労働に出た。共産党員は先頭に立って、その労働の英雄精神で大衆をひきつけた。土曜労働には、党と政府の指導的な活動家も参加した。クレムリの土曜労働では、レーニンが働き、ミヘリソン工場では、カリーニンが働いた。党の呼びかけにしたがって何千万という勤労者が、軍事戦線で献身的に社会主義の祖国を守ったのと同じように平和な労働に献身的にいそしむ決意を、全ロシア土曜労働によってしめした。

しかし、こんども帝国主義者は息つぎをぶちこわした。協商国は、新しい進攻を準備し、ブルジョア＝地主的ポーランドを主要な反ソヴェト勢力としておし立てた。

ソヴェト政府はポーランドに講和を再三、申し入れてきた。一九二〇年のはじめに、ソヴェト政府はふたたび講和を申し入れた。だが、ポーランドの帝国主義者は、ソヴェトの領土を強奪することを夢みていた。ポーランドのブルジョアジーは、帝国主義諸国に経済的にも政治的にも完全に従属していた。ポーランドの地主とブルジョアジーの地位は不安定であった。勤労大衆、まず第一にプロレタリアは、ますます頻繁に支配階級に反対する行動をとっていた。イギリス、フランス、アメリカの支配層も、ポーランドの支配層も、革命運動の成長をおそれて、対ソ戦争を革命から人民をそらせる手段とみていた。ポーランド共産党は、ポーランド帝国主義者の侵略戦争に、断固として反対した。共産党は、ソヴェト共和国にたいする戦争がポーランドの勤労者にたいする戦争でもあることを、勤労者に説明した。

一九二〇年四月二五日、ポーランド軍はソヴェトの国を攻撃し、ウクライナの首都キエフは占領された。ポーランドを援助するために、帝国主義者は、クリミアに配置されていたヴランゲリの白衛軍を投入した。

ソヴェト共和国は、ふたたび、干渉軍および白衛軍とのたたかいに、力をそそがなければならなくなった。一九二〇年五月二三日、ロシア共産党（ボ）中央委員会のテーゼ『ポーランド戦線とわれわれの任務』が発表された。党とソヴェト政府は、敵を撃滅するために全力をあげるよう労働者と農民に呼びかけるとともに、ソヴェトの国はポーランドの独立と主権を侵害しようとするものではなく、ポーランドの運命をきめるのはポーランドの勤労者自身であると強調した。「われわれを攻撃してきたポーランドの白衛軍を撃滅しても、ポーランドの独立にたいするわれわれの態度は、すこしも変わらない」と、テーゼにはのべてあった。

赤軍は共産党員によって強化された。全党員の約半数——三〇万人以上——が軍隊にはいっていた。軍隊には約七万人のコムソモール員がいた。

五月の中ごろ、西部戦線での攻撃がはじまった。しかし、この攻撃は準備不足で、成功をおさめなかった。もっとも、攻撃は敵の兵力を牽制し、それによって西南戦線の状態を楽にした。六月のはじめ、南部から転進してきた第一騎兵軍が、ウクライナで白系ポーランド軍の戦線を突破した。騎兵軍につづいて、西南戦線の全軍が攻勢に転じ、敵軍に敗北をなめさせた。一九二〇年七月はじめには、西部戦線の軍隊も攻勢に転じた。七月末、同軍はポーランド領にはいり、西南戦線の軍隊は西ウクライナにはいった。戦線は、ポーランドの首都ワルシャワに近づいた。

赤軍の勝利は西欧の労働者階級をはげました。イギリス、フランス、アメリカ、イタリア、チ

ェコスロヴァキアで、「ソヴェト・ロシアから手をひけ！」というスローガンをかかげた運動がつよまった。労働者はポーランド向けの兵器の積みこみを拒否し、ストライキをおこなった。

コミンテルン第一回大会後に、共産主義運動は全世界で大きな成功をおさめた。一九一九年五月には、ブルガリア社会民主労働党（「テスニャキ」）が、共産党に改組された。一九二〇年までに、アメリカ、イギリス、ユーゴスラヴィア、スペイン、トルコ、その他の国々に共産党が結成された。

通例、共産党は、社会主義諸党から分離した左派を基礎にして創立されていた。若い党はまだ大衆活動の経験をもたなかった。社会民主諸党の伝統と古い闘争形態とのある種の重荷が、党の活動をさまたげていた。それとならんで、若い共産党内には、「左派」があらわれた。彼らは、労働者階級の古い闘争方法をすべて否定し、国会を利用することに反対し、反動派の手ににぎられた労働組合のボイコットを主張した。このような政策は、大衆からの遊離、セクト主義、党の役割の軽視につうじていた。これらのあやまりは左翼的な空文句でカムフラージュされていた。これは、まだ革命闘争の訓練をへていない若い党の成長にともなうあやまりであった。レーニンは、こうしたあやまりを特徴づけて、共産主義内の「左翼主義小児病」と呼んだ。

一九二〇年七月、コミンテルン第二回大会がひらかれた。この大会の主要な任務は、共産党を思想的および組織的に強化し、大衆のあいだで多数者を獲得することに党の目標をおかせることであった。大会にさきだってレーニンは、『共産主義内の「左翼主義」小児病』という著書を書いた。同書の基本的な目的は、すべての共産党にロシアの共産主義者の非常にゆたかな経験、その戦略戦術を知らせて、兄弟党にこの経験を身につけさせることであった。レーニンは、ボリシ

ェヴィキ党が、労働運動内の主要な敵であり、国際的にみてもやはり主要な敵である日和見主義、メンシェヴィズムとの闘争をつうじて成長し、つよくなり、きたえられたこと、それと同時に、党は小ブルジョア的革命主義、「左からの」日和見主義者や、エス・エル、無政府主義者との闘争をもつうじて強固になってきたことをしめした。

レーニンのこの著書では、労働者階級の独裁（ディクタトゥーラ）の体系に占める共産党の役割と地位がしめされている。党がその巨大な任務をはたしたのは、鉄のような規律のおかげであり、革命的理論に忠実だったおかげであり、勤労者と固くむすびついていたおかげであり、ボリシェヴィズムの思想が正しいことを自分の経験で確信するようになった人民大衆から、完全な献身的な支持を受けていたおかげであった。労働者大衆と人民の多数者とを党に獲得することを保障した党の戦略戦術を分析して、レーニンは、あらゆる状況のもとで——革命の時期にも、後退の時期にも——大衆のあいだで活動し、あらゆる社会団体のなかで、大衆がいるところではどこででも活動することが必要である、と強調した。レーニンは、「左派」のばかげた「理論」が、また反動的な労働組合や国会や協同組合内での活動を「左派」の拒否していることが、労働運動にどんな損害をあたえているかをしめした。共産党がこれらの団体内での活動を拒否するなら、それは、党が大衆から遊離することにつうじており、それによってブルジョアジーに最大の御用をつとめることになる。

「いやしくもそこにプロレタリア大衆または半プロレタリア大衆がいるなら」とレーニンは書いている。「たとえそれがどんなに反動的なものであっても、その機関、協会、団体——たとえ、それがどんなに反動的であろうとも——のなかでこそ系統的に、頑強に、ねば

りづよく、忍耐づよく宣伝・扇動するために、どんな犠牲をもはらい、最大の障害をものりこえることができなければならない」（全集、第三一巻、三九ページ）。

レーニンは、あらゆる闘争形態に習熟することを共産主義者におしえた。レーニンの労作は、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）をめざす闘争の時期の経験をも、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）と社会主義建設のもとでの経験をもふくめて、共産党の戦略戦術の経験を概括した。レーニンは、ロシアのマルクス主義者の、きわめてゆたかな経験が、一国的な意義をもつだけではなく、国際的な意義ももっていることを、しめした。

「ロシアの模範は」とレーニンは書いている。「すべての国に、それらの国の避けられない、近い将来に属するあるものを、しかもきわめて本質的なあるものを、しめしている」（同、六ページ）。

レーニンのこの名著は、巨大な国際的意義をもっている。同書の結論は、四一ヵ国の代表団が出席していたコミンテルン第二回大会の諸決定の基礎におかれていた。大会は、レーニンの報告を聴取して、プロレタリア革命にはたす共産党の役割についての決議を採択し、コミンテルンの規約を承認し、新しい型の党を建設する諸原則にもとづいた、二一ヵ条のコミンテルン加入条件を採択した。

共産主義インタナショナル第二回大会は、万国の労働者に、革命ロシアの擁護に立ちあがるよう呼びかけた。ドイツに、中央ヨーロッパ全体に、革命運動は盛り上がった。ポーランドでは、プロレタリアートの行動はますます積極的になっていった。ベロストークにポーランド臨時革命委員会が結成されて、地主や資本家との闘争を勤労者に呼びかけた。

ポーランドとの戦争と平和の問題は、一九二〇年九月末にひらかれた第九回党協議会で審議され、同協議会は、ポーランドとの講和締結条件についての決議を全員一致で採択した。一〇月のはじめ、四〇万の男女青年を擁するコムソモールの第三回大会がひらかれた。大会ではレーニンが演説した。彼は、**共産主義をまなぶ**という課題を青年に負わせた。レーニンのこの歴史的な演説は、青年に共産主義的教育をほどこすためのコムソモールの行動綱領となった。

帝国主義の手先をつとめるポーランド軍の夏の敗北は、国際情勢を大きく変えた。ポーランドの資本主義制度の存立だけでなく、協商国がヨーロッパにつくりだしたヴェルサイユ体制全体の存立までが、崩壊の危険にさらされていた。協商国は、ポーランドにおけるブルジョアジーの独裁（ディクタトゥーラ）をいそいで救わなければならなかった。イギリスとフランスは、ソヴェト・ロシアにたいして軍事行動を開始するといっておどかした。フランスは、ポーランドに大量の装備と多数の将校・教官をおくりこんだ。イギリスは、ロシアからクリミアを奪おうとして、またポーランドの地主の反攻により有利な状況をつくりだそうとして、ソヴェト軍が攻勢を停止してヴランゲリと休戦協定をむすぶよう、ソヴェト政府に要求し、ポーランドと講和条約をむすぶ仲介をしようと、ソヴェト・ロシアに申し入れた。

協商国の援助で、白系ポーランド軍司令部は予備軍を動員し、一九二〇年八月のなかば、反攻に転じた。ソヴェト軍は後退を余儀なくされた。ワルシャワ攻撃は成功しなかった。

八月にポーランド戦線で失敗した大きな原因は、ソヴェト軍司令部のおかしたあやまりにあった。というのは、ソヴェト軍の急進撃は、ソヴェト政府の指令が要求していたのとはちがって、全面的に保障された状態にはなく、援軍はおくれ、弾薬はとどかなかった。白系ポーランド軍が

いそいで退却したのを、同軍隊の壊滅と勘ちがいしたが、その実、白系ポーランド軍は、兵員や器材を打撃からそらせようとしたのであった。「われわれの攻撃のさい」とレーニンは言っている。「ワルシャワの近くまであまりにも急速に進撃したさい、あやまりを犯したことはうたがいない。……このあやまりは、われわれが自分の力の優勢を過大視したためにおこったのである」（全集、第三一巻、一七九ページ）。

しかし、失敗は、軍事上の誤算だけによるものではなかった。ポーランド住民の一部はあざむかれていた。ポーランドの支配者たちは、かつてポーランドを隷属させていた帝政ロシアにたいする勤労者のにくしみに乗じて、赤軍の解放闘争を外国の侵攻であるといつわった。勤労者、とくに農民大衆はこの欺瞞を見ぬくことができなかった。他方、ポーランドの労働者地区に達することが、赤軍にはできなかった。さらに、ソヴェトの国が西部と南部との二面作戦をしていたことにも、赤軍の失敗の一因があった。国民経済の崩壊、とくに運輸の崩壊状態も、一役買っていた。

予備兵力をくりだして、ソヴェト軍は九月にふたたび打撃をくわえる準備をしていた。ポーランド政府はこの打撃をおそれて、一〇月に休戦協定をむすぶことに同意した。休戦はついで講和となった。失敗にもかかわらず、ソヴェトの国は大勝利をおさめた。レーニンが指摘しているように、戦争は、「四月にわれわれがポーランドに申し入れたよりも、わが方にとって有利な講和に」（全集、第三一巻、四九五ページ）おわった。それでもポーランドの反動層は、国際帝国主義者に後押しされて、ソヴェト・ウクライナとソヴェト・ベロルシアから、その西部地方を略奪することができた。

ポーランドとの戦争をおえて、ソヴェト政府は、協商国の最後の手下であるヴランゲリに兵力を集中することができるようになった。一九二〇年九月、党中央委員会の決定にしたがって、南部戦線がつくられた。その司令官にはエム・ヴェ・フルンゼが任命され、同戦線の軍事会議の委員には、エス・イ・グセフとベラ・クンが任命された。中央委員会は、全党組織に手紙をおくった。党の呼びかけにおうじて、党組織とコムソモールは一万人以上の党員と同盟員を南部戦線におくった。党中央委員会とソヴェト政府の指令にしたがって、フルンゼをいただく南部戦線革命軍事会議は、ヴランゲリ撃滅計画を作成した。ソヴェト軍は兵員数の点でヴランゲリ軍を圧倒するようになった。

激戦の結果、ヴランゲリはクリミアへ撃退された。一九二〇年一一月、ペレコプ地峡を英雄的に強襲したあとで、赤軍はクリミアに突入し、これを敵の手から解放した。

ロシアにおける干渉と内戦はおわった。極東で干渉軍と白衛軍の最後の集団が最後的に撃滅されたのは、ようやく一九二二年のことであったとはいえ、ソヴェトの国が懸命にたたかわなければならなかった敵の主力は粉砕されて、ほうほうの体でソヴェトの国土から駆逐された。

人民は自分のソヴェト権力と祖国の独立を守りぬいた。全世界の帝国主義者との一騎打ちで、若いソヴェト国家は勝利をおさめた。

6　ソヴェト権力の勝因。内戦の教訓

干渉軍と白衛軍にたいして赤軍が勝利をおさめた原因は、だいたいつぎの点にまとめられる。

一　ソヴェト・ロシアの勤労者がおこなった内戦は正義の戦争であった。地主と資本家の権力を倒したロシアの労働者と農民は、内戦で、自分の権力を強固にするための、社会主義社会をつくりだすための闘争をつづけていた。ソヴェト権力の政策は、人民の利害を代表していたので、人民はそれを自分の政策として支持した。人民の生みの子である赤軍は、人民の利益のためにたたかったのに、白衛軍と干渉軍は人民に敵対していた。このことを自覚していたからこそ、多年の世界帝国主義戦争で疲れきっていた人民大衆が、比類なく困難な内戦を勝利するまでやりとおす力をふるいおこすことができたのである。

二　干渉軍と白衛軍にたいしてソヴェトの国が勝利をおさめた根本原因は、労働者と農民の強固な同盟と諸民族の友好とにもとづいた、この国の社会制度と国家制度にある。地主、資本家、国際ブルジョアジーとの闘争のなかで、労働者階級と農民の軍事的・政治的同盟が生まれ、強固になった。干渉軍と白衛軍支配のあらゆる恐ろしさを思い知らされた大衆自身の経験は、この同盟を強固にした。干渉軍と白衛軍にたいする解放戦争は、人民のあいだの愛国心をたかまらせて、国の内部を強化した。革命の火元を消しとめ、ソヴェト共和国を粉砕しようとしていた外国の侵略者と白衛軍の強襲を撃退しながら、労働者と農民はきたえられ、彼らの同盟はいっそう強固になり、彼らは党を中心としていっそう固く団結した。この点に、ソヴェト権力に本来そなわっている特徴があらわれた。ソヴェト権力は人民を分裂させるのではなく、彼らを結束させるのである。

三　党とソヴェト権力の正しい民族政策は、全ロシアのこれまで抑圧されていた諸民族の勤労者を、干渉軍と反革命派とにたいするたたかいで団結させた。反革命派は、一時勝利をおさめる

と、どこでも民族的抑圧の旧体制を復活させた。これまで抑圧されていた諸民族の勤労者は、自分自身の経験で、ソヴェト権力こそ人民の真の自由と民族的独立との唯一の強固な保障であることを確信するようになった。赤軍の隊列で肩をならべてたたかった、さまざまな民族の勤労者の同盟は、内戦のなかでますます強固になった。

四　赤軍に大きな援助をあたえたのは、敵の後方で活動していたパルチザンであった。共産党によって組織され指導されたパルチザン部隊は、敵の兵力を牽制し、敵に耐えがたい状況をつくりだした。交通連絡を撹乱し、兵員を殺し、戦闘器材を破壊し、占領軍の権力機関を破壊したのである。

五　ソヴェトの対外政策も赤軍の勝利にあずかって力があった。直接に中央委員会の指導を受けるソヴェト政府は、大小を問わずすべての民族の同権の政策を一貫して遂行し、帝国主義諸国の内部にある深刻な対立や敵の誤算をたくみに利用し、こうしてプロレタリア国家の地歩をつよめた。

六　赤軍の勝利を容易にしたのは、干渉に反対する国際プロレタリアートの革命闘争であった。資本主義諸国の勤労者は、武器の引きわたしを妨害し、「ロシアから手をひけ」委員会をつくり、これによって干渉軍の行動を妨げ、ソヴェト国家をたすけた。

「ほかならぬこの支持」とレーニンは書いている。「われわれにもっとも敵意をいだいている列強の勤労大衆もふくめて、全世界の勤労大衆――労働者も、農民・農耕者の大衆も――がわれわれによせたほかならぬこの共感、まさにこの支持とこの共感こそ、われわれにたいする侵攻が失敗におわった……最後の、もっとも決定的な源であり、決定的な原因であっ

た」(全集、第三三巻、一三八ページ)。

七　ソヴェト国民の勝利、赤軍の勝利の決定的な条件は、敵とのたたかいにプロレタリアートと膨大な勤労農民大衆とを立ちあがらせ、動員し、組織することのできた共産党の指導であった。赤軍のすばらしい勝利は、試練をへたボリシェヴィキ党が人民の先頭に立ってすすむばあいには、人民がどんな大きな力となるかをしめした。ソヴェト武装兵力の建設と国防全体の組織とに傑出した役割をはたしたのは、労農国防会議議長のヴェ・イ・レーニンであった。レーニンを先頭とする党中央委員会は、闘争全体を指導した。中央委員会は、戦争の遂行、補給、戦略計画作成のあらゆる問題の解決に当たっていた。党は、反革命派のあらゆるたくらみにたいする闘争で確固不動の態度をしめし、プロレタリアートと農民の同盟、すべてのソヴェト民族の勤労者の友好を守った。党は、敵にたいし、反革命行為にたいしては容赦なくたたかうと同時に、動揺する小ブルジョア的中間層にたいしては柔軟な戦術をとり、ソヴェト権力を承認してそれをすすんで擁護しようとする者をすべて人民の味方につけた。

中央委員会の呼びかけにこたえて、共産党員は軍隊にはいった。党は、革命の大業に生命をささげた少なくとも五万人の党員をうしなった。それにもかかわらず、戦争中に党の隊列は二倍になった。何十万という先進的な労働者と農民が入党して、果敢な闘争の修練をへた。内戦のなかで、党指導者の古い幹部、レーニンの戦友であり弟子であり、大革命の勝利の組織者であった人人がきたえられ、また指導者の新しい幹部が成長してきて、戦争のいた手を一掃し、社会主義社会を建設する仕事を、双肩にになった。そうした人々のなかには、ア・ア・アンドレーエフ、ア・エス・ブブノフ、カ・イェ・ヴォロシーロフ、エス・イ・グセフ、エフ・エ・ジェルジンス

キー、ア・ア・ジダーノフ、エル・エス・ゼムリャチカ、エム・イ・カリーニン、エス・エム・キーロフ、エス・ヴェ・コシオル、エリ・ベ・クラシン、ゲ・エム・クルジジャノフスキー、ヴェ・ヴェ・クイブィシェフ、デ・ゼ・マヌイリスキー、ア・イ・ミコヤン、ア・エフ・ミャスニコフ、ゲ・カ・オルヂョニキッゼ、ゲ・イ・ペトロフスキー、ペ・ペ・ポストィシェフ、ヤ・エ・ルズターク、ヤ・エム・スヴェルドロフ、エヌ・ア・スクルイプニク、イ・ヴェ・スターリン、エム・ヴェ・フルンゼ、ア・デ・ツュルーパ、エヌ・エム・シヴェルニク、イェ・エム・ヤロスラフスキーがいた。

銃後でも、前線でも、地下でも、いたるところで党は大衆とともにあり、大衆の先頭に立っていた。党は、人民を勝利にみちびいた。

「党が警戒を厳にし」とレーニンは言っている。「できるだけ厳格に規律をたもち、党の権威がすべての官庁と機関を団結させ、中央委員会のあたえたスローガンにしたがって数十人、数百人、数千人が、結局は数百万人が一丸となって行動したからこそ、そしてまた、未曾有の犠牲をはらったからこそ、はじめてこの奇跡もおこりえたのである」（全集、第三〇巻、四六一ページ）。

干渉軍と白衛軍の撃滅は、ソヴェトの国にとって巨大な意義をもっていただけではない。ロシアにおける内戦の教訓は、大きな国際的意義をももっている。

一　ロシアにおける干渉の失敗と内戦の結果とは、労働者階級に指導されるプロレタリアートと農民の同盟に立脚した人民権力を粉砕することは、国内の反革命勢力にはできないということを、全世界の勤労者に証明した。もちろん、打倒されたどの階級にしろ、抵抗のあらゆる機会を

ためしてみずに降伏するようなことはけっしてない。ロシアでは、地主とブルジョアジーは、うしなった人民にたいする権力を取り返そうとして、凶悪なテロル、謀略活動、暗殺、流血の暴動など、手段をえらばなかった。だが、彼らは、共産党を先頭に立てた人民にたいしては無力であった。外国帝国主義者の干渉、武力介入は、撃破された搾取階級を勇気づけ、彼らは、武器を手にとって人民におそいかかり、国を長期の苦戦におとしいれた。イギリス、フランス、アメリカ、日本、ドイツの帝国主義者のせいで、ソヴェトの国の勤労者は前代未聞の苦難をこうむり、無数の犠牲をはらわなければならなかった。

二　ロシアにおける干渉が粉砕されたことは、世界帝国主義を撃破し粉砕することができるということを、すべての国の人民、とくに従属し抑圧されている国々の人民にしめした。赤軍の勝利は、東方諸国の人民に、あらゆる器材と訓練された軍隊とをもつ帝国主義がどんなに強力であっても、帝国主義にたいする闘争は見込みのない闘争ではなく、諸国人民の解放は実現できるものであることをしめした。もっとも強大な国々の侵攻をもちこたえたソヴェト共和国の経験は、隷属する民族を勇気づけ、全世界の民族解放運動をつよめた。被抑圧人民は、ソヴェトの国の勤労者および国際プロレタリアートといっしょになれば、彼らは帝国主義にたいする勝利をおさめることができることを、ますます確信するようになった。

三　外国干渉軍とその手先である白衛軍とにたいするたたかいは、ソヴェト権力の国際的な性格をあきらかにした。ロシアの労働者と農民は、自分の利益のためにたたかいながら、そうすることで同時に万国の勤労者の利益をも守っていた。ソヴェトの国の勤労者は、帝国主義者の兵力を牽制し、これをよわめ、これによって資本主義諸国の労働者が自国のブルジョアジーにたいす

る闘争で成功をおさめるのをたすけた。国際プロレタリアートは、ソヴェト権力が自分たちの利益のためにもたたかっていること、だから、干渉に反対する世界プロレタリアートの闘争は、ソヴェト国民への援助であるだけでなく、自国の搾取者にたいする革命戦争でもあることを、理解していた。

四　干渉と内戦の時期に、ブルジョア民主主義とソヴェト民主主義との優劣についての論争が、実践的に解決された。搾取階級の地主とブルジョアジーから完全に自由になったソヴェトの国ほど、現実の自由と真の平等のためにこれほど貢献した国はこれまでなかった。すべての資本主義国では、もっとも民主主義的な国ですら、戦争にともなって民主主義的自由が縮小され、憲法がふみにじられるかわすれさられ、大衆にたいする暴力がつよめられ、テロルが行使され、労働者にたいする軍事的苦役がもうけられた。ロシアでは、内戦にともなって、闘争に立ちあがった大衆の積極性がすばらしく高まり、勤労者の新しい層が政治活動に引きいれられた。内戦の時期だけで、全ロシア・ソヴェト大会が三度ひらかれ、それにさきだって、郷、郡、県の大会がひらかれた。ソヴェト憲法の効力は一瞬も停止されなかった。もちろん、ソヴェト権力は暴力に訴えないわけにはいかなかったが、——暴力に訴えるばあいには、プロレタリアートの独裁(ディクタトゥーラ)として当然なように、断固として、手きびしく行動した——そういう暴力措置は、敵にたいし、干渉や国内反革命派の共犯者にたいし、コルチャック、デニーキン、ヴランゲリの手先や一味にたいして、適用されたにすぎなかった。

外国帝国主義者とその手先の白衛軍とが撃滅されたことは、戦闘的、革命的な党に指導される人民が不敗であることを、万国の勤労者にしめした。

「ある国の労働者・農民の大多数が」とレーニンは言っている。「自分の守っているものは勤労者の権力である自分たちのソヴェト権力であること、自分の守っている大業が勝利すれば、自分や自分の子供たちはあらゆる文化財、人間労働のあらゆる創造物を享受する可能性を保障されることを、さとり、感じ、見てとったばあいには、そういう国民をうちやぶることはけっしてできない」（全集、第二九巻、三一七ページ）。

要約

一九一八年から一九二〇年にいたる帝国主義者の武力干渉と内戦の時期には、共産党は、勤労者の獲得物を守り、人民の権力を解体させてロシアにブルジョアジーの独裁（ディクタトゥーラ）を復活させようとしていた干渉軍とロシアの白衛軍とにたいする祖国戦争の組織者として行動した。

一九一七年一〇月に打倒されたブルジョアジーと地主は、武器をすてず、人民の権力に服従しなかった。エス・エルとメンシェヴィキ、無政府主義者と民族主義者の支持にたよって、以前の支配階級は、サボタージュ、買収、妨害活動から流血のテロルと祖国の分割にいたる、あらゆる手段に訴えてプロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）の打倒をはかったが、人民にたいしては無力であった。

外国帝国主義者は、ロシア革命が彼らの銃後に革命の火の手を燃えあがらせることをおそれて、ソヴェトの国に軍隊を派遣し、ロシアの反革命派に完全な支持をあたえた。こうして、国の内外の反革命派の単一のブロックができあがった。三年のあいだ、干渉軍と白衛軍は、ソヴェトの国を血の流れにひたし、その工業を、町や村を破壊し、この国に飢餓封鎖をおこなったが、人民大

衆の抵抗をくじくことはできなかった。

党は勤労者を結束させて、外敵の侵攻にたいする祖国戦争に立ちあがらせた。党は、正しい政策によって、プロレタリアートと農民の同盟、国内のすべての民族の同盟を強固にした。党は、正義の戦争という自覚にはげまされる強大な赤軍を創設した。ソヴェトの国は、平和、自由、独立の擁護者として、全人類のまえにたちあらわれた。

干渉と内戦のもたらした苦況にもかかわらず、党内では、党生活のレーニン的基準が守られていた。中央委員会総会、会議、協議会、大会は、定期的に召集されていた。戦争中に党は二度大会をひらいたが、そこでは新しい綱領の採択、ソヴェト国家の建設に広範な勤労大衆をひきいれること、軍隊の建設など、きわめて重要な問題が解答をあたえられ、史上はじめて社会主義社会の建設の指導にあたっている党の経験、したがって国際プロレタリアート全体にとって重要な経験が、概括された。

人民は、共産党がブルジョアジーと地主の反人民的権力の一掃のために大衆を立ちあがらせ、組織する能力をもっているだけでなく、国防を組織し、公然たる戦闘で国内および国際反革命の連合勢力の撃滅を組織する能力をもっていることを、確信した。エス・エルとメンシェヴィキ、無政府主義者とブルジョア民族主義者は、反革命の主謀者であり、反革命の党であるという正体を暴露した。被抑圧民族の勤労者は、自分たちが共産党という、人民の利益の真の擁護者をもっているだけでなく、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）という、すべての民族の自由な発展の唯一の保障をもっていることを、確信するようになった。国のすべての民族のプロレタリアートと農民は、共産党を中心に団結した。

帝国主義者の兵力を牽制し、これをよわめたソヴェト国民の英雄的な闘争は、西欧の勤労者が自国の資本家とたたかうのを容易にし、帝国主義にたいする被抑圧民族の民族解放運動の発展をうながした。逆に、全世界の勤労者の闘争と民族解放運動の発展とは、ソヴェト権力にたいする大きな支援であった。

ソヴェトの国は、資本主義諸国との平和共存の可能性をたたかいとり、着実な社会主義建設の条件を確保した。

第一〇章　国民経済の復興のためにたたかう党。ソヴェト社会主義共和国連邦の創設（一九二一—一九二五年）

1　内戦終了後の国際情勢と国内情勢。労働組合についての論争

ソヴェトの国土から干渉軍と白衛軍を追いだしたのち、共産党とソヴェト国民は、国民経済を復興し、社会主義への今後の前進の道を定める課題に当面した。

平和的建設への転換は、複雑な国際情勢と国内情勢のもとでおこなわれようとしていた。世界のブルジョアジーは、対ソ戦争にはやぶれたが、ソヴェト制度を一掃しようとするもくろみを捨てたわけではなかった。彼らは、ソヴェト権力を経済的に圧殺する計画をいだいていた。だが、この計画の実現をさまたげていたのは、資本主義世界の国家間の対立と階級対立であった。一九二〇年に、資本主義諸国には経済恐慌が勃発した。工場は閉鎖された。労働者は街頭にほうりだされた。失業者と半失業者の数は、四〇〇〇万人に達した。経済恐慌は、イギリスとフランス、イギリスとアメリカ、アメリカと日本、日本とイギリスのあいだの対立を激化させた。これ

らの国は、いずれも他の国を犠牲にして、なによりもソヴェトの国を犠牲にして、恐慌をきりぬけようとしていた。

階級対立も激化した。ブルジョアジーは、十月革命後の革命的高揚期に労働者階級がかちとった獲得物に攻撃をくわえはじめた。労働者は、ブルジョアジーの攻撃を撃退した。イギリスでは、一九二一年四月、賃金引き下げに抗議した鉱山労働者の大衆的ストライキがはじまった。同年、ドイツの一連の地方では、労働者が蜂起したが、社会民主主義者の力をかりて鎮圧された。その他のヨーロッパ諸国でも、はげしい階級戦がおこっていた。

帝国主義者の地歩は、植民地と半植民地——インド、イラン、トルコ、アフガニスタン、中国その他の国——の民族解放運動によってよわめられた。

レーニンは、ソヴェト・ロシアの国際的地位を特徴づけて、それは一種の均衡状態であり、この均衡状態はきわめて不安定なものではあるが、それでも、敵対する資本主義の包囲にもかかわらず、存立し発展する可能性を社会主義共和国にあたえている、と言った。

帝国主義列強の支配層のあいだには、ソヴェトの国にどんな態度をとるかという問題について二つの基本的な傾向があった。ある者は、ソヴェトの国との経済関係を発展させようとつとめていたが、大多数は、ソヴェト国家が変質するだろうという望みを、またロシア、ウクライナ、カフカース、中央アジアを植民地として隷属させようという望みを棄てていなかった。他の者は、好機をとらえて武力干渉を再開しなければならない、と考えていた。政治情勢におうじて、ときには一方の傾向が、ときには他方の傾向がつよまった。対ソ軍事攻撃の危険はのぞかれたわけではなかった。「われわれはいつ、どんな襲撃をうけるかわからない状態にあることをおぼえてい

なければならない」とレーニンは指摘した（全集、第三三巻、一四二ページ）。だから、赤軍の戦闘力を強化することは、いまなお党とソヴェト政府の課題である、と彼は言った。

ソヴェトの国の国内情勢は、非常に困難であった。国民経済は、帝国主義戦争、内戦、外国の軍事干渉のために荒廃していた。大工業の生産高は、一九二〇年には、戦前にくらべて約七分の一になった。とりわけ容易ならぬ状態にあったのは鉄鋼業で、銑鉄の生産高は、戦前の生産の約三％にすぎなかった。採炭高は戦前の三分の一、石油の産出高は約四割、綿織物の生産は二〇分の一に減少した。燃料も原料もないために、大多数の企業は操業していなかった。住民は、必要欠かせない工業製品のひどい不足になやんでいた。

農業も極度に荒廃していた。パンその他の食料品も不足していた。工業中心地の労働者は飢えていた。飢えをのがれようとして、多くの人が農村へでていった。一九二〇年には、工業労働者の数は一九一三年の約二分の一になった。労働者階級は四散し、その一部は階級から脱落した。このことは、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）の社会的基盤をよわめた。経済的崩壊の情勢のもとでは、小ブルジョア的自然成長性の危険は、とくに大きかった。レーニンは、小ブルジョア的自然成長性は、デニーキン軍、コルチャック軍、ユデーニッチ軍を全部あわせたものよりも恐ろしい、とのべている。地主や大ブルジョアジーという搾取階級は、一掃されていた。約二〇〇万の地主、資本家、白衛派、革命におびえた小ブルジョアは、国外へ逃亡した。彼らの多くは、帝国主義者の手先になった。国外に身をかくすことができなかった敵対分子と富農は、農民を労働者にけしかけ、労働者と農民の同盟を切りくずし、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）を打倒するために、全力をつくしていた。

一九二一年のはじめには、戦時共産主義の政策と新しい情勢との食い違いから、重大な政治的難局が生じた。内戦と干渉の時期にうまれた労働者階級と農民の同盟の軍事的・政治的な形態は、平時の情勢のもとでは不十分なことがあきらかになった。この同盟の経済的な形態が必要であった。農民は、食糧割当徴発制が農民経済を発展させる刺激を彼らから奪っていたので、これに不満をいだいていた。彼らは、自分の労働生産物を市場で売りたがっていた。カデット、エス・エル、メンシェヴィキ、無政府主義者、ブルジョア民族主義者といった反革命諸党の残党は、農民の不満に乗じた。彼らは、ソヴェト権力反対の活動を大わらわになってくりひろげた。タンボフ県、ウクライナ、ドン、シベリアのいくつかの地方で、彼らは、農民の暴動をおこさせることに成功した。

一九二一年三月のはじめに、クロンシタットで反乱が勃発した。クロンシタットの水兵の構成は、内戦中に激変していた。革命的な水兵の大多数は、戦線に出ていった。彼らに代わって、農村から新兵が海軍に補充されてきたが、これらの新兵は政治的におくれていて、食糧割当徴発制にたいする農民の不満を反映していた。エス・エル、メンシェヴィキ、無政府主義者、白衛派は、クロンシタットのボリシェヴィキ組織が弱体になったのに乗じて、食糧割当徴発制反対のはげしい扇動をくりひろげていた。

内戦で粉砕された反革命的ブルジョアジーは、ソヴェト権力に公然と反対することはあえてしなかった。彼らは、闘争の戦術を変えた。クロンシタット反乱の首謀者たちは、「権力は党ではなく、ソヴェトへ！」と、大衆をあざむこうとするスローガンをかかげた。反革命派は、このスローガンをかかげて、大衆にソヴェト制度を一掃させようとくわだてた。カデット党の元指導者

で亡命者のミリュコフは、「共産党員ぬきのソヴェト！」というスローガンをかかげて、この目的をカムフラージュした。反革命派は、ソヴェトにたいする指導から共産党員を遠ざけ、ソヴェトをないも同然にし、ブルジョアジーの独裁（ディクタトゥーラ）をうちたて、ロシアに資本主義制度を復活させようと思っていた。

国際ブルジョアジーは、クロンシタットの反乱を「人民革命」と呼んでいた。彼らは、クロンシタットを蜂起の全国的中心地にするという任務をあたえて、その手先をクロンシタットに派遣した。だがブルジョア新聞が「難攻不落」と呼んでいたクロンシタット要塞は、エム・エヌ・トゥハチェフスキーの指揮する赤軍によって攻撃をくわえられた。カ・イェ・ヴォロシーロフを先頭として反乱の鎮圧に参加したロシア共産党（ボ）第一〇回大会の代議員は、英雄精神の模範をしめした。一九二一年三月一八日、要塞は強襲によって占領され、クロンシタットの反乱は鎮圧された。

クロンシタット、シベリア、その他の地方の事件は、国内の政治的危機の徴候であった。レーニンは、この危機を特徴づけて、「われわれはソヴェト・ロシアの大きな――思うに、もっとも大きな――国内の政治的危機に突きあたった。この危機は、農民の大部分のあいだの不満を明るみに出しただけでなく、労働者の不満をも明るみに出した」と言っている（全集、第三三巻、四三八ページ）。

一部の労働者は、小ブルジョア的自然成長性の影響を受けていた。彼らは、飢えにかられて、不満の色を見せた。一部の企業では、ストライキがおきるにいたった。

国内の政治的危機は、党にも反映した。しっかりしていない党員のあいだには動揺があらわれ

れた。この動揺は、最初に、社会主義社会を建設するうえで労働組合のはたす役割の問題にあらわれた。

労働者階級は、社会主義建設の主力である。彼らは労働組合に組織されている。党は、労働組合を利用して労働者を英雄的な労働に立ちあがらせなければならなかった。ところが内戦のあいだに、労働組合はよわくなっていた。平時の状況におうじて労働組合の活動をたてなおす課題があらわれた。

一九二〇年一一月、第五回全ロシア労働組合会議で、党は、労働組合内の戦時的な活動方法をやめて、広範な民主主義にうつる問題を提起した。それは、指導機関の自主補充と任命制に代って、選挙制を実施し、労働組合員の総会を定期的にひらくようにし、選出された機関の報告義務制にうつることであった。労働組合内で労働者民主主義を展開することに反対したのは、トロツキーであった。彼は、労働組合のなかに命令と行政的処理の方法をひろめようとしていた。これは、彼が鉄道・水運従業員組合中央委員会（ツェクトラン）を指導していたとき、この労働組合で実施されていた方法であった。彼の考えによると、労働組合の活動を活発にするただ一つの手段は、労働組合の指導的幹部を上から下まで行政的なやりかたで「ゆすぶる」ことであった。

労働組合の問題は、実質的には勤労大衆に近づく方法、彼らを社会主義建設にひきいれるやり方、彼らを指導する方法の問題であった。労働組合問題についてのトロツキーとの「真の意見のくいちがい」は、「大衆に近づき、大衆をつかみ、大衆とむすびつく方法の問題について」の意見のくいちがいであり、「これがすべての主眼点である」、とレーニンはのべている（全集、第三二巻、七ページ）。

労働組合の問題は、党中央委員会で審議された。中央委員会は、あらわれた意見の相違を、大衆討議にかけないことに決定した。ところがトロツキーは、党規律をやぶって、中央委員会内の意見の相違を公表し、彼および同意見者のグループの名で、中央委員会の方針には同意しないと公言した。彼は、政綱を基準にして第一〇回大会の代議員を選挙せよ、と党に挑戦した。

トロツキーの言動は、反党的な分派闘争のはじまりであった。

一九二一年一月の中央委員会総会は、トロツキーの公然たる言動を非難した。トロツキーの武器を取りあげるため、総会は討論をはじめることにきめ、政綱を基準にしてロシア共産党（ボ）第一〇回大会代議員を選挙してもさしつかえないとみとめた。中央委員会は、これがトロツキーを暴露することに役立つものと確信していた。

こうして、トロツキーは、国が難局にあった時機に、党に討論をおしつけて、党を経済的任務の解決からそらさせようとしたのである。

討論中には、シリャプニコフを先頭とする「労働者反対派」、サプロノフを先頭とする「民主主義的中央集権派」、ブハーリンを先頭とする「緩衝派」のような、それぞれの政綱をかかげる別個の反対派もあらわれた。

党内に各種のグループと政綱があったのは、小ブルジョア的自然成長性がしっかりしていない党員に影響をおよぼしていたからである。労働者は党の約二分の一を占め、農民がほぼ四分の一、その他は勤務員と家内工業者であった。ボリシェヴィキの立場にうつることを声明して入党したかつてのメンシェヴィキ、エス・エル、ブント派、ボロチバ派は、小ブルジョア的動揺にとりつかれていた。国内のいくつかの地方で反革命的蜂起がはじまったとき、これらのしっかりしない

党員は恐慌状態におちいった。たとえばトロツキーは、クロンシタットの反乱に関連して、「ほとときすが」ソヴェト権力の最後を「もう告げている」と言明した。

反対派はそれぞれ独自の要求をかかげていた。トロツキー派のスローガンは、労働組合を即時国家機関化せよ、であった。彼らは、労働組合を国家機関の付属物にし、労働組合と国家とを癒着させ、労働組合に生産管理の職務をゆだねるよう要求した。トロツキー派の政綱は、労働者大衆の物質的・生活的・文化的な利益を守り、彼らを社会主義の精神に立って教育することから、労働組合を排除するものであった。そういうことに従事すべきものはソヴェト権力機関であると、トロツキーは言った。トロツキーは、強制の方法、むきだしの行政的処理の方法をかかげた。彼は、労働者の労働を軍事化し、労働組合や生産で軍隊的方法を用いることを要求した。トロツキーの政綱は、労働組合を一掃し、プロレタリアートの独裁を切りくずすことにつうじていた。

「労働者反対派」は、国民経済の運営を労働組合――「生産者の全ロシア大会」――にゆだねることを要求していた。このグループは、最高国民経済会議の機構をばらばらにして、それぞれの労働組合にひきわたすことをもとめ、労働組合を国家と党に対立させた。トロツキー派は労働組合の国家機関化を主張したが、「労働者反対派」は国家を「労働組合化」すること、すなわち、労働組合を国家に優先させ、国家をないも同然にすることを要求していた。これは、国民経済で党とプロレタリア国家が指導的な役割をはたすのを否定することを意味していた。「労働者反対派」の見解は、実際には、アナルコ－サンディカリズム的なものであった。なぜなら、アナルコ－サンディカリズムこそ、資本主義から社会主義への過渡期にプロレタリア国家の必要なことを否

定するものだからである。

「民主主義的中央集権派」は、労働組合が最高国民経済会議の幹部会を推薦すること、党内に分派やグループの自由をみとめ、これらの分派やグループが指導的な党機関やソヴェト機関に自分の候補者を提案することを要求していた。「民主主義的中央集権派」は、企業での単独責任制と厳格な規律、管理上の中央集権制に反対した。彼らは、労働組合の官僚主義的な麻痺をわめきたてた。レーニンは、このグループを「だれよりもやかましくわめく人」の分派と呼び、彼らの政綱をエス・エル＝メンシェヴィキ的なものと呼んだ。

ブハーリン・グループは「緩衝的」な政綱をかかげた。この政綱が「緩衝的」と呼ばれたのは、ブハーリンがレーニンの政綱とトロツキー派の政綱のあいだの、緩衝器の役割をはたそうとしていたからである。自分の政綱をでっちあげるにあたって、ブハーリンは、一部の定式はレーニンから、一部の定式はトロツキーからかりてきていた。ブハーリン派は、労働組合が経済管理機関に自分の候補者を推薦し、指導機関はそれらの候補者を必ず受けいれるべきであると言った。レーニンは、これをサンディカリズム的偏向と特徴づけた。彼は、ブハーリンの政綱を「思想的崩壊の極」と呼んだ。ブハーリンの「緩衝的」な政綱は、実質的には、トロツキー主義を擁護するものであった。したがって、ブハーリンがまもなくその政綱をすてて、トロツキーの政綱に同調したのは偶然ではなかった。

ヤ・エ・ルズタークのテーゼを基礎にして作成され、レーニンをはじめとする中央委員の大多数が署名した政綱では、労働組合は党から大衆へのベルト、共産主義の学校とみなされていた。

レーニンは、労働者階級のもっとも大衆的な組織である労働組合が、プロレタリアートの独

裁（トゥーラ）を実現するうえで、きわめて重要な役割をはたすことを指摘した。

「しかし、それは国家組織ではない」とレーニンは書いている。「強制の組織ではない。それは教育組織であり、引きいれる組織、訓練する組織である。それは学校であり、管理の学校、経営の学校、共産主義の学校である」（全集、第三二巻、四ページ）。

労働組合をつうじて、共産党と大衆との結びつきが実現される。党は、党外の労働者大衆を指導し、「まず労働者を、ついで農民をも」（同、三八ページ）啓蒙し、訓練し、教育する。労働組合内での教育活動によって、党は、各労働者が自分の労働生産性と全ソヴェト国民のそれを向上させる必要を認識することを目標とする。レーニンは、労働組合の任務を規定して、こうのべている――

「国家権力を獲得したのちの、プロレタリアートのもっとも重要で、もっとも根本的な利益は、生産物の量をふやし、社会の生産力を大幅にたかめることである」（全集、第三三巻、一八六ページ）。

レーニンは、社会主義経済を建設するうえでの労働組合の主要な役割を、ソヴェト国家の計画作成機関や経済機関に参加し、労働生産性の向上と労働規律の強化のためにたたかい、労働者の物質的利益や文化的利益に気をくばり、労働者と勤労大衆一般のなかから国家機関や経済機関のための基幹要員を養成することである、と考えていた。労働組合の活動は、労働者民主主義を幅広く展開し、官僚主義および行政的処理とたたかい、組合員を教育し、組合員の創造的な積極性を発揮させる点にあらわれる。労働組合の活動の基礎には、説得の方法がある。

激しく、またなみはずれて広範なものになった、この論争では、労働組合についてのレーニン

の見地が勝利をおさめた。反対諸派の政綱が大多数票をあつめたのは、一部の党組織内にすぎなかった。

多大の困難と小ブルジョア的自然成長性の情勢のもとで、また資本主義に包囲された状況のもとでは、レーニンが指摘したように、討論はゆるされないぜいたくであった。革命の敵は、ボリシェヴィキ党の分裂をあてにし、それがソヴェト権力の崩壊をもたらすことを期待していた。国を統治すること、しかも基本的に小ブルジョア的な国を統治すること、社会主義を建設するなかで幾百千万の大衆を指導することは、党の統一と一致団結、党の思想的一貫性、党隊列内の鉄の規律、日和見主義的動揺と分派を容赦しない態度という必須の決定的な条件のあるばあいにはじめて、可能である。したがって、是が非でも党内の分派とグループを一掃しなければならなかった。そうしなければ、国内の政治的危機を片づけ、正しい政治方針を仕上げて実行し、社会主義を順調に建設し、帝国主義者のあらたな襲撃を撃退することは、不可能であった。

すべてこれらの問題に解答をくだしたのは、第一〇回党大会であった。

2　第一〇回党大会。新経済政策への転換

ロシア共産党（ボ）第一〇回大会は、一九二一年三月八日から一六日までひらかれた。この大会には、七〇万人以上の党員の代表が出席していた。大会の議事日程には、中央委員会の報告、党の統一の問題、労働組合問題、民族問題、食糧割当徴発制を食糧税に代える問題、党建設の諸問題その他があった。

レーニンは、中央委員会の政治活動についての報告、食糧割当徴発制を現物税に代えることについての報告、党の統一とアナルコ―サンディカリズム的偏向とについての報告をおこなった。現物税についての副報告は、食糧人民委員のア・デ・ツュルーパがおこなった。

大会は、食糧割当徴発制を食糧税に代える問題、戦時共産主義から新経済政策（ネップ）に移る問題、労働者階級と農民という二つの基本的階級の相互関係の問題を審議した。ことの本質は、労働者階級が国の人口の大多数を占める勤労農民とかならず共同して社会主義を建設しなければならなかったという点にあった。地主と資本家を収奪し、追いだすことはできたとしても、小生産者である勤労農民を「**追いだすことはできない**。彼らを押しつぶすこともできない。彼らとは仲よくくらしていかなければならない。非常に長期にわたる、漸進的な、慎重な組織活動によってはじめて、彼らをつくりかえ、再教育することができる（またそうすべきである）」（全集、第三一巻、二九ページ）。レーニンはこうおしえている。

農民を社会主義建設に引きいれる課題を解決するためには、工業と農業のむすびつきの従来の形態を考慮する必要があった。何世紀ものあいだ、農村と都市との経済的交流は、売買をつうじる農産物と工業製品との交換にあらわれていた。資本主義から社会主義への過渡期に、多くの経済制度からなる経済のもとでは、国有工業と小商品生産的農民経営との商業による結合は客観的必然であった。

レーニンは、プロレタリアートの独裁の最高の原則は労働者階級と農民の同盟である、とおしえている。労働者階級と農民の相互関係の問題は、中央委員会の政治報告と食糧割当徴発制を現物税に代えることについての報告のなかで検討された。レーニンは、食糧税の実施を規定す

る新経済政策による以外には、農民を社会主義建設にひきいれる方法はないと強調した。

「新経済政策の本質は」とレーニンはのちに言っている。「プロレタリアートと農民の同盟である。その本質は、前衛であるプロレタリアートと広範な農民大衆との結合にある」（全集、第三三巻、一六七ページ）。

この結合は、経済的基礎にもとづいてきずかなければならなかった。レーニンはこう指摘した。プロレタリア国家は、食糧税の形で、農民から余剰食糧の全部ではなく、その一部だけを取りあげ、のこりの余剰は、農民が市場でそれを自由に販売できるようにすべきである。このことは、小農が経営をいとなむうえでの刺激になり、国の農業全体を急速に復興させることになろう。そうなれば、国有工業、とくに重工業を復興し、発展させ、社会主義の地歩を強化し、農業を社会主義的に改造する土台をつくりだすことができるであろう。この時期には農業を復興し発展させることが緊急な課題であって、この課題を解決することが社会主義建設を保障していた。

だが、食糧税の実施は、私的商業の自由につうじていた。ところで、このことは、資本主義のいくらかの復活、富農の成長、私的小企業の開設を意味していた。これは、ソヴェト権力にとり、社会主義の前途にとって、危険となるおそれはなかったか？　ある程度、そのおそれはあった。しかし、この危険は恐ろしいものではなかった。国家の手には、工業、銀行、鉄道運輸、水運、外国貿易、土地など、国民経済の中枢がにぎられていた。党は正しい政策を立案し、実行していた。富農の成長は、ソヴェト国家によって制限されていた。私的資本主義にたいしては、国家による統制が確立されていて、その発展は、一定の限度内でゆるされていたにすぎなかった。

レーニンは、私的資本主義を国家資本主義の方向にむけることを提案した。その一形態として、

彼は、大工業を急速に復興させるために、個々の工業企業を外国の資本家に利権として供与する（賃貸する）こと、をあげた。こうした企業は、ソヴェト国家の統制のもとに操業することによって、社会主義の助力者の役割をはたすであろう。したがって、資本主義がいくらか復活するとしても、おそれるにたりない。

ロシア共産党（ボ）第一〇回大会の代議員は、レーニンの計画を全員一致で承認した。大会は、ただちに食糧割当徴発制を食糧税に代えることに賛同した。そのさい食糧税は食糧徴発制による割当額よりも大幅に減らした額が決定された。貧農は現物税のいくつかの種類を——特別のばあいには全部の種類をも——免除され、精農には特典があたえられ、余剰農産物の売買がゆるされた。

新経済政策は、資本主義から社会主義に移るさいの、ただ一つ正しい政策であった。その目標は、プロレタリアートと農民の同盟を強固にし、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）を強化すること、社会主義的な方向に国を発展させること、プロレタリア国家の手に国民経済の中枢を確保しながら、一定の範囲内で資本主義をみとめること、社会主義的要素に資本主義的要素とたたかわせ、社会主義的要素を勝利させ、搾取階級をなくし、ソ連邦に社会主義を建設することであった。

新経済政策は、戦時共産主義にくらべて、ある限度まで後退することを意味していた。われわれは内戦の時期に、社会主義にむかって前進しすぎたので、後方すなわち農民からきりはなされる危険がわれわれをおびやかした、とレーニンはのべている。彼は、内戦の時期の社会主義建設の方法を要塞にたいする強襲にたとえた。そのときには、強襲によって、すなわち「もっとも簡単な、急速な、直接の」方法によって、都市と農村の資本主義を破壊し、「生産と分配の社会主

義的原則にうつること」（全集、第三三巻、八一ページ）がくわだてられた。経験は、この移行が成功するためには、資本主義という要塞の長期攻囲が必要なことをしめした。「強襲ではなく……長期の攻囲という、きわめて苦しい、困難で不愉快な任務……」とレーニンはのべている（同、八二ページ）。

一時、自己の後方へできるだけ近いところまで退却し、勢力を再編成して、資本主義にたいする全勤労大衆のあらたな断固たる攻撃を開始する必要があった。この条件があるならば、すなわち農民とのむすびつきが維持されるならば、ソヴェト国民の社会主義への前進の速度は、いまわれわれが夢想もできないようなものになるだろう、とレーニンはのべた。

新経済政策への移行は、戦時共産主義政策からの急転換であった。共産党員は、新しい情勢を早急によく知り、新経済政策におうじて自分の活動方法をかえ、経営することを習得し、文化的に商売することを習得しなければならなかった。共産党員にとっては、このことは非常な困難を呈していた。なぜなら、地下活動や牢獄では、彼らに国民経済の指導の仕方や商売のやり方をおしえる者はだれもいなかったし、だれからも経験を借りてくるところがなかったからである。レーニンは、社会主義の建設が信じられないほど困難な仕事だと警告した。しかし、レーニンのそだてた党は、困難をおそれず、新経済政策を社会主義へのただ一つ正しい道とみて、その実施に大胆に取組んだ。

第一〇回大会が新経済政策を採択したことには、共産党の英知があらわれ、社会発展の法則の深い知識にもとづいた、レーニンのすばらしい洞察力があらわれていた。レーニンは、マルクス主義者のうちではじめて、資本主義から社会主義への過渡期のプロレタリア国家の経済政策を理

論的に基礎づけた。新経済政策は、一九一八年の春、彼が『ソヴェト権力の当面の任務』という労作のなかでのべた、社会主義経済の基礎の建設についての諸命題を発展させたものである。その後の数年のソ連邦での社会主義建設の経験は、レーニンがまったく正しかったこと、彼の科学的・マルクス主義的な見通しのすばらしい力を証明した。

新経済政策は国際的な意義をもっている。レーニンは、プロレタリア革命がおきるところでは、世界のどの国でも、社会主義は農民と共同して労働者階級によって建設されるであろう、新経済政策に固有な諸方策の実施は避けられない、とおしえている。実生活はこれを完全に裏書きした。

新経済政策は、世界革命運動の基地であり、とりでであるソヴェトの国を強化し、発展させることによって、世界史の歩み全体に影響をおよぼしたという意味でも、国際的な意義をもっていた。

「現在、われわれは」とレーニンは言っている。「主としてわれわれの経済政策によって国際革命に影響をあたえている。……闘争は、世界的な規模で、この舞台にうつされている。われわれがこの任務を解決するならば、そのときこそ、われわれは、確実に、最後的に、国際的な規模で勝つであろう」(全集、第三二巻、四六五ページ)。

ロシア共産党(ボ)第一〇回大会は、民族問題を審議し、イ・ヴェ・スターリンがこの問題について報告をおこなった。この問題は世界史的な意義をもっていた。この問題の正しい解決は、社会主義建設の成功をたすけ、植民地・従属国の人民を民族解放闘争にふるいたたせた。

民族問題は、国民経済復興の課題と、新経済政策にもとづく国民経済の社会主義的発展と固く

むすびついていた。民族問題は、主として、農民問題であった。というのは、少数民族のすむ辺境地方の住民は主として、農民からなっていたからである。党は、おくれた民族のおのおのもつ特殊性を念頭におきながら、彼らを社会主義建設にひきいれる方法を作りあげた。レーニンは、多民族ソヴェト国家という条件のもとで、おくれた民族には社会主義にむかって非資本主義的に発展する可能性があるという、マルクスとエンゲルスのすばらしい思想を発展させ、豊かにした。ツァーリズムは、カザフスタン、中央アジア、カフカースおよび北部地方の諸民族を無知蒙昧の状態にとどめておき、彼らのあいだに家父長制的・封建制的関係と氏族関係を存続させていた。党は、ツァーリズムのこれらの旧植民地の民族を資本主義的発展段階をとおらずに、社会主義にみちびくという課題を立てた。

第一〇回大会は、おくれた民族の事実上の不平等を一掃することについての決定を採択した。彼らの法律上の不平等は、ソヴェト権力成立直後に一掃された。これに反して、事実上の不平等を一掃するためには、まず第一に少数民族地区に工業をつくりだすことが必要であった。そのためには時間とプロレタリアートの努力が、国の先進的なソヴェト諸民族の努力が、おくれた同胞民族にたいする彼らの利欲をはなれた援助が、すくなからず必要であった。大会は、おくれた民族がソヴェト国家組織、母語をつかう権力機関と経済管理機関、裁判所、新聞雑誌、学校、劇場などを自国に発展させ、これを強化するのをたすけ、民族出身の基幹要員の養成を促進するのをたすける必要があることを、みとめた。

大会は、ソヴェト諸共和国の結束に大きな注意をはらった。これらの国のどれ一つとして、単独では、帝国主義者によって粉砕されるのをまぬがれることはできなかった。大会はこう声明し

た。政治経済上および国防上の共通の利害は「帝国主義への隷属と民族的圧迫をまぬがれる唯一の道として、個々のソヴェト共和国の国家的同盟を厳命している」。連邦のいろいろな型を適用したソヴェト・ロシアの経験は、「ソヴェト諸共和国の国家的同盟の一般的形態としての連邦がまったく適切で柔軟性にとむものであることを完全に確証した」(『ソ連邦共産党決議集』、第二巻、二五〇、二五一ページ)。

レーニン的民族政策の実行をさまたげていたのは、大国的排外主義と地方的民族主義という、二つの偏向であった。大会は、これらの偏向、まず第一に、主要な危険である大国的排外主義と断固としてたたかうよう、呼びかけた。大国的排外主義は、社会主義をめざしてたたかうために国際主義の旗のもとに団結した諸民族の統一を、決裂させるおそれがあったからである。

ロシア共産党(ボ)第一〇回大会は、党の統一の問題を特に重視した。資本主義の包囲があり、国内におびただしい小ブルジョア大衆が存在することは、日和見主義や分派行為の温床であった。トロツキー派、「労働者反対派」、「民主主義的中央集権派」、その他の日和見主義的グループは、分派闘争をおこない、分派とグループの自由を要求することによって、党を分裂に追いこもうとしていた。これは、プロレタリア独裁(ディクタトゥーラ)の弱化につうじるものであり、その階級敵を利するものであった。党は、自分の隊列内の分派にたいして断固たるたたかいをくりひろげた。

レーニンは、分派行為を根絶し、党内の分派とグループを禁止するよう、大会に呼びかけた。彼は、意志・見解・行動の統一と鉄の規律がマルクス主義政党の発展法則であり、この法則はいっさいの分派行為と党規律違反をゆるさないとおしえた。

「プロレタリア大衆のこのような意志をもってしてこそはじめて」とレーニンは言った。

「農民国で、プロレタリアートは、独裁（ディクタトゥーラ）と指導という、大きな任務をはたすことができる」（全集、第三二巻、一八六ページ）。

大会は、レーニンの提案した党の統一についての決議案を採択した。決議には、こうのべてある――

「大会は、あれこれの政綱にもとづいてつくられたグループに、例外なく、すべて即時解散することを命じ、どのような分派的行動をもゆるさないよう厳重に監視することを、すべての党組織に委任する。大会のこの決定を遂行しないばあいには、無条件に即時党から除名しなければならない」（『党決議集』、第二巻、二二〇ページ）。

大会は、中央委員が党の統一をやぶり、分派を組織して、党の分裂をくわだてるばあいには、非常措置として、彼らをも党から除名することを、中央委員会に委任した。「このような非常措置をとる（中央委員、中央委員候補、統制委員にたいして）条件は、中央委員候補全員と統制委員全員を参加させた中央委員会総会」――ほかならぬこの総会が三分の二の多数決で処罰方法の問題を決定する――「を招集する」（同、二二一ページ）ことでなければならない。

レーニンが起草し、大会が採択した、党内のサンディカリズム的および無政府主義的偏向についての決議では、「労働者反対派」の見解が、きびしく批判されていた。大会は、これらの見解はマルクス主義と完全に手を切ったもので、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）にとって大きな政治的危険を呈している、と指摘した。大会は、この反対派の思想を、小ブルジョア的なぐらつきを表明する、サンディカリズム的・無政府主義的な反党思想とみなした。実際には、「労働者反対派」の思想は党の首尾一貫した指導方針をよわめ、プロレタリア革命の階級敵をたすけている、と決

れない、とみとめた。

党の統一について、また分派はゆるせないことについて第一〇回党大会の採択した決定は、党生活と党建設の不動の原則となった。これらの決定は、トロツキー主義や、民族主義的偏向や、基本方針からのその他の日和見主義的逸脱とたたかううえで党を武装させた。

大会は、党建設上の諸問題に大きな注意をはらった。内戦の時期の党の特徴は、きびしい中央集権、党内民主主義の制限であった。平和的建設の条件のもとでは、党内民主主義を復活させ、発展させることが必要であった。「完全に自由に党内批判をおこない、すべての重要問題を広範に討議し、それらの問題について討論するという方法、全党的決定を集団的につくりあげるという方法」（『ソ連邦共産党決議集』、第二巻、二二〇ページ）が、党活動の方法とならなければならなかった。

大会の決定は、すべての党員にとって拘束力をもち、すみやかに、かつ正確に遂行されなければならなかった。民主主義を中央集権と、自由な発言を鉄の規律とむすびつけ、集団的につくりあげられた決定を無条件に遂行すること、――これこそ民主主義的中央集権制の本質であった。

ソヴェト権力の時代になってから、一部の小ブルジョア分子が党にはいってきたこと、出世主義者や利己主義者が党にもぐりこんだこと、官僚主義者があらわれたこと、動揺しやすく、思想的に首尾一貫していない以前のメンシェヴィキやエス・エルが党にはいったことを考慮して、大会は党から非共産主義分子を一掃することを決定した。

労働組合の問題についての討論を総括して、大会は、レーニンの政綱を採択した。大会はトロ

ツキー派、「労働者反対派」、「民主主義的中央集権派」の見解を非難し、労働組合の基本的な任務をさだめた。決議ではこう強調されていた。労働組合は、共産主義の学校である。労働組合の主要な任務は、経済を組織する上での任務であり、教育上の任務である。労働組合は、生産を組織し、国の生産力を復興することに協力しなければならない。労働組合は、組合員の日常生活のあらゆる面に奉仕し、彼らの利益を擁護しなければならない。労働組合の活動の基本的な方法は、説得の方法である。

内戦中にひどくせばめられていた労働者民主主義を、まっさきに、労働組合内に復活させなければならない。労働組合は、民主主義的中央集権制の原則にもとづいて、うちたてられなければならない。労働組合の活動は、共産党が指導する。

これらの基本的命題は、社会主義・共産主義を建設する全期間にわたって、労働組合が活動するさいの指導原理となった。

大会は、労働者出身の多くの党員が国家機関にうつり、赤軍へ行ってしまって、工場での直接の仕事からはなれたこと、多くの共産党員が内戦の戦線でたおれたことを指摘して、思いきって労働者を党にいれることに賛成した。

党の一致団結、党の権威に大役をはたしているのは、中央委員会であり、中央委員の見解の統一である。労働組合についての討論は、そうした統一のなかったことを示した。このことは、レーニンに非常な不安をいだかせた。彼の要請で大会は、中央委員会の「政策の完全な安定性を保障し」、中央委員会と大衆の結びつきを強化するために、「大衆的な党活動で頭角をあらわした組織者」（同、二〇六ページ）を中央委員会にいれることを必要とみとめた。第一〇回大会は、一

九二〇年九月にひらかれた第九回党協議会の中央統制委員会設置についての決定を確認した。同委員会の使命は党強化に役立つことであった。各級統制委員会の任務は、官僚主義や出世主義とたたかい、党員が自分の党内の地位や職務上の地位を悪用することとたたかい、党内の同志的関係の違反とたたかうことであった。大会は、レーニンを先頭とする中央委員会と、中央統制委員会とを選出した。

第一〇回大会は、世界史的な意義をもっている。大会は、資本主義から社会主義へ移っていく道、戦時共産主義の時期にくらべて新しい社会主義建設方法をさだめた。大会は、社会主義を建設するには労働者階級と農民の同盟が必要だということ、国の国家生活・経済生活・文化生活を指導するうえで党が決定的な役割をはたすことを、とくに力をこめて強調した。大会は、党の統一を大切に守り、分派行為と容赦なくたたかえ、という指令をあたえた。大会は、党が党外大衆とできるだけ固くむすびつく必要を指摘し、党外大衆を指導する形態と方法を明確にした。

一九二一年五月の第一〇回党協議会の席上と、それと同時に発表された『食糧税について』というすぐれた労作のなかで、レーニンは新経済政策を理論的に基礎づけた。レーニンによって詳述された諸命題は、マルクス＝レーニン主義の宝庫へのあらたな寄与であった。

一九二一年六月下旬から七月中旬にかけてモスクワでひらかれたコミンテルン第三回大会は、戦時共産主義から新経済政策への歴史的転換に賛同した。このころまでに、共産党の数はいちじるしく増加していた。共産党は、フランス、イタリア、チェコスロヴァキア、ルーマニア、その他いくつかの国で創立された。共産党の創立にすぐれた役割をはたしたのは、フランスではマルセル・カシャン、ポール・ヴァイヤン＝クチュリエ、イタリアではアントニオ・グラムシとパル

ミロ・トリアッチ、チェコスロヴァキアではアントニン・ザポトツキーとボグミル・シュメラルであった。一九二一年七月には、中国共産党がうまれた。

大会には、五二の共産党と社会主義諸党の代表が出席していた。レーニンは、ロシア共産党（ボ）の戦術について報告した。全世界の共産主義者は、ロシア共産党（ボ）の政策と戦術にこぞって賛同し、ソヴェトの国を支持するよう、国際プロレタリアートに呼びかけた。

大会は、資本主義諸国に革命闘争の一時的な退潮がはじまったこと、ブルジョアジーの主要な社会的支柱である社会民主党が資本主義とブルジョア支配の維持をたすけていることを、指摘した。共産党のまえには、プロレタリアートの多数者を味方に獲得するという、課題が提起された。大衆を獲得しなければ、資本の支配を打倒してプロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）を樹立することはできないからである。大会は、「大衆のなかへ！」というスローガンとプロレタリア統一戦線をつくる戦術とを提起した。

3　新経済政策の最初の成果。第一一回党大会。ソヴェト国家の対外政策。ソヴェト社会主義共和国連邦の創設

党は、全力をあげて新経済政策を実行しはじめた。農業、工業、運輸の復興、都市と農村のあいだの商品交換の回復、信用・貨幣制度の整備といった、経済問題が党組織の活動の重点になった。党は、新経済政策の本質を勤労者に広く説明し、新しい任務におうじて党の隊列をたてなおし

くんでいた。多くの中央委員、中央委員候補、その他の有数な党活動家が、党活動、国家活動、経済活動の決定的な部署におくられた。エフ・エ・ジェルジンスキーは全ロシア非常委員会――統合国家保安部の議長の職にとどまりながら、交通人民委員に任命され、ついで最高国民経済会議議長に任命された。ゲ・カ・オルヂョニキッゼは一九二一年から一九二六年まで党ザカフカース地方委員会の書記になり、ザカフカース・ソヴェト諸共和国の国民経済の復興を指導した。エス・エム・キーロフは一九二一年の夏いらい、アゼルバイジャン共産党中央委員会書記として活動していた。彼の指導のもとに、同共和国の経済、とくに石油産業が復興の途上にあった。ヴェ・ヴェ・クイブィシェフは電気産業総管理局長となり、その後、最高国民経済会議議長になった。エリ・ベ・クラシンは外国貿易人民委員に任命された。ヴェ・ヤ・チュバーリはウクライナ最高国民経済会議議長として、ついでドンバスの石炭産業支配人として活動していた。レーニンは、この石炭産業を復興することを非常に重視していた。

党は、数千人の党員を赤軍から経済活動へ派遣した。多くのコミサール、指揮官、政治部員が、工場長になり、国営商業や協同組合などの働き手になった。

中央委員会は、工場細胞の強化に非常に気をくばっていた。工場には党活動と政治活動をつよめるために、共産党員がいろいろな機関から派遣された。党細胞は、企業の運営にあらゆる面で影響をあたえ、監督をおこなっていたが、企業管理部の処置には干渉しなかった。党細胞は、生産課題の遂行と労働生産性の向上をめざす労働者のたたかいの先頭に立った。

党は、第一〇回大会の決定を遂行して、党の隊列を粛清した。粛清は公開の集会でおこなわれ

た。党外の労働者、勤務員、農民は、異分子、腐敗分子、出世主義分子の摘発や党からの追放をたすけた。党員の約四分の一が除名された。党の構成は、いちじるしく改善された。党規律はたかまった。党の統一は強固になった。勤労者のあいだでの党の権威はたかまった。

新経済政策は、国の経済によい影響をおよぼした。勤労農民は、食糧割当徴発制を食糧税に代える法律を歓迎し、はやくも一九二一年の春にはいくつかの地方で作付面積をふやした。彼らは、赤軍が国の一部の地方に生じた富農の暴動や匪賊行為を一掃するのを、積極的にたすけた。労働者階級の状態は改善され、彼らが階級から脱落していく過程はやんだ。熟練労働者が工場に帰ってきた。大工業は活気づきはじめた。国の経済は、徐々に崩壊状態を脱していった。

これらの成果は、一九二一年一二月の第一一回協議会で党によって確認された。空前のひどい飢饉が国をおそわなかったならば、成果はもっと大きかったであろう。飢饉発生の根本的な原因は、国が、とくに農業が経済的におくれていたこと、干渉軍と白衛軍が国民経済を荒廃させたことにあった。食糧事情を極度に逼迫させたのは、一九二〇年の干害と、さらにひどい一九二一年の干害であった。凶作は人口約三〇〇〇万の三四県に波及した。党と政府は、非常飢饉対策を講じた。やっとのことで、この最大の災厄はかたづけられた。

新経済政策にもとづく平和な社会主義建設の第一年度を総決算したのは、五〇万以上の党員の代表が出席していたロシア共産党（ボ）第一一回大会（一九二二年三月二七日―四月二日）であった。大会は、中央委員会の政治報告、組織問題、党粛清の総括、党の隊列の強化の問題、その他の問題を審議した。

中央委員会の政治報告のなかでレーニンは、退却はおわった、目的は達せられた、農民経済と

の結合は確立されつつある、プロレタリアートと農民の同盟は強固になった、経済的成果は現にあがっている、と言明した。党には、資本主義的分子に攻撃をくわえるために勢力を再編成する、という新しい任務が負わされた。

新経済政策は、資本主義と社会主義との激闘を意味していた。問題は「だれがだれを」、つまり、この死闘で社会主義が勝利者になるか、それとも資本主義が自分のうしなった地歩をとりもどすか、というふうに出されていた。資本主義に勝利するためには、経営のやりかたを習得しなければならない、過去一年のしめすところでは、共産党員はまだそれを習得していない、とレーニン言いった。レーニンは、共産党員が資本家よりうまく経営できることを国民に証明するよう、彼らに呼びかけた。

党の任務の連鎖の基本的な一環は、当時は商業であった。社会主義経済と農民経済との交流は、商業の形態をとっていた。私的資本は、商業で強力な地歩を占め、大きな技能をもっていた。市場で私的資本とたたかうことは、共産党員にとって、とくに困難であった。彼らは、商業をするすべを知らず、多くの者は、商業の重要性を理解せずに、商業を軽蔑する態度をとっていた。「商業をまなべ」――これがレーニンのかかげたスローガンであった。いまや、「普通の番頭、普通の資本家、商人との競争に耐えぬくこと」が任務である、とレーニンはのべている（全集、三三巻、二七八ページ）。

新しい任務は、基幹活動家を正しく選択し、配置することを必要としていた。

党と国家の政策は、基幹活動家をつうじて実現される。問題の眼目は人にあり、基幹活動家の選択、仕事のしぶりの点検にある、――とレーニンは指摘した――どの活動分野でも、成功は、

活動家が正しく配置されているかどうかに、多分にかかっている。だが基幹活動家は、その活動の結果にもとづいて系統的に点検し、彼らをたすけ、彼らが仕事のうえで失敗したばあいには、彼らを適時配置転換し、更迭しなければならない。

基幹活動家の選択と配置、仕事のしぶりの点検は党とソヴェト国家の注目のまとになった。

大会は、党の隊列を強化することに大きな注意をはらった。党は、党内のプロレタリア中核を大きくし、非プロレタリア分子が党にはいるのをむずかしくするために、党員の採用にあたって、三つの部類を設けた。(一)労働者と労農出身の赤軍将兵、(二)他人の労働を搾取しない農民(赤軍将兵をのぞく)と家内工業者(クスターリ)、(三)その他(職員など)。それぞれの部類には、別々の入党条件がさだめられた。入党は、第一の部類については緩和されたが、第三の部類については、むずかしくされた。

大会は、分派行為のあらわれにたいして、とくにきびしい態度をとった。「労働者反対派」の指導者らは、第一〇回大会の分派解散の決定にしたがわなかった。彼らは非合法に会合をもち、自派の反党的な決定を秘密にばらまいていた。大会は、このグループの分派活動をきびしく非難し、今後も反党活動をつづけるばあいは党から除名すると、シリャプニコフ、メドヴェデフ、コロンタイに警告した。この決定によって、党はもういちど、党は党の統一と鉄の規律を固く守って、党内にどんな分派のあることも絶対にゆるさない、ということを強調したのである。

ロシア共産党(ボ)第一一回大会は、レーニンが出席して指導した、最後の大会であった。大会をとじるにあたって彼は、党がその精神のしなやかさとその戦術とによって、世界にかつてなかったほど高い水準に革命を引き上げた、と指摘した。

「世界中のどんな力も」とレーニンは言った。「たとえその力がいまなお何百万何億という人々にどれほどの災厄と不幸と苦難をもたらすことができるにせよ、わが革命の主要獲得物を奪いとることはできないであろう。なぜなら、この獲得物はいまではすでに『われわれの』獲得物ではなくて、世界史的な獲得物となっているからである」(全集、第三三巻、三三四―三三五ページ)。

大会で選出された中央委員会の第一回会議で、政治局、組織局、書記局の選挙がおこなわれた。中央委員会書記長にはイ・ヴェ・スターリンがえらばれた。

その当時とくに重要になったのは、基幹活動家を思想的にきたえるための党の活動であった。世界のブルジョア新聞は、ボリシェヴィズムにイデオロギー攻勢をくわえていた。ソヴェトの国の内部では、カデット、エス・エル、メンシェヴィキ、ブルジョア民族主義者の活動が活発になった。彼らは、「だれがだれを」の問題は資本主義に有利に解決されるだろう、ソヴェト権力はブルジョア民主主義に変質するだろう、と耳うちしていた。

国外に逃亡したブルジョアジーも、ソヴェト制度の変質に大きな期待をかけていた。亡命者の一部のあいだには、「スメーナ・ヴェーフ」的潮流がひろまった。この潮流は、一九二一年にプラハで白系亡命者グループが発行した論集『道標の転換』と、パリで白系亡命者が発行していた雑誌『スメーナ・ヴェーフ』〔『道標の転換』〕にちなんで、こう呼ばれるようになったものである。「スメーナ・ヴェーフ派」は、新経済政策の環境のもとでの国民経済の発展が資本主義の道をすすむものと信じて、ソヴェト権力と協力することに賛成していた。

「スメーナ・ヴェーフ」的潮流は、ソヴェト権力と誠実にすすんで協力しようとする亡命者グ

ループをも統合していたので、党は、彼らのあいだのブルジョア専門家をソヴェトの仕事に用いることに賛成した。しかし、党は、ソヴェト権力との協力を反革命行為の政治的偽装にする「スメーナ・ヴェーフ派」にたいしては、弾圧手段をとることに賛成した。

党は、ソヴェト制度が変質するという、ブルジョアジーとその手先の嘘を暴露し、資本主義への復帰など問題になりえないこと、党は新経済政策の進路をとってソヴェト国民を社会主義にみちびいてゆくことを、大衆に説明した。党は、社会発展の法則をただ一つ正しく説明して、資本主義社会を社会主義社会に改造する道をしめしているマルクス主義的イデオロギーを、大衆のあいだに普及させることにつとめた。

党の基幹活動家をマルクス主義的に教育し、彼らをブルジョア・イデオロギーにたいする非妥協的なたたかいに動員するうえで、大役をはたしたのは、一九二二年三月に発表されたレーニンの論文『戦闘的唯物論の意義について』であった。この論文は、すべての住民層のあいだでマルクス主義的イデオロギー、弁証法的唯物論を宣伝し、観念論と坊主主義を暴露することに、共産党員の目をむけさせた。

共産党員は——とレーニンはおしえている——共産党に属してはいないが一貫した唯物論者、現代自然科学の代表者たちとかたく同盟して、行動しなければならない。共産党員は彼らと共同し、彼らを指導しながら、唯物論的意識を大衆のあいだに普及させなければならない。レーニンは、自然科学の知識をひろめ、それを基礎にして、人民大衆のあいだで広範な無神論の宣伝をくりひろげ、人民大衆が宗教的迷信と手を切るのをたすけるよう、すべての共産党員と一貫した唯物論者に呼びかけた。彼は、マルクス主義の弁証法的唯物論を会得する必要にソヴェトの自然科

学者の注意をうながした。

「しっかりした哲学的基礎づけがなければ」とレーニンは書いている。「どんな自然科学、どんな唯物論も、ブルジョア思想の攻撃とブルジョア的世界観の復活にたいする闘争をたたかいぬくことはできないということを、理解しなければならない。この闘争をたたかいぬき、それを完全な勝利をおさめるまでやりとおすためには、自然科学者は近代的唯物論者となり、マルクスに代表される唯物論の意識的信奉者にならなければならない。すなわち弁証法的唯物論者にならなければならない」（全集、第三三巻、二二三ページ）。

レーニンは、セクト的な狭量におちいらないよう、共産党員に警告し、旧社会の勢力でソヴェト権力に忠誠なものをすべて社会主義建設のために用いるよう主張した。共産主義者だけの手で共産主義を建設できると考えることは、この上なく大きく、危険なあやまりの一つである。いろいろな分野で働いている非党員と同盟しなければ、共産主義建設のどんな成功も問題にならない、と彼は書いている。

レーニンは、ブルジョア的な「現代民主主義」、とくにアメリカ合衆国のそれを系統的に暴露することがきわめて重要なことに、共産党員の注意をうながした。各種の「社会主義者」は、この「民主主義」のまえにひざまずき、それをほめそやして、「三拝九拝している」。ところが実は、このほめそやされている「民主主義」なるものは、「説教してもらえばブルジョアジーに有利なことがらを説教する自由にほかならないし、ブルジョアジーにとっては、もっとも反動的な思想や、宗教や、非開化主義や、搾取者の弁護などを説教することが有利なのである」（同、二二三ページ）。一九二二年八月の第一二回党協議会は、すべての党員にブルジョア・イデオロギーと

断固としてたたかうよう、呼びかけた。

レーニンは、科学を尊重することをまなび、科学者に注意ぶかい態度をとり、彼らを極力支持するよう、党に訴えた。彼は、農工業を復興するには、新しい、近代的な、科学の最新の成果にもとづいてきずかれた基礎のうえにしなければならないと強調した。「古い基礎のうえに工業を復興することは」とレーニンは言った。「あまりにも多くの労力と時間を要する。われわれは工業にもっと近代的な形態をあたえなければならない。すなわち、電化に移らなければならない」（全集、第三二巻、五一六ページ）。この課題を解決するためにはすぐれた科学者と技術者を引きいれ、科学技術上の基幹要員の養成を広くおこない、科学を極力発展させなければならない。

新経済政策にもとづいて党は、ソヴェトの国の経済復興の任務を着々と解決していった。一九二二年の末、労働者・農民の生活状態は、好転した。国の政治情勢は安定した。富農の匪賊（ひぞく）行為の多少とも大きな勢力は、すべて粉砕された。一九二二年の秋、赤軍は、極東から日本干渉軍を一掃した。国際舞台におけるソヴェト・ロシアの政治的威信は、いちじるしくたかまった。

社会主義建設が成功するには、平和が必要であった。「……われわれにとってなによりも貴重なのは、平和を維持することであり、経済の復興に全力をささげることが完全にできることである……」とレーニンは言っている（同、一一六ページ）。レーニンのこの方針は、社会主義と資本主義の二つの体制が存立する時期全体に当てはまるものであった。彼は「われわれは資本主義列強と共存できる条件をたたかいとった」と指摘している（全集、第三二巻、四一四ページ）。

レーニンは世界のすべての国民と平和のうちに暮したいというソヴェト国民の願いをつねに強調

し、ソヴェト国家の平和愛好対外政策を、ソヴェト国家がすべての国家との経済関係と文化関係を広げることに気をくばっていることを、ねばりづよく説明した。「われわれは、アメリカと経済協定をむすぶことに断然賛成です。どの国との協定にも賛成ですが、とくにアメリカとの協定には賛成です」と彼は言った（全集、第三〇巻、三九ページ）。「アメリカの資本家はわれわれに手だしをしないでください。われわれは彼らに手だしをしません」と彼は言明している（同、三七六ページ）。

共産党は、社会制度を異にする国家の平和共存をめざしていたが、これは、係争問題を戦争によってではなく、話合いで解決すること、内政に干渉しないこと、各国民の主権と領土保全をみとめることを意味していた。これは階級闘争の新しい形態であった。平和は、ソヴェトの国内の社会主義建設の成功を助けた。これは資本主義諸国間の階級闘争をはげまし被抑圧民族の民族解放運動をますます強めた。ブルジョア・イデオロギーとの闘争についていえば、この分野では平和は全然ありえなかった。

ソヴェト国家は、資本主義諸国家との関係を正常化することに努力していた。一九二一年に、ソヴェト国家はイギリスと、ついで、さらにいくつかの国家とも、通商協定を締結した。全ロシア中央執行委員会は、一九二一年に、アメリカにも、通商関係を樹立するように申し入れた。しかしアメリカ政府は、これを拒否して、頑として干渉主義的な立場をとっていた。フランスの支配層も、ソヴェト・ロシアとの通商の拡大をサボタージュした。

一九二一年の秋、ソヴェト政府は、資本主義諸国との経済協力関係の樹立をやりやすくしようとして、一定の条件つきでツァーリ政府の戦前の債務をみとめる用意のあることを声明し、また

ロシアにたいする外国の請求権と外国にたいするソヴェトの請求権を検討し、ロシアとその敵国とのあいだの講和条件を作成するような、国際会議を招集するよう提案した。

経済恐慌によって市場が急激に縮小していたので、協商国側の列強は、「ヨーロッパの経済復興を促進するため」というふれこみで、ソヴェト・ロシアと敗戦国ドイツをふくめた、全ヨーロッパ諸国の経済財政会議を、ジェノア（イタリア）で召集することにした。

会議は、一九二二年の四月から五月にかけてひらかれた。ソヴェト代表団首席にはレーニンが任命された。しかし、労働者は、レーニンに危害がくわえられることを懸念して、彼の外国旅行に異議をとなえた。レーニンは、モスクワから代表団の活動を指導した。会議で代表団首席の代理をつとめたのは、外務人民委員のゲ・ヴェ・チチェリンであった。代表団は声明を読みあげたが、そのなかにはこうのべてあった。「共産主義の原則の立場に立ちながらも、ロシア代表団は、旧社会制度と生まれようとしている新しい社会制度の並存を可能にしている現在の歴史的時期には、これら二つの所有制度を代表する国家間の経済協力は、絶対に必要であるとみとめる」。

会議でソヴェト代表団は、ロシアに新しい借款をあたえ、ソヴェト政府を法的に承認することを条件として、ツァーリ政府の戦前の債務をみとめることに賛意を表明した。ソヴェト代表団は、外国人所有者がロシアで受けた損失には一定の補償をあたえる用意があると声明した。逆に代表団は、干渉軍と協商国の支持を受けていたロシアの白衛軍とが自国にあたえた損害を補償せよ、という反対要求をもちだした。

だが、帝国主義者には、独自の計画があった。彼らは、同権の原則にもとづいてソヴェト・ロ

シアと協力する意志はなく、経済上・外交上の圧力によってソヴェト・ロシアに植民地政権をおしつけるつもりであった。彼らは、いっさいの債務の支払と、国有化された資産の旧外国人所有者への返還とを要求した。帝国主義者のあつかましさは、ソヴェト財政にたいする、それどころかロシアの国民経済全体にたいする外国の監督を打ちたてることをのぞむまでになった。ソヴェト代表団は、このような要求を断固としてしりぞけ、この要求の略奪的な性格を暴露した。

会議では、帝国主義列強間に、とくに戦勝国と敗戦国ドイツのあいだにするどい対立があらわれた。ドイツは、ヴェルサイユ条約によって自国に負わされた賠償支払の過重な負担を協商国がわに軽減してもらおうと努力したが、徒労におわった。この略奪条約に反対した国は、ソヴェト・ロシアだけであった。ドイツの支配層のもっとも目先のきく分子は、ソヴェトの国との接近がドイツの立場をつよめ、協商国からいくらかの譲歩を引き出すのをたすけると同時に、ロシアと通商する幅広い余地をひらくだろう、という結論に達した。一方、ソヴェト政府は、ソヴェト共和国を孤立させないようにすることに気をくばっていた。こうして、たがいに接近する余地が生じた。一九二二年四月、ラパルロ（ジェノアの郊外）でソ独条約が調印された。両国間の外交関係は再開された。ソヴェト・ロシアとドイツは、相互の請求権を、すなわちヴェルサイユ条約によってロシアにあたえられていた賠償請求権、旧債務の支払、国有化された資産の補償をたがいに放棄した。

ソヴェト政府は、ラパルロ条約を締結することによって、帝国主義列強の戦線に突破口をひらいた。ソヴェト政府は、平和とソヴェト・ロシアの安全のために、帝国主義者間の対立をたくみに利用したのである。

ジェノアで協商国側と話合いをつけることには、成功しなかった。交渉は、一九二二年の夏のハーグ会議でつづけられたが、やはり成果はなかった。

ソヴェト政府は、ジェノア会議で、全般的に軍備を縮小し、もっとも野蛮な戦争手段——「毒ガス、空中戦その他」——を禁止する問題を審議するよう、提案した。帝国主義諸国家は、この提案の審議を拒否した。ソヴェト政府の言明は、いまや歴史上はじめて、全般的軍備縮小をめざす政府が出現したことを、全世界の人々にしめした。

党とソヴェト政府は、被抑圧従属民族に接近するために尽力した。一九二一年に、イラン、アフガニスタン、トルコとの条約が締結され、これらの国の民族解放闘争に大きな援助があたえられた。これは、東方諸国と大国との最初の平等な条約であった。ソヴェト政府は、帝政ロシアがこれらの国でもっていた特権と利権をすべて放棄した。

一九二一年三月に創立されたモンゴル人民革命党の指導のもとに、モンゴル人民は、同年、ソヴェト軍の援助をえて、中国の軍閥とロシアの白衛軍を自国から駆逐し、人民政府をうちたてた。ソヴェト国民とモンゴル国民のあいだには密接な友好関係が樹立された。モンゴル人民共和国は、非資本主義的発展の道をえらんだ。同共和国の創立者スヘーバトルは、レーニンと会い、モンゴルの新しい生活を建設する道について話し合った。

一九二二年に、自国の独立のためにたたかっていたトルコと、イギリス帝国主義者に支持されていたギリシアとの戦争がおわった。トルコが勝利した。講和条件を作成するために、ロザンヌで国際会議が召集された。帝国主義列強は、ダーダネルス海峡の将来の問題だけの討議にくわわるようソヴェト・ロシアを招請した。ソヴェト政府は、同海峡にたいするトルコの主権、トルコ

軍艦以外のすべての軍艦にたいする同海峡の無条件閉鎖、通商航海の完全な自由を主張した。帝国主義者は、他の問題の討議にソヴェト共和国の代表をくわわらせるのを拒否した。なぜなら、彼らは、東方諸民族にたいするソヴェト国家の友好的な立場が、被抑圧諸国の民族解放運動の発展をたすけることをおそれていたからである。ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国が抗議したにもかかわらず、会議は決定を採択したが、その決定によると、海峡と黒海はすべての国の軍艦に開放された。こうして帝国主義者は、自国の軍隊がソヴェトの国の南部国境に接近する道をその後も維持していた。ロザンヌ会議の決定は、資本主義諸国から戦争をしかけられる危険のあること、つねに応戦できるようにそなえている必要があることを、ソヴェト共和国の勤労者にもう一度おもいおこさせた。

ソヴェトの国にたいする帝国主義諸国の多くの敵対行動も、このことをたえずおもいおこさせた。たとえば、一九二三年に、イギリス政府は、「カーゾンの最後通牒」――カーゾンはイギリス外相――として知られている最後通牒を、ソヴェト政府につきつけた。この最後通牒には、イランとアフガニスタンからソヴェト代表を引きあげよという要求、その他いくつかの強要がふくまれていた。ソヴェト政府は、係争問題を平和的に調整するための英ソ会議を召集するよう提案したが、これらの国からソヴェト代表を引きあげよという最後通牒の主要求を、きっぱり拒絶した。イギリス政府は、断固たる反撃を受けて引きさがった。ソヴェト国家にたいする力の政策は、またもや失敗した。

ソヴェトの国の主権を守り、経済的崩壊を一掃し、社会主義を建設するという課題は、ソヴェト諸共和国の経済力・政治力・軍事力や外交上の方策を緊密に統合することを切実に必要として

いた。すべての民族ソヴェト共和国の勤労者は、統合して一つにまとまる必要を理解していた。プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）を樹立し強化するための共同のたたかいと、社会主義建設における協力とをつうじて団結していたソヴェト諸民族は、十月大革命の獲得物を首尾よく守り、社会主義にむかって急速に前進するために、国家として統合することをも願っていた。

党は、ソヴェト諸民族のこの統合の願いをいいあらわした。統合とその形態の問題が、党中央委員会で検討され、審議された。イ・ヴェ・スターリンは、「自治共和国化」、すなわち、すべてのソヴェト共和国が自治権をもってロシア社会主義連邦ソヴェト共和国に加入するという構想を持ち出した。レーニンはこの提案に手きびしい批判をくわえた。彼は、この問題では「スターリンの性急なやり方と行政官的熱中が……致命的な役割を演じた」と書いている（全集、第三六巻、七一七ページ）。レーニンは、ソヴェト社会主義共和国の連邦をつくるよう提案した。スターリンは自分の誤った提案を撤回した。

中央委員会一〇月総会（一九二二年）で、つぎのような決定が採択された。

『連邦』の構成から自由に脱退する権利を各共和国に留保して、ウクライナ・ソヴェト共和国、ベロルシア・ソヴェト共和国、ザカフカース共和国連邦、ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国を『社会主義ソヴェト共和国連邦』に統合することについて、前記の共和国とのあいだに条約を締結することを必要とみとめる」。

一九二二年一〇月から一二月にかけて、ウクライナ、ベロルシア、アゼルバイジャン、グルジア、アルメニアの各共産党中央委員会総会は、ソヴェト諸共和国をソヴェト社会主義共和国連邦に統合することに賛成した。統合運動は全国民的なものになった。一九二二年一二月にひらかれ

たすべての共和国のソヴェト大会は、国民の感情を表明して、全員一致でソヴェト社会主義共和国連邦の創設に賛成した。

一九二二年一二月三〇日、ソヴェト社会主義共和国連邦第一回ソヴェト大会がモスクワでひらかれた。レーニンは、病気のため大会には出席していなかったが、名誉議長に選出された。大会は、ソ連邦の創設にかんする宣言と連邦条約を採択し、最高の立法機関——ソ連邦中央執行委員会——を選出した。中央執行委員会議長にはエム・イ・カリーニン、ゲ・イ・ペトロフスキー、ア・ゲ・チェルヴィヤコフ、エヌ・エヌ・ナリマノフが選出された。中央執行委員会の第二回会議でソ連邦人民委員会議が創設された。中央執行委員会は、レーニンをソ連邦人民委員会議議長として承認した。

こうして、レーニンを先頭とする党の指導のもとに、多民族ソヴェト社会主義国家が創設された。この国家は、自由意志の原則にもとづき、ソ連邦に加盟する各ソヴェト共和国の民族主権を保持して、組織された。これは、レーニンの学問上の最大の発見である、新しい型のプロレタリア連邦国家であった。

ソ連邦の創設は、レーニン主義の思想の勝利であり、共産党のレーニン的民族政策の勝利であった。民族問題を解決し、民族の不平等をなくす道、社会主義・共産主義の建設のために諸民族をむつまじい一家族に統合する道が、すべての進歩的な人々にしめされた。

一九二四年のソ連邦第二回ソヴェト大会は、最初のソヴェト社会主義共和国連邦憲法を採択した。

一九二二年一一月から一二月にかけて、コミンテルン第四回大会がひらかれ、五八ヵ国の共産

党の代表が出席した。レーニンは、この大会で『ロシア革命の五ヵ年と世界革命の展望』という報告をおこなった。この五ヵ年の主要な成果は、社会主義の地歩が強固になったことであった。新経済政策は役に立っただろうか？　これが主要な問題であり、――とレーニンは言った――この問題は、すべての共産党にとって至大の意義をもっている。否定的な解答がでてくれば、「われわれはみな破滅の運命におちいるであろう」(全集、第三三巻、四三八ページ)、だが、新経済政策は、党が戦時共産主義から新経済政策へ転換したことが絶対に正しいことを証明した、と。

これは、諸大会でおこなった、レーニンの最後の演説であった。彼の報告は、プロレタリア独裁(ディクタトゥーラ)をめざす資本主義とのたたかいをロシア共産党の経験にもとづいてまなび、この経験を自国の具体的な条件に創造的に適用せよという、すべての兄弟党の共産党にのこした遺言ともいうべきものであった。大会は、ソヴェト・ロシアが世界のプロレタリアートにとって、歴史的な革命的経験のもっとも豊富な宝庫である、と強調した。

国際情勢を分析して、大会は、世界経済恐慌が激化し、失業が増大し、労働者階級の獲得物に資本が世界的な規模で組織された攻勢をくわえていることを確認した。資本家は、なによりもまず労働者の賃金と生活水準全体を引き下げようとしていた。すべての国のプロレタリアートは、守勢に移らざるをえなかった。

資本の圧迫は、労働者のあいだに、自然発生的な統一気運をおこさせ、大衆を共産主義者に接近させた。大会は、統一戦線戦術にもとづいて労働者階級の多数者を味方に獲得することが共産党の基本的任務である、とかさねて指摘した。労働者統一戦線とは、社会民主主義者、無政府主

義者、サンディカリストその他に追随している者をもふくめて、資本主義とたたかう全労働者の統一であると解されていた。

大会は、ヴェルサイユ体制の不安定なこと、帝国主義者間の対立が激化していること、すべての資本主義国で軍事化がつよまっていることを指摘した。大会はまた、資本主義の内的法則が抑えようのない勢いで新しい世界的な紛争にみちびくことを強調し、各国共産党に、帝国主義戦争の危険と、とくにソヴェトの国にたいする戦争の脅威とたたかうよう訴えた。

4　ヴェ・イ・レーニンの最後の論文と手紙。レーニンによる革命理論、ソ連邦に社会主義を建設する計画、党学説の発展

一九二二年一一月、ソヴェト国民は十月革命五周年を迎えた。ソヴェト国家の対外的な政治的立場が強固になり、経済的な成果があがったことは、党とソヴェト国民、外国の友人をよろこばせた。しかし、このよろこびも、レーニンの病気でくもらされた。多年の、全力をつくした、大大的な活動が、ヴラヂーミル・イリイチの健康をそこなっていた。エス・エル派の婦人テロリストの魔手から受けた痛手の結果も、あらわれていた。

一九二二年の秋、病状は悪化した。病気からいくらか回復して、レーニンは、一一月二〇日、モスクワ・ソヴェトの代議員をまえにして演説をおこなった。新経済政策にもとづく国の一年半の発展の結果を論じて、彼はこう言った。この過渡期は困難なものではあるが、困難は切り抜け

られるであろう。党はすでに、一定の成果をあげている。「われわれは社会主義を日常生活に引きいれた」。レーニンは、「ネップのロシアは社会主義のロシアになるであろう」（全集、第三三巻、四六二ページ）という、固い確信をのべて、盛大な拍手のなかで、その演説をおわった。
これは、党とソヴェト国民の指導者がおこなった、最後の公開演説であった。一九二二年一二月には、これまでよりはげしい病気の発作がはじまった。
一九二三年の一月から二月にかけて、レーニンは、最後の諸論文『日記の数ページ』、『協同組合について』、『われわれは労農監督部をどう改組すべきか』、『わが革命について』、『量はすくなくても、質のよいものを』と、手紙『大会への手紙』、『ゴスプランに立法機能をあたえることについて』、『少数民族の問題または「自治共和国化」の問題によせて』を口述した。これらの論文と手紙は、レーニンが党と世界共産主義運動にのこした、一種の政治的な遺言であった。
これらの論文や十月革命後の著作のなかで、レーニンは、世界革命運動の経験を概括し、新しい歴史的時代の特徴をしめし、この時代の特殊性を明らかにし、国際舞台での勢力配置と世界革命の発展の展望をしめし、マルクス主義理論を重要な結論と命題で充実させた。
十月社会主義大革命いらい、人類が資本主義から社会主義に移っていく時代がはじまった。世界は、資本主義制度と社会主義制度の二つの制度に分裂した。国際舞台には、新しい力関係が生じた。最初の社会主義国家の出現、労働運動と民族解放運動の発展の結果、社会主義思想の影響は全世界で増大した。これら三つの勢力は、一つの流れに合流して、帝国主義体制をむしばみ、ぐらつかせていた。二つの対立する社会制度の闘争、帝国主義に反対して、社会進歩と社会主義的社会改革のためにたたかうすべての勢力の積極的な行動は、歴史発展の主内容となり、主な特

質となった。

十月革命は、世界革命の端緒であった。人類の資本主義から社会主義への過渡は一時代をなし、このあいだに個々の国あるいは一群の国が徐々に資本主義から離脱して、社会主義の道にふみだす。どの国が、いつ、どういう順序で資本主義から離脱するかを、予言することはできない。革命は注文でおこなわれるものではない。革命を外部からむりじいするわけにはいかない。革命は、各国の内部の階級矛盾が激化した結果としておきるものである。

解放運動の先頭をすすんでいるのは、国際プロレタリアートである。労働者階級は、何十年も資本主義にたいする闘争をおこない、自分のまわりに勤労者を結集してきた。労働者階級がはじめて、被抑圧民族をまもって反帝闘争の旗をかかげたのである。十月革命の勝利とともに、国際プロレタリアートは新しい歴史的段階に達した。国際プロレタリアートは、社会主義国家という確実な基盤をもつようになった。資本主義諸国には共産党がうまれ、共産主義インタナショナルに統合された。そして後者は、革命的国際プロレタリアートの指導力となった。これらの共産党は、ソヴェトの国にたいする新たな干渉を未然に防ぐことを、最大の責務と考えていた。

革命的プロレタリアートは、マルクス主義の旗のもとに帝国主義の本拠である先進資本主義諸国で闘争をおこなっており、これらの国のブルジョアジーを倒さずには帝国主義の支配を片づけることができないことを自覚している。共産党は二重の任務に当面していた。自分の隊列を固めること、大衆に革命の準備をととのえさせること、がそれである。共産党を強固にし、その戦闘力をたかめるには、——とレーニンはおしえている——「左」右の日和見主義と断固としてたたかい、不屈の指導的幹部をきたえあげ、マルクス主義理論とボリシェヴィズムの経験とを創造的

に適用することを習得することが必要である。共産党にはプロレタリアートの前衛が統合されている。だが前衛だけで勝利することはできない。社会革命の最大の推進力をなすものは、労働者階級と勤労農民の同盟である。党の使命は、彼らの闘争を指導することである。社会民主党の右翼指導者を暴露し、大衆のあいだで不断の活動をおこない、大衆自身の経験にもとづいて彼らをおしえる必要がある。党は、社会活動のすべての形態と闘争手段に習熟し、これらのものが急速に交替するのに応じる用意をつねにととのえていなければならない。「大衆をほんとうの、決定的な、最後の、偉大な革命的闘争へみちびいていく具体的な道、あるいは事件の個々の転換点を見いだし、探りだし、正確にさだめるすべを知ること――まさにここに西ヨーロッパとアメリカの今日の共産主義の主要な任務がある」（全集、第三一巻、八六ページ）。

植民地・従属国の被抑圧民族の民族解放運動は、世界解放運動の、反帝闘争の積極的な力となった。この運動は、世界革命で重要な役割を演じるにちがいない。だがこの運動の成功は――とレーニンは言っている――、国際プロレタリアートに支援されるばあいにのみ、「国際帝国主義にたいするわがソヴェト共和国の革命的闘争と直接に結びつく」（全集、第三〇巻、一四二ページ）ばあいにのみ可能である。はじまった時代の条件に応じて、レーニンは解放運動の国際的スローガンである「万国のプロレタリアと被抑圧民族、団結せよ」を基礎づけた。

被抑圧民族の民族解放運動には、一般民主主義的運動としてはじまる可能性がある。だがレーニンは、この運動が、最初は帝国主義からの民族解放を目標にしていても、資本主義一般に反対するものになるだろうという確信を表明している。後進国の大多数では前資本主義的諸関係が支配し、農民が圧倒的で、プロレタリアートはほとんどいなかった。では、これらの国の革命の展

望は、どんなものだろうか？　封建的な関係が優勢であった、それどころか家父長制的・氏族的関係が優勢であった中央アジアのソヴェト諸共和国の経験は、農民大衆がソヴェト組織の思想を首尾よく摂取して、社会主義的な発展の道にふみだしたことをしめした。ここから、後進国の人民のまえには、資本主義をとおらずに、社会主義に移っていく展望がひらかれている、という結論が出てきた。他の国々の勝利したプロレタリアートの援助をえて、彼らは「一定の発展局面を経て、資本主義的発展段階をとおらずに、共産主義へ移ることができる」とレーニンは言っている（全集、第三一巻、二三七ページ）。

東洋諸国にとって重大事件だったのは、これらの国に、共産主義組織が出現してコミンテルンに加入したことであった。レーニンは、これらの国の共産主義者に、小ブルジョア民族主義におちいらないよう警告し、社会主義的国際主義の本質を彼らに説明し、マルクス主義を創造的に習得することをおしえ、また彼らの闘争を国際プロレタリアートの共同の闘争と融合させ、「ソヴェト・ロシアと、すべての民族解放運動および植民地解放運動とのもっとも緊密な同盟」（同、一三八ページ）をめざすように、大衆のあいだでの活動を組織するよう呼びかけた。

世界帝国主義との闘争の主な負担は、ソヴェトの国にかかっていた。最初の社会主義国家と帝国主義諸国家との矛盾が新しい時代の基本矛盾になった。世界の政治情勢全体は――とレーニンは指摘している――この中心点のまわりに集中していた。国際プロレタリアートの生みの子であるソヴェトの国は、世界の全革命勢力のとりでになった。諸国人民は、事態の歩みによって、ソヴェトの国を、すべての国の先進的な労働者の運動と民族解放運動全体を自分のまわりにあつめている重心とみるのを常とするようになった。すべての国の勤労者は、ソヴェトの国の労働者と

農民が自分たちと共同の事業をおこなっていること、社会主義への道をひらき、全人類のために新しい社会の手本をつくっていることを理解した。偉大な国際主義者であるレーニンは、われわれは「自分自身のために活動しているだけでなく、国際革命のためにも活動している」と言っている（全集、第三二巻、五一二ページ）。

レーニンの革命理論のなかで中心的な地位を占めていたのは、ソ連邦における社会主義の前途の問題であった。レーニンは、最後の諸論文と演説のなかで、この問題をくわしく解明した。社会主義建設の主眼は、大工業、とくに社会主義の経済的基盤である重工業の発展である、とレーニンは書いている。彼は、党に国の工業化の課題を負わせ、この課題をはたすにはどうすべきかを指示している——

「わが国家の経済をできるかぎり節約することによって、われわれの機械制大工業を発展させ、電化、水圧利用泥炭採取を発展させ、ヴォルホフ河水力発電所建設工事その他を建設しとげるために、どんな零細な貯蓄でも確保できるようにつとめること。

ここに、そしてここにだけ、われわれの望みの綱があるであろう」（全集、第三三巻、五二三—五二四ページ）。

プロレタリアートは、農民にたいする指導権を維持し、農民を社会主義建設に引きいれてはじめて、自分の基本的な任務をはたすことができる。レーニンは、労働者階級と勤労農民の同盟を強固にすることを、ソ連邦で社会主義を建設するための決定的な条件の一つであると考えていた。彼は、農民を社会主義建設に引きいれる道は協同組合であると考えていた。資本主義のもとでは、協同組合は、資本主義的な性格をおびており、「集団的な資本主義的施設である」。権力が

プロレタリアートの手にあり、プロレタリアートと農民の同盟や労働者階級の指導権が確保され、土地もふくめて、基本的な生産手段がすべて国家の手ににぎられているソヴェト制度のもとでは、協同組合は社会主義的企業になる。協同組合は、農民を大きな集団に統合する、もっとも手頃な形態である。協同組合では、農民の私的・個人的な利益と全社会の利益とが組み合わされている。

「私的利益・私的商業の利益と国家によるこの利益の監視および統制とをどの程度に組み合わせるべきか、私的利益をどの程度に公共の利益に従わせるべきかは」とレーニンは書いている。「以前には実に多くの社会主義者のつまずきの石となったが、われわれはいまではこの度合いを見いだしている」（全集、第三三巻、四八八ページ）。

小農民的生産を協同組合化することは、プロレタリアートが権力を獲得したのちの、もっとも困難な課題であった。この課題は、農民大衆にたいする国家の大きな援助があり、彼らが積極的に参加するばあいにはじめて、解決することができる。農民を協同組合に統合することは、自由意志の原則にもとづいておこなわなければならず、けっして行政的手段によってはならない。レーニンはこう書いている。国の住民が協同組合に組織されるならば、それは開化した協同組合員の組織となるであろう。ところで、プロレタリア国家では、生産手段の社会的所有のもとでは、このような制度は社会主義の制度である、と。

協同組合だけが農民を社会主義の道にうつすことができるという、レーニンの教えは、マルクス主義を新しい状況のもとで創造的に発展させたものであった。レーニンは農村における社会主義建設のはっきりした見とおしをたてた。

レーニンは、およそ社会主義を建設するうえで、文化革命が巨大な意義をもつことをみとめていた。彼はこう指摘している。党とソヴェト権力は、全住民を読み書きのできるようにしなければならない。この目的で、文化・啓蒙の後援組織を工場労働者でつくり、農民の文化的向上と政治的啓蒙について彼らを援助するために、労働者を系統的に農村に派遣する必要がある、と。

レーニンは、最後の諸論文と手紙のなかで、ソヴェト国家は社会主義建設の武器であって、たえずこの国家を改善し、強化していかなければならない、とあらためて強調した。レーニンは、労農監督部と中央統制委員会とを合同し、この合同機関に、国家機関をできるだけ縮小し、一新し、金のかからないものにするうえで広範な権限をあたえるよう提案した。党中央委員会も、両者の合同から利益を得るであろう、なぜなら、中央統制委員会―労農監督部をつうじて、中央委員会と大衆とのむすびつきがいっそう固くなり、中央委員会がいっそう事情につうじるようになり、すべての問題をこれまでより正しく解決するようになるであろうから。「わが中央委員会内で、純個人的な事情や偶発的な事情の影響が減り、したがって分裂の危険が少なくなるだろうということも、利点の一つにかぞえなければならない」とレーニンは書いている（同、五〇六ページ）。

レーニンが、なによりも心をくばっていたのは、党の統一と一致団結を維持することであった。彼の希望は、分派とグループを厳禁している、ロシア共産党（ボ）第一〇回大会の決定を党がつねにおぼえていることであった。レーニンはこう言っている。「もしわれわれがわが党の統一を維持強化するなら、もしわれわれが国際的な困難を、今後もこれまでと同様にりっぱに切りぬけ

ていくなら、もしわれわれが今日の条件からいま絶対の必然性で生じてくる諸任務の解決に全力をそそぐなら、われわれがこれらの困難を切りぬけるであろうということは、疑いない」(全集、第三三巻、二六三―二六四ページ)。

レーニンは国際情勢をもくわしく論じている。ソヴェト国家は、世界ブルジョアジーの襲撃から自国の独立した存立を守りぬく力を十分もっているであろうか、ソヴェト国は社会主義の勝利を達成することができるであろうか、と。

国際情勢の科学的な分析と社会発展の客観的な合法則性にもとづいて、レーニンは、これらの問題に肯定的な解答をあたえた。

帝国主義者の陣営には、統一と完全な一致はありえない。なぜなら、彼らは利潤をもとめ世界市場の支配をもとめて、かならずなぐりあいをするようになるからである。これに反して、ソ連邦の国際政策の目標は、平和のためのたたかいであり、互恵の条件で資本主義国家と実務的な協定をむすぶためのたたかいである。レーニンはこう言っている。われわれは、帝国主義者の挑発やおどかしに乗らずに、しっかりと舵をにぎって、忍耐心と不撓不屈さを発揮し、独自の道をすすまなければならない。

世界プロレタリアートの勝利はのびのびになっているけれども、この現象は一時的なものである。資本主義諸国の敵対する階級のあいだの「平和」は外見的なものにすぎない。実際には、たえまない階級闘争がおこなわれていて、それがあるときは鳴りをしずめ、あるときは激化する。階級闘争の激化することは避けられないし、それとおなじように、プロレタリアートの勝利も避けられない。

民族解放運動がつよまることも、避けられない。植民地人民の解放闘争は、資本主義の基礎をゆすぶり、資本主義の力をよわめるだろう。したがって、「世界的闘争の最後の決着がどうなるかについては、いささかの疑問もありえない。この意味で、社会主義の最後の勝利は完全にまた無条件に保障されている」、とレーニンは書いている（同、五二三ページ）。

十月革命後の天才的な著作のなかで、とくに最後の論文と手紙のなかで、レーニンは、ソ連邦に社会主義を建設する計画を基礎づけ、説明した。レーニンの計画の基本命題は、つぎの点に帰着する。

一　ソヴェトの国には、完全な社会主義社会を建設するのに必要かつ十分なものが全部そろっている。党の主な任務は、工業、とくに重工業を復活し発展させ、国を電化し、国民経済全体をつうじて労働生産性を引き上げることである。社会主義の物質的・技術的基盤をつくりだし、ソヴェト国家の国防力をたかめるためには、国を工業化し、国の技術的・経済的立遅れを一掃しなければならない。

二　労働者階級は、勤労農民を社会主義建設に引きいれ、勤労農民がばらばらな個人経営を大規模な社会化された経営に改造するのを、たすけなければならない。農民を社会主義建設に参加させる、もっともよい形態は協同組合である。党は、農民が農村で協同組合制度をつくりあげるのをたすけなければならない。この制度をつくりだすには、農民が自身の経験にもとづいて、集団的形態の長所を納得し、自分で、強制されずに、よろこんで協同組合の道をとるようにするために、徐々に一歩一歩すすんでいかなければならない。農民が集団的な経営形態にうつっていく必要を納得するようになれば、彼らが社会主義へすすんでいく速度ははやくなるであろう。一方、

国を電化し、重工業を創出すれば、農村に機械技術を十分にいきわたらせることができるであろう。

三　社会主義が勝利するためには、文化革命をおこなわなければならない。その目標は、ソヴェト社会に社会主義文化、マルクス主義世界観を確立することである。社会主義文化は人々の思いつきでもないし、なにもない場所に出現するものでもない。それは、人類がこれまでの時代に蓄積した知識の貯えの発展の合法則的な結果である。プロレタリアートの利害と文化を言いあらわすものはマルクス主義であるが、このマルクス主義は、人類の知識の総和のなかからうまれ、人類の知識という強固な基礎をよりどころにしている。マルクス主義は「ブルジョア時代のきわめて貴重な成果をけっして拒否しないどころか、人類の思想と文化の二千年以上におよぶ発展における価値あるものをすべて摂取し加工したからこそ」、プロレタリアートのイデオロギーとして世界的意義をもつようになったのである、とレーニンはのべている（全集、第三一巻、三一六ページ）。プロレタリア文化は、人類の知識のあらゆる貴重な貯えをよりどころとしながらも、これを批判的に理解して、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）の実地の経験によってこれを発展させ、共産主義の思想をこれに吹きこむことを使命としている。課題は、住民の文盲状態を一掃し、青少年の教育をおこない、新しいインテリゲンツィアの基幹活動家をそだて、ソヴェト国民の政治教育を保障するとともに、彼らに教養をあたえるだけでなく、マルクス主義世界観の精神に立ち、共産主義の精神に立って彼らを教育することでもある。

四　社会主義を建設する基本的な条件はプロレタリアートの独裁である。これを維持し強化するために、党は、共産党を先頭とする労働者階級が指導的な役割をはたす、労働者と農民の

同盟をたえず強固にしていかなければならない。党は、この同盟を分裂させる恐れのある事情を注意ぶかく見まもり、時をうつさず、それを一掃しなければならない。そうすればソヴェト国家は不動のものとなるだろう。労働者階級の手ににぎられている国家は、社会主義建設の武器である。国家機関の役割をたかめるためにも、国家機関の維持費を節約するためにも、国家機関を縮小して最小限にし、官僚化した分子や異分子を国家機関から追いだし、勤労者出身の新鋭勢力で国家機関を一新しなければならない。勤労者の協力にもとづいて、国家機関は改善され、新しい社会制度にふさわしいものになるであろう。

五　社会主義を建設することは、ソ連邦諸民族の確固たる友好があるばあいにのみ可能である。党は、後進諸民族の事実上の不平等の急速な根絶を促進し、すべての民族を国際主義と友誼的統一の精神に立って教育し、各民族の民族感情に注意ぶかい態度をとらなければならない。レーニンはこう書いている。「プロレタリアにとってはなにが重要か？　プロレタリアにとって重要であるばかりか、ぜひとも必要なことは、プロレタリア階級闘争にたいする異民族の最大限の信頼を確保することである。このためにはなにが必要か？　このためには、異民族にたいするその態度により、その譲歩によってなんとかしてあの不信や疑惑をとりのぞき、歴史上の過去に異民族が『強大』民族からこうむった侮辱をつぐなうことが必要である」（全集、第三六巻、七一九ページ）。

六　ソ連邦に社会主義社会を建設することは、国際的な見地からみても完全に保障されている。資本主義世界では、階級対立と国家間の対立が激化するであろう。プロレタリアートとブルジョアジーのあいだの階級戦争がつよまることは、避けられない。植民地と半植民地で、とくに東方

諸国で発展しつつある民族解放運動は、ますます帝国主義者の支配を掘りくずすであろう。すべてこうしたことは、いっしょになって、ますます資本主義の基礎をゆるがすようになるであろう。ソヴェト制度をなくそうとする帝国主義者のどんなくわだても、失敗するだろう。

七　党とソヴェト政府は、賢明な対外政策をとって、ブルジョア国家との軍事的衝突を未然にふせぐようにつとめなければならない。平和のために、また社会主義と資本主義との平和共存と経済競争とのために、ねばりづよくたたかうこと――これが、党の確固たる政策でなければならない。レーニンは、この競争では社会主義が勝利をおさめるであろう、「社会主義は巨大な力をそなえている、人類はいまや新しい、非常にかがやかしい展望をひらいた発展段階にうつった」(全集、第三三巻、五二二ページ)という、不動の確信を表明した。それと同時にレーニンは、国防を極力強化し、侵略者が攻撃してきたばあいにはこれに徹底的な反撃をくわえるために、陸海軍の戦闘能力をたかめるよう、ソヴェト国民にねばりづよく訴えた。

八　社会主義建設の指導力は、労働者階級とすべての勤労者の利害を代表し、大衆と固く結びついた共産党である。党は国家と勤労者のすべての組織とを指導し、経済と文化の発展が社会主義の道をすすむのを指導し、国防を組織立て、ソヴェト権力の対外政策の原則と方式を作りあげ、社会主義建設に勤労者をふるい立たせる。

以上がレーニンの社会主義建設計画の基本命題であり、ソ連邦でこの計画を実現する条件である。

レーニンの計画は、第八回大会で採択された党綱領を遂行するための闘争で、社会主義のための闘争で最強の理論的および実践的武器となった。この計画は、労働者と農民を労働の偉業にむ

かってふるい立たせた。

十月革命が勝利していらい、レーニンは、ソヴェト国家の強化のためにたたかうとともに、党の当面する新しい課題に多大の注意をはらってきた。一連の理論的著作や発言のなかで、また党の実践活動をつうじて、彼は、党が社会主義国家を指導する時期の党についての学説をあらゆる面で発展させた。

レーニンはこう教えている。十月革命後、共産党は、ソヴェト社会を指導し、その方向をさだめる力になった。「プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）は、共産党をつうじるよりほかには不可能である」と彼は強調した（全集、第三二巻、二〇八ページ）。党は、科学上の知識にもとづき、マルクス主義にもとづいて、ソヴェト社会の発展を指導する。党は社会改造のプログラムを立て、社会発展の客観的必要と社会主義建設の課題とにふさわしい、党の基本方針とソヴェト国家の政策とをさだめる。

レーニンはこう指摘している。社会主義の建設に成功するためには、党の基幹活動家は、理論的素養が高くなければならない。彼らは、社会主義・共産主義のための闘争の新しい条件にマルクス主義理論を適用するすべを知っていなければならない。共産主義者は、マルクス主義はドグマではなくて、行動の指針であること、マルクス主義は永遠に生きいきとした、発展し充実していく学説であることをいつも覚えていなければならない。だから党は、新しい歴史的情勢に応じて新しい理論的命題を大胆にかかげなければならない。共産党は、革新者の党であり、党は新しいものにたいする感覚を持ち前とし、また社会発展の法則につうじているので、先見の能力があり、社会主義・共産主義への社会の前進の道を指ししめす。

党は――とレーニンは言っている――、マルクス主義を修正して、党を革命の道から改良主義の道あるいは冒険主義の道に押しやろうとするあらゆる企てに徹底的な反撃をくわえなければならない。党が「左」右いずれであれ、修正主義者が自分の隊列内にいるのを大目に見るなら、社会主義を順調に建設することはできないし、党そのものが変質する恐れがある。マルクス主義の純潔をまもる闘争は、党の生活と活動の必須条件である。

レーニンはこう教えている。支配政党にとっては、その隊列の思想的および組織的統一が特別の重要性をもつようになる。党内では分派活動は許されない。なぜならそれは、党の意志と行動の統一をかならずよわめることになるからである。党の統一は、党を中心とする労働者階級と全勤労者の団結の基礎であり、国家の力と安定性の、社会主義の勝利の最重要条件である。党内に設置された統制委員会は、統一の強化を助長しなければならない。レーニンは、これらの党機関が非常に重要であると考えていた。彼はこう書いている。「わが中央委員会と中央統制委員会の主要な任務は、わが党全体の任務もそうであるが、分裂の原因となるおそれのある事情に注意ぶかく気をつけ、そういう事情を未然にふせぐことである」（全集、第三三巻、五〇六ページ）。支配政党にとっては、指導される者にとっても指導者にとっても同一な、厳重な規律がとくに必要である。「プロレタリアートの党の鉄の規律をいくらかでもよわめようとする（とくにプロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）の時期に）者は、事実上プロレタリアートにそむいてブルジョアジーをたすけるものである」とレーニンは言っている（全集、第三一巻、三〇ページ）。

レーニンはこう再三強調している。自分の指導的な役割をはたし、プロレタリア独裁（ディクタトゥーラ）期の多種多様で複雑な課題を解決し、社会主義建設上の至大の困難に打ち勝つことが党にできるのは、

すべての活動で集団性の原則をかならず厳守するばあいだけである。この集団性の手本を中央委員会はしめさなければならない、と。第九回党大会でレーニンは言っている。「誤解を除くためにはじめに強調しておかなければならないが、組織局または政治局あるいは中央委員会総会で採択された、中央委員会の合議による決定だけが、もっぱらこのような決定だけが、党中央委員会書記によって実行に移されたのであった。こうしなければ、中央委員会の活動が正しく進行するわけにはいかない」（全集、第三〇巻、四五九ページ）。

レーニンはこう教えている。党の方針の立案は、最大の重要性をもっている。党は、それと同時に、この方針の実行をも保障しなければならない。それなしには、党の方針は宙に浮いてしまう。方針の実行を保障するものは党員大衆である。彼らを組織するものは党機関である。党機関と党員大衆は不可分の一体をなしている。党の指導機関は、党の優秀な基幹活動家によって補充される。基幹活動家の正しい選抜、育成、訓練なしには、彼らの正しい配置と点検、彼らにたいする注意ぶかい態度なしには、党は、社会主義国家で指導的な役割をはたすことはできない。「どんな政策でも、それが遂行されるには、任命や更迭となって現われないわけにはいかない」とレーニンは言っている（同、四五八ページ）。党機関の名誉をきずつけることは許されない、それは党を解体させるおそれがあり、党の武装を解除する。

社会主義の建設期にとくに重要な意義をもつようになるのは、党の隊列の純潔に気をくばることである。レーニンは、つねに、とくにソヴェトの条件のもとでは、党が社会的構成に深い注意をはらうこと、党が主として労働者を入党させて大きくなること、非プロレタリア階級や層の出身者の入党を制限することを要求した。支配政党には——とレーニンは言っている——出世主義

者、冒険主義者、ぺてん師、いかさま師がもぐりこもうとするものである。だから新党員の採用はきわめて制限され、きわめて慎重でなければならない。党にはいりこんだ異分子は組織的に取り除かなければならない。こうした粛清によって――とレーニンは言っている――「党は、階級の前衛として以前よりもはるかに強力になり……多くの困難や危険のさなかにあっていっそうよく階級を勝利に導くことのできる前衛となるであろう」(全集、第三三巻、一一五ページ)。

レーニンはこう指摘している。国家を統治し、社会主義を建設することは、まったく新しい、誰もまだためしてみたことのないものである。だから党の実践活動にあれこれの誤り、欠陥、失敗がおこることはありうる。党は、いち早く自分の誤りと欠陥をただすべきで、これに口をつぐんでいてはならない。誤りを公然とみとめることは、大衆のあいだでの党の声望をたかめるだけである。「われわれが苦しいが厳然とした真実を率直にかたることをおそれないならば、われわれはありとあらゆる困難に打ち勝つことを学びとるであろうし、かならず、無条件にそれを学びとるであろう」とレーニンは言っている(同、八六ページ)。

レーニンは、党内で批判と自己批判を極力発展させるよう、呼びかけた。国政のかじをにぎっているのが共産党だけで、その他の党は、革命の過程で破産した者として歴史の舞台から消えていったときには、このことは特に必要である。こういう条件のもとでは党機関と国家機関の個々の環が慢心し、官僚主義に毒される危険がつよまる。だから批判と自己批判が、空気のように必要である。批判と自己批判がくりひろげられる場合にだけ、いち早く欠陥と誤りをあばき出して一掃し、党にたいする勤労大衆の確固不動の信頼を得るようになり、彼らを党を中心に結集することができる。

レーニンは、社会主義の建設における成功は、党が勤労大衆と固く結びついているばあいにだけ保障されるだろう、と教えている。彼は、共産主義者は大衆を教えるだけでなく、また大衆に学び、人民の英知を吸収しなければならない。ここに党の強みがある、と言っている。レーニンは、社会主義へ移りつつある支配政党にとって「もっとも大きく、もっとも恐ろしい危険の一つは、大衆から切り離される危険である」と指摘している（同、一九〇ページ）。党が大衆の利害を代表し、彼らの幸福に気をくばっているなら、大衆との結びつきは強固で破壊できないものとなる。人民の幸福について気をくばることは、党の最高のおきてである。党は、党の政策の正しいことを大衆に納得させることによって、彼らの信頼をかちとる。「人民大衆を説得するという任務は」とレーニンは言っている。「どんなときにもまったくなおざりにできるものではなく、逆に、それはつねに、統治上のもっとも重要な任務の一つをなすであろう」（全集、第四二巻、五四ページ）。

労働者階級が権力を獲得したのち、共産党の役割は、国際舞台でも一変した。ロシアの労働者階級は、共産主義のためにたたかう世界プロレタリアートの突撃隊となり、党は、世界共産主義運動の戦闘部隊になった。自国の社会主義建設を指導することによって、党は同時に、国際労働運動にたいする自分の国際的な責務をもはたしている。党は、党員とソヴェト国民全体をプロレタリア国際主義の精神に立って教育している。レーニンは、党が、党の隊列内にいて自分の民族的利益をプロレタリアの国際的利益に優先させる者、小ブルジョア民族主義におちいっている者を大目に見ないように警告している。

レーニンはこう指摘している。支配政党は自分の活動の水準を極力引き上げる義務を負ってい

る。党内民主主義と共産党員の自主活動をおしすすめること、党内生活の規範と原則を厳守すること、党員の思想的・政治的水準を引き上げること、大衆のあいだで幅広い教育活動をおこなうこと、国家建設、経済建設、文化建設を指導する方法を改善し、活動のスタイルを改善することがそれである。

レーニンは、新しい、高度の型の政治的指導者であり、勤労大衆の首領であり教師であった。彼の多岐にわたる党活動と国家活動はすべて、党の基幹活動家の見ならうべき手本であった。

レーニンは、大衆の実地の経験を高く評価し、ここには人民の集団的な英知が集中されている、と考えていた。「何千万という創造者の英知は」と彼は強調している。「どんなに偉大な、天才的な予見よりも、なにかはるかに高いものを創造するものである」(全集、第二六巻、四八四ページ)。人民の創造力にたいする信念、人民の行動を理解し、人民の経験を慎重に研究する能力をもっていたので、レーニンは、大衆の運動に正しい方向をあたえ、彼らの闘争を首尾よく指導することができた。彼の活動では、革命的理論と革命的実践が有機的に組み合わされていた。レーニンはこう書いている。「現在、問題はすべて実践にあること、理論が実践に転化し、実践によって生気をあたえられ、実践によって修正され、実践によって点検される歴史的瞬間がまさにやってきたこと」を理解しなければならない(同、四二二ページ)。

レーニンは、大衆を歴史的創造に引きいれることにたえず気をくばっていた。正しい指導は、「労働者階級と勤労大衆をすべての建設に、ますます広く、ますます深く引きいれる」(全集、第三三巻、一八八ページ)能力なしにはありえないと、彼は教えている。レーニンの活動は、大衆

のあいだでどのように活動する必要があるかの模範である。彼は大衆と無数の糸でむすばれていた。多くの労働者代表、農民代表、あらゆる民族や職業に属する人々が彼に疑問と提案を持ち出し、自分の考えや願いを聞いてもらった。大衆との交流から自分の得たおびただしい事実を、彼は慎重に秤にかけ、概括した。レーニンは大衆の創造的イニシアティヴを目ざめさせ、これに方向をあたえるすべを知っていた。

レーニンのなかには創造精神がかがやいていた。彼は、未来に属する新しいものを見てとる能力をそなえていた。彼は、新しいものの芽生えを注意ぶかく研究し、断固としてそれを支持し、この芽生えの世話をすることを党と国家のもっとも重要な責務と考えていた。

レーニンは、党と人民の事業にたいする偉大な忠実さの模範であり、社会主義革命への献身的な奉仕の模範であった。彼は、労働者階級、全勤労者の解放のために共産主義の勝利のために自分を、自分の生涯をささげた。彼は、確固たる忠実なマルクス主義者であり、日和見主義のどんな現れも大目にみなかった。

レーニンは、信念のかたい、熱烈な革命家であるとともに、現実をありのままに見る、先見の明にとんだ、現実的な政治家であった。彼は成功にまどわされることもなかったし、失敗したからといって意気消沈することもかつてなかった。党活動家、国家活動家は、「できるだけ沈着冷静に判断し、秤にかけ、点検する能力」を持ち前としなければならない、と彼は言っている（同、一〇一ページ）。

レーニンのスタイルの特徴は、発想の大胆さ、活動における革命的進取精神である。レーニンは、国の革命的改造にとっては「真に革命的な階級の驚くべく大胆な、歴史的に偉大な、そして

ひたむきに情熱にあふれた、創意と進取の気性が必要である」と教えている（全集、第二五巻、一五七ページ）。内戦の戦闘の響きがまだなりやんでいないのに、レーニンはもう、貧しく荒廃した国を電化する大胆な計画をくり広げ、人民大衆の創造力の深い研究にもとづき、社会発展の法則の知識にもとづいた、社会主義的改造の魅力にみちた展望をえがいている。

レーニンは、革命的進取精神を指導の実務性、具体性と組み合わせ、また大衆の積極性をたかめ、自分の力にたいする信念を固めさせる、慎重な組織活動・教育活動と組み合わせるすべを知っていた。レーニンにあっては、当面の目標をも遠大な目標をも見ている革命家の発想の大胆さと気慨の高さとが、厳密に科学的で冷静な情勢判断といつも組み合わされていた。

レーニンのスタイルのきわめて重要な特徴は、政策と実践の基本問題を解決するさいの集団性である。最大の権威をもち、党の限りない信頼を得ていながらも、レーニンは、原則的な問題を集団的機関をとおさずに、単独で決定するようなことはけっしてなかった。彼は、中央委員会の問題をすべてレーニンが単独で決定していたような意見をのべた活動家をきびしくたしなめている。「君が『中央委員会は私だ』と繰りかえしている（再三）のはまちがっている。こういうことは、ひどく気が立って疲れきった状態のときにしか書けるものではない……私が中央委員会だといった、まったく許せない、まったく許せない文句を書くほどいらだつのはどうしたわけなのか？」と（全集、第四五巻、七六—七七ページ）。集団性は、委任された仕事にたいする働き手の個人的な責任をぬきにしては考えられない。集団性は、指導者とその権威の意義を低めるものではない。

レーニンは彼の個性や功績を賛美し、ほめちぎることは絶対に許さなかったし、おべっかを使

うことや提灯持ちをすることを大目に見なかった。彼は、率直さと謙虚さの模範であった。党史および十月革命史委員会（イストパルト）が未来のレーニン博物館の資料を集めることに着手したことを知ると、レーニンはそれを厳禁して、「こういうふうに私個人をいつも持ち出すことが、私にはどんなに不愉快か、諸君には想像もつかないだろう」と言っている。

レーニンは、お祭り騒ぎや空騒ぎやおしゃべりに断固として反対し、官僚主義と容赦なくたたかった。彼は「コムチヴァンストヴォ」（共産党員の高慢）、働き手の高慢をきびしく非難し、こういう連中を指導的な部署からはずすよう忠告した。

レーニンは、無原則性と偽善のあらゆる現れをきびしく非難した。原則的な政策は――と彼は言っている――もっとも正しい政策である。誠実と正直さは共産主義者のもっとも重要な資質であり、あらゆることに、まず第一に、なすべきことにたいする態度に現われなければならない。人の「言行が不一致ならば、全然なっていない。それは偽善につうじる」（全集、第一一巻、二二八ページ）。

レーニンは法律遂行の模範をしめし、他人が革命的法秩序を厳守するよう要求した。彼は自分が法律でさだめられた規則の例外とみとめられることをけっして許さなかった。

レーニンは、多くの仕事のなかから主要なものを取り出して、それに注意を集中するすべを知っていた。彼は、仕事に集中すること、はじめた仕事を最後までやりとおすことを要求した。正しい決定をくだすことは、仕事の手はじめにすぎないと考えていた。彼は、重要なことは人をたくみに選抜して監督することにあると見ていた。「人物を点検し、仕事の実際の遂行を点検するること、――いまはここに、もう一度言うが、ここに、ここにだけ、活動全体の、政策全体の重点

がある」（全集、第三三巻、一二六ページ）。レーニンにあっては、基幹活動家の選抜にあたって前面に出ていたのは、つねに彼らの政治的資質と実務上の資質であった。彼は、働き手の目的意識性、機動性、創意、問題解決に当たっての自主性、責任感を尊重し、仕事にたいする形式的な態度、怠慢、欠陥にたいする無関心を絶対に大目に見なかった。実務的な考慮と全国家的利害は、個人的なそれに優先しなければならない、と彼は言っている。

人々にたいする厳格さは、レーニンにあっては、彼らにたいする思いやりをともなっていた。彼は、勤労者の質問には並はずれて注意ぶかい態度をとった。レーニンは、同僚の暮しや日常生活に父親のように気をつけていた。ここには、「賢明な雇主が正直で有能な労働者に時としてしめすことのある利己的な思いやり」はなかった——とア・エム・ゴーリキーは書いている——「そうではない、これは、真の同志にたいする心からの気づかいであり、平等な者同志の愛情であった」（『ヴェ・イ・レーニンの思い出』、第二巻、一九六九年刊、二六六ページ）。

デミヤン・ベードヌイは、レーニンの形象をえがいて、つぎのような言葉で彼の天才、思想の明確さ、人民に由来する英知を特徴づけている。

レーニンは語る——
猫をかぶらず、利口ぶらず、
空騒ぎせず、わめきたてず、
彼を理解できないのは、分かろうとしない者だけ。
あたかもヴォルガ河のよう、広く、深く、
底の底まではっきりと見とおせる明確さ。

レーニンの言葉に別のたとえようはない。
この明確さには、偉大な天才の明確さがあり、
率直さには、人民の底しれぬ英知がひそむ。
まんまんたる大河は、はかりしれぬ威力にみち、
果てもない平野にあふれる。
堤という堤を苦もなくこえ、
その行手をとざすような力はなく、
別の河床にそらせるような力もない。

5　第一二回党大会。トロツキー主義との闘争。経済的困難の克服。ヴェ・イ・レーニンの死。レーニン記念入党アピール

ソ連邦に社会主義を建設するレーニンの計画の構想は、ロシア共産党（ボ）第一二回大会の諸決定のなかで言い表わされた。大会は約四〇万人の党員を代表して、一九二三年四月一七日から二五日までひらかれた。党員数の減少は、一九二一年から一九二二年にかけておこなわれた党粛清の結果であった。

これは、病気のためにレーニンが欠席した、十月革命後最初の大会であった。大会の議事日程には中央委員会と中央統制委員会の報告、工業の問題、民族問題、農村における租税政策の問題、

その他があった。

中央委員会の主報告についての決議のなかで、大会は、ネップが党内のもろもろの偏向の温床をつくりだしている、とくに危険で有害なのは、ソヴェト国家を労働者階級に、また党を国家に対置している偏向である、と強調した。大会は、党をレーニンの道からそらさせ、党の統一を動揺させようとする者とは、ロシア共産党（ボ）からの除名をもふくむ、断固たる闘争がつづけられるであろう、と厳重に警告した。

大会は、国家機構を改善することは党の最高の責務であり、真に社会主義的な国家機構だけが労働者と農民の確固たる同盟を保障する、と指摘した。大会は労農監督部と中央統制委員会の合同にかんする決定をおこない、現場の労働者を国家機構を改善する仕事に引きいれることを、中央統制委員会—労農監督部の義務とした。

大会は、党機関とソヴェト機関の分業の必要、経済活動家と行政活動家とがそれぞれ専門化する必要、まかされた仕事に個人が責任をもつという原則を厳守する必要を強調した。

大会は、国民経済で、また労働生産性をたかめるうえで、成功をおさめたことを指摘し、工業の発展、なによりも重工業の発展に力をそそぐよう、労働者階級に呼びかけた。なぜなら「重工業だけが真の社会主義建設の強固な土台となることができる」（『ソ連邦共産党決議集』、第二巻、四〇五ページ）からである。重工業とともに、またそれにもとづいて軽工業も急速に発展するにちがいない。大会は、工場では「息づまるような中央集権、創意の圧殺」、企業の「仕事への機械的な干渉を極力さける」よう勧告した（同、四二一ページ）。

第一二回党大会はこう強調した。経済機関の活動の主な責任は党にあり、党は、この活動の

すすめかたを決定し、点検しなければならない。「もっと経済にちかづき、経済機関にもっと多くの注意、指導、力をそそげ、――これが、党の当面のスローガンである」（同、四〇六ページ）。

工業製品の販売の組織の仕方があやまっていたために、法外な間接費と部分的な滞貨をもたらしはじめた。商業機関の末端施設網をつくって工業と農民市場とのむすびつきを確保しなければならなかった。商品の価格を調整することも必要であった。なぜなら、工業製品の価格は、農産物の価格よりもいちじるしく高かったからである。

農民の状態を楽にし、国内の商品流通をふやすために、農民から徴収されるすべての直接国税（食糧税、金納の戸数割、労働および荷馬車運搬税）と、同じくすべての地方直接税を単一の直接農業税に統合することが勧告された。おもな租税負担は、富農制限政策の現れとしてもっとも裕福な経営におわされ、一部の貧農は税を免除された。

大会では、日和見主義的分子が党をレーニンの道からそらさせようとくわだてた。トロツキーは工業のきびしい集中に賛成した。すでに大会直前に、彼は、欠損をだしながら操業しているという理由で、巨大工場――プチロフ工場、ブリヤンスク工場その他――を閉鎖するように提案していた。これは、重工業に大損害をあたえ、労働者を党に敵対させることになったであろう。党中央委員会は、断固としてトロツキーの提案をしりぞけ、彼の提案を採用することはソヴェト共和国の政治的敗北を意味するであろう、と指摘した。第一二回党大会は、中央委員会の方針を確認した。

トロツキーは、第一二回大会のためにつくったテーゼのなかで、「工業独裁」の確立というス

ローガンを持ち出した。彼の口にかかるとこのスローガンは、国民経済で工業が指導的役割をはたすのを強調すること、あるいは生産手段の生産を消費物資の生産よりも優先的に発展させることを意味するものではなかった。このスローガンは、トロッキーの理解しているところでは、農民を搾取して工業を発展させることを意味していた。このような方針は労働者と農民の同盟を決裂させ、ソヴェト制度を破滅させることになったであろう。大会は、現段階では農業が国の経済全体にとってもっとも重要な意義をもっている、と強調した。

原則的な重要性をもっていたのは、外国貿易の独占についての大会の決定であった。この問題は、一年間党中央委員会によって研究され、再三討議されてきた。ソコリニコフとブハーリンは、外国貿易の独占の部分的廃止を主張していた。党中央委員の大多数もこの独占を緩和することに傾いていた。レーニンは、ソコリニコフとブハーリンに、また他の中央委員たちの動揺にきっぱり反対した。大会は、外国貿易の独占の問題についてのレーニンの方針を正しいとみとめ、独占の確固不動なことを確認し、ソコリニコフとブハーリンの日和見主義的見解を断固として非難した。クラシンその他は、借款を受けることができさえすれば、外国の資本家にたいする大幅な経済的譲歩に応じるよう提案した。大会はこれらの誤った提案を否決した。

大会は、イ・ヴェ・スターリンの民族問題についての報告をきき、諸民族の事実上の不平等の一掃を早めることに賛成した。ロシアのプロレタリアートは、ソ連邦のおくれた諸民族の経済的・文化的な発展にたいする援助をつよめなければならないとされた。

ネップの環境のもとでは、ブルジョア民族主義が活気づいた。ロシア共産党(ボ)第一二回大会は、第一〇回大会とおなじように、主要な危険としての大ロシア人的排外主義とも、地方的民

族主義とも断固としてたたかうよう、ふたたび党に呼びかけた。後者は、グルジアではとくにはっきりと現われていた。国家機関内で、大ロシア人的排外主義の風習を根絶しなければならなかった。それは民族諸共和国の必要や要求にたいする高慢で軽蔑的な、無関心で官僚主義的な態度に現われていた。大会は、グルジアの偏向者（ムジヴァニ、オクジャヴァその他）を断固として非難した。彼らは、グルジアで大国的排外主義者として振舞い、ザカフカース連邦をつくることに反対していた。

第一二回党大会のあと、国民経済の指導は改善された。農業と工業の復旧はすすんだ。作付面積は拡大し、工業生産高の年間増加率は向上した。しかし、大きな欠陥もあった。労働生産性と労働者の賃金は、戦前の水準より低かった。国営商業組織と協同組合商業組織の仕事ぶりはわるかった。工業製品価格と農産物価格のひらきをなくせという第一二回大会の指令は、実行されていなかった。価格のひらき（「鋏状価格差」）は、一九二三年の秋には大幅なものになった。その結果、ルーブルの相場の変動がひどくなり、その価値は下落した。

こういうことはみな、労働者と農民の生活状態や、彼らの購買力にわるい影響をおよぼした。倉庫には工業製品が売れのこっていた。農民は工業製品を必要としていたが、価格が高いので買えなかった。このような価格政策は、農村で不満を買った。滞貨の結果賃金の支払がとどこおったので、労働者も不満であった。一部の企業では、ストライキがおこるにいたった。

党中央委員会とソヴェト政府は、ただちに日常消費物資の価格を引き下げ、農産物の価格を引き上げた。一九二二年一〇月に制定されたチェルヴォーネツの商品流通への浸透がすすみ、チェルヴォーネツは、強固で安定した通貨となった。労働者に賃金を定期的に支払う手はずがととの

えられ、また商業を整備し、商業から個人商人を駆逐し、投機と断固としてたたかう措置が立てられた。農民の経営を発展させるために、農民にたいする低利の信用が設定された。これは貧農の状態を楽にするのをたすけた。

経済面に各種の困難が生じているとき、党内では、またもや反レーニン的な分子が活気づいた。トロツキーは、党の指導者レーニンが戦列からはなれ、病気が重いのに乗じて、ふたたび党にたいしてたたかいをはじめた。彼は、国内に生じていた困難が自分のもくろみを実現するのに有利であると判断した。そのもくろみとは、党の指導権を乗取り、結局は資本主義の復活へみちびくような方針を実行することであった。

一九二三年一〇月はじめ、トロツキーは、中央委員会に手紙をおくり、そのなかで中央委員会の活動を中傷した。政治局の会議や中央委員会総会の会議で問題を討議することによって党内の欠陥をとりのぞこうと努力するのが普通のやり方であるのに、トロツキーは、そうせずに党中央委員会とのたたかいに自分の支持者を全部動員した。トロツキーの手紙につづいて、トロツキー派、「民主主義的中央集権派」が署名し、「共産党左派」と「労働者反対派」との残党が署名した四六名の声明書が中央委員会にとどいた。彼らのあいだには、中央委員も何名かいた。彼らは、党機関が党とすりかわっていると中傷し、共産党員を党機関にけしかけようとした。トロツキー派その他の日和見主義者は、分派とグループをつくる自由をふたたび要求した。そうすることで、彼らは、第一〇回党大会の分派禁止の決定を廃止させるつもりでいたし、党が分裂すればいいというメンシェヴィキ、エス・エル、新ブルジョアジーの期待を代弁していたのである。

トロツキー派は、トロツキーの手紙と四六名の声明書を地方の党組織にばらまいた。

党内事情の問題は、中央委員会と中央統制委員会の十月合同総会で、一〇の最大級の党組織——ペトログラート、モスクワ、ハリコフその他の党組織——の代表と共同で審議された。総会は、トロツキーと四六名の言動を、政治的にあやまったものであり、「党の統一に打撃をあたえるおそれがあり、党の危機をつくりだす分派的言動の性格」をおびている、と非難した。(『ソ連邦共産党決議集』、第二巻、四九六ページ)

総会の決定は、たとえばヴェ・ア・アントノフ＝オフセエンコ、ア・エス・ブブノフその他のような、反対派に同調した者の一部の者の反省を促し、彼らはのちにはトロツキズムとの闘争をおこなった。だが総会の決定は、トロツキーには感化をおよぼさなかった。彼は、小冊子『新しい進路』を発表し、そのなかで党の指導部は変質しているといって非難し、党の古い幹部を第二インタナショナルの日和見主義的指導者になぞらえ、しっかりした党幹部に、党員としては未熟な青年、とくに学生を対置し、これらの青年にへつらって、彼らを「党のバロメーター」と呼んだ。

トロツキーとトロツキー派は、工場細胞や学内細胞の集会で、中央委員会を非難しはじめた。こうして、トロツキー派は、ふたたび党に討論をおしつけた。

全国にわたって、党組織内ではげしい討論がはじまった。モスクワ、ペトログラート、ウクライナ、ウラル、バクーその他、大工業中心地の党組織は、トロツキー派の攻撃に徹底的な反撃をくわえた。トロツキー派は完敗した。党は、レーニン的中央委員会を中心に結束した。

この討論の総括をおこなったのは、一九二四年一月にひらかれたロシア共産党（ボ）第一三回協議会であった。協議会は、党にたいするトロツキー派の闘争を痛烈に非難し、「現在の反対派

という形で、われわれは、ボリシェヴィズムを修正しようとするこころみだけでなく、レーニン主義からの直接の逸脱だけでなく、歴然とした小ブルジョア的偏向にも直面している」と声明した（『ソ連邦共産党決議集』、第二巻、五一一ページ）。

トロツキー派の新たな攻撃は、ネップの環境のもとで国内で階級闘争が激化したのを反映していた。都市ではネップマンが、農村では富農が、プロレタリア独裁（ディクタトゥーラ）にたいするたたかいをつよめていた。トロツキー派は、彼らの代弁者であった。

党員がトロツキー主義の本質と危険をいっそうよく理解するのをたすけるために、ロシア共産党（ボ）の歴史、共産党がその隊列内の各種の分派、グループ、偏向、日和見主義とたたかい、労働運動内のブルジョアジーの手先とたたかった歴史の研究が広くおこなわれた。若い党員たちは、トロツキーが多年にわたって恥さらしにも、メンシェヴィキに加担して、レーニンとたたかい、ボリシェヴィキ党とたたかってきたことを知った。共産党員の最大のイデオロギー的武器は、党とソヴェト権力の決定で出版された『レーニン全集』であった。この全集を研究して、党員の新しい世代は、レーニン、ボリシェヴィキが労働者階級、人民大衆の利益のため、ロシアにおける革命の勝利のためにどんなに大規模な闘争をおこなったか、国際革命運動をマルクス主義の道へむけるために、レーニンがトロツキーにたいしても、第二インタナショナルの日和見主義者にたいしてもどんなに断固としてたたかったかを知った。レーニンの著作は、社会主義のための闘争の理論と実践の諸問題についての知識の真に汲みつくせない源であり、これらの著作のなかでこの偉大な理論家が、歴史的発展の新しい段階に応じてマルクス主義を前進させていることを知ったのである。

一九二四年に出たイ・ヴェ・スターリンの著書『レーニン主義の基礎について』はトロツキー主義を暴露するのをたすけた。同書では、プロレタリア革命とプロレタリアートの独裁の理論と戦術であるレーニン主義の基本問題が叙述されており、レーニンがマルクス主義にもたらした新しいものがあきらかにされている。

第一三回党協議会の直後に、党、ソヴェト国民、世界のプロレタリアート、すべての進歩的な人々は、最大の悲運にみまわれた。一九二四年一月二一日、ヴラヂーミル・イリイチ・レーニンがなくなったのである。彼の訃報は、ソヴェト国民、全世界の労働者と被抑圧民族のあいだに、筆紙につくせない悲しみをもたらした。党中央委員会臨時総会は、『党に訴える。全勤労者に訴える』というアピールを採択した。アピールには、こうのべてある——

「プロレタリアートにそなわる真に偉大で英雄的なすべてのもの、すなわち、おそれを知らない英知、鉄のような、不撓不屈の、ねばりづよい、あらゆるものに打ちかつ意志、奴隷状態と抑圧にたいする燃えるような、限りないにくしみ、山をもうごかす革命的な情熱、大衆の創造力にたいするかぎりない信頼、すばらしい組織の才——すべてこれらが、レーニンの一身にみごとに具現されており、彼の名は、西から東にいたり、南から北にいたる新しい世界の象徴となった」（同、五三四ページ）。

ほとんどまる一週間、人々はレーニンに別れのあいさつをした。厳寒にもかかわらず、人々は、昼夜をわかたず労働組合会館の円柱の間に出かけて、永遠のねむりについた指導者に別れのあいさつをした。

レーニンの葬儀の日、ソヴェト国民は五分間仕事をやめ、深い悲しみのうちに、自分の父であ

り、教師であり、友であった人を見送った。工場や機関車の葬送の汽笛が全国にひびきわたるなかで、レーニンの柩は、赤い広場の廟におさめられた。

党とソヴェト国民は、レーニンに別れをつげるに当たって、彼の遺言を徹底的に遂行することを誓った。

国際プロレタリアート、全世界の勤労者も、ソヴェト国民と深い悲しみをともにした。レーニンの葬儀の日、多くの資本主義国の労働者は、五分間仕事をやめ、心のなかで全世界の労働者の指導者に別れをつげた。

指導者の死にこたえて、労働者階級は、党を中心として一段と結束した。悲しみの日々に労働者から、ロシア共産党(ボ)への入党申込書が何千通となくとどいた。中央委員会は、この運動の規模が大きなことを考慮して、現場の労働者のレーニン記念党員採用をおこなうことを公表した。中央委員会は労働者にあてたアピールを発表した。そのなかには、指導者の死は労働者階級を奮いたたせ、数十万の労働者が党に援助の手をさしのべている、と言われていた。

レーニン記念党員採用のとき、革命戦のなかできたえられた優秀な、先進的な労働者が、党にはいった。入党申込書を党集会で審議するさいには、党外の労働者もすすんでくわわり、生産の先進分子やプロレタリア革命にもっとも献身的な人々を、党の隊列に選抜するのをたすけた。

レーニン記念入党運動の結果、二四万人以上の労働者が、ロシア共産党(ボ)にはいった。これは、労働者階級とその党との切っても切れない統一をはっきり実証するものであった。

6　第一三回党大会。農村における党の活動の強化。トロツキーのあらたな攻撃の暴露

指導者の死後、党の隊列が結束したことをしめしたのは、ロシア共産党（ボ）第一三回大会（一九二四年五月二三—三一日）であった。この大会には、約七三万六〇〇〇名の党員と一二万七〇〇〇名以上の党員候補の代表が出席していた。第一二回大会いらい、党は、その隊列を主として労働者で補充して、二倍近くになった。この一事だけでも、党と労働者階級とのむすびつきが強固になり、大衆が党を中心として結束し、党の権威がたかまったことをものがたっていた。

大会の議事日程には、中央委員会と中央統制委員会の各報告、商業の問題、協同組合の問題、農村における活動の問題、その他があった。

大会は、党がレーニンの直接の指導をうしなったにもかかわらず、党中央委員会が困難かつ複雑な情勢のもとで、すべての活動分野で大きな成果をあげたことを、満足して確認した。大会は、中央委員会が毅然とした態度で、レーニンのように非妥協的にトロツキー主義とたたかい、レーニン主義を毅然として守ったことを、完全に承認した。大会は、今後も、どんな偏向からも、断固として、また毅然とした態度で、党の統一と一貫した方針とを守るように中央委員会に委任し、トロツキー主義を小ブルジョア的偏向と特徴づけた、ロシア共産党（ボ）第一三回協議会の決議を確認した。

並外れて重要な意義をみとめられていたのは、党員とくにレーニン記念入党者をマルクス＝レ

ーニン主義的に教育することであり、後者は、国家活動、社会活動、経済活動、文化活動のための党の基幹活動家の貯水池とみられていた。大会は、「同志レーニンの指導的な思想が、わが党の歴史のなかで特別な意義をもっているので」、党の教育活動全体を「わが党の歴史の主要な段階」と関連させておこなうよう、要求した（『ソ連邦共産党決議集』、第三巻、五〇ページ）。

大会は、国の経済全体が発展していることを指摘した。大会は、金属増産のためのたたかい、重工業振興のためのたたかい、生産手段の生産を軌道に乗せるためのたたかいを展開せよ、という指令をだした。

農業で成果があがったことと関連して、大会は、農村住民を協同組合にいれるための党活動をつよめる必要があることを強調した。農村で貧農が富農への隷属状態におちいろうとしていたことを考慮して、大会は、貧農に納税上の特典をあたえる法律、貧農の利益を守る法律の実施につとめ、富農にたいする租税政策を正確に守って富農の成長を制限することを、農村の党組織の義務とした。

大会は、工業製品の価格引き下げの正しさが実証された、と指摘した。大会は、国内商業人民委員部の創設を承認した。同人民委員部の基本的な任務は、国内市場を掌握すること、まず第一に、国家が卸売取引を掌握することであり、私的資本の活動を統制し、私的資本を商業から駆逐することであった。

決議『党建設の当面の任務について』では、プロレタリアートの中核的な活動分子を党に引きいれる必要が強調されていた。党組織は、新党員のあいだで教育活動をおこない、彼らを党生活、国家生活、社会生活に極力引きいれる義務を負わされた。工場細胞の活動を改善し、生産生活に

おけるその役割をたかめ、工場細胞の指導を強化する必要があった。

大会は、青年のあいだの活動の問題を審議し、党のコムソモール指導をつよめることを要求した。レーニンのコムソモールは、党の忠実な助力者であった。党の指導のもとに、コムソモールは、国民経済の復興のために献身的にたたかっていた。大会はコムソモールに、社会主義建設に、また都市と農村で党とソヴェト権力がはじめたすべての社会的・政治的な計画や文化的な計画に、青年の共産主義的教育に、労働者とインテリゲンツィアの熟練した基幹分子の養成に、積極的に参加するよう呼びかけ、知識を習得するよう呼びかけた。

第一三回大会には、反対派の公然たる動きはなかった。これは、トロツキー派が敗北し、党が思想的に結束していたことをはっきりしめすものであった。トロツキーとその追随者はこのことを考慮しないわけにはいかなかった。しかし彼らは、あとで分派闘争を再開するために、静観的な態度をとったのであった。

大会では、遺言という名で知られている、レーニンの『大会への手紙』が、代議員団ごとに公表された。この手紙のなかでは、党の統一を維持する必要、党の分裂を未然にふせぐことのできる、安定した中央委員会をつくる必要が強調されていた。こういう目的で、レーニンは、中央委員会の権威をたかめ、機関の活動を改善し、「中央委員会の小部分のあいだのあらそいが、党の運命全体にとって過大な意義をもつようになるのをふせぐ」(全集、第三六巻、七〇一ページ)ために、なによりもまず中央委員の数をふやすよう提案した。手紙のなかで、レーニンは、数人の中央委員の特徴をあげた。ジノヴィエフとカーメネフについて彼は、彼らの「十月のエピソード」は、もちろん、偶然なものではないと書いている。レーニンはトロツキーの「非ボリシェヴ

ィズム」を指摘し、こうして、トロツキーにはメンシェヴィズムのきわめて危険なぶりかえしが生じることを、党に警告した。さらに、レーニンはトロツキーについて、彼は「度はずれて自己を過信し、物ごとの純行政的な側面に度はずれに熱中する」（全集、第三六巻、七〇三ページ）人物である、と書いている。レーニンは、ブハーリンの特徴をあげて、「かつて弁証法をまなんだことがなく、けっして十分にそれを理解しなかった」（同、七〇四ページ）スコラ学者としている。

レーニンは、十月革命の勝利をめざして党がたたかっていた決定的な瞬間に、党の方針に反対し、党の隊列を分裂させようとこころみた、こういう連中の特徴を総括的にしめした。レーニンと党中央委員会が、断固として、非妥協的に十月革命の時期のジノヴィエフ、カーメネフのストライキ破り的行動とたたかい、ブレストの時期のトロツキー、ブハーリンの有害な裏切政策とたたかい、労働組合討論の時期の彼らの反党的な方針や分派行為とたたかったことだけが、党の正しい方針の遂行と党の隊列の一致団結、十月革命の勝利とその獲得物の擁護を保障したのである。

レーニンは、その手紙のなかでイ・ヴェ・スターリンの特徴をもあげた。レーニンは、スターリンがひいでた党活動家の一人であることを指摘すると同時に、彼の欠点をも批判した。彼は、こう書いている。「同志スターリンは、党書記長になってから、広大な権力をその手に集中したが、彼がつねに十分慎重にこの権力を行使できるかどうか、私には確信がない」と。レーニンは、「スターリンをこの地位からほかにうつして、その他の点はともかく、ただ一つの長所によって同志スターリンにまさっている別の人物、すなわち、もっと忍耐づよく、もっと忠実で、もっと丁重で、同志にもっと思いやりがあり、彼ほど気まぐれでない等々の人物を、この地位に任命す

る方法をよく考えてみる」よう提案した。「この事情は、とるにたりない、ささいなことのように思われるかもしれない」が「これはささいなことではない。あるいは、これは、決定的な意義をもつようになりかねないそういう種類のささいなことである」（同、七〇三、七〇四—七〇五ページ）と。

レーニンの『手紙』は、党中央委員会の統一と権威についての心づかいにみちている。彼は、指導的な中央委員の欠点を批判して、欠点克服の一助にしようと思っていたのである。

大会の代議員団は、レーニンの手紙を審議した。代議員は、スターリンが、トロツキー主義とトロツキー派にたいし、非妥協的にたたかったことを考慮し、また彼を書記長の地位から解任することは、当時はトロツキー派を利することになったであろうという事情をも考慮した。スターリンがレーニンの手紙に指摘されている自分の欠点をあらためると誓ったことをも考慮にいれて、代議員団は、スターリンを党中央委員会書記長の地位に留任させることに賛成した。

スターリンの好ましくない個人的資質についてのレーニンの批判は、スターリンが共産主義者としてこの批判を深く理解して、自分の欠点を取り除く義務を彼におわせていた。スターリンは党の指導的な活動家で、自分はレーニン主義とレーニンに忠実で、両者を信奉しているといつも強調していただけに、この批判はスターリンにそうする義務をますますおわせていたのである。

第一三回党大会は、中央委員の数を大幅にふやすことについての、レーニンの指示を実行した。

ロシア共産党（ボ）第一三回大会後まもなく、一九二四年六月中旬から七月上旬にかけて、モ

スクワでコミンテルン第五回大会がひらかれた。第四回大会から第五回大会までの期間に、西ヨーロッパ諸国での階級戦は労働者の敗北におわった。ブルジョアジーは、プロレタリアートの攻勢を撃退することができた。労働者階級の敗北に大役をはたしたのは、社会民主党の指導者たちの裏切行為と、一部の共産党のおかした重大なあやまりであった。指導部にいた右翼日和見主義者――のちに共産党は、これらの日和見主義者を一掃したが――の降伏主義的な行動は、ドイツその他いくつかの国の労働運動と共産党に大害をおよぼした。

一九二四年に資本主義は安定期にはいった。安定は、相対的で、脆弱なものであった。コミンテルン第五回大会は、国際情勢の分析にもとづいて、新しい状況のもとでの共産党の闘争の戦術を立てた。

資本主義諸国の共産党のボリシェヴィキ化が、主要任務の一つになった。それは、共産党がボリシェヴィズムの思想上・組織上・戦術上の原則を習得し、マルクス＝レーニン主義からの偏向と妥協することなくたたかい、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）のための闘争を労働者の日常要求の擁護とたくみにむすびつけ、大衆とできるだけ固くむすびつくことを意味していた。統一戦線という絶対に正しい戦術は依然としてゆるがなかった。その基礎は、労働者大衆の統一、下からの統一であった。

第五回大会は、トロツキーからむりじいされたロシア共産党（ボ）内の討論の問題を審議し、トロツキー主義を非難した。大会は、トロツキー主義を党内の小ブルジョア的偏向と規定したロシア共産党（ボ）第一三回協議会と第一三回大会の決定を確認した。大会は、トロツキー派の行動は党の統一をおびやかすものであり、したがって、ソ連邦におけるプロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）

をもおびやかすものであるとみとめた。

第一三回党大会と第五回コミンテルン大会の決定は、ソヴェト連邦の共産党員を鼓舞して、社会主義建設を盛り上がらせた。工場では、共産党員が高い労働生産性の手本をしめした。党外の労働者は、彼らの模範にならった。共産党員は、商業機関を改善し、商業と市場を掌握し、ますます個人商人を駆逐していった。彼らは、農村にたいする文化的後援活動を組織し、勤労農民を各種の協同組合にひきいれる仕事を指導した。

党中央委員会は、農村に生じたこと、農村に生じていた過程を注意ぶかく見守っていた。農業の生産性と農民大衆の福祉は向上した。資本主義的分子も成長しはじめた。もっとも、それは主として農村の中位の層と富裕な層についてであった。資本主義的分子も成長しはじめた。すべてこうしたことは、富農層の活発化となって政治的に現われた。富農は中農にたいする影響を強め、中農はまたもや動揺しはじめた。中農の小所有者としての本性が現われたのである。中農に支持されて、富農は村ソヴェトにもぐりこんで、そのなかで自分の方針を実行しだした。そうしたソヴェトは、ソヴェト政府の租税政策を富農に有利なようにゆがめ、貧農の利益を圧迫した。いくつかの地方で、富農が、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）に反抗して、ソヴェトの働き手、農村の積極分子、富農の反ソヴェト行動を暴露した農村通信員を殺害した。グルジアのグーリヤ郡では、一九二四年八月にソヴェト権力に反対して暴動をおこしたメンシェヴィキを、富農が積極的に支持した。メンシェヴィキは、外国のブルジョアジーから物質的援助を受けていた。しかし、グルジアの勤労農民は、メンシェヴィキを支持しなかったので、蜂起は一日後にはかたづけられた。

一九二四年一〇月にひらかれた中央委員会総会は、農村における活動の当面の任務を審議し、

中農にたいする富農の影響とたたかう措置を立てた。中農を富農からきりはなし、貧農と中農の同盟を強固にする必要があった。総会は、農民の積極性を、まず第一にソヴェトの活動を活発にすることに、協同組合その他の社会団体の活動をつよめることにむかわせるよう、勧告した。ソヴェトの活動を活発にする任務は、「当面の基本的で、もっとも緊迫した任務の一つである」と決議にはのべてある（『ソ連邦共産党決議集』、第三巻、一九七〇年刊、一三七ページ）。

農民大衆とのむすびつきを強固にするために、農民をもっと幅広く国家統治に参加させることが決定された。総会は、連邦構成共和国と自治共和国の中央執行委員会のなかの、党外農民の数をふやすよう勧告した。一連の人民委員部、たとえば農業人民委員部、教育人民委員部、内務人民委員部、労農監督部その他の人民委員部の参与会は、農民出の委員を一、二名補充するよう勧告された。農民はまた、参与会員として、それぞれの県ソヴェトの部課や郡ソヴェトの部課に参加させられ、郷執行委員会や郡執行委員会の議長にも選出された。

こういうふうに、総会は、全党の注意を農村にむけさせた。総会の決定にもとづいて、農村党組織の活動がたてなおされた。それらの党組織は、農民の要求にいっそう注意ぶかい態度をとるようになった。

中央委員会と党全体が、国の生産力をいっそう急速に復旧し、社会主義の道をさらに前進しようと努力していたのに、トロツキーとトロツキー派は、この努力をくつがえし党をレーニンの立場からそらせようとするくわだてをまたしてもおこなった。

一九二四年の秋、トロツキーは新たな討論を党におしつけた。彼は論文を発表し、そのなかで党の歴史をゆがめ、レーニンとレーニン主義を中傷した。トロツキーによれば、ボリシェヴィズ

ムが首尾一貫したものとなったのは、やっと一九一七年いらいのことであり、ボリシェヴィズムがトロツキーの「永続革命」の思想を身につけてからのちにやっとそうなった、というのであった。トロツキーは、十月革命で指導的な役割をはたしたのは、党でもなければ、レーニンでもなく、彼自身であるとしていた。そこで、レーニンの死後、トロツキーはあつかましくも、レーニン主義をトロツキー主義にすりかえようとくわだてたのである。

レーニンが生きていたあいだは、トロツキーも、はやくから日和見主義的なものとして暴露されていた自分のくされきった思想を公然と持ち出す勇気はなかった。レーニンがいなくなったいま、トロツキーはまたもや、レーニン主義の中傷という、日和見主義の毒いりの武器に訴えたのである。

トロツキーは、党の世界観の基礎であるレーニン主義に反対した。トロツキーの中傷を暴露する必要があった。党中央委員会と党活動家は、このために建設活動からはなれざるをえなかった。党中央委員会と党活動家は、出版物の紙上や、党集会の席上で、トロツキーを反駁した。トロツキーの支持者は、彼を弁護した。はげしい論争がおこった。中央委員会と地方の党組織は、トロツキーに断固たる反撃をくわえた。

党の有力な活動家、まず第一に、レーニンとともに十月革命の勝利のためにたたかった人たちがトロツキーに反対した。彼らは、トロツキーが党と党の理論と戦略戦術のための、革命の準備と遂行のための、社会主義のための、闘争の歴史をゆがめていることを、事実をあげて証明した。この討論のなかでトロツキー派は反レーニン主義者として暴露され、党規律違反者として非難された。トロツキー主義とのたたかいで大きな役割をはたしたのは、イ・ヴェ・スターリンの労作

『トロツキー主義かレーニン主義か』であった。この労作では、レーニンのプロレタリア革命理論が擁護されており、トロツキーの反マルクス主義的な「永続革命」、彼のでっち上げと中傷、レーニン主義をトロツキー主義にすりかえようとする企てが暴露され、トロツキー主義を思想的潮流としてほうむる課題が提起されていた。

一九二五年一月にひらかれたロシア共産党（ボ）中央委員会総会は、トロツキーのレーニン主義にたいする新たな攻撃を非難した。総会は「トロツキーがレーニン主義攻撃をやめていない」ことを指摘し、この攻撃は「レーニン主義をトロツキー主義にすりかえる」くわだてであると規定した（『ソ連邦共産党決議集』、第三巻、一四二、一四三ページ）。総会は、トロツキーに厳重な警告をあたえ、口先でなく実際に党規律にしたがい、レーニン主義の思想に反対するいっさいのたたかいを絶対にやめるよう要求した。トロツキーはソ連邦革命軍事会議の仕事から解任された。彼のかわりに、忠実なレーニン主義者エム・ヴェ・フルンゼが、同革命軍事会議議長に任命された。総会は、討論はおわったものとみとめるが、一九〇三年いらいのトロツキー主義の反ボリシェヴィズム的・小ブルジョア的な性格の説明を、党宣伝のうえでつづけていくことを決定した。

トロツキーの新たな攻撃に断固たる反撃をくわえたのち、党はひきつづき、ソ連邦における社会主義の建設を指導するという、自分の歴史的な使命を全力をあげて遂行していった。

7　ソ連邦における社会主義の勝利の可能性の問題。全連邦共産党（ボ）第一四回党大会。国の社会主義的工業化の方針。「新反対派」の粉砕

党に指導されるソヴェト国民の懸命な努力は、成果をあげ、国民経済の復興はおわりに近づいた。ソヴェトの国はますますしっかりしたものになった。ソヴェト制度がネップの環境のもとで資本主義制度に変質するだろうという、世界ブルジョアジーの期待ははずれた。外国の資本家はソヴェトの国との経済関係を拡げていった。ソ連邦「不承認」政策はソ連邦の強化と成功をさまたげることができないということが、資本家の指導層にあきらかになった。それればかりでなく、この政策は資本主義国自身に損害をあたえ、ソ連邦との経済関係の発展をさまたげた。ところが、この経済関係は、それらの国にとって少なからず有利なものだったのである。このことを考慮にいれて、一九二四年、イギリス、イタリア、オーストリア、ノルウェー、ギリシア、スウェーデン、デンマーク、メキシコ、フランスは、ソヴェト政府を承認し、ソヴェト政府と外交関係を樹立した。ソ連邦と中国との外交関係も樹立された（そのさい、中国と大国との最初の平等条約である協定が調印された）。一九二五年には、日本がこれらの国の例にならった。大国のうちでは、アメリカだけが、頑としてソ連邦「不承認」政策をとっていた。

国民経済が戦前の水準に近づいたので、国民経済を社会主義的に改造する課題が日程にのぼっ

た。党は、ソ連邦に社会主義を建設するレーニンの計画を実行する方針を堅持していた。社会主義を建設する可能性の問題は、とくにさしせまったものになった。トロツキー派は、経済的・技術的に立ちおくれているソヴェト・ロシアで、資本主義の包囲と資本主義の安定という状況のもとでは、西ヨーロッパの勝利したプロレタリアートの国家的な支持がなければ、ソ連邦で社会主義を建設することはできないと主張した。彼らは、党を資本主義に降伏するほうに追いこもうとしていた。

党は、トロツキー派に断固たる反撃をくわえた。第一四回党協議会（一九二五年四月）は、明確にこう声明した。「復古のあらゆるくわだてから国を守りぬくことができるならば、社会主義社会の建設が勝利することは可能であり、実際にもかならず勝利するであろうと確信して、プロレタリアートの党は、この建設に全力をそそがなければならない」（『ソ連邦共産党決議集』、第三巻、二一四ページ）。

党は、労働者と農民には自国のブルジョアジーに打ち勝つ力が十分にあることを確実に知っていた。しかし、完全な社会主義社会が建設されたばあいでも、ソヴェト国家には、資本主義諸国の干渉をふせぎ、ソ連邦で資本主義を復活させようとする資本主義諸国のくわだてをふせぐ保障はなかった。

「したがって、社会主義の最後の勝利のただ一つの保障、すなわち復古をふせぐ保障は、一連の国で社会主義革命が勝利することである」と協議会の決議にはのべてある（同、二一三ページ）。

ソ連邦に社会主義を建設する可能性についての第一四回党協議会の決定は、各党員にとって党のおきてとなった。決定には、はじめはただ一つの国でも社会主義は勝利するというレーニン理

論の核心、ソ連邦に社会主義を建設するレーニンの計画の核心が、言いあらわされている。

一九二五年の末、社会主義建設ではいちじるしい成果が達成されていた。国民経済は、だいたいにおいて復旧していた。ソヴェト国家の手ににぎられた国民経済の中枢は、強固になり、発展していた。経済的基礎にもとづいて労働者と農民の同盟はいっそう強固になり、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）の地歩は固まった。

農業は、戦前の生産高の八七％を供給した。作付面積は、一九一三年の作付面積の九九・三％になった。国内の牛と豚は、一九一六年よりも多かった。一九二五年の夏までに各種の協同組合にはいった農民経営の数は約五〇〇万になった。

大工業は、一九二五年には戦前の生産高の四分の三を生産した。国有工業と協同組合工業の生産高は総生産高の八一％を占め、私的工業の生産高は一九％を占めていた。だが、鉄鋼業は、ひどく立ちおくれていた。銑鉄の生産高は戦前の生産高のほぼ三分の一、粗鋼の生産高はほぼ二分の一であった。消費物資を生産する部門の総生産高は、戦前の水準の三分の二以上に達した。鉄道運輸は復旧し、その貨物輸送量は一九一三年の貨物輸送量の八〇％に達した。

レーニンのゴエルロ計画は、着々と実施されていた。一九二五年の末までにカシーラ、シャトゥーラ、「クラースヌイ・オクチャブリ」（レニングラート）、キゼール、ニジニ・ノヴゴロト（バラフナ）の各発電所が建設された。シテロフカとヴォルホフの発電所の建設もおわろうとしていた。

一九二五年の末、農工労働者数は六〇〇万をこえた。その一年間に職をえた者は、約一五〇万人だった。だが国内には主として農村からやってきた失業者がまだ一〇〇万人近くいた。

国内商業の分野では、大きな成果があがっていた。その総売上高は、戦前の七〇%に達していた。この売上高で占める国家の割合は五〇%、協同組合の割合は二五%、個人商人の割合は二五%であった。こうして、商業を習得せよというレーニンの指示を、共産党員はりっぱに実行していた。彼らは、市場から個人商人を着々と駆逐していった。

勤労者の生活状態はよくなった。国有工業の労働者の実質賃金は、戦前のそれを上回った。賃金の増大に労働生産性の増大が立ちおくれていた状態は、克服された。穀物、肉、獣脂、植物性油脂、砂糖の農家消費量は、大幅にふえた。

国民教育と文化建設の面でも、多少の成果があがっていた。全住民のうちで読み書き能力のある者の割合は、一九二〇年の三二%から、一九二六年末の四〇%にふえた。農村には、二万二〇〇〇以上の図書室がひらかれており、農民の日常生活にはラジオと映画が普及しだした。

この期間に、党は、国家機構を一段と強固なものにした。党の指導のもとに、工業管理体制ができあがった。その基礎には、民主主義的中央集権というレーニンの原則がおかれていた。党は、国民経済の計画化、とくに工業の計画化のうえで成果をおさめた。そのさい、党は、重工業が優先的な役割をはたすことを、わすれなかった。年ごとに強固になった計画原則にもとづいて、国民経済は、資本主義諸国の戦後経済にはなかったし、またありえなかったような空前の急速度で復興された。

復興期の末には、ソ連邦は、さらに強固になっていた。一九二四―一九二五年は、民族政策のうえで重大な施策がとられたことで注目すべき年であった。中央アジアに連邦構成ソヴェト共和国、すなわちトゥルクメン共和国とウズベク共和国が創設され、また数年おいてタジク共和国も

創設された。トゥルクメニスタン共産党、ウズベキスタン共産党、タジキスタン共産党が結成された。連邦構成共和国の党は、人民大衆を社会主義建設にいっそう積極的に参加させるという課題に当面していた。

党は、平和を固め、国際舞台ではたすソ連邦の役割をたかめることができた。だが世界には、ソ連邦にたいする軍事攻撃を準備している勢力があった。赤軍を強化するために一九二四年に軍事改革の実施がはじまり、この改革は、新しい軍用器材に応じて軍制に根本的な変更をくわえた。小人数の正規軍とならんで地域的民兵部隊が創設された。一九二八年におわった軍事改革は、赤軍の戦闘力を大幅に向上させた。

党自身も、この時期に思想的にきたえられ、党員の数をふやした。党の指導的役割は向上した。党は、一五〇〇万以上の同盟員をもつコムソモール、七〇〇万の組合員をもつ労働組合、一〇〇〇万にもおよぶ会員をもつ各種の任意加入団体を指導していた。これらの組織の活動は、大衆の積極性が高まり、プロレタリア民主主義が発展し、党が大規模な教育活動をおこなっていたことを立証していた。

経済生活と政治生活でおさめられた成果は、ネップのはじめにレーニンの提起した「だれがだれを」という問題が社会主義に有利に解決されつつあることを、明瞭に証明していた。新経済政策は、正しいことが実証された。ソヴェト国民は、社会主義への道を邁進していたのである。

社会主義へ前進する速度をはやめる必要があった。このことを指摘したのは、一九二五年一二月一八日から三一日までひらかれた第一四回党大会である。大会には、六四万三〇〇〇人の党員と四四万五〇〇〇人の党員候補との代表が出席していた。大会は、中央委員会と中央統制委員会

の各報告、党規約変更の問題、その他の問題を審議した。〔中央委員会の〕報告はイ・ヴェ・スターリンがおこなった。

第一四回党大会は、中央委員会の政治上・組織上の方針を承認したが、この方針の遂行は、国民経済の順調な復興を保障し、国民経済を戦前の水準に近づけ、社会主義の地歩をかためた。

資本主義がソ連邦を包囲していること、イギリスとアメリカの指導のもとに、資本主義諸国があらたな対ソ攻撃のためにブロック結集に当たっていることを考慮にいれて、大会は、挑発にのらずに、全世界の平和のためにねばりづよくたたかい、国際プロレタリアートや被抑圧民族との同盟を固め、国防力を極力つよめ、武装兵力の威力をたかめるよう、中央委員会に指令した。

経済建設の分野では、党綱領を実行して大会は、国の社会主義的工業化についてのレーニンの計画をねばりづよく実施せよという方針をあたえた。大会の決議には、こうのべてあった。「本大会は、ソ連邦における社会主義建設の勝利をめざしてたたかうことを、わが党の基本的な任務とかんがえる」(『ソ連邦共産党決議集』、第三巻、二四六ページ)。経済建設は、わが国を機械設備の輸入国から機械設備の生産国に、最新の技術をそなえた工業国に、転化させる方向でつづけなければならない。ソ連邦は資本主義的世界経済に左右されない、独立の経済単位でなければならない。

党の当面していた任務は、党の隊列の意志が完全に統一され、その隊列が団結しているばあいにはじめて、解決することができた。大会は、「それがどういう原因から生じようと、またたれがその先頭に立っていようと、党の統一を破ろうとするあらゆるくわだてと断固としてたたかうよう」中央委員会に委任した(同、二五二ページ)。

この決定は、第一四回大会のころに中央委員会政治局員のジノヴィエフとカーメネフをいただく「新反対派」が結成されていたこととも、関連があった。彼らは、以前はトロツキー主義に反対していたが、第一四回協議会のあとでは、自分もトロツキー派の立場に転落した。党協議会では、ソ連邦に完全な社会主義社会を建設しようとする党の方針がのべられている決議に賛成投票したが、まもなく彼らは、西欧に社会主義革命がおきなければ、ソ連邦に社会主義を建設することはできない、と主張しだした。これは、一九一七年一〇月にジノヴィエフとカーメネフがプロレタリアートの力を信ぜず、プロレタリアートに勤労農民をひきいていく能力のあることを信じないで、党の社会主義革命の方針に反対したときの、降伏主義的な立場のぶりかえしであった。トロツキーも、西ヨーロッパのプロレタリアートが権力をにぎって国家的な援助をあたえないかぎり、ロシアで社会主義を建設することはできないと、はやくから主張していた。したがって、ジノヴィエフ、カーメネフ、トロツキーの思想的立場は、ソ連邦で社会主義の勝利が可能なことを否定するメンシェヴィキ的見解の点で、一致していたのである。

ソ連邦に社会主義を建設することが可能かどうかという問題は、すべての日和見主義者、すべての分派の意見と、レーニンとの、党との意見がくいちがっていた、最大の問題であった。レーニンの社会主義建設理論のもっとも猛烈な反対者は、トロツキー、カーメネフ、ジノヴィエフ、ラデックであった。

ソ連邦に社会主義を建設することが可能なことを否定し、党の工業化の方針に反対して、「新反対派」は、国有工業は社会主義的工業ではなく、国家資本主義的工業である、ネップはもっぱら退却、すなわち資本主義への退却である、と主張した。「新反対派」は、労働者階級と中農の

同盟というレーニン的方針に反対した。このことは、プロレタリアートの独裁(ディクタトゥーラ)の基礎を切りくずすことを意味していた。「新反対派」は、党は変質しつつあると中傷した。

その見解で小ブルジョア層の重圧を反映していた「新反対派」は、党内の日和見主義分子、降伏主義者、社会主義建設にともなう多大の困難におじけづいていた確信のない人々のたまり場であった。「新反対派」は世界資本主義の力に直面して恐慌におちいり、富農の活動におじけづいていた。彼らは、党が富農とたたかわず、富農の危険に目をとじている、と中傷した。

しかし、党は二つの戦線でたたかっていた。すなわち、富農の危険を過大視し、中農の役割を軽視していた者とたたかい、また富農の危険をみとめていなかった者とたたかっていたのである。第一四回大会の決議にはこうのべてある——

「大会は、農村における階級分化を軽視し、富農の成長にともなう危険をみとめない偏向を、断固として非難する……。

同時に大会は、農村における共産主義的政策の基本問題、すなわち農業の中心人物である中農のためにたたかう問題と、農村が社会主義へ前進していくための基本的な組織形態である協同組合の問題とを、あいまいにしようとするこころみを、同じく断固として非難する。

大会は、この後のほうの偏向とたたかう必要を、とくに強調する」(『ソ連邦共産党決議集』、第三巻、二四九ページ)。

「新反対派」は、トロツキー主義の政綱にもとづいて結成されていた。このことは、トロツキー主義をメンシェヴィズムの変種として徹底的に粉砕する必要をいま一度強調していた。トロツキーとトロツキー派は、革命と社会主義建設における指導勢力としての、党の役割をひくめ、ゆ

がめようとしていた。党内での分派の存在を主張することによって、彼らは、実のところ、党を破壊しようとしていた。なぜなら、激烈な階級闘争という状況のもとで党内に分派があるばあいには、党は滅亡をまぬがれないからである。

トロツキー派は、農民を社会主義に反対する反動勢力とみて、労働者階級と勤労農民の同盟を決裂させる方針をとっていた。したがって、トロツキー派の方針は、プロレタリアートの独裁を滅亡にみちびくものであった。なぜなら、ソヴェト権力は、共産党を先頭とする労働者階級が指導的役割をはたす、労働者と農民の同盟がなければ存立することができないからである。

トロツキー派は、党の社会主義建設方針に反対し、労働者のあいだに降伏主義的思想の種をまいていた。トロツキー派の見解からすれば、労働者階級のなすべきことは、資本家に平身低頭して罪をみとめることでしかなかった。「新反対派」は、レーニン主義をトロツキー主義にすりかえようとくわだてたが、このくわだては党によって暴露された。これにあずかって力があったのは、イ・ヴェ・スターリンの著書『レーニン主義の諸問題について』であった。

以上のように、トロツキー派は、レーニン主義のすべての根本問題について、反レーニン的・反党的な立場をとっていた。そこで、トロツキー主義をかたづけなければならなかった。

「新反対派」の中心は、レニングラートにあった。ジノヴィエフとその仲間は、党中央委員会と彼らとの意見の相違を、さしあたりレニングラートの共産党員にかくしておいて、中央委員会の方針、党の方針を支持しているようにみせかけていた。一方、欺瞞的なやりかたで、代議員として第一四回大会にもぐりこんだ「新反対派」は、大会の席上では別個のグループとして行動した。そして、中央委員会をたおして党の指導権を自分の手ににぎるために、中央委員会に挑戦す

ることにした。彼らは、中央委員会に対抗して、自派の副報告者としてジノヴィエフを立て、ジノヴィエフはすべての根本問題について、「新反対派」の見解を党の方針に対置した。レニングラート県党会議が中央委員会信任の投票をしていたのに、「反対派」は、第一四回党大会で中央委員会不信任の投票をした。事態は、「新反対派」が大会の決定にしたがわないと声明し、レニングラートに帰ってからは、共産党員のあいだで破壊活動をはじめるまでになった。

大会は、レニングラート党組織にあてた特別のアピールのなかで、大会で「新反対派」の指導者たちがとった行動をしらせた。大会の終了後、中央委員の一団が、大会の決定を説明し、「新反対派」の反党活動を暴露するために、レニングラートへむかった。レニングラートの共産党員の集会は、激烈なものになった。「新反対派」の活動にたいする憤激は、大きかった。共産党員の九七%以上が、大会の決定をみとめて「新反対派」を非難した。大会後一ヵ月をへてひらかれたレニングラート県党会議は、ジノヴィエフ派の指導部をやめさせて、エス・エム・キーロフを先頭とする新しい県党委員会を選出した。

こうして、いま一つの反党グループも、党の統一を動揺させ、レーニン主義をトロツキー主義にすりかえようとくわだてたが、みじめな敗北をなめたのである。

第一四回大会は、新しい党規約と、ロシア共産党（ボリシェヴィキ）という党名を改めて全連邦共産党（ボリシェヴィキ）とする決定とを採択した。

全連邦共産党（ボ）第一四回大会は、国の工業化の大会として歴史に記されている。大会の決定には、工場と農業に最新の技術を供給し、農民経済を社会主義的につくりかえ、国を農業国から工業国に変え、ソ連邦に社会主義社会の建設を保障する能力のある重工業、社会主義的機械制

大工業を急速に発展させるという、党のレーニン的方針が表明されている。

要約

一九二一年から一九二五年にいたる時期は、激闘にみちみちている。党は、資本主義から社会主義への過渡期全体にたいするただ一つ正しい政策である、新経済政策を採用し、この賢明な措置によって労働者と農民の同盟を強化し、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）を強固にした。国は社会主義にむかって急速に前進しはじめた。

党は、正しいマルクス＝レーニン主義的民族政策によって、ソヴェトの国にすむ諸民族の統一と友誼（ぎ）を達成し、これらの民族をゆるぎないソヴェト社会主義共和国連邦に団結させ、一九二四年にその最初の憲法を採択させた。

党は、ソヴェトの国には完全な社会主義社会を建設するのに必要かつ十分なものがそろっているという、レーニンの教えを断固として実行にうつした。ソ連邦で社会主義の建設が可能かどうかという問題は、基本的な、もっともさしせまった問題であった。ほかならぬこの問題について、日和見主義者と分派はみな、党と激闘をおこなっていた。そのなかで指導的な役割をはたしていたのは、トロツキー派であった。彼らは、党をレーニンの道からそらせ、ソヴェトの国に資本主義を復活させることにつうじる降伏主義的な道に党をおしやることをめざしていた。

党は、これらのグループを撃破した。この点に偉大なレーニンの最大の功績がある。なぜなら、彼は、日和見主義者にたいする非妥協的な態度の模範をしめし、党の隊列の統一と一致団結のた

め、鉄の規律のため、どんな分派行為も容赦しない態度のためにたたかうのに必要な、強力な思想的武器を党にあたえたからである。

レーニンの政策をうまずたゆまず実行にうつすことによって、党は、資本主義的分子とのはげしい階級闘争をつうじて、ネップによって大成功をおさめた。党の指導を受けて、労働者階級と勤労農民は、歴史的にみて最短期間に国民経済を復興し、社会主義建設の新しい段階にうつる強固な土台をきずいた。レーニンの対外政策にもとづいて平和を維持するためにたたかうことによって、党は、国際舞台でのソ連邦の影響をいちじるしくつよめた。

こうして、党は、その生涯の複雑きわまる時期の一つで、困難な歴史的試練にたえた。勤労者にたいする党の権威は、いちじるしくたかまった。国民は経験によって、党が賢明なこと、党の指導がたくみなことを確信し、党が勤労国民の利益を守り、党の活動がソヴェト社会の幸福と繁栄をめざしていることを確信した。

党は、復興期の主要任務を解決して、ソヴェト国民をソ連邦の社会主義的工業化の時期にみちびいてきた。

第一一章　国を社会主義的に工業化し、農業の全面的集団化を準備するための党の闘争（一九二六―一九二九年）

1　一九二六―一九二九年の国際情勢と党およびソヴェト国家の対外政策

党は、資本主義が相対的に安定した情勢のもとで、国の社会主義的工業化に着手しようとしていた。この安定は長つづきしない一時的なもので、帝国主義者間の対立や階級対立の緊迫を取除きはしなかったし、取除くはずもなかった。とくにイギリスとアメリカの対立は、後者が世界市場でイギリスを圧迫していたので、緊迫していた。

資本主義の安定にともなって、労働者、全勤労者の搾取はつよまった。労働者階級にたいする資本家の攻勢の結果、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの激烈な階級戦が生じた。一九二六年、イギリス・プロレタリアートのゼネラル・ストライキが勃発し、五〇〇万人以上がこれにくわわった。ソ連邦の労働者階級は、このストライキにただちに呼応し、ストライキ労働者を援助して巨額の資金をあつめた。イギリスの労働者は、ソ連邦の労働者階級の精神的・物質的

支援をプロレタリア連帯性の端的な現われとして歓迎した。一九二七年七月、オーストリアにおける資本と反動派の攻勢に対抗して、ウィーンの労働者が蜂起した。

資本主義の安定に大打撃をあたえたのは、帝国主義者のたえがたい圧制に反対して植民地・従属諸国に民族解放運動のもり上がったことであった。この運動の最大の事件は、偉大な中国人民の革命であった。中国共産党は、マルクス＝レーニン主義の教えにしたがい、労働者階級と勤労農民を指導して、全革命勢力の糾合をめざす統一戦線戦術をとり、革命でプロレタリアートの指導的役割を確保しようとつとめていた。ソ連邦における社会主義建設の進捗と中国革命のおさめた最初の成功とは、全世界の、とくにインド、インドネシア、モロッコ、エジプトの民族解放闘争に大きな影響をおよぼした。

植民地・従属国の人民の民族解放運動は、ソヴェト国民の深い同情をかった。ソ連邦の勤労者は、中国革命を熱烈に歓迎した。ソ連邦と決起した中国人民のあいだには、心からの友情が生まれた。党は、被抑圧民族の無二の味方であるレーニンの教えにしたがって、中国、インド、エジプトその他の国々の革命運動を支援した。

すべての国の帝国主義者は、ソ連邦の強化・発展が資本主義制度をおびやかすものだと見ていた。資本主義諸国家とソ連邦との関係は、依然として緊迫していた。工業化がソヴェト国民の社会主義への前進を早め、ソ連邦の独立を保障し、その防衛力をつよめると考えて、帝国主義者は、工業化を失敗させるか、妨害しようとしていた。彼らは、ソヴェト国家にクレジットをあたえるのを拒絶し、ソ連邦を経済的に孤立させる方針をとり、新たな武力干渉をおこなう気配をみせていた。

反ソ政策の主謀者は、諸国人民の解放運動の旧敵である、イギリス帝国主義であった。イギリス帝国主義者は、その手先をつうじていろいろな国で一連の反ソ挑発をくわだてた。北京やロンドンその他でソヴェト代表部やソヴェト機関の手入れをおこない、ワルシャワでソヴェト全権代表ヴォイコフを暗殺した。帝国主義者は、ソ連邦内にいる白衛派の残党の破壊活動を支援していた。一九二七年、レニングラートでイギリスの破壊工作者が党のクラブに爆弾を投げこみ、三〇名近くを負傷させた。イギリス、フランス、アメリカの帝国主義者は、ソ連邦の工業化を妨げるために、ありとあらゆる挑発をおこなった。

一九二七年、イギリスの保守党政府はソ連邦との外交関係を断絶した。同政府は、他の資本主義諸国をもこれに同調させてソ連邦を孤立させようとくわだてた。だが保守党は誤算していた。ブルジョア国家で、彼らの例にならうものは一つもなかった。

イギリス保守党の反ソ計画を失敗させるのに大いに役立ったのは、党とソヴェト政府の対外平和政策であった。この政策は、資本主義国家の反ソ統一戦線を結成しようとする保守党の努力を、徒労におわらせたからである。イギリスがとくに力こぶをいれていたのは、ドイツを反ソ政策に加担させることであった。ドイツは当時、アメリカのドルの援助で自国の重工業、とくに軍需工業を急速に再建しようとしていた。一九二五年、ドイツ政府はイギリス、フランス、イタリア、ベルギーとロカルノ協定に調印した。この協定は、イギリスが音頭をとって反ソ・ブロックの結成に一歩すすめたことを意味していた。しかし、ソヴェト国家との正常な関係がドイツにとってきわめて重要であると考えていたので、ドイツの指導層には、ソ連邦と手を切って反ソ戦線に完全にくわわる勇気はなかった。一九二六年、ソ独間には中立条約が締結され、ドイツが反ソ政策

にくわわるのをさまたげた。一九二五年から一九二七年にかけて、ソ連邦は中立不可侵条約をトルコ、アフガニスタン、イラン、リトワニアと締結した。この条約は、これらの資本主義国家を反ソ連合に引きいれるのをある程度さまたげるのに役立った。これはソ連邦の対外平和政策の成果であった。

新たな対ソ干渉を組織するのに失敗し、正常な対ソ通商関係の妨害から損失をこうむって、イギリスは、一九二九年、ソ連邦との外交関係を復活せざるをえなくなった。

だが帝国主義者は、対ソ挑発行為を止めたのではなかった。彼らにそそのかされて中国の軍閥は、一九二九年の夏、ソ連邦に属する東支鉄道を占領し、ソヴェト領内に侵入し、ソ連邦の極東国境の安全をおびやかした。紛争を平和的に解決しようとするソヴェト政府の試みはすべて徒労におわった。極東における戦争挑発者に対抗する措置が必要になった。一九二九年八月、ヴェ・カ・ブリュッヘルの指揮する極東特別軍が編成された。まもなく極東特別軍は国境侵犯者にたいする軍事行動に出て、中国軍閥の軍隊を撃破した。つづいてソ中両国間の交渉がおこなわれた。一九二九年一二月、紛争解決に関する協定が調印され、東支鉄道には正常な状態が回復された。

党とソヴェト政府は、平和を固めようとして、一九二六年から一九二九年にかけて軍縮のためのたたかいを精力的につづけた。この目的のため、国際連盟の設置した軍縮会議招集準備委員会が利用された。一九二七年一一月、ソヴェト政府は、あらゆる国家の軍備全廃に関する提案を同委員会に提出した。だが提案は否決された。そこでソ連邦は、一九二八年、別の提案として、部分的軍備縮小に関する提案を提出した。帝国主義者はこの提案もはねつけた。

ソ連邦が平和のためにたたかい、軍備縮小を主張したことは、国際プロレタリアートと全勤労

者の積極的な共鳴を得た。資本主義諸国、植民地・従属諸国の民衆のあいだでソ連邦の声望は、不断に高まった。これは、社会主義社会の建設にとって非常に重要であった。敵対する資本主義に包囲されながら社会主義を建設するソヴェト国にとっては、幾百千万の勤労者の国際的支持を得ることはきわめて重要である、とレーニンはおしえている。

プロレタリアの国際連帯は、平和をまもる上できわめて重要な要因であった。資本主義諸国の労働者階級は、帝国主義者の侵略計画の実行に反対していた。ソ連邦の成功は、資本主義諸国の労働者階級の地歩を固め、資本にたいする彼らの階級闘争をうながした。

全世界の労働者階級、勤労者は、ソ連邦における社会主義の建設を熱心に見まもっていた。イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、オーストリア、チェコスロヴァキア、ベルギーその他の国から、労働者代表団がソ連邦をおとずれて、社会主義建設の成果を見聞した。代表団にくわわっていた人たちは、帰国後、最初の社会主義国の実状をつたえ、ブルジョア宣伝の中傷を暴露した。一九二七年一一月、十月革命一〇周年にちなんで、モスクワでソ連邦友の会世界大会がひらかれた。大会は、ソヴェト・ロシアにおける社会主義の建設がすべての国の革命運動の利益にそったものであり、全世界のプロレタリアの血をわけた事業である、と強調した。

2　国の社会主義的工業化の始まり。トロツキー＝ジノヴィエフ反党ブロックにたいする党の闘争

国の社会主義的工業化へ移ることは、党とソヴェト国民の社会主義をめざす闘争の新しい段階を意味していた。ソ連邦国民経済の復興は、大体において古い技術的基盤にもとづいておこなわれた。いま国は、国民経済の社会主義的改造に、近代工業の創出に移ろうとしていた。国の社会主義的工業化の最大の目標は、社会主義の物質的・技術的基盤を創出し、国内の社会主義的生産関係を発展させ強固にすることであった。

党がしたがっていたのは、レーニンのつぎのような直接の指示であった。

「社会主義の唯一の物質的基礎になりうるものは、農業をも再編成することのできる機械制大工業である」（全集、第三二巻、四八七ページ）。

大工業の発展と、国民経済のすべての部門を電化することとは切りはなせない。レーニンは、電化を技術進歩のきわめて重要な手段とみていた。

「ロシアが」とレーニンは言っている。「発電所と強力な技術的設備の細かな網の目でおおわれるならば、われわれの共産主義的経済建設は、未来の社会主義的なヨーロッパとアジアの模範となるだろう」（全集、第三一巻、五二六ページ）。

ソ連邦で社会主義が勝利することは、社会主義経済の基礎の基礎である重工業が強力に発展す

る結果としてはじめて可能であった。重工業は、国民経済全体の進歩をうながし、社会主義の原則にもとづいて農業を再編成し、国民の福祉を向上させ、国防力を保障することができるからである。いくたの近代的重工業部門――鉄鋼業、機械工業、工作機械工業、自動車工業、化学工業、国防工業、トラクター工業その他――を新設しなければならなかった。生産手段を生産する企業の古いものを改造し、新しいものを建設する必要があった。世界でもっとも進んだ社会制度とその脆弱な物質的・技術的基盤との不均衡をなくすために、大工業を急速に発展させることが必要であった。

社会主義的工業化は、国民経済全体を改造する鍵であり、労働者階級の成長する条件であり、労農同盟を、都市と農村の生産的結合を固める基礎であった。

さらに、すべての連邦構成共和国、少数民族地区に近代工業を創出しなければならなかった。これは、以前抑圧されていた民族の事実上の立遅れがなくなり、少数民族出の基幹要員が成長し、民族文化が発達する上で、非常に重要であった。社会主義的工業化は、労働者階級の、全勤労者の物質的および文化的な生活水準の向上を保障するものであった。

急速な工業化は、敵対する資本主義に包囲されていることからも絶対に必要であった。ソ連邦の経済的独立性と防衛力を保障するために党のかかげた課題は、ソ連邦を先進的な工業大国にし、歴史的にみて最短期間に、工業生産高の点で先進資本主義諸国に追いつき、ついでこれを追いこすことであった。

これは面倒でむずかしい課題であったし、その解決に当たるのは歴史上はじめてのことであった。ソ連邦の労働者階級は、資本主義諸国の工業化の経験を借りるわけにはいかなかった。工業

化の社会主義的方式は、資本主義的方式とは根本的にちがっている。社会主義的工業化は、自然発生的にではなく、計画にしたがっておこなわれる。それは、資本主義諸国でそうであったように軽工業からはじまるのではなく、重工業の創出からはじまる。ソ連邦は、外部からの援助をなにか当てにするわけにはいかなかった。ソ連邦を包囲していたのは、敵対する資本主義諸国家で、その支配層は、ソ連邦の経済発展をさまたげることを利益としていた。ソヴェトの国の工業化の困難は、この国が技術的・経済的に立遅れていたこと、基本建設の資金を蓄積することが困難なこと、工業の基幹要員の数が少ないことからきていた。国内の資本主義的分子と党内の降伏主義者との猛烈な抵抗は、この困難を倍加した。こうした状況のもとでソ連邦で社会主義的工業化をおこない、社会主義を建設することは、党、労働者階級、ソヴェト国民の偉業であった。

国の工業化に着手するに当たって、党はソヴェト国民の努力を、まず第一に、資金を見つけ、資金を蓄積するため財源をすべて十分に利用することにそそがせた。工業における大規模な基本建設は、何十億という投資を必要としていたが、ソヴェトの国は豊かではなかった。ブルジョア諸国は、重工業の建設資金を植民地・半植民地の略奪、戦争の賠償金、自国勤労者の容赦ない搾取によって手にいれたものである。ソヴェトの国には、社会主義制度とはあいいれない、こうしたものを財源にすることは原則としてできなかった。ブルジョア諸国の工業化でかなり大きな役割をはたしたのは、外債であった。ソヴェトの国はこれを当てにするわけにもいかなかった。ブルジョア諸国が外債の供与を拒絶したからである。古い工場の設備を根本的に更新し新しい工場を建設するには、国内で資金を見つけなければならなかった。

そしてこういう資金が見つかったのは、十月社会主義大革命の獲得物のおかげであった。

生産手段がプロレタリア国家の手に集中されたので、国の社会主義的工業化のために大きな予備を用いることができるようになった。国有工場、運輸、銀行制度、国営の対外貿易と国営の国内商業のもたらす利潤は、社会主義工業の発展にまわされた。国は、ツァーリの借款の利子やロシアに投下された外国資本家の資本の配当金として、八億ないし九億金ルーブリという巨額の金を年々金で支払う必要をまぬがれていた。

ソヴェト農民は、地主的土地所有が廃止された結果、借地料と土地購入代金を地主に支払う必要がなくなっていたので、いまでは自分たちの労働と資金・資材で国の工業化を助けることができた。農民は、労働者階級におとらずこれを利益としていた。なぜなら彼らは、農業機械と工業製品を是非とも必要としていたからである。

すべてこれらの資金蓄積源は、ソヴェト権力の手ににぎられていた。必要なことはただ、それをたくみに利用し、きびしい節約政策を実施し、不生産的な支出をなくし、諸機関の法外に膨張した定員を縮小し、節約された資金を国の工業化にむけることであった。課題は、労働生産性を引き上げ、生産を合理化し、工業製品の原価を引き下げるにあった。共産党は、まさにこれらの経済的課題の解決に全力をあげて取組み、労働者階級、全ソヴェト国民を社会主義工業の創出のためにふるい立たせたのである。

一九二六年四月、全連邦共産党（ボ）中央委員会と中央統制委員会は、蓄積を高めるために、機関、企業、団体で「上から下まで」きびしい上にもきびしい節約方策を実施するよう、全党組織と全勤労者に呼びかけた。国民はこの呼びかけに応じた。一九二六／二七経済年度に工業には約一〇億ルーブリが投下されたが、三年後にはすでに五〇億ルーブリ以上が投下された。ソヴェ

ト国民は、ドニエプル水力発電所、トゥルケスタン゠シベリア鉄道、「エフ・エ・ジェルジンスキー」トラクター工場その他のような大企業の建設に着手した。

重工業の建設はしっかりした基礎の上にすえられ、着実に進捗した。だがこれを妨害しようとしたのが社会主義の敵である、都市と農村の資本主義的分子であった。

国内の階級闘争の激化は、党内にも反映して、降伏主義者と反対派が頭をもたげた。主要な危険となっていたのは、トロツキー派とジノヴィエフ派であった。ジノヴィエフ、カーメネフ、その他の「新反対派」は、第一四回党大会で敗北をこうむると、トロツキー派は、トロツキー主義の降伏主義的な立場に公然と移った。一九二六年の夏、トロツキー派とジノヴィエフ派は、トロツキー派の政綱にもとづいて、反党ブロックに結集した。このブロックには、粉砕されたすべての反対派――「労働者反対派」、「民主主義的中央集権派」その他――の残党がくわわった。こうして、降伏主義者のブロックは、党から糾弾されたあらゆる反対派分子のたまり場になった。これら雑多な反党分子はみな、資本家階級の残党の利益を代表し、プロレタリアートの独裁の体制にたいする都市小ブルジョアジーと高級ブルジョア・インテリゲンツィアの不平不満を反映していた。彼らは階級敵の手先であり、敵対する資本主義的包囲の代弁者であった。

党とトロツキー゠ジノヴィエフ・ブロックとの原則的な意見の相違の根底には、依然として、ソ連邦で社会主義の勝利することは可能かどうかという、あの同じ問題があった。党は、プロレタリアートの独裁と労農同盟の強化とにもとづいて完全な社会主義社会を建設するために必要かつ十分なものがソヴェトの国には全部そろっているという、レーニンの遺訓を厳守していた。ソ連邦における社会主義の勝利をめざす党の基本方針にトロツキー゠ジノヴィエフ反党ブロック

は反対したのである。

中央委員会は、トロツキー派その他の降伏主義者に反対してレーニンの社会主義建設計画の遂行をめざす闘争の先頭に立った。党組織は、中央委員会の指導のもとに、降伏主義者とねばりづよく非妥協的にたたかい、国の社会主義的工業化という、奮闘努力を必要とする計画の遂行に大衆を奮起させた。この闘争で積極的な役割をはたしたのは、ア・ア・アンドレーエフ、カ・イェ・ヴォロシーロフ、エフ・エ・ジェルジンスキー、ア・ア・ジダーノフ、エム・イ・カリーニン、エス・エム・キーロフ、エス・ヴェ・コシオル、ヴェ・ヴェ・クイブィシェフ、ヴェ・エム・モロトフ、ア・イ・ミコヤン、ゲ・イ・ペトロフスキー、ペ・ペ・ポスティシェフ、ゲ・カ・オルヂョニキッゼ、ヤ・エ・ルズターク、エヌ・ア・スクルィプニク、イ・ヴェ・スターリン、エム・ヴェ・フルンゼ、ヴェ・ヤ・チュバーリ、エヌ・エム・シヴェルニク、イェ・エム・ヤロスラフスキー、その他のような、党の働き手と活動家であった。

党は、トロツキー派とジノヴィエフ派を、レーニン主義と手を切った、まぎれもない降伏主義者として暴露した。彼らはレーニンの工業化計画の実施に反対して、ありとあらゆる冒険主義的スローガンをもちだした。トロツキー＝ジノヴィエフ反党ブロックは、労農間の階級衝突と労農同盟の決裂は必至であると説いていた。反対派の指導者たちは、農民経済が社会主義の道をとおって発展する可能性のあることを否定した。危険だったのは、農民の農業税をふやし、工業製品の引渡し価格を引き上げるという、彼らの提案であった。トロツキー派とジノヴィエフ派の降伏主義的政策は、十月革命の獲得物を放棄し、プロレタリアートの独裁（ヂィクタトゥーラ）を破滅させ、ソヴェトの国に資本主義を復活させることにつうじていた。

トロツキー派とジノヴィエフ派は、分派とグループの自由をもとめ、党の統一に関する第一〇回大会のレーニン的決議の撤回をもとめていた。彼らは党内の規律をやぶり、革命的活動の数十年のあいだにつくりあげられた党機構を非難し、それと党員大衆とを対立させようとした。

対外政策の問題では、トロツキー派とジノヴィエフ派は、こともあろうに、帝国主義者の干渉の危険からソ連邦をまもる必要を否定した。彼らは、党指導部とソヴェト指導部とをにくむあまり、帝国主義者がソヴェトの国を攻撃したばあいには、背後からこれに打撃をくわえる用意をするまでになった。

トロツキー派とジノヴィエフ派は、コミンテルンを分裂させる道に踏みだした。彼らは反レーニン主義的な分派や共産主義運動の敵や裏切者で、コミンテルンから除名された者や、さらにコミンテルンとたたかっていた、公然たる反共団体・グループ・個人と結託した。

これが、トロツキー＝ジノヴィエフ・グループの降伏主義の本質であった。

中央委員会は、党の統一と国内での党の指導的役割とをくつがえそうとするトロツキー反対派と断固としてたたかうよう、党員と全労働者階級に訴えた。中央委員会は党が統一されているばあいにのみ、また民衆の唯一の指導者でプロレタリア独裁（ディクタトゥーラ）の唯一の指導者であるばあいにのみ、党は社会主義の勝利を確保できる、と強調した。中央委員会は、反党ブロックが分派活動をやめず、解散しないなら、ブロック加担者は党から除名されるだろう、と厳重に警告した。

だが、反対派は鳴りをひそめなかった。一九二六年の秋、トロツキー＝ジノヴィエフ反対派の指導者は、モスクワの「アヴィアプリボール」工場、レニングラートのプチロフ工場の党会議で、公然たる党攻撃をくわだてた。彼らは、党に新しい討論をむりじいしようとして、自派の政綱を

討議にかけた。党員たちは、この攻撃にこぞって反撃をくわえた。トロツキー派とジノヴィエフ派が党会議からあっさり追い出されたところもあった。党内と労働者階級のあいだで大敗をこうむったので、反党ブロックの指導者は中央委員会に上申書を出し、そのなかで自分たちの分派活動を非難した。だがそれは口さきにすぎなかった。実際には反対派は、独自の規律をもち、党費をおさめ、独自の非合法印刷所をもつ反レーニン党をひそかに組織しているところであった。党規約にしたがわずに、彼らは秘密の会議をひらいて、その席上で分派の政綱と党および党中央委員とたたかう戦術とを討議していた。

一九二六年の一〇月末から一一月初めにかけて、第一五回党全国協議会はそれまでの一年間の総括をした。この総括は、国民経済が困難を切りぬけながら、社会主義の道をすすんでいることを、明確に示していた。協議会は、国の経済で大工業の指導的地位が固まったこと、農業の振興と農業協同組合の発展で大工業の主導的な役割がいっそうつよまったことを指摘した。協議会は、党、労働者階級、勤労農民を国の工業化というレーニン的計画を実現するために奮起させた。

協議会は、トロツキー＝ジノヴィエフ反対派は党内のメンシェヴィキ的偏向であるとして、くわしい政治的評価をくだし、これ以上メンシェヴィズムのほうにそれていくならば、彼らは党から除名されることになろうと、反対派の連中に警告した。協議会は、トロツキー＝ジノヴィエフ・ブロックと断固としてたたかうよう、すべての党員に呼びかけた。

一九二六年一一月末から一二月中旬にかけて、コミンテルン執行委員会第七回拡大総会がひらかれた。この総会は、国際舞台でトロツキー主義を思想的に粉砕し、トロツキー派その他の修正主義分子を各国共産党から一掃する上で、特筆すべき意義をもっていた。総会は、反対派ブロッ

クに関する第一五回協議会の決議に賛同し、国際共産主義運動を分裂させようとするトロツキー派のあらゆるくわだてと断固としてたたかうよう、各国共産党に指令した。第一五回協議会と執行委員会総会で、トロツキー＝ジノヴィエフ反対派およびこれとたたかう方策について報告したのは、イ・ヴェ・スターリンであった。第一五回党協議会と第七回執行委員会総会との決定、レーニン的方針を擁護する党活動家の報告と発言は、レーニンの思想の旗のもとに党の隊列を結束させ、トロツキー派、その降伏主義と反党撹乱活動を暴露するうえで大役をはたした。

だがトロツキー派とジノヴィエフ派は、党の方針に反対する闘争をやめなかった。一九二七年、イギリス政府が外交関係と通商関係を断絶したのにともなって、ソ連邦の国際的立場が困難になったとき、トロツキー派は反党闘争をつよめて、いわゆる「八三名の政綱」を持ちだした。これは、党と労働者階級をあざむこうとする、偽善的な政綱であった。口さきではトロツキー派とジノヴィエフ派は党の分裂に反対し、国の工業化、農業の集団化に賛成していたが、実際には独自の地下の党をつくっていたし、国の工業化と農業集団化との政策を嘲弄していた。政綱には、党とソヴェト政府が外国貿易の独占をやめようと思っているとか、富農に政治的権利をあたえようと思っているとかいった、中傷的なデマがふくまれていた。まったく根も葉もないこの政綱を、反対派は何千部も自分の秘密の印刷所で印刷し、党の内外にばらまいた。党は、トロツキー＝ジノヴィエフ・ブロックの反党中傷声明を暴露した。勤労者は、トロツキー派の嘘八百を憤然としてしりぞけた。

何年というもの、トロツキー反対派は、党の統一と党指導部に打撃をくわえるために、国内の難局にいつも乗じてきた。反対派は党を討論クラブにしてしまおうとしていた。トロツキー派と

ジノヴィエフ派の反党行動にけりをつける必要があった。一九二七年一〇月の中央委員会・中央統制委員会合同総会の決定によって、反対派の頭目であるトロツキーとジノヴィエフは、党と党の統一とにたいする分派闘争のかどで、中央委員会から除名された。

一九二七年一〇月、中央委員会は第一五回大会の議事日程の問題についてのテーゼを発表し、これについての全党討論を告示した。討論集会は、党員が政治的に成長していること、彼らがレーニン的中央委員会を中心に団結していることを実証した。中央委員会の政策に賛成投票した党員は七二万四〇〇〇名であったのに、トロツキー派とジノヴィエフ派のブロックに賛成投票した者は、四〇〇〇名（一％未満）にすぎなかった。反党ブロックは粉砕された。党のレーニン的政策は勝利をおさめた。

十月社会主義大革命一〇周年を記念して、ソ連邦中央執行委員会は、党中央委員会の提案にしたがって、宣言を採択した。そのなかには七時間労働日に移ること、勤労者の福祉を向上させるための施策をいくつか取ることが述べられていた。トロツキー＝ジノヴィエフ反対派は国民の賛同した宣言に反対し、こうして自分たちの政策が反人民的なものであることをさらけ出した。

トロツキー＝ジノヴィエフ・グループの政治的破産、大衆からの孤立が明らかになればなるほど、彼らはますます反ソ闘争の深みにはまっていった。十月革命一〇周年記念日に、トロツキー派は反ソ行動に出た。レーニン主義のスローガンをかかげた大衆の盛大なデモンストレーションに対抗して、トロツキー、ジノヴィエフ、カーメネフをはじめとする一にぎりのトロツキー派は、ソヴェトの法律を無法にもおかして、モスクワとレニングラートの街頭で反党・反ソ的なスローガンをかかげてデモンストレーションをおこなった。国民のあいだには、トロツキー派にたいす

る憤激の波がもりあがった。

一九二七年一一月、中央委員会と中央統制委員会は、党の意志を体して、トロツキーとジノヴィエフを党から除名し、その他の反対派分子を中央委員会と中央統制委員会から罷免した。反対派の処置は、第一五回党大会の審議にゆだねられた。

3　国の工業化をめざすソヴェト国民の全力傾注。党と勤労者の大衆団体の活動の建てなおし

国の社会主義的工業化に成功することと、党組織の戦闘力を向上することとは、切っても切れない関連があった。第一四回大会の採択した党規約は、党内民主主義の振張と党員の積極性の向上に有利な環境をつくりだした。党中央委員会は、党指導のレーニン的規範と、党機関の選挙方式がまもられているかどうかをきびしく監視し、官僚主義の現われや、健全な批判を押えつけようとするくわだて、その他党内民主主義に違反する現象と断固としてたたかった。中央委員会と地方党組織の活動は、集団指導の原則、党内民主主義の進展にもとづいておこなわれていた。中央委員会総会、党委員会総会、党組織の活動分子、党細胞会議が定期的に招集され、その席上では党建設・国家建設・経済建設・文化建設の重要問題が討議された。中央委員会と党組織が接触する形態はますます多様になった。

党組織の注目の的になっていたのは、生産の合理化、労働生産性の向上、節約方策の実行、製品原価の引き下げ、という任務であった。党組織のなかには、大衆的な政治的カンパニアに没頭

していて、企業の生産活動と熱心に取組まず、経済建設の実際面をおろそかにしていた者もあったが、中央委員会はそうした党組織の活動に批判をくわえた。とくに重要だったのは、労働者大衆とじかに接触している職場党組織の活動を改善することであった。職場党組織は一九二四年には二〇〇〇あったが、一九二七年にはほぼ四〇〇〇あった。これを中心として多数の党外活動分子が生まれた。党の政治的影響力は高まり、党と大衆との結びつきは強まった。

党中央委員会は、党の社会的構成を改善し党のプロレタリア中核を広げる措置をとった。十月革命一〇周年記念にちなんで、労働者の大量入党アピールが発表された。党員採用は厳重に個別的におこなわれた。入党者は一〇万八〇〇〇名にのぼった。農村党組織の強化に役立ったのは、農業労働者や雇農や貧農のなかから、貧農グループやソヴェトや協同組合のなかで働いていた積極分子を入党させたことであった。

国の工業化は、勤労者の大衆団体を新しい課題に直面させた。ソヴェト、労働組合、コムソモール、その他の社会団体の活動をたてなおし、その活動を活発にすることが必要になった。党は、労働者階級のすべての大衆団体にむかって、「生産に目を向けよ！」というスローガンをかかげた。

党は、ソヴェトの活動を活発にする政策をとって、国家権力機関の活動を改善した。政治建設・経済建設・文化建設ではたすソヴェトの役割は、つよまった。国家統治には、労働者階級と勤労農民の大衆がますます幅広く引きいれられるようになった。ソヴェトの周囲には、党外活動分子が生まれてきた。ソヴェト代議員はこれまでより頻繁に選挙人に報告をするようになった。

一九二六年と一九二七年に、勤労大衆の積極性が高まり階級闘争が激化していたなかで、ソヴ

ェトの改選がおこなわれた。この改選は、都市と農村の勤労大衆にたいする党の影響力がまし、資本主義的分子の地歩がよわまっていることを示した。富農が中農からますます孤立していることは明らかであった。レーニンの指示にしたがって、党は国家機関を縮小してこれを安上がりなものにし、国家機関内の官僚主義的歪曲と不断にたたかった。

国民経済の改造に移るためには、労働組合の活動を改善する必要があった。労働者階級は数のうえで急増した。工業化がはじまってから二年のあいだに、労働者階級には二〇〇万人以上が流入した。労働組合には、大衆、とくに新しい労働者を教育して、彼らを社会主義建設に参加させる活動をつよめる必要があった。労働組合の活動は、プロレタリア民主主義を展開することによって改善された。労働者大衆を社会主義建設に、生産の管理に、労働生産性向上のための闘争に引きいれる重要な形態は、労働者の創意で生まれた生産会議であった。この会議は広く普及した。会議で討議されたものには、生産の状態、節約方策、手待ち時間の一掃、原価の引き下げ、労働生産性の向上、労働規律の強化の諸問題があった。党は、生産会議の経験を工業と運輸のすべての部門に普及させることにつとめた。

コムソモールの活動も活発になった。国の工業化のためにたたかううえでの独創的な企画のうち、コムソモールのおこなったものは少なくない。コムソモールは、そのなかから何万という生産合理化提案者と発明家を輩出させた。

大きな意義をもっていたのは、さらに、婦人を生産や積極的な社会活動に引きいれたこと、とくに民族共和国や少数民族地方で婦人を引きいれたことであった。労農婦人の代表者会議が広くおこなわれた。一九二七年一〇月、労農婦人第一回全国大会がひらかれた。同大会は、勤労婦人

の積極性と文化水準が向上したこと、婦人の政治的視野が広がり、党の事業、社会主義の事業に献身的であることを強調した。

国内で階級闘争が激化しているときにとりわけ重要だったのは、農村でプロレタリアの影響力をつよめることであった。ここでは、農民の大多数を占める中農の獲得をめぐって、労働者階級とブルジョア・富農分子とのあいだに激闘がおこなわれていた。党のかかげた「農村に目を向けよ！」というスローガンは、党組織によって着々と実施されていった。約二万一〇〇〇の細胞、二五万人以上の党員――これが農村における党の前哨であった。党は、党員を都市から農村に派遣するとともに、農村自体で育っていた新しい基幹活動家を抜擢した。農村の社会生活にはたす党員の役割はいちじるしく高まった。これを雄弁にものがたっていたのは、ソヴェト選挙の結果であった。村ソヴェトの議長では五人につき一人が、郷執行委員では半数が共産党員であった。

農民にたいするプロレタリアの働きかけは、数百万の労働者を擁する、都市の各種社会団体をつうじてもおこなわれた。農村で党の重要な支柱となったのは、労働組合であった。多くの労働者が農村とつながりをもち、そこに経営をもっていた。しかも農村自体にも二〇〇万人以上の労働組合員が働いていて、そのうちの一〇〇万人以上が農林業労働者であった。党は、農村の社会生活で労働組合のはたす役割を高めることにつとめ、ますます多くの労働者を農村後援活動に引きいれていった。当時後援団体には、約一五〇〇万人がくわわっていた。

農村を社会主義的に改造するためにたたかうに当たって、党は農民自身のあいだの勢力にもささえられていた。だがこの勢力は、これを結集し組織する必要があった。党の支柱になったのは、ソヴェト内の、また中農もくわわっていた協同組合内の、貧農グループであった。貧農の組織性

が向上したので、彼らは村の社会生活にますます強い影響をおよぼすようになり、富農と積極的にたたかった。

農村で党の忠実な助力者となっていたのは、コムソモールであった。社会主義の農村をめざす一〇〇万の若い闘士は、富農や全反ソヴェト勢力と勇敢にたたかうとともに、旧習固守や、前人未到の社会主義的な道にたいする疑惑ともたたかった。この点で重要な役割をはたしたのは、新聞であった。農民大衆を組織して党とソヴェト権力を中心として団結させる壁新聞の出ていないような郷は、一つもなかった。二〇万の軍勢に達する農村通信員は、富農のやみうちを恐れずに、社会主義の事業を勇敢にまもった。

党は、農村青年の政治水準と教育水準とを高めるために赤軍をも活用した。予備役になった赤軍将兵は、農村で大きな影響力をもっていた。村ソヴェト議長の半数と郷執行委員会議長の三分の二は、赤軍の訓練をへた人々であった。

党と党に指導される社会団体とのおこなう、政治活動と組織活動が改善された結果、勤労農民大衆は富農にたいする反撃をつよめた。労働者階級は、貧農に依拠しながら、中農との同盟を強化した。農民はますます、農村の各種共同経営に引きいれられていった。消費組合には農家の三八%が加入していたし、農業協同組合は農家のほぼ三分の一を含んでいた。レーニンの協同組合計画は着々と実行にうつされていた。

党は、個人農民経営から社会主義制度であるコルホーズ制度への大量移行を準備するために、農業協同組合を拡大する方針をとっていた。

4　国の社会主義的工業化の最初の成果。第一五回党大会と農業集団化方針。トロツキー＝ジノヴィエフ反党ブロックの粉砕

二年間のねばりづよい努力ののち、国の社会主義的工業化の最初の成果が現われた。古い工場の設備は更新され、新しい工場が建設された。一九二七年の末、農工業の総生産高は、戦前を上回った。

もっとも急速に発展していたのは、大工業であった。一九二六／一九二七経済年度には、大工業の生産高は前年度を一八％上回った。ソ連邦大工業のこの記録的な成長率は主要資本主義国の工業成長率を何倍も凌駕していた。

大工業の振興につれて社会主義部門は国民経済でますます主導的な役割をはたすようになった。社会主義部門の割合は、一九二七年の末には工業生産の八六％になっていたが、私的部門は一四％に低下していた（大部分が私的経営者ににぎられていた製粉業をのぞいて）。工業化が社会主義的な性格をおびていることが、実際に立証された。資本主義的分子は商業から駆逐されつつあった。私的経営者の割合は、小売商品売上げ高では一九二四／一九二五経済年度の五三％から一九二六／一九二七経済年度の三五％にへり、卸売商業では九％から五％にへった。

国民所得は一九二六／一九二七経済年度に前年度より一一％ふえた。アメリカ、イギリス、ドイツ、その他の先進資本主義国の国民所得の年平均伸び率が二―四％をこえていなかったことを

考えるなら、ソ連邦の国民経済がどんなに急テンポで発展していたかが、明らかになろう。ソヴェトの国は、共産党の指導のもとに、国民経済から資本主義的分子を駆逐しながら、社会主義にむかって自信にみちて、足早やに前進していた。

同時に党を憂慮させていたのは、国民経済のなかで最大の、きわめて重要な部門である農業が立遅れていることであった。全体としては農業の総生産高は、戦前のそれを上回っていた。農業の基本的な部門である穀作部門の総生産高は、一九二六／一九二七経済年度には一九一三年の総生産高の九五％になっていた。これに反して、穀物の商品化率は、戦前の二六％にたいして、一三・三％にすぎなかった。

商品穀物の生産がこのように減少したのは、十月革命の結果、農村で地主の大所有地が一掃され、戦前にはもっとも大量の商品穀物を供給していた富農経営が大幅に減少したためであった。以前地主は、商品穀物全体のなかの二億八一六〇万プード（二二％）を供給し、富農は六億五〇〇〇万プード（五〇％）を供給していたのである。

ソヴェト時代に穀物の主要生産者になっていたのは、中貧農経営であった。一九二七年にこれらの経営は戦前を上回る穀物を生産した（二五億プードの代わりに四〇億プード）が、商品穀物は四億六六〇〇万プード（七四％）しか供給しなかった。ソフホーズとコルホーズはその当時八〇〇〇万プードの穀物を生産したが、商品穀物全体の六％しか供給していなかった。富農経営は、一九二七年に六億一七〇〇万プードの穀物を生産し、一億二六〇〇万プード（二〇％）を売渡した。

だが、地主経営や富農経営では商品化率が高かったのに、一九二七年に主な穀物保有者であっ

た貧中農経営では商品化率は低く、自分の生産する穀物のわずか一一・二%しか売渡さなかった。こうした状態では穀作農業は、労働者階級と都市人口とが増大したためふえてきた、国の穀物需要を充たすことができなかった。

工業の発展では大成功がおさめられたが農業は大幅に立遅れているというのが、第一五回党大会直前の経済情勢であった。大会は一九二七年一二月二日から一九日にかけてひらかれた。当時党内には党員が八八万七〇〇〇名、党員候補が三四万九〇〇〇名いた。大会は、中央委員会の報告、中央統制委員会——労農監督部の報告、五ヵ年計画作成に関する指令、農村における活動の問題、反対派の問題その他を討議した。報告をおこなったのは、イ・ヴェ・スターリン、エス・ヴェ・コシオル、ゲ・カ・オルヂョニキッゼ、ゲ・エム・クルジジャノフスキー、その他であった。

大会は、中央委員会の政治活動と組織活動に賛同した。対外政策の分野では、大会は、終始一貫平和のためにたたかうというレーニン的方針を遂行すること、すべての国の勤労者との国際的連係を固めること、ソ連邦の防衛力を高めることを、中央委員会に委任した。国内政策の分野では、大会は、引きつづき国の工業化の速度をゆるめないこと、農業を社会主義的に改造することによって農業を振興することに特に気をくばること、資本主義的分子を一掃する方針を堅持して、彼らにさらに断固たる攻勢をとることを、指令した。

大会は、農業の発展が遅々としている原因を明らかにした。工業は大規模で集中されたものであったのに、農業は依然として小規模で細分されたものであった。大工業の基礎は生産手段の社会的所有で、その発展は、国民経済における社会主義の地歩を強固にし、資本主義的分子の絶滅

のぞけば)。社会主義的工業は、計画原則にしたがっていたのに、農民の小商品経営は、市場の自然成長性に左右されていた。大工業は新しい技術をたえず供給され、拡大再生産の原則にしたがって発展していた。農民経営は、原始的な技術と手労働にもとづいていて、発達は遅々としており、しばしば単純再生産すら保障していなかった。

一九二七年ごろ、細分された小規模な農民経営は、労働生産性をそれ以上高める能力を、大体において出しつくしていた。農村には、農民経営の細分過程がつづいていた。これらの経営は最小限の商品生産物しか供給しなかった。とりわけ穀物ではそうであった。農業の発展は、年を追ってますますおそくなり、社会主義的工業の成長率にますます立遅れていった。その結果、都市住民に農産物を供給し、工業に原料を供給するのに障害を生んだ。農産物は輸出でとるにたりない割合しか占めず、国家の予備をつくるのに支障をきたした。農業の立遅れは、社会主義建設全体の進展と国防力の強化のブレーキになった。

第一五回党大会は、この問題をあらゆる面から討議して、農業の集団化を広くおこない、農業で新しい技術にもとづく大規模な社会主義的生産に移っていく、という決定を採択した。全戦線にわたる社会主義の攻勢を準備するという課題がかかげられた。

農業の集団化なしには、社会主義の勝利に国をみちびき、幾百千万の勤労農民から富農への隷属と貧困と無知を取除くことはできなかった。党は、ソ連邦に社会主義を建設するレーニンの計画を指針とし、レーニンのすばらしい協同組合計画を、彼のつぎのような有名な指示をよりどころにした。

「われわれが小農民国に生活しているかぎり、ロシアの資本主義には、共産主義よりも堅固な経済的基盤がある。これを銘記していなければならない。都市生活と比較して農村の生活を注意ぶかく観察した者ならだれでも、われわれが資本主義の根を引きぬいていないこと、国内の敵の土台、基礎をくつがえしていないことを知っている。国内の敵は、小経営にささえられており、これをくつがえすためには一つの手段しかない——それは、農業をもふくめて国の経済を、新しい技術的基盤に、近代的大規模生産の技術的基盤に移すことである」（全集、第三一巻、五二三—五二四ページ）。

「農民経済がさらに発展することができるものなら、さらにいっそうの移行をも確実に保障する必要がある。だが、さらにいっそうの移行とは、もっとも不利でもっともおくれた、小規模な分散した農民経営が、徐々に統合して、共同の大規模な農業経営を組織するということにならざるをえない」（全集、第三二巻、三〇六ページ）。

大会は、コルホーズを広く建設することを焦眉の課題と認めるとともに、農民をコルホーズの道に移らせることは、必ず勤労農民自身の自発的な同意をえておこなわなければならない、とはっきり指摘した。同時に大会は、ソフホーズを強化し、発展させるよう指令した。

大会は、農業の立遅れをなくす唯一の道はレーニンの協同組合計画を遂行することであり、コルホーズとソフホーズにもとづいて農村の社会関係を改革することである、と強調した。プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）のもとでは、農業協同組合は、社会主義工業が農村をひきいてゆくのを助ける。協同組合化でおさめられた成果は、近い将来すべての貧農と大多数の中農を協同組合に引きいれるという課題をかかげることを可能にしていた。農業協同組合は、農機具賃貸所を広く網

の目のように設置して貧中農に作業供与することにより、また土地の共同耕作のために有利な条件で貧中農に機械を提供することによって、彼らが富農への隷属を脱するのを助けた。

大会は、労農同盟が強化されたので、貧中農全体と協力して、富農と個人農に今後さらに系統的に、根気づよく制限をくわえ、彼らを駆逐することに着手する時がきている、という結論に達した。

社会主義建設の展開、長期にわたる予定の巨額の投資――すべてこうしたことは、国の経済の計画的指導をさらに高い水準に引き上げることを必要としていた。党は国民経済の計画化についてかなりの経験をつんでいた。一年ごとの目標数字から数年にわたる長期計画に移ることができるようになった。これは、党のレーニン的経済政策のすばらしい勝利であった。

社会主義を建設する計画を論じた晩年の諸論文のなかで、レーニンはこう書いている。歴史上はじめて「根本的な社会的変化を生じさせるのに必要な期間をきめる」ことができるようになった、「われわれには、五年間でなにをなしとげることができるか、なにがはるかに大きな期間を必要とするかが、はっきりわかる」と(全集、第三三巻、五〇四ページ)。

第一五回大会は、国民経済発展第一次五ヵ年計画の作成に関する指令を採択した。

第一次五ヵ年計画の基本的な経済的課題は、終始一貫重工業を発展させること、重工業にもとづいてすべての国民経済部門の急速な成長、国民経済にしめる社会主義部門の比重の向上につとめること、国民経済の全戦線にわたって社会主義が資本主義の残存物にたいして攻勢に移ることを目標にしながら、資本主義的分子をいっそう断固として駆逐することにあった。

第一次五ヵ年計画に関する指令が採択されたことは、ソヴェト国民経済に計画原則を確立する

うえでの新しい段階を意味していた。この指令によって、ソ連邦における大規模な社会主義的改造の期限と速度が具体的にさだめられたのである。

第一五回大会の目標の一つは、党の統一を強化するためにたたかうことであった。大会の選出した委員会を代表して『反対派について』という報告をおこなったのは、ゲ・カ・オルヂョニキッゼであった。大会はこう指摘した。トロツキー＝ジノヴィエフ反党「反対派は、思想的にはレーニン主義と手を切り、メンシェヴィキ的グループに変質し、国際ブルジョアジーと国内ブルジョアジーとの勢力に降伏する道にふみだし、客観的にはプロレタリア独裁（ディクタトゥーラ）体制にたいする第三勢力の道具になっている」と（『ソ連邦共産党決議集』第四巻、一九七〇年刊、二〇—二一ページ）。反対派は、党とソヴェト権力にたいして狂暴にたたかう階級敵の道具になっていた。大会は、トロツキー反対派に属してその見解を宣伝することは、党の隊列にとどまることと相容れない、と宣言した。

大会は反対派が党規律に無法にも違反しただけでなく、ソヴェトの法律で許される限界をふみこえて、分派活動から反ソヴェト的なトロツキー党の結成に移ったことを確認した。以上を考慮して、大会は、反党的反対派の頭目であるトロツキーとジノヴィエフを党から除名するという、中央委員会と中央統制委員会の決定に賛同し、トロツキー＝ジノヴィエフ・ブロックの積極的な活動家七五名——カーメネフ、ピャタコフ、ラデック、ラコフスキー、サファロフ、スミルガ、イ・スミルノフ、ラシェヴィチその他——を党から除名した。二三名からなるサプロノフ派も、明らかに反革命的なものとして、党から除名された。

大会は、「トロツキー反対派の明らかに度しがたい分子を全部」その隊列から一掃するよう、

党組織に命じた。同時に大会は、反対派の普通の加担者にたいしては思想的に働きかけるあらゆる措置を講じて、トロツキー主義の降伏主義的な立場をすててレーニン主義の道にふみ出すよう、彼らを説得することを、中央委員会と中央統制委員会に委任した。

第一五回大会は、党規約にたいする重要な補足を採択した。「統制委員会の質問に正直に回答しない党員は、即時党から除名される」と（『ソ連邦共産党決議集』第四巻、一九七〇年刊、七四ページ）。こうした補足が必要になったのは、反対派の連中が党機関に呼びだされたとき、トロツキー派の反党活動について正直な証言をしない場合が往々あったからである。

全連邦共産党（ボ）第一五回大会は、農業集団化の大会として、全戦線にわたる社会主義の攻勢を準備した大会として歴史に記されている。大会の決定は、党組織と労働者階級と全勤労者の幾百千万の大衆の賛同を得た。これらの決定は、ソ連邦に社会主義を建設する上での、また共産党の統一を強化する上での新しい段階を反映していた。

大会は、トロツキー主義にたいするレーニン主義の多年の闘争の決算をつけ、トロツキー主義を思想的に決定的に撃破し、もっとも積極的なトロツキー分子を党から追放した。

大会後まもなく、トロツキー＝ジノヴィエフ反対派に加担して党から除名された多数の者が、トロツキー主義と手を切って復党をねがった上申書を出しはじめた。これまで、反対派分子がこうした上申書を出したあと、反党行動の再開されるのが常であったことを考慮して、党はこれらの上申書に気を許さなかった。党は、上申書を出した者の復党の条件として、思想的・組織的に完全に武器をすてること、自分の見解を反レーニン主義的なものとしてきっぱり公然と非難すること、党の、党大会や党中央委員会の決定を擁護する義務を負うことを要求した。上申書を出し

た者には、六ヵ月間の試験期間がさだめられた。そして、かつての反対派分子の言動が彼らの負った義務——党の規約と綱領、党の規律をまもり、党の基本方針を実践すること——にかなっていると確認したのちにはじめて、党は、除名された者の一人びとりについて復党問題を個別に審査した。

除名された者の大多数は、これらの義務をはたして、党員の資格を回復した。彼らの多くは、党内で誠実に働き、社会主義の建設のための闘争にくわわった。

レーニン主義の不倶戴天の敵であるトロツキーは、武器をすてなかった。彼は、一九二九年、反ソヴェト活動のかどで国外に追放されたが、ここでソ連邦、全連邦共産党（ボ）を攻撃する中傷カンパニアにただちにくわわった。

党は、党隊列の統一を油断なくまもり、ソ連邦における社会主義の勝利のためにたたかう、明確なレーニン的綱領で人民大衆を武装させ、この勝利を準備した。

5　全戦線にわたる社会主義の攻勢の準備。右翼的偏向にたいする党の闘争。第一次五ヵ年計画の採択。大衆的なコルホーズ運動の始まり

第一五回大会の決定を遂行しながら、またレーニンの社会主義建設計画にもとづいて、党は、国を社会主義的に工業化するためのたたかいと農業の大量集団化を準備するためのたたかいを、新たな勢いでくりひろげた。

国民経済の社会主義的改造が進展したことは、国内の資本主義的分子の頑強な反抗をまねき、世界ブルジョアジーに深い不安をいだかせた。帝国主義者と国外に逃亡した地主・工場主・銀行家は、ソ連邦での社会主義建設を挫折させるための激闘ではネップマンと富農が自分たちの支柱になると考えていた。資本主義的分子は、一九二八年に住民の四・六％を占めていた。彼らは国内経済である程度の役割をはたしていた。ネップマンの手中には、小売商品売上高のほぼ四分の一、鉱工業生産高のほぼ六分の一がにぎられていた。富農は商品穀物の五分の一を生産していた。国民経済でネップマンと富農の占める割合はたえず低下してはいたが、彼らの絶対的増加はいまなお見うけられた。彼らは小商品生産——家内工業と個人農民経営——に根をはっていた。資本主義的分子、とくに富農は、農民・手工業者・家内工業者・事務員の一部に影響をおよぼしていた。

国内の階級闘争は激化した。敵は、一九二八年の穀物難に乗じようとした。穀作農業の立遅れにくわえて、ウクライナ南部と北カフカースに不作が生じた。ネップのもとで成長していた富農は、大量の貯蔵穀物をもっているのに、ソヴェト権力のきめた価格でそれを国家に売渡すことを拒否した。彼らは、余剰穀物を売渡した中農にテロをくわえようとした。富農は、コルホーズ建設をよわめ、くつがえそうとやっきになった。彼らはコルホーズに害をくわえ、穀物収納所に放火し、農村の党やソヴェトの働き手を暗殺した。

党とソヴェト権力は、農村で階級的政策を堅持し、大衆の支持にささえられて、富農の反抗をうちやぶった。富農にたいしては非常措置がとられた。余剰穀物を隠匿した富農は裁判にかけられ、その判決によって穀物は没収された。そのさい、没収された穀物の四分の一は貧農に貸付け

られた。穀物調達に当たっては、自主割当ての方法が用いられた。農民には、穀物調達計画を個個の経営に自分で割当てる権利があたえられた。こうして、穀物獲得のたたかいに、農村の貧中農大衆が引きいれられた。彼らは、富農に対抗して、党組織やソヴェト機関を中心に団結した。ソヴェト機関や協同組合機関からは、降伏主義的イデオロギーにそまって、富農と「あらそう」つもりのない堕落分子が追い出された。

これらの措置はみな、穀物調達の成功にあずかって力があった。一九二八年の末までに、国家は十分な穀物予備をつくりあげた。富農の反抗の鎮圧はソヴェト権力を固め、農村における社会主義の地歩をつよめた。

一九二八年と一九二九年の穀物調達と作付カンパニアのさい、農村の党組織、国家機関、勤労者の社会団体はその活動を活発にした。共産党員は、富農のおどしを恐れず、階級的政策を実行しながら、穀物調達計画を遂行するために積極的にたたかった。しかし、一部のソヴェト機関と党組織は行き過ぎをおかして、貧中農の一部に、富農にむけた非常措置を適用した。中央委員会は、党方針のこの歪曲を手きびしく非難し、事態をただした。

穀物問題を解決することは、もっとも重要な課題の一つであった。党中央委員会と政府は、国家の利益と勤労農民の個人的利益とを正しく結びつけるというレーニン的原則にしたがって、この問題の解決に取組んだ。一九二八年四月の中央委員会・中央統制委員会合同総会は予約買付け（国家機関および協同組合機関と農民経営との契約関係）によって農民経営に交付される前渡金の額を一億三五〇〇ルーブリにふやし、農業発展のための支出総額を七億一七〇〇万ルーブリにふやすことを決定した。新しい大規模な穀物ソフホーズがつくられた。これらのソフホーズは、

五年後には毎年約一億プードの商品穀物を国に供給することになっていた。ソフホーズは、農業を社会主義的に改造する拠点になった。穀物のためのたたかいは、工業化のため、ソ連邦に社会主義を建設するためのたたかいの構成部分であった。

富農の必死の反抗は、隠れていた敵対グループが資本主義を復興させるためにたたかうのをはげました。一九二八年の初め、ドンバスのシャフチ地区その他の地区でブルジョア専門家の大がかりな妨害組織が摘発された（「シャフチ事件」）。旧専門家の大多数は国民経済のいろいろな部門で誠実に働いていたが、「シャフチ事件」は、国を工業化し社会主義を建設するのを失敗させようとしている妨害分子・サボタージュ分子もいることを明らかにした。数年のあいだ、カムフラージュした白衛派である、ブルジョア専門家の一団は、企業の旧所有者――ロシア内外の資本家――や外国諜報機関の指図にしたがって、ひそかに破壊活動をおこない、ドンバスの石炭産業を破壊しようとしていた。妨害分子は、竪坑を爆破したり水びたしにしたりし、金のかかる設備をだめにしたり、発電所に放火したり、国民の基本建設用の資金をわざとむだ使いしたりした。妨害組織の一味は、ドンバスの炭鉱や発電所には不向きなことがはっきりしている設備を外国で買入れた。とくに危険であったのは、妨害分子が炭鉱労働者の生活状態を悪くしようとしたことである。彼らは賃金を引き下げ、住宅の建設を妨害し、坑内の保安規則に違反して、炭鉱労働者の生命をおびやかした。これらはみな、労働者の不平不満をあおり、労働者を党とソヴェト権力に反抗させるためであった。

妨害分子の狙いは、ソ連邦の経済力と防衛力をよわめ、帝国主義国家の干渉に都合のよい状況をつくりだすことであった。摘発されたシャフチ妨害分子のなかには、元の大資本家や貴族が三

○○名近くいた。

「シャフチ事件」は、ブルジョア専門家にたいする党員経営活動家の革命的警戒心がにぶっていたこと、ドンバス労働者の大衆団体、まず第一に労働組合の活動がまずく、炭鉱労働者の不平に耳をかたむけていなかったことを裏書きした。

「シャフチ事件」にともなって、人民から出て、人民と固く結びつき、現代の科学技術の水準に達した、新しいソヴェト技術インテリゲンツィアをつくり出す課題がいっそうさしせまったものになった。ボリシェヴィキ経営活動家が、技術を習得して、鉱工業を正しく管理し、ブルジョア専門家の仕事ぶりを監督するべきであった。短期間に自分の技術インテリゲンツィアをつくりだすのは、並はずれて面倒でむずかしかった。

党は、基幹要員の養成に自信をもって取組んだ。高等工業学校と職業技術学校の網の目が拡張され、それらの学校内の労働者中核と共産党員の数は増大した。高等工業学校には、党やソヴェトや経営や労働組合内での活動という訓練をへた、数千人の党員（「党員千人組」）が派遣された。夜間教育制度と通信教育制度が拡張された。先進的な労働者は、高等工業学校や職業技術学校をおえて、ソヴェト技術インテリゲンツィアを補充した。

国民経済を改造するには、社会主義建設上の欠陥にたいする批判を広くおこなうことが必要であった。中央委員会の特別なアピール『全党員に、全労働者に訴える』（一九二八年六月）にはこう言われていた――

「自己批判――『だれはばからず』上から下への、下から上への批判をおこなうことは、当面の中心スローガンの一つである」。

党は、批判と自己批判を、活動全体を改善し、党の隊列の統一を固め、妨害分子・降伏主義者・官僚主義者を、つまりあらゆる異分子を暴露する手段とみていた。批判と自己批判は、党の基本方針のためのたたかいに大衆を政治的に動員する手段であった。同時に中央委員会は、経済指導や党指導を悪意をもって、十把一からげにけなしたり、その信用をおとさせようとすることには断固として反対し、批判と自己批判のスローガンを経営やソヴェトの働き手を攻撃する手段にすることや、反党分子がこのスローガンを党精神と党規律反対に逆用することに反対した。

社会主義的改造上の困難や、社会主義の攻勢の結果当然階級闘争の激化したことは、小ブルジョア住民層のあいだに動揺を生んだ。これは党内にも反映して、ブハーリン、ルイコフ、トムスキーをはじめとする右翼降伏主義者の一派が生まれた。早くも一九二五年に、ブハーリンは「裕福になれ！」というスローガンをかかげた。このスローガンは、農村の富農経営を支持することを意味していた。だが党が主要な危険としてトロツキー派やジノヴィエフ派とたたかっていたときには、右派は自分と党との意見の相違を口に出さず、トロツキー派との闘争にくわわりさえした。だが党が富農にたいして断固たる攻勢に転じるとともに、右派の指導者は党の政策に公然と反対した。口先ではソ連邦に社会主義を建設することは可能であるとみとめながらも、右翼日和見主義者は、実際には、重工業発展政策に反対していた。彼らは急速な工業化に異議を唱えた。

右派は、社会主義が全戦線にわたって攻勢を展開し、国民経済内の資本主義的分子を一掃し、富農に攻撃をくわえることに反対だった。彼らは、階級闘争が下火になり富農が社会主義に平和的に更生する、という「理論」を説いた。彼らは、農村が社会主義にすすむ大道が、レーニンの教えているように、コルホーズを最高の形態とする生産協同組合であることを、みとめようとし

なかった。右派は、農村を社会主義の軌道に移すことは購買・販売協同組合をつうじてのみ可能である、と考えていた。彼らは、市場の自然成長力の「手をほどき」、富農経営にたいする制限をすべて撤廃し、資本主義的分子に譲歩するよう提案した。

こうして、右派は実際には、ソ連邦に社会主義を建設することが可能なことを否定したのである。彼らは、困難に屈服するイデオロギーを党内に広め、都市と農村の富農・資本主義的分子との協調をめざしていた。彼らの立場が資本主義の復活をもたらすのは必至であった。中央委員会は、右翼降伏主義者との断固たる闘争に党と労働者階級を奮起させた。彼らは、党内の主要な危険となり、国内の反ソヴェト勢力と包囲する資本主義との代弁者になっていたからである。

全連邦共産党（ボ）が社会主義の勝利をめざし、党の基本方針のために、あらゆる偏向に反対して非妥協的にたたかったことは、国際共産主義運動によって完全に支持された。一九二八年八月、モスクワで共産主義インタナショナル第六回大会がひらかれた。大会は、ソ連邦における社会主義建設の成果を強調し、この成果が国際プロレタリアートの革命的な地歩を固める上で、また全世界で革命運動が発展する上で、重要な役割をはたすことを強調した。

大会は、国際情勢にマルクス＝レーニン主義的な評価をくだした。資本主義諸国間の対立の激化とこれら諸国内部の階級対立の激化、植民地・半植民地の民族解放運動の成長、資本主義世界とソ連邦との対立の激化——すべてこれらは、資本主義の安定をさらにぐらつかせ、世界経済恐慌を近づけることになった。資本家は、この恐慌を未然に防ぐ方法を、植民地再分割のための新しい戦争と対ソ戦争にあると考えていた。

大会は、新しい戦争のおきる危険があることを系統的に説明すること、平和をまもるために断

起の蜂起固としてたたかうこと、ソ連邦を擁護すること、帝国主義的奴隷制にたいする植民地人民の蜂起を支援すること、とくに中国革命を支援することを、各国共産党に呼びかけた。

大会は、全連邦共産党（ボ）とコミンテルン内でのトロツキー派の反革命的、メンシェヴィキ的活動を糾弾し、全連邦共産党（ボ）その他の共産党の隊列から彼らを除名したことを正しいとみとめた。大会は、カムフラージュしたトロツキー派の残党とも、右翼降伏主義者とも、二つの戦線でたたかうよう、各国共産党に呼びかけた。ブハーリン派もふくめて、右翼日和見主義者は、資本主義の安定の改良主義的評価におちいっていた。彼らは、資本主義の根本的矛盾をごまかし、世界経済恐慌の接近の必至なこと、資本主義諸国の労働運動と植民地・従属国の民族解放闘争との新たな革命的高揚の必至なことを否定していた。大会は、共産党の隊列内の右翼日和見主義が、第二インタナショナルの改良主義と結びついて、国際共産主義運動内の主要な危険になっている、と指摘した。

第六回大会はコミンテルンの綱領と規約を採択し、両者は、国際共産主義運動を強固にし発展させる上ですぐれた役割をはたした。大会の諸決定は、共産党のレーニン主義的統一をつよめるのに役立ち、大衆を資本主義反対の闘争に奮起させるのに役立った。

全連邦共産党（ボ）とコミンテルン内の右派は、手きびしい批判をうけたにもかかわらず、引きつづき反レーニン主義的な立場を固執していた。彼らは、反党分派闘争をおこない、モスクワ委員会の指導者（ウグラノフその他）を抱きこんで、モスクワの党組織と党中央委員会とを対立させようと計った。だが中央委員会の呼びかけに応じて、モスクワのボリシェヴィキは、党のレーニン主義的統一に無法にも違反して党規律をやぶった右翼分派主義者に一斉に反撃をくわえた。

一九二八年一一月の中央委員会総会は、主要な危険である、公然と日和見主義的な右翼的偏向と断固としてたたかうよう呼びかけるとともに、トロツキー主義との闘争もよわめてはならない、と指摘した。党内の日和見主義的偏向と二つの戦線で非妥協的にたたかい、これらの偏向と協調する態度ともたたかうこと――これが中央委員会総会の指令であった。

ブハーリンは、右派を代表して、カーメネフを介してトロツキー派と連絡をとり、中央委員会と中央委員会政治局の政策を変更させるために、彼らと秘密の話合いをおこなった。右派の指導者は、中央委員会に圧力をかけ、農村の富農と都市の資本主義的分子に譲歩させようと試みた。党は右派の問題をあらためててがけなければならなかった。一九二九年四月の中央委員会・中央統制委員会合同総会と第一六回党協議会は、右派の政治的見解を党の基本方針と相いれないものとして非難し、彼らがトロツキー派とおこなった秘密の分派的話合いを非難した。総会は、ブハーリンとトムスキーを責任のある部署から解任し、中央委員会の決定に違反しようと再度試みたばあいには、政治局から即時罷免する、と両者に警告した。

だが右派は党の道にふみ出さなかった。彼らは、党とそのレーニン的指導部に新たな攻撃をかける準備をしているところであった。

党は、中央委員会の指導のもとに、右派の降伏主義的イデオロギーと労働組合運動内での彼らの反党活動とを暴露した。成長していた活動分子にささえられて、党は、労働組合機関内の労働組合主義分子・官僚主義分子を一般組合員から孤立させ、社会主義の事業に忠実な新しい働き手を下から抜擢して、労働組合内の指導的な活動をこれにまかせることができた。

中央委員会は党の基本方針に反対する右派にたいしてさらに断固たる措置をとらざるをえなか

ることは彼らが党内にとどまることと相いれないものとみとめた。右派の指導者――ブハーリン、ルィコフ、トムスキー――にかんして、総会は、ブハーリンを右翼降伏主義者の音頭取りであり指導者であるとして政治局から罷免し、ルィコフとトムスキーに厳重な警告をあたえた。

中央委員会のこの決定のあと、右翼降伏主義者の指導者たちは、自分の誤りと党の基本方針の正しさとをみとめる上申書を提出した。だが彼らは、この方針を実行するために積極的にたたかわず、傍観的な立場をとっていた。

ソヴェト時代になってから一二年以上、党は、レーニン主義のために、トロツキー派、右派、民族主義的偏向者、その他の降伏主義者にたいしてねばりづよい、非妥協的なたたかいをおこなってきた。この闘争は、多くの時間と精力をついやさせたが、この闘争の教訓をくんで党の基幹活動家が成長し強化し、党組織がきたえあげられた。彼らは、レーニンの社会主義建設計画をしっかり擁護し、国の工業化、農業の集団化のために、文化革命、国民の福祉の不断の向上のためにたたかった。

一九二九年四月にひらかれた第一六回党協議会は、社会主義建設の新たな盛りあがりをめざして党と国民を奮起させた。協議会の主な議題は、国民経済発展五ヵ年計画（一九二八／二九―一九三二／三三年度）、農業振興策、官僚主義との闘争の成果と当面の課題、党の粛清であった。

協議会は、五ヵ年計画の「最適」案を採択した。こうして右翼日和見主義者の最小限主義的方針はしりぞけられた。これまでの五年間の投資は二六五億ルーブルであったのに、今度の五年間の投資は総額六四六億ルーブルときめられた。鉱工業生産高は二・八倍に、重工業生産高は三・

三倍にふえる予定であった。鉱工業総生産高に占める社会主義部門の比重は、九二％に高まる予定であった。あらゆる形態の農業協同組合に統合される農民経営の数は、八五％にふえる予定であった。計画は、農民経営総数の約六分の一を集団化し、コルホーズの作付面積を二〇〇〇万ヘクタールにし、コルホーズとソフホーズの商品穀物を国の商品穀物全体の四三％に高めることを予定していた。

第一次五ヵ年計画は、全戦線にわたって展開された社会主義の攻勢のプログラムであった。この計画は、社会主義経済の基礎を建設し、都市と農村の資本主義的分子を完全に絶滅することをめざして彼らを駆逐することを見こんでいた。計画の採択されたことは、社会主義社会の建設にたいする党の指導がいっそう高い段階にのぼったことを意味していた。

協議会の決定は、都市と農村の結合の生産的形態を強固にするものであった。決定は、貧農だけでなく中農もいだいていた、集団経営への念願を支持した。コルホーズに物質的・財政的援助をあたえ、農機具と基幹要員をこれに供給することがさだめられた。

協議会は、官僚主義との闘争に大きな注意をはらった。レーニンは、この闘争が長期かつ頑強なものになるだろう、とおしえている。協議会は、この面でいくらかの成果がおさめられたことを指摘して、国家機関内の官僚主義との闘争をつよめるよう指令し「党自体の内部、党機関の内部の官僚主義分子と断固として、あくまで、ねばりづよくたたかう」必要がある、と指摘した（『ソ連邦共産党決議集』、第四巻、二二六ページ）。協議会は、批判と自己批判が官僚主義とたたかう重要な方法である、と強調した。

協議会は、大衆の創造的積極性を極力発揮させることを目標におこなわれた。協議会は、第一

次五ヵ年計画の遂行をめざす大衆的な運動として社会主義競争をくりひろげることについて、『ソ連邦のすべての労働者と働く農民に訴える』というアピールを採択した。

「競争と五ヵ年計画の間には」とアピールにはのべてある。「切っても切れない関連がある。これらの課題の遂行を目標として、ソ連邦のプロレタリアートは、プロレタリア独裁の階級敵にさらにすすんだ攻撃にうつる」(『ソ連邦共産党決議集』、第四巻、二五二—二五三ページ)。

協議会は、全党粛清と党員および党員候補の点検とをおこなうことを決定した。粛清の基本目標は、異分子や堕落分子を党から取除き、党組織をいっそう強化し、共産党員の前衛としての役割を高めるにあった。

粛清の結果、党からは党員の約一割が除名されたが、これは役に立たない異分子であり、堕落分子であった。粛清は、何千名という先進的な労働者、農業労働者、貧農、積極分子の中農が入党するのをうながした。党はいっそう統一した強固で権威あるものになった。

一九二九年は、社会主義建設のすべての戦線で大転換のおこった年として、ソ連邦の歴史に記されている。工業では労働生産性の向上に根本的な転換が生じた。社会主義的蓄積の問題は、大体において解決された。農業では、農民の大多数がコルホーズの道に転換した。

五ヵ年計画は、労働者階級の幾百万の大衆に、全勤労者に力づよい意欲をおこさせた。企業でくりひろげられた競争は、社会主義的な労働態度を示す、すばらしい模範を生んだ。労働者階級の大衆のあいだには「五ヵ年計画を四ヵ年で!」という有名なスローガンが生まれた。

この点で大きな役割をはたしたのは、レーニンの論文『競争をどう組織するか?』であった。

この論文は、一九二九年一月に『プラウダ』にはじめて発表されたのである。

「社会主義は」とレーニンは書いている。「競争の火を消さないだけでなく、反対に、競争を真に幅広く、真に大衆的な規模で適用し、勤労者の大多数を活動の舞台に実際に引きいれて、そこで彼らが自分の力量を発揮し、その能力をのばし、まだ一度もくみだしたことのない泉として人民のなかにひそんではいるが、資本主義が何千となく、何百万となく、もみくちゃにし、圧しつぶし、息の根をとめてきた天分を発揮する、そういう可能性をはじめてつくりだす」（全集、第二六巻、四一五ページ）。

社会主義競争の新しい形態がいろいろ生まれて、急速に広がった。一九二六年七月にカザン鉄道のモスクワ駅の機関区で、また同年の九月にレニングラートの「クラスヌイ・トレウゴーリニク」工場で最初の青年突撃隊がつくられた。その他の工場・建設場のコムソモール員、青年が彼らの例にならった。一九二八年、コムソモールは、創立一〇周年にさいして、内戦の時代に発揮した剛勇にたいして赤旗勲章をさずけられた。これは、青年のあいだに労働意欲の高まりを生んだ。競争には労働者の新しい層がつぎつぎにくわわった。

党組織は、労働者の社会主義競争の先頭に立った。一九二九年の末ごろ、いろいろな形の競争にくわわっていたものは大企業の労働者の約三分の二、突撃隊にくわわっていたものは四分の一余りになっていた。一九二九年一二月、突撃隊第一回全連邦大会がひらかれた。大会は、突撃隊運動を総括し、労働生産性向上のための闘争の当面の課題をさだめた。突撃隊員は労働者階級の先進分子であった。彼らは労働生産性の高い指標のため、先進的な作業方法と生産組織の改善のためにたたかった。社会主義競争と突撃隊運動は、農村でも広くおこなわれた。その提唱者にな

ったのは、共産党員、コムソモール員、コルホーズ制度の積極分子であった。
労働生産性は、一九二九年に前年にくらべてほぼ一三%向上し、戦前の水準を一・三倍以上上回った。労働生産性の向上、節約方策、製品原価の引き下げによって、工業化の最大の難問の一つである、社会主義的蓄積の問題を解決することができた。一九二九年、工業には前年の一倍半の三四億ルーブルが投下された。社会主義工業の成長率は計画目標を上回った。大工業の生産高は一年間に二五%、重工業では三一%ふえた。
工業の基本建設は大規模なものになった。ドニエプル水力発電所が建設中であった。ドンバスではノヴォ－クラマトルスク工場の建設がはじまり、ウラルでは、重機械製作工場（ウラルマシザヴォート）ベレズニキ化学コンビナートとソリカムスク化学コンビナート、マグニトゴルスク製鉄コンビナートの建設がはじまった。モスクワとレニングラートでは、航空機工場、工作機械工場、発動機工場その他の工場の建設または改造がすすめられていた。モスクワ自動車工場が建設中であった。「エフ・エ・ジェルジンスキー」トラクター工場とロストフおよびザポロジエの大規模な農業機械工場の建設がおわろうとしていた。ソ連邦の第二の石炭基地であるクズバスは拡張されつつあった。
党は、民族諸共和国でも一貫して工業化の実現に当たっていた。カザフスタンではリッデル非鉄冶金コンビナートとチムケント鉛工場が、ウズベキスタンの首都タシケントとトゥルクメンニスタンの首都アシハバートでは繊維工場その他の企業が建設中であった。少数民族地区に工業の拠点が生まれたことは、政治・経済・文化的に大きな意義をもっていた。工業化にもとづいて少数民族出の労働者幹部が生まれてきた。社会主義の建設は、ソ連邦諸民族の友好をつよめた。

党は、レーニン的民族政策を実行するとともに、ブルジョア民族主義の現われである、大国的排外主義や地方的民族主義と非妥協的な闘争をおこなった。両者はソ連邦諸民族の友好をよわめる恐れがあったからである。

工業化は、世界にかつてなかったボリシェヴィキ的な進取の精神ですすめられていた。労働者階級は、労働英雄精神のすばらしい模範を示した。ソ連邦における建設の規模と速度は、全世界を感動させた。敵は五ヵ年計画は実行できないものだとくりかえし、その失敗を予言した。すべての国の勤労者は、ソ連邦の成果をよろこんだ。

大規模な工業建設と労働者階級の英雄精神とは、勤労農民につよい感化をおよぼした。農民は、党とソヴェト権力、労働者が、困難を切りぬけながら、トラクター工場や新しい農業機械の工場を建設しているのを見た。多くの農民代表団が工場や新建設場を見学し、労働者の集会に列席し、彼らの熱意にはげまされた。勤労農民の先進分子は、農村に帰ると、新しいコルホーズの建設の主唱者になった。

社会主義部門は、計画についても農村の経済に変革的な影響をおよぼした。一九二八ー一九二九年に予約買付にくわわった者は、農業経営の三分の一を上回った。年ごとに、農村にはいるトラクターと農業機械はますます多くなった。ソヴェト国家は、農機具賃貸所、トラクター縦隊、機械トラクター・ステーションを設立して、勤労農民をたすけた。労働者階級と農民の大多数との経済的結合は、主として生産的な結合になった。

レーニンの協同組合計画を実施するに当たって、党は、農村で協同組合運動をねばりづよく発展させ、農業協同組合を極力奨励した。コルホーズ建設は、農民経営を協同組合化する最高の形

態であった。

大衆的なコルホーズ運動を準備する上で重要な意義をもっていたのは、一九二八年と一九二九年の作付カンパニアと穀物調達カンパニアのときにおこなわれた、富農との断固たる闘争であった。この闘争は農村における富農の力を大いによわめて、貧中農を党組織とソヴェトを中心に結束させた。

農民大衆のコルホーズへの転換は、最初のコルホーズやソフホーズの作業のすぐれた経験によっても準備された。農民は、実地の経験で、大経営と集団的な労働が個人的な労働よりすぐれていることを納得した。コルホーズとソフホーズは、農業における先進的な農耕法の拠点であった。両者は、レーニンのおしえたように、機械、種畜、精選種子などで周囲の農民に援助をあたえた。

労働者階級が農村にあたえた政治的影響力は、非常に大きかった。工場の従業員集団は農村地区を後援し、農村に多くの労働者隊を派遣した。作付カンパニアと穀物調達カンパニアにくわわるため、農村には約二五万の共産党員、コムソモール員、党外労働者が派遣された。

こうして大衆的なコルホーズ運動がはじまり、全面的な集団化に進展した。この集団化は、党とソヴェト国家の一連の政治経済的施策によって準備されたものであった。農民は、社会主義的発展の道である、コルホーズの道に転換した。貧農につづいて中農がコルホーズにはいった。一九二九年の三ヵ月間（七月―九月）だけで約一〇〇万の農民経営がコルホーズにはいった、すなわち、十月革命後の一二年間にはいったのとほぼ同数がはいったが、一九二九年の最後の四半期にコルホーズにはいった農民経営はすでに約二四〇万に達していた。

一九二九年の一一月中旬、全連邦共産党（ボ）中央委員会総会がひらかれ、五ヵ年計画の初年

度の成績を総括した。総会は、農民の大多数が社会主義に決定的に転換し、それが大衆的なコルホーズ運動となって現われたことは「わが国に社会主義を建設する上での新しい歴史的段階」を意味している、と指摘した(『ソ連邦共産党決議集』、第四巻、三二三ページ)。
マルクス＝レーニン主義で武装し、中央委員会を中心として団結した共産党は、敢然として社会主義建設の新しい課題の解決に当たった。

要約

一九二六年から一九二九年にかけて、共産党は、ソ連邦に社会主義を建設するレーニンの計画で武装して、幾百千万の労農大衆の創造的積極性と献身にささえられ、国際的および国内的難局を切りぬけながら、国民経済の社会主義的改造への転換を準備し、かつそれを実現した。
党とソヴェト国家は、平和をまもるために着々とたたかった。ソ連邦を孤立させて新しい干渉を準備しようという、帝国主義者の目論見は失敗におわった。プロレタリア国際主義の原則にもとづいて、党は、労働者階級の世界革命運動や植民地・従属国の解放運動との結びつきを広げ強固にし、ソ連邦と中国人民革命との戦闘的同盟の強固な基礎を築いた。
国内では、党は、レーニンの社会主義的工業化政策の勝利を確保した。国の多年の立遅れをなくし、国を強大な社会主義工業大国に転化させようとする党の基本方針は、大衆の広範な支持を得た。工業化の至難な課題の一つである、重工業建設資金の蓄積は大体において解決され、重工業の基礎はこの時期に築かれた。第一次五ヵ年計画の遂行をめざすたたかいで、ソヴェト国民は、

党の指導のもとに、英雄的な労働のすばらしい模範を示し、社会主義を建設する数百万勤労大衆の運動として社会主義競争を展開した。社会主義工業の発展の速度は、史上空前のものになった。

大転換の年として歴史に記されている一九二九年、党は、工業で労働生産性を大幅に向上させ、農業の社会主義的改造で最初の大成功をおさめた。農村の貧中農層は社会主義のほうに転換し、大衆的なコルホーズ運動がはじまった。

ソ連邦が社会主義の道を前進するにともない、国内の階級闘争は激化し、党内闘争はつよまった。党は、労働者階級と勤労農民の革命的積極性をふるい立たせ、都市と農村の資本主義的分子に対抗した。はげしい階級闘争をつうじて、富農や鉱工業内の妨害分子の反抗が打ちくだかれた。労働者階級の指導する労農同盟が強固になった。党は、国民経済を社会主義的に改造する課題に即応して、党の隊列と勤労者のすべての大衆団体の活動とを建てなおした。

社会主義建設の勝利する最重要条件の一つは、トロツキー＝ジノヴィエフ・ブロック、右翼降伏主義者、民族主義的偏向者など、反レーニン主義的反対派を党が孤立させ粉砕したことであった。この闘争をつうじて、党は思想的にきたえられ、党の隊列の統一は強化した。トロツキー派と右翼降伏主義者の見解は、共産党に所属していることと相いれないものとみとめられた。

一九二六―一九二九年に、党は大幅に成長した。数十万の先進的な労働者と勤労農民が入党し、党の基幹活動家は、国の工業化とコルホーズ建設のためのたたかいをつうじて成長しきたえあげられた。

党は、レーニン的基本方針を毅然として実施することによって、全戦線にわたる社会主義の攻勢の準備をととのえた。

第一二章　全戦線にわたる社会主義の攻勢の時期の党。コルホーズ制度の創出（一九二九—一九三二年）

1　資本主義世界の経済恐慌。社会主義の全面的攻勢の時期のソ連邦の国際的地位

一九二九年の末、国際情勢に重大な変動が生じた。並はずれて深刻で長期にわたる経済恐慌が世界資本主義全体をゆるがせた。恐慌が資本主義諸国の経済にくわえた破壊作用はきわめて大きかった。生産の低下は三年近くつづいて、一九三二年に最低点に達した。そのころ生産はアメリカでは一九二九年にくらべてほぼ半減し、ドイツでは四〇％以上減少していた。

恐慌は未曽有の失業を生んだ。アメリカだけでも失業者数は、一五〇〇万ないし一七〇〇万人に達した。ドイツでは、一九二九年に労働組合員の約四四％が完全失業者であった。大量失業は非常に長びいた。それは、すべてのブルジョア諸国で労働者階級のかなりの部分を極貧におとしいれた。

恐慌は、資本主義の一時的安定をおわらせ、労働者階級、勤労大衆を革命化した。プロレタリ

アートの階級的利害とブルジョアジーの階級的利害を和解させることができるとか、資本主義経済は恐慌に見舞われずに発展することができるとかいった改良主義理論は、無根拠なことがわかった。多くの国で共産党の影響は増大した。たとえばドイツで共産党は、一九三二年一一月の国会選挙で約六〇〇万票を獲得した。

ソ連邦でおさめられた成功は、国際情勢にますます大きな影響をおよぼした。全世界の勤労者は、社会主義制度が資本主義制度よりすぐれていることをますますさとるようになった。

反動的な資本家層のあいだでは、干渉主義的な気運が再燃し、ソ連邦における社会主義建設を妨害し第一次五ヵ年計画の遂行を挫折させようとする傾向がつよまった。対ソ戦争をはじめるだけの決心はつかないので、帝国主義者は、ソヴェト国民経済内での妨害活動の企てに手をかし、中傷カンパニアを一斉におこなった。ローマ法皇が音頭を取る教会派の反ソ攻撃につづいて、ソ連邦はダンピングをしているといった悪意の宣伝が流布された。ついで、ソ連邦では強制労働が使われているという、見えすいた作り話が用いられた。ソヴェトの国にたいする中傷には際限がなかった。多くの資本主義国（アメリカ、フランス、ポーランド、ベルギー）の支配層は、反ソ宣伝に乗じて、ソヴェトの輸出を縮小させ、対ソ・クレジットの供与を拒否した。ソヴェトの国にたいする本格的な経済戦争がおこなわれていた。

しかし、資本主義諸国家の対ソ政策には、これに対立する傾向ものこっていた。資本主義諸国の工業製品の販路にとってソヴェト市場のもつ重要性は、恐慌期に非常に高まった。機械工業のような、一部の重要な工業部門にとって、社会主義国の市場は決定的な重要性をもつようになっていた。有力な実業家グループがソヴェトの発注に関心をもっていたことは、帝国主義反動勢力

の対ソ陰謀をいくらか妨げた。ソヴェトの国に深い同情をよせていた労働者大衆は、ソ連邦に敵対する政策をとることに反対していた。

この時期の国際情勢は依然として緊迫していた。市場と勢力圏のための争いは激化し、帝国主義国家間の対立はつよまった。資本主義諸国の反動的な支配層には、恐慌の打開を戦争と他国領土の略奪に求めようとする者が多かった。

他の国に先んじて、侵略の道にふみ出したのは、日本であった。一九三一年、日本帝国主義者は、正式の宣戦布告なしに、中国の東北諸省（満州）を占領した。極東には戦争の火元が生まれた。ソヴェト政府は、ソ連邦勤労者の中国人民にたいする同情をあらためて声明した。

帝国主義列強のとった態度は、これとはちがっていた。日本の拡張政策がこれら列強の利益をそこなっていたにもかかわらず、列強は実質上侵略者をはげましていた。西側列強は、日ソ両国間の衝突を挑発するつもりでいたのである。

共産党とソヴェト国家の対外政策は、これまでと同じく平和の政策であった。党は平和をまもることができ、敵がソヴェトの国を国際紛争にまきこむようなことをさせなかった。だが日本の中国侵略にともなって、ソ連邦はその極東国境の防備を固める措置を講じなければならなかった。干渉派の陰謀、彼らがソ連邦内で妨害活動や破壊活動を組織したこと、世界資本の対ソ経済圧迫、ソヴェト極東の近くに戦争の火元が生まれたこと——すべてこれらの対外的要因のため、党とソヴェト国民は、帝国主義侵略者のありうべき攻撃を撃退するために、国防力をうまずたゆまず強化し、かなりの人手と資金・資材を陸海空軍の戦闘力を向上させることにむけなければならなかった。

2　農業の全面的集団化の展開。階級としての富農を絶滅する政策への転換。第一六回党大会。

資本主義世界が恐慌でゆすぶられているとき、ソ連邦では社会主義経済が向上の一途をたどっていた。五ヵ年計画の最初の二年間に鉱工業生産高の年平均伸び率は二〇％以上に達した。国内では鉱工業の急激な成長とならんで、強力なコルホーズ運動が展開された。一九三〇年の初めに、コルホーズ建設の五ヵ年計画は大体において遂行されていた。国のいくつかの地区では、コルホーズ運動は発展して全面的な集団化になった。農民は村々をあげてコルホーズにはいった。全面的集団化の地区が最も多かったのは、ヴォルガ沿岸地方、北カフカース、ウクライナのステップ地帯であった。

全面的集団化への移行は、農民の大多数が社会主義に根本的に転換したことを意味していた。大衆的なコルホーズ運動の始まる前、ソ連邦には個人農民経営が二四五〇万あり、そのうち約八五〇万が貧農経営、一五〇〇万が中農経営、一〇〇万余りが富農経営であった。農民――貧農と中農――が最も多人数の勤労階級であった。小農民の商品経済は資本主義経済ではなかったが、生産手段の私的所有にもとづいていて、そのなかから資本家である富農を生みだしていた。農民は、コルホーズにはいることによって、富農への隷属と資本家の搾取のない、新しい社会主義的な発展の道に移った。農村には、社会主義制度であるコルホーズ制度が生まれた。

集団化は、ソヴェト農業の発展の根本的な転換を意味していた。コルホーズにはいるまでは、

農民は単独で働き、原始的な農具を使っていた。木すきや木製のプラウで土地をたがやし、鎌や大鎌で作物をとりいれ、からざおで脱穀する場合が、珍しくなかった。牽引力としては馬や牛が使われていた。経営の規模が零細なため、トラクターその他の新しい機械を使うことはできなかった。農民の労働生産性は低かった。農民の大多数がコルホーズに転換したことは、遅れた小規模な個人経営からすすんだ大規模な機械制集団農業へ移ったことを意味していた。農民の農具を寄せ集めただけでも、コルホーズ内の労働生産性は大幅に高まった。コルホーズのすぐれていることは、トラクターその他の機械を使うときには、いっそう明らかになった。新しい農機具を使う集団的労働は、農民が作付面積を広げ、農耕水準を高め、自分の生活状態と文化状況を改善することを可能にした。

したがって、集団化は、ソ連邦の農業の徹底的な革命的変革を意味していた。この変革の基礎は、生産手段にたいする勤労農民の私的所有が社会的所有に変革されたことであり、大規模な集団的な社会主義的生産に移ったことであった。コルホーズ制度が創出されるとともに、農業のような国民経済の重要部門に社会主義制度が確立され、農業における資本主義の根底が根こそぎにされ、資本主義的分子の復活と農民の階層分化の基盤が一掃された。コルホーズ農民の生活のおもなよりどころとなったのは、アルテリ経営とそのなかでの彼の個人的な労働であった。

農村のこの最大の革命的変革は、国の発展過程全体によって準備され、共産党とソヴェト権力の発議と指導のもとに、労働者階級の全面的支持と、幅広い勤労農民大衆の積極的な参加を得て遂行された。

強力なコルホーズ運動は、コルホーズ建設の五ヵ年計画を改訂し、国のいろいろな地区の集団

化の期限を正確にさだめ、集団化をおこなう形態と方法をきめることを必要にした。理論的にも実践的にも重要な意義をもっていたこれらの問題を検討するために、中央委員会は、一九二九年一二月、ソ連邦農業人民委員ヤ・ア・ヤコヴレフを長とする委員会を設置した。委員には、中央委員や中央委員候補、最大級の党組織の指導者――ア・ア・アンドレーエフ（北カフカース）、カ・ヤ・バウマン（モスクワ州）、イ・エム・ヴァレイキス（中央黒土地方）、エフ・イ・ゴロシチェキン（カザフスタン）、エス・ヴェ・コシオル（ウクライナ）、エム・エム・ハタエヴィチ――（中部ヴォルガ地方）、ベ・ペ・シェボルダエフ（ヴォルガ下流地方）その他――がはいった。

一九三〇年一月五日、全連邦共産党（ボ）中央委員会は、決定『集団化の速度とコルホーズ建設にたいする国家の援助措置について』を採択した。中央委員会は、五ヵ年計画のおわりまでに集団化を大体において完了することを目標にしていた。そのさい、いろいろな地方、州、民族共和国の条件の多様なこと、集団化にたいする農民の準備が一様でないことが、厳密に考慮されていた。

中央委員会は、集団化の速度について国の諸地区を三つのグループに分けた。第一のグループには、最も重要な穀作地区である北カフカース、ヴォルガ中・下流地方がはいり、そこでは一九三一年の春までに集団化を大体おえることが予定されていた。これらの地区は、集団化の準備が他よりもよくととのっていた。これらの地区は、トラクターその他の農業機械を他よりも大量に受け取った。ここでは農民の分化が他よりも深刻で、階級闘争は他よりもはげしくおこなわれており、貧農は他よりもよく組織され、大規模な機械化されたソフホーズとコルホーズは他よりも多く、農業協同組合の発展は他よりもすすんでいた。これらの地区の党組織とソヴェト機関は、

集団化を実施する上でかなりの経験をつんでいた。第二のグループにはいっていたのは、ウクライナ、中央黒土地方、シベリア、ウラル、カザフスタンといった、その他の穀作地区全部で、ここでは集団化を一九三二年の春までに大体おえる予定であった。のこりの地方、州、民族共和国では、集団化を五ヵ年計画のおわりまでに、すなわち一九三三年に、大体完了する予定であった。

農民の生産協同組合化についてのレーニンの指示、レーニン的党綱領にしたがい、全面的集団化のおこなわれた地区の経験を考慮にいれて、党中央委員会は、農業アルテリがコルホーズ建設の基本形態でなければならない、と規定した。このアルテリでは、土地の用益、役畜、農業機具、経営用の建物、市場向けの用畜が共有化される。土地共同耕作組合やコンムーナとはちがって、アルテリはコルホーズ員の個人的利益と共同の利益とを最もうまく両立させていたので、昨日までの個人農のあいだに集団主義の精神を育てるのが容易になった。

党中央委員会は、トラクター、コンバインその他の農業機械を生産する工場の建設を早める措置も講じた。全面的集団化の諸地区の機械トラクター・ステーションは、コルホーズのために働くように切りかえられた。コルホーズには、一九二九／三〇経済年度に五億ルーブルのクレジットが供与された。国家は、コルホーズの耕地整理の費用を負担した。コルホーズの基幹要員を養成するために、短期講習会網が広く設けられた。

党中央委員会は、下からもりあがるコルホーズ運動の先頭に立つよう、全党組織に呼びかけた。中央委員会の決定は、コルホーズ運動の発展を抑えようとする企てをも、とりわけ、この運動を上から「命令する」あらゆるやり方をも断固としていましめていた。

中央委員会の決定では、富農にたいする新しい政策——全面的集団化にもとづいて階級として

の富農を絶滅する——政策が確認されていた。

富農は、国内の最も人数の多い搾取階級で、社会主義の仇敵であった。富農は、農民経営の約五％を占めて、一九二七年には、約一〇〇〇万ヘクタールの穀物作付面積（総面積九四七〇万ヘクタールのうちの）をもち、商品穀物全体の五分の一を供給していた。地主と資本家が一掃されたのち、富農は、国内における資本主義復興の最後の拠点になっていた。彼らはソヴェト権力の施策をサボタージュし、反ソ暴動をくわだて、農村の活動分子にテロをくわえ、貧農と中農を隷属させ自分の影響下におこうと懸命になっていた。一九一八年と一九二八年の二度、富農は、ソヴェト国家から穀物を奪って、国家の講じる社会主義的施策をぶちこわそうと、必死になって策動した。彼らは、新経済政策の環境のもとで自分の立場を強化し資本主義の旧制度を復活させることができるものと考えていた。ソ連邦に資本主義を復活させることを夢みていた、すべての国の資本家は富農に期待をかけていた。

ロシア共産党（ボ）第八回大会以来、党は、富農の搾取傾向を制限し、資本主義的分子を駆逐する政策をとってきた。ソヴェト権力は、借地法や農民経営における賃労働の使用にかんする法律によって、富農の生産規模と富農が勤労農民を搾取する余地とを制限した。また富農経営には高率の税金をかけ、公定価格で国家に穀物を売渡すよう要求した。制限政策は、富農の成長をおさえはしたが、その絶滅を意味するものではなかった。

レーニンは、富農との和解はありえず、労働者階級は富農に徹底的な打撃をくわえる準備をしなければならない、と教えている。「われわれは富農との直接の内戦状態にあったし、いまもそうであるし、将来もそうであろう」とレーニンは言っている（全集、第二九巻、一四六ページ）。

彼は、ロシア共産党（ボ）第一一回大会で、「ロシア資本主義との、小農民経営から成長し、これに支持される資本主義との最後の決戦」（全集、第三三巻、二八〇ページ）がごく近い将来にひかえている、と党に警告している。

富農との最後の決戦をはじめるに当たって、党とソヴェト権力は、一九三〇年までに社会主義建設でおさめていた大成功をよりどころにしていた。

国民経済では社会主義部門が強固になっていた。鉱工業は急速に発展をつづけ、農村には何万というコルホーズが生まれていた。国内では、社会主義に有利な、階級勢力の再編成がおこっていた。社会主義的工業化の過程で労働者階級は数的に増大し、その指導的役割は高まっていた。労働者階級は、国内で最後の搾取階級である富農を絶滅することに切実な関心をいだいていた。全面的集団化のおこなわれた諸地区では、中農もコルホーズに加入した。彼らは、貧農とともに、富農にたいして断固たる闘争をおこなっていた。党とソヴェト権力は、いまでは労働者階級と貧農だけでなく、コルホーズに加入した中農をもしっかりよりどころとすることができ、階級としての富農を絶滅することができた。

そのうえ、一九三〇年ごろ、ソヴェト権力は、富農の穀物生産に取ってかわる物質的基盤をすでにもっていた。コルホーズが急激に発展したので、一九三〇年にはコルホーズとソフホーズがすくなくとも四億プードの商品穀物を供給するだろう、すなわち、富農経営が一九二七年に供給した商品穀物の数倍のものを供給するだろう、と十分信じられた。

国民経済の社会主義部門が成長し、国内で階級問に新しい力関係が生まれ、ソヴェト国家に穀物生産のしっかりした基盤があったので、党は、一九二九年の末、富農を制限し駆逐する政策か

ら、全面的な集団化にもとづいて階級としての富農を絶滅する政策に移ることができた。この政策の核心は、富農から、彼らの存続し発展するための生産的基礎である、土地の自由な用益、生産用具、借地、労働者を雇う権利を奪いとることにあった。この政策は、ソヴェト国家の最高機関の決定によって法文化された。全面的集団化のおこなわれた諸地区では、借地法や個人農民経営での雇用労働の使用についての法律が廃止された。

全面的集団化は、部落や村の地域内の土地が全部コルホーズの管理に移されることを意味していた。その地域にあった富農の地所は、コルホーズの手に移った。富農は、借地権を失っただけでなく、自分の用益していた土地も失った。土地国有は、コルホーズに有利な耕地整理の実施を保障していた。レーニンは、土地国有が「農業で社会主義に移る最大の好機をプロレタリア国家にあたえている」と指摘している（全集、第二八巻、三三六ページ）。ソ連邦には土地私有がなかったので、コルホーズには、農民から地所を買いもどす必要も、集団的用益に移される土地の補償を農民にする必要もなかった。

富農は、コルホーズに反対して凶悪な扇動をくりひろげ、さまざまな挑発的なうわさを広め、コルホーズの経営用の建物に放火し、家畜を毒殺し、トラクターや機械を破壊し、村の共産党員、コルホーズ議長、農村通信員、村の活動分子を暗殺した。彼らは、集団化を妨害するために、あらゆることをした。だから、全面的集団化への農民の転換は、富農にたいする断固たる闘争をともなったのである。農民は、富農を完全に収奪して自分の部落や村の地域から富農を追放するよう、ソヴェト権力機関に要求した。

ソヴェト権力は、貧中農の闘争を全面的に支持して、富農収奪の禁止を解いた。全面的集団化

のおこなわれた地区では、地元のソヴェト権力機関に、富農をこれまでの定住地から遠くはなれた地区に移住させ、すべての生産手段（家畜、機械、その他の農具）を彼らから没収し、それをコルホーズの所有に移す権限があたえられた。富農は完全に収奪された。富農にたいするこの措置は、唯一つ正しいものであった。それは、ソ連邦における社会主義の建設の利益にかない、コルホーズ運動の成功、コルホーズの強化を保障していた。

コルホーズ制度の創出と確立に重要な役割をはたしたのは、機械トラクター・ステーションであった。国内で最初の機械トラクター・ステーション（エム・テ・エス）は、一九二八年、オデッサ州の「シェフチェンコ」ソフホーズの設立したものであった。このステーションの活動のすぐれた経験にもとづいて、党中央委員会は、一九二九年六月、機械トラクター・ステーション設立・指導全国センター（トラクトロツェントル）を設置することを適当とみとめた。農業協同組合機関が設置するか、数コルホーズが共同して設置したトラクター縦隊も、一九二九年には広く普及した。しかし実地の経験は、トラクターその他の農業機械を国家の手もとにのこしておくのが適当なことを、示していた。若いコルホーズには当時はまだトラクターその他の機械を買いいれる資金がなく、技術要員もいなかったからである。

以上を考慮してソヴェト国家は、コルホーズにたいする技術的サービスと機械化要員の養成とを全部引きうけた。政治的側面も重要な意義をもっていた。エム・テ・エスは、農業の社会主義的発展に指導的な影響をおよぼす、有力な槓桿であった。それは、何百万というコルホーズ員に集団主義を教える手段となった。

こうして、大衆的なコルホーズ運動の当初に、党は、コルホーズ制度の勝利をめざす具体的な

闘争計画を労働者階級と勤労農民にあたえたのである。中央委員会の決定にふくまれる、農民の生産的協同組合化の基本形態は農業アルテリであるという命題、全面的集団化にもとづいて階級としての富農を絶滅するという命題、農業の社会主義的改造にはたす国有のエム・テ・エスの役割についての命題は、レーニンの協同組合計画を、マルクス＝レーニン主義理論を発展させたものであった。

全連邦共産党（ボ）中央委員会が一九三〇年一月五日の決定を採択したのち、党組織は集団化の活動をつよめた。農村の党員は貧農と中農をひきいて、率先してコルホーズに加入した。一九三〇年の春には、農業に従事していた農村党員の約四分の三がコルホーズにはいっていた。

党は「ソヴェトはコルホーズに目を向けよ！」というスローガンをかかげた。ソヴェトは、農村における党の新しい政策の実行者になった。重要な役割をはたしたのは、七万以上あった村ソヴェトであった。それらは、約四〇〇万の貧中農の活動分子を統合していた。村の活動分子はコルホーズ運動の主唱者になった。

党は、都市労働者の集団化参加熱の高まりを支持した。一九三〇年、労働組合は、コルホーズを組織したり機械を修理したりするために、一八万の労働者隊を農村に派遣した。とくに重要な役割をはたしたのは二万五千人組――一九三〇年の初めに党の呼びかけでコルホーズに働きにきた先進的労働者――であった。これは、工場の党組織や労働組合組織、工場の従業員集団から派遣された志願者である。二万五千人組の約七割が共産党員であった。

党の積極的な助力者になったのは、コムソモールであった。一九三〇年の春、農村のコムソモール員の約半数（五五万人）がコルホーズに加入した。農村のコムソモールは、コルホーズ青年

の組織になっていった。

一九三〇年の一月と二月は、コルホーズが最も急激に発展した月であった。二月二〇日には、約一四〇〇万、すなわち全農民経営の約六〇％がコルホーズにはいっていた。集団化の達成された水準は、中央委員会の一月の決定で予定された水準を大幅に上回っていた。このころ、コルホーズ建設では真の成果とならんで、重大な誤りも表面化した。

レーニンは、私的所有者的個人経営から集団経営へ農民が移るのは、社会主義建設の最も困難で面倒な課題である、とおしえている。彼は、コルホーズを設立するさい、農民、とくに中農に暴力を用いてはならないといましめ、この問題を十分慎重に取扱うよう、農民が自分の経営に執着していることを念頭におくよう呼びかけた。レーニンの書いたロシア共産党（ボ）第八回大会の決議にはこう強調してある。「この問題ではいそぎすぎるのは有害である。なぜなら、新規なことにたいする中農の偏見をつよめるおそれがあるだけだからである」と（『ソ連邦共産党決議集』、第二巻、七八ページ）。事をいそいではならないとは、かつてエンゲルスも指摘している。

一九三〇年初めのコルホーズ建設の実地の経験は、多くのばあいにレーニンのこの重要な指示が破られていたことを示した。

破られたのは、まず第一に、自由意志というレーニンの原則であった。農民のあいだで辛抱づよく説明活動をすることが、いくつかの地方では、行政的処理や上からの命令にすりかえられた。農民が「富農収奪」、選挙権剝奪、等々のおどしでコルホーズ加入を強制されたことも、珍しくなかった。いくつかの地方で「富農収奪」の比率は農民の一五％に達し、選挙権剝奪の比率は一五—二〇％に達した。

コルホーズ建設の基本形態は農業アルテリであるという、党の方針が破られた。コンムーナが設立されて、小家畜をふくめた全家畜と家禽が強制的に共有にされた事実も、とくにウクライナとシベリアで、すくなくなかった。

国の地方地方によって状況が多様なことを考慮にいれなければならないという原則も、破られた。集団化の準備が余りととのっていない少数民族地区やロシア連邦のいくつかの地方とが、先進地区を目ざしはじめた。たとえば、中央黒土地方とモスクワ州の党地方委員会は、集団化を一九三〇年の春におえることを予定していたが、中央委員会一月決定によれば、中央黒土地方にはすくなくとも二年、モスクワ州にはすくなくとも三年の余裕がまだあったのである。北カフカース、ザカフカース地方、中央アジア、カザフスタンといった、少数民族地区の党組織も、これらの地方に遅れをとるまいとしていた。

これらすべては、農民、とくに中農のあいだに不平不満をおこさせた。

こうした誤りは、なによりもまず、幾百万の農民経営を集団化する問題を解決するのがむずかしいことから生じたものであった。この課題は、ソ連邦で歴史上はじめて、国内のはげしい階級闘争と敵対する資本主義の包囲という環境のもとで、解決されようとしていたからである。

農村で新しい階級政策を遂行するに当たって、党の基幹活動家に明確さが十分なかったことも一因であった。新しいスローガン——全面的集団化にもとづいて階級としての富農を絶滅するという——は、党の政策の急転換を意味していた。これまで急転換をおこなって新しい方針をさだめるさいにはいつも、党は、大会や協議会や中央委員会総会で、この方針の根拠を示したものであった。党の指導的幹部も、全党員も、党政策の本質をはっきりのみこんだのち、十分の理解を

もってこの政策の実施に当たっていた。大衆的コルホーズ運動の初めには、この順序がやぶられた。党の新しいスローガンは、一九二九年の末、マルクス主義農業問題専門家会議でスターリンによって公表され、数日後に中央委員会一月決定のなかで確認された。このスローガンの根拠を示し説明するために、中央委員会総会すら招集されなかった。集団化と取組んでいた、現地の党組織と多くの党基幹活動家には、農村における新政策の本質をすぐ理解することはできなかった。この政策を行政措置をとる方針であると解して、全面的集団化にもとづいて富農を収奪するのではなく、コルホーズを設立するまえに富農収奪をはじめ、「富農収奪」のおどしで農民にコルホーズ加入を強制しはじめた者も多かった。

コルホーズ運動の初期の成功に有頂天になったこと、上からある種の圧迫があったこと、現地で集団化率の高いのをあせったことも、一因であった。集団化過程の指導は、集団化の規模に立遅れていた。集団化のさい最も重要なことは、農民の生産手段を共有にすることであったが、大衆的コルホーズ運動の初めには、この基本問題にしかるべき注意がはらわれていなかった。農業アルテリの模範定款は、やっと二月六日に発表された。だがこの定款も、明確さをもたらさなかった。それには宅地付属地については何も述べてなく、経営に乳牛一頭しかいないばあい、家畜共有のさいどういう処置をとるべきか、小家畜と家禽は共有にすべきか、そうでないか、が説明されていなかった。

コルホーズ建設でおかされた誤りは、ソヴェト権力の敵、まず第一に富農に利用された。旧白衛派、エス・エルその他かくれていた反ソ分子が活気づいた。敵の振舞はずるく、わるがしこかった。挑発行為から共産党員や農村の活動分子にたいする凶悪な報復行為にいたる、あらゆる手

段が用いられた。階級敵は、コルホーズでは家畜はどのみちみな取りあげられてしまうという噂をながして、コルホーズに加入するまえに家畜をみな殺しするよう、農民をそそのかした。富農の挑発にのせられて、多くの農民が乳牛、豚、羊、家禽を屠殺した。一九二九／三〇経済年度に、牛は一四六〇万頭、豚は三分の一、羊と山羊は四分の一以上減少した。これらの家畜は、主として一九三〇年の二月と三月に屠殺されたものであった。畜産業は大損害をこうむり、長いあいだ立ち直ることができなかった。

ソヴェト権力の敵は、コルホーズ建設でおかされた誤りと行きすぎが農民を憤激させ、彼らを大規模な反ソ暴動にかりたてるものと、当てにしていた。敵は、一部中農の一時的な不満に乗じて彼らを自分についてこさせようと思っていた。彼らが反ソ行動を挑発することに成功したばあいもあった。

右翼日和見主義分子も、そこここで、党の集団化活動全体の信用をおとすために、コルホーズ運動の困難に乗じようとした。

コルホーズ建設上の誤りは、コルホーズ運動に、社会主義建設全体に大害をおよぼした。労働者階級と農民の大多数との同盟が決裂しプロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）がそこなわれる危険が生じた。

この時期に大活躍をしたのは、党中央委員会であった。中央委員会は、コルホーズ運動を政治的・組織的に指導する司令部になった。コルホーズ建設のいろいろな問題について中央委員会の設けた委員会は、不眠不休の活動をした。政治局員のうち何人かは、地方に出かけた。共和国、地方、州の党機関の指導者は、集団化の進行状況を不断に中央委員会に知らせ、貴重な提案をした。中央委員会の集団的な英知、その確固とした態度と柔軟さのおかげで、集団化をおこなう上

での誤りと欠陥は取り除かれていった。

二月の中ごろ、中央委員会は、国の少数民族地区の党組織の指導者の会議を招集した。ザカフカース、中央アジアの民族共和国とロシア連邦共和国の少数民族地区との集団化のやり方について、決定が採択された。中央委員会は、集団化の準備が比較的ととのっていた地区で用いられる形態や方法をこれらの地区に持ちこまないよう、党組織に警告した。これらの地区の民族的特殊性や経済的特殊性を考慮して、集団化の準備活動を主眼とすることが命じられた。

二月の後半、農民大衆が不平をいだいている危険な徴候が国のいくつかの地区に現われると、党中央委員会は、コルホーズ建設上の誤りをただす措置をただちに講じた。

二月の下旬、ロシア連邦共和国とウクライナの一連の地方・州党組織の指導者の会議が、中央委員会の招集でひらかれ、集団化の問題を審議した。会議では、共和国、地方、州の巡回から帰ってきた政治局員のエム・イ・カリーニン、ゲ・カ・オルヂョニキッゼその他が演説した。これらの発言者は、共有化の問題について明確な指令のないことを指摘し、集団化の速度を早める方針を批判した。この会議は、コルホーズ建設でおかした誤りをただすうえで重要な役割をはたした。

会議の討議の結果、中央委員会は、二月末、農業アルテリ模範定款をさらに正確にし、修正した。それは一九三〇年三月二日に、新聞に発表された。同定款は、生産手段を共有にする問題を明確にした。同日、党中央委員会政治局の委任をうけて、新聞にイ・ヴェ・スターリンの論文『成功による幻惑』が発表された。この論文は、大きな積極的役割をはたした。論文は、コルホーズ建設における党の政策を説明し、この建設が自由意志にもとづかねばならないという原則を強調し、農民にたいする行政的圧迫措置を非難していた。論文は、農村の中農大衆に歓迎された。

働き手にあるとされていた。しかし論文では、これらの誤りの上述の原因は十分には明らかにされず、責任は主として地方の論文は、コルホーズ建設でおかした誤りと行きすぎをただす道へ、党の基幹活動家を向けかえた。

これと同時に、地方の党組織は、新しい困難に当面した。コルホーズからの大量脱退がはじまり、富農とその手先が、コルホーズと集団化政策そのものとの信用を失墜させようと企てたのである。だが共産党員は、新しい困難にひるまなかった。党組織は、すばやく陣容をたてなおすボリシェヴィキ的手腕を発揮した。彼らは、コルホーズの道にふみ出した貧中農大衆を結束させる活動をくりひろげ、富農の反コルホーズ行動を阻止し、新しいコルホーズを強化した。反コルホーズ行動と農民のコルホーズ脱退の波は引きはじめた。

一九三〇年三月一四日、中央委員会は、『コルホーズ運動における党方針の歪曲との闘争について』という決定を採択した。決定には、党の方針の歪曲は「コルホーズ運動の今後の発展の主な障害であり、われわれの階級敵に直接手をかすもの」である、と指摘されていた(『ソ連邦共産党決議集』、第四巻、三九六ページ)。中央委員会は、集団化に当たって強制的方法を用いるのをやめるとともに、引きつづき自由意志にもとづいて農民をコルホーズに加入させる活動をねばりづよくおこなうこと、コルホーズの組織的・経済的整備と強化に専念することを、党組織に命じた。

党は、農村に生じた情勢を冷静に判断して、おかした誤りをただす道にふみだした。党組織は、農村の状態の正常化に断固として取組み、農業アルテリ模範定款にしたがって新しいコルホーズの組織的・経済的整備に専念した。誤りと失敗も、レーニンの協同組合計画、集団化方針の正し

さにたいする党の信念をゆるがせはしなかった。党は、コルホーズの道が、富農への隷属、貧困と無知を脱する唯一つ正しい道であり、この道だけが自由で明るい生活につうじていることを、農民大衆に説明していった。

誤りを熱心にただしたことは、農民大衆を安心させた。中農にたいするレーニン的態度が旧に復した。中農の不満に乗じてソヴェト権力を攻撃しようとする敵の目論見は失敗した。

党は、集団化の成功を定着させる追加的な措置を講じた。四月二日、中央委員会は、決定『コルホーズのための特典について』を採択した。コルホーズとコルホーズ員は、家畜にたいする課税を二年間免除された。コルホーズには、国家の手持ちから六一〇〇万プードの穀物の種子が無利子で貸付けられた。社会主義的農業の物質的・技術的基盤の建設が、急テンポですすめられた。一九三〇年六月、「エフ・エ・ジェルジンスキー」トラクター工場とロストフ農業機械工場が操業を開始した。ザポロージエ収穫機工場は、コンバインの生産に着手した。その他多くの農業機械工場の建設または改造がすすめられていた。コルホーズを受け持っていた機械トラクター・ステーションは、一九三〇年の春には一五八あったが、一九三一年の夏には一二二八に達した。これらのエム・テ・エスにはトラクターが六万二〇〇〇台以上あった。

党は、コルホーズ建設上の誤りを一掃して、集団化の初期の成功を定着させた。もっとも、でっちあげられていた「紙上の」コルホーズは解散し、動揺する農民のコルホーズ脱退が生じ、集団化の率はさがり、コルホーズの数はへった。だがそれも、ソヴェト農民が社会主義へ歴史的な転換をしたという、もっとも重要な事実の意義を低めるものではなかった。農民大衆は、党とソヴェト権力の政策の正しさを確信して、毅然としてコルホーズにとどまった。一九三〇年七月―

日、国内には約八万六〇〇〇のコルホーズがあった。六〇〇〇万の農民経営――農家の約四分の一(二三・六%)――はコルホーズの道にしっかり踏みだした。

大衆的なコルホーズ運動を展開すると同時に、党はうまずたゆまず国の工業化の実施に当たった。一九三〇年、国の歴史上はじめて、国民経済のなかで(価額で表示して)鉱工業の比重が農業の比重を上回った。社会主義工業と農村のコルホーズとが急速に成長したことは、資本主義的分子にたいする攻勢の戦線を広げることを可能にした。一九二九年まで、資本主義的分子にたいする本格的な攻勢は主として都市で――商工業で――おこなわれていた。農業生産は、ほとんど社会化されていなかった。農民の大多数が社会主義の道に転換するとともに、資本主義的分子にたいする攻勢は、全般的なものとなり、都市でも農村でも、全戦線にわたって展開された。

こうした情勢のもとで、一九三〇年六月二六日から七月一三日まで、全連邦共産党(ボ)第一六回大会がひらかれた。この大会は、全戦線にわたって展開された社会主義の攻勢の大会として歴史に記されている。

大会の代議員は、党員一二六万名以上、同候補約七一万二〇〇〇名を代表していた。職場労働者は全党の約半数を占めていた。大会は、中央委員会、中央統制委員会、共産主義インタナショナル執行委員会全連邦共産党(ボ)代表団の各報告を聴取して審議し、また工業五ヵ年計画の遂行、コルホーズ運動と農業の振興、改造期における労働組合の任務の諸問題についても審議した。報告をおこなったのはイ・ヴェ・スターリン、ゲ・カ・オルヂョニキッゼ、ヴェ・ヴェ・クイブイシェフ、ヤ・ア・ヤコヴレフ、エヌ・エム・シヴェルニクであった。

中央委員会の活動報告のなかではこう指摘されていた。第一五回党大会以後の時期は、二つの

対立する経済制度――ソヴェト経済制度と資本主義経済制度――が世界の舞台で重大な試練をうけた時期であった。ソヴェト経済制度は資本主義経済制度よりはるかにすぐれていることをしめした、と。この優越性は、社会主義工業の高い発展速度になによりもあざやかにあらわれていた。しかしソ連邦は、鉱工業生産水準の点で先進資本主義国よりはるかに立遅れていた。一九二九年、ソ連邦は、粗鋼の生産では世界で第五位（アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスについで）、銑鉄の生産と石炭の産出では第六位、電力の生産では第九位を占めていた。

とくに我慢がならないのは、鉄鋼業における立遅れであった。一九二九年の銑鉄生産は、ソ連邦では四〇〇万トンであったが、アメリカでは約四三〇〇万トン、ドイツでは一三二〇万トン、フランスでは一〇三〇万トン、イギリスでは七七〇万トンに達していた。鉄鋼業の立遅れは国民経済の発展をおさえ、銑鉄を外国で買うことを余儀なくさせた。社会主義を建設し、ソ連邦の経済的独立性を保障し、その技術的・経済的立遅れを克服するには、鉄鋼業の発展をはやめることが是非とも必要であった。

第一六回大会は、重工業を極力発展させることに党の努力を傾注し、鉄鋼業発展の速度を早め、近い将来東部地方に第二の石炭＝製鉄基地であるウラル＝クズバス・コンビナートを建設することを決定した。大会は、国民経済の隘路になろうとしていた運輸の発展と改造に注目させた。大会の決定で重要な地位を占めていたのは、軽工業の発展、農業への機械とトラクターの供給、畜産業の復興と発展の諸問題であった。経営要員と技術要員の養成の決定的な意義が強調されていた。

国の工業化の早い速度が可能になったのは、なによりもまず、党が社会主義競争を広く組織し

たからであった。競争には二〇〇万以上の労働者が参加し、一〇〇万以上の労働者が突撃作業班にはいっていた。労働者階級は「五ヵ年計画を四ヵ年で！」というスローガンのもとに工業化を促進するためにたたかった。大会は、「今後も社会主義建設に戦闘的なボリシェヴィキにふさわしい速度を確保し、五ヵ年計画を四ヵ年で実際に遂行しとげるよう」中央委員会に委任した（『ソ連邦共産党決議集』、第四巻、四一八ページ）。

大会は、経済建設ではたす労働組合の役割を強調して、社会主義競争を組織する任務を労働組合に負わせた。大会は、企業の生産会議の活動を改善し、熟練労働者の養成にもっと留意し、先進的労働者と専門家の経営活動への抜擢を促進し、労働者の創意の発揮をさまたげていた守旧心理や官僚主義とたたかうよう、労働組合に呼びかけた。

第一六回党大会は、大衆的コルホーズ運動がソ連邦における社会主義の勝利にとって非常に大きな意義をもつことを指摘した。大会の決定にはこう言われている――

「地主からの土地没収は農村における十月革命の第一歩であったが、コルホーズへの移行は第二の、しかも決定的な一歩であり、ソ連邦に社会主義社会の基礎を建設するうえで、きわめて重要な段階を画するものである」（同、四五八ページ）。

一九三〇年の夏、主要穀作地区ではコルホーズは農民経営の四〇―五〇％を統合していた。コルホーズの作付面積は三六〇〇万ヘクタールに達した。それは、商品穀物全体の二分の一以上を供給することができた。もはや、個人農民経営ではなく、コルホーズとソフホーズがソヴェト農業の将来を決するようになった。

ソヴェト国民経済内の各種経済制度の相互関係は変化した。ほとんど工業だけをよりどころに

していた社会主義的生産関係は、いまでは、農業で急速に発展している社会主義部門をよりどころにするようになった。農村におけるソヴェト権力の社会的支柱の問題は、新しい仕方で提起された。全面的集団化の始まるまで、ソヴェト権力は、農村では貧農をよりどころとしていて、中農は労働者階級の同盟者であった。いまや、全面的集団化の諸地区では、第一六回大会の指摘したように、全コルホーズ農民が「ソヴェト権力の真の、強固な支柱」になった（同、四四九ページ）。

文化革命の遂行でもいくらかの成功がおさめられていた。しかし大会は、文化建設の速度が不十分であるとみとめて、近い将来普通初等義務教育を実施して住民の文盲を一掃する、という課題をかかげた。

大会は、党が社会主義建設で成功をおさめたのは、基本方針を断固として遂行し、トロツキー主義や右翼偏向ときっぱりたたかったおかげである、と指摘した。大会はこう確認した。トロツキー主義は反革命的、メンシェヴィキ的立場に完全に転落している。社会主義の全面的な攻勢のもとでは主要な危険は、客観的には党内にいる富農の手先である右翼偏向である、と。大会は、右翼反対派の見解は全連邦共産党（ボ）に所属することと相容れない、という一九二九年一一月の中央委員会総会の決定を確認した。大会は、民族問題における偏向にたいする——主要な危険としての大国的排外主義と地方的民族主義とにたいする闘争にも注意を喚起した。

大会は、党員に党の統一をまもるよう呼びかけ、中央委員会に今後も「鉄の党規律とレーニン党の統一とをぐらつかせ破壊しようとするあらゆる企てに容赦ない反撃をくわえる」よう委任した（同、四一八ページ）。

第一六回党大会は、新しい近代技術にもとづいて国民経済のすべての部門を改造する方針をあたえた。この改造は、社会主義の物質的・技術的基盤の創出、国の多年の立遅れの一掃、国の経済的独立と防衛力の強化を保障するし、歴史的にみて最短期間に技術的・経済的な点で先進資本主義諸国に追いつき、さらにこれを追いこす可能性をあたえるからであった。

技術的改造は、全戦線にわたる社会主義の攻勢が成功をおさめる必須条件であった。それは、農業における古い社会経済制度を建てなおし、農業を集団化し、ソ連邦の経済から資本主義を根こそぎにするのを、容易にするからであった。

社会主義的生産組織のもとで国民経済の技術的基盤を改造することは、国の生産力をさらに急速に発展させ、労働生産性をたかめ、生産額をふやし、勤労者の福祉を向上させる、条件をつくりだすものであった。

3 全戦線にわたって展開された社会主義の攻勢のもとでの党の組織活動と政治活動

第一六回大会の決定を武器として、党は、全戦線にわたって社会主義の攻勢を展開した。主眼点は、社会主義建設の速度をあげることであった。

第一次五ヵ年計画は、新しい建設の五ヵ年計画であった。広大な国土に、何百という工場、炭鉱、鉱山、発電所の建設がすすめられた。新しい都市と労働者町が生まれた。鉄道幹線が建設された。何千というコルホーズ、ソフホーズ、機械トラクター・ステーションがつくられた。学校、

クラブ、病院が設立された。第一次五ヵ年計画の時期には、毎月平均一工業企業が操業をはじめ、ソフホーズ二、エム・テ・エス一ないし二、コルホーズ約一一五がつくられていた。それはありきたりの建設ではなかった。建設されたのは、社会主義企業であった。その一つ一つが社会主義の新しいとりでだったのである。

工業建設の大躍進と農業の社会主義的改造は、党が政治活動と組織活動の水準をたかめることを必要にした。党は、全国的な規模でも、各建設場、各工場、各コルホーズでも、何千万という人々の建設活動を実際に組織しなければならなかった。社会主義建設を実際に指導する新しい形態と方法をつくりあげ、プロレタリア独裁（ディクタトゥーラ）の各級機関を大衆に、生産に近づける必要があった。党は、組織活動の重要性についてのレーニンの教えを銘記し、組織活動が社会主義の勝利にとって重要なことを理解していた。

党は、全戦線にわたる社会主義の攻勢の課題に応じて、その隊列を建てなおした。

党が急速な成長をとげた結果、大工場の細胞は数千人の集団になった。一九三〇—一九三二年に、党員が五〇〇名をこえる企業には党委員会がつくられ、職場には職場細胞が、作業班には党グループがつくられた。工場の党組織は生産上の問題をこれまでよりふかく理解するようになり、労働者大衆のあいだでの影響力はたかまった。人口五万以上の都市には、党細胞の指導を改善するために、党の市委員会がつくられた。

農村の党組織も改組された。一九三〇年の夏、農村には四〇万人以上の党員を統合する約三万の細胞があった。彼らの約三分の二が地域細胞にはいっていた。全面的集団化のおこなわれた地区では、大きなコルホーズには党細胞がつくられ、コルホーズ員の党員が農村の地域細胞からそ

れに移された。これらの細胞は、農村における党活動の拠点になった。大会後まもなく管区が廃止され、農村における社会主義建設の基本的な単位として地区が強化された。この改組は、党機関の柔軟性と機動性をたかめ、コルホーズや農民大衆に党機関を近づけた。

党は、ソヴェト機関が組織者としての役割をたかめること、各級の国家機関が正確かつ機動的に活動することにも努力した。ソヴェト諸機関の活動の欠点の批判と自己批判、国家機関からの官僚主義的な分子の粛清が広くおこなわれた。国家機関の指導的な部署には、何千という先進的労働者が生産現場から抜擢された。国家機関の改善は、中央統制委員会――労農監督部とその地方機関に負うところが多かった。第一六回党大会後、中央統制委員会議長兼ソ連邦労農監督人民委員には、ア・ア・アンドレーエフが任命された。

指導を企業に近づけ、国民経済の決定的な部門の発展にいっそう留意するため、人民委員部の細分がおこなわれた。最高国民経済会議は、三つの人民委員部――重工業、軽工業、木材業各人民委員部――に改組された。党は、経済建設の決定的な部署にすぐれた活動家をすえた。すなわち、ヴェ・ヴェ・クイブィシェフはソ連邦国家計画委員会議長に任命され、ゲ・カ・オルヂョニキッゼはソ連邦重工業人民委員に、ア・イ・ミコヤンは同供給人民委員に任命された。

労働組合も改組された。党の目標は、労働組合を社会主義建設に積極的に参加させることであった。労働組合は、指導機関から右翼降伏主義分子を一掃していった。党中央委員会は、全連邦労働組合中央評議会にたいする指導を強めた。同中央評議会第一書記にはエヌ・エム・シヴェルニクが選出された。党中央委員会の提唱で、労働組合の細分がおこなわれた。労働組合は、個々の工業部門をこれまでよりも身をいれて研究するようになり、下級機関をいっそう具体的に指導

し、労働者大衆の面倒をいっそうよく見るようになった。

党の組織活動は、まず第一に、工業建設の速度を早めることにむけられていた。党は、優秀な党基幹活動家と労働者階級のすぐれた働き手とを、ドニエプル水力発電所、マグニトゴルスク製鉄コンビナートとクズネック製鉄コンビナート、ベレズニキ化学コンビナートとネヴァ化学コンビナート、ウラル重機械工場、ノヴォークラマトルスク機械工場、チェリヤビンスクおよびハリコフのトラクター工場、モスクワおよびゴーリキーの自動車工場、サラトフ・コンバイン工場の建設に集中した。党中央委員会は、毎月これらの建設の進捗状況を指導し、その一つひとつが予定の期日に操業をはじめるよう努力した。新建設場、とりわけモスクワ、ウラル、西シベリア、ウクライナ、カザフスタン、ゴーリキー、サラトフのそれは、地方党組織の注目のまとになっていた。建設場で大活躍していたのは、党細胞であった。細胞は、国の各地、主として農村から来た建設労働者を組織し、若い勤労集団を結束させ、彼らの作業を秩序立てることにつとめた。

大衆のなかでの党の政治活動は、早い速度を確保することにむけられていた。党は、工業化の速度を早める必要を説明し、国民に困難な事態をかくさなかった。党は、労働者と技術要員の政治的自覚をたかめ、彼らの積極性を発揮させ、難関を突破することに、五ヵ年計画の期限前遂行に彼らを奮起させた。

大規模な建設がすすめられているさいには、多くの困苦欠乏に耐えなければならなかった。国はまだ貧しかった。衣類、靴その他多くの生活必需品がたりなかった。建設場では労働者はテントやバラックで暮していた。食料品や多くの工業製品は、切符で配給されていた。これらの苦難は、まず第一に労働者の肩にのしかかっていた。だが彼らは、敵対する資本主義に包囲されてい

るとき、国を強力な工業大国にするためには別の道はなく、そのためには犠牲と厳重なうえにも厳重な節約とが必要なことを理解していた。万事を我慢し、耐乏生活をしながら、彼らは、比類のない労働英雄精神を発揮した。労働者階級、勤労大衆は、ソ連邦で社会主義が勝利すること、党の政策の正しいことを固く信じて、目標にむかって邁進していた。労働者階級の熱情は、コルホーズの建設を展開した勤労農民大衆に感銘をあたえた。とくに大きかったのは、青年のあいだの熱情であった。数万の青年男女が、党の呼びかけに応じ、コムソモールから派遣されて、へんぴな地方に、ウラル、クズバス、ドンバス、極東、中央アジアの新建設場に出かけていった。

第一六回党大会後、国内には社会主義競争が新たな勢いで広がった。工場の面目と工場生活の平常のリズムは一変した。新建設場や工場の労働者集団のあいだで労働の経験交流がおこなわれ、企業では生産コンクールや優秀職場・優秀班コンクールがおこなわれた。表彰板は、先進的な班や突撃労働者の作業成績で埋められた。競争の新しい諸形態が生まれた。一九三〇年の夏、レニングラートの「カール・マルクス」工場の労働者が、同工場の一九三〇／三一経済年度の目標数字を討議して、呼応生産財務計画を提出した。まもなく呼応生産財務計画運動は大多数の工場に広まって、集団的な競争形態の端緒となった。マリウポーリの「イリイチ」工場の労働者は、交代班別呼応計画作成の提唱者になった。一九三一年の初め、レニングラートには独立採算にうつされた作業班が生まれた。一九三二年の春、こうした班は国内にすでに一五万五〇〇〇あった。

社会主義競争の基本形態は、突撃作業班運動であった。突撃作業は、共産主義土曜労働という、すばらしい伝統の継続であり発展であった。班の先頭に立っていたのはもっとも声望のある熱心な労働者、多くのばあい共産党員やコムソモール員であった。彼らの多くは、生産から離れずに

労働者予備学校や職業技術学校をおえ、その後職場長や工場長になった。

競争の組織者は、党組織であり、党員や青年同盟員であった。五ヵ年計画の時期に、基幹労働者の六人に一人は共産党員であった。一九三二年の春までに、巨大企業の党組織は、第一六回党大会の指令を遂行して、党員と青年同盟員をほとんど全部競争に引きいれていた。主導的な職場や決定的な職区で党員がふえた。党員は坑内にはいり、高炉やマルチン炉や工作機械につき、新建設場の足場にのぼった。彼らは、自分の労働英雄精神で全労働者大衆の意気をふるいたたせた。

社会主義建設にあげた特別の功績によって、五ヵ年計画の先進労働者約四〇〇名が労働赤旗勲章を授与され、六〇〇名以上が、一九三〇年四月にソヴェト政府の制定したレーニン勲章を授与された。労働英雄は全国に知れわたった。国民は彼らを賞賛し尊敬した。精神的奨励は、労働生産性をたかめるよう労働者を物質的に奨励することと結びつけられていた。改善された新しい等級賃金体系が実施され、熟練労働や重労働は、これまでよりも高い評価を受けるようになった。

一九三二年末、競争にくわわっていた者は全労働者の約四分の三に達した。競争にはインテリゲンツィアもくわわった。労働意欲が全般的に高揚したことは、旧技術インテリゲンツィアにもよい影響をおよぼした。彼らの圧倒的多数は、社会主義建設に積極的にくわわった。労働者の模範は、コルホーズ員、ソフホーズとエム・テ・エスの労働者が見ならった。社会主義競争と突撃作業は、全国民の運動となった。ソヴェト国民は、革命と内戦の時期にソヴェト権力のためにたたかったのと同じ熱情と英雄精神で、平和建設の戦線で働いた。

民衆の創造的活動がこのようにたかまったことは、史上空前のことであった。何百万という労働者が新建設の熱情の虜になった。労働生産性の向上をめざす労働者の大衆的運動は、建設の期

間を短縮した。ドニエプル水力発電所とマグニトゴルスク製鉄所の建設のさい先進的な班は、コンクリート基礎工事の世界記録をうちたてた。ドニエプル水力発電所の最初のタービンの据付けは、計画で予定されていた九〇日間ではなく、三六日間で遂行された。モスクワ自動車工場では、組立職場の工作機械一二〇〇台が一ヵ月間で据付けられた。

巨大工業企業は、つぎつぎに操業を開始した。一九三一年には、ハリコフ・トラクター工場、モスクワ自動車工場、ウラル精銅工場が、またウラル重機械工場の第一期建設分が操業をはじめた。一九三二年の初めには、ゴーリキー自動車工場とサラトフ・コンバイン工場が操業をはじめ、二月にはマグニトゴルスクの最初の熔鉱炉が、四月にはクズネツクの最初の熔鉱炉が銑鉄を出した。マグニトゴルスクとクズネツクの製鉄コンビナートの最初の熔鉱炉が操業をはじめると時をおなじくして、クズネツク炭田が開発されたので、ソ連邦の東部地方の新しい強力な石炭＝製鉄基地には強固な土台が据えられた。

巨大工業企業のまわりには、大都市が生まれた。とくに急速に発達したのは、マグニトゴルスクとノヴォクズネツクであった。一九二九年の末、シベリアで巨大製鉄所が起工されたとき、ヴラヂーミル・マヤコフスキーはクズネツク建設場の人々にささげた詩にこう書いている。

かならずや
　町が
　　できよう。
かならずや
　花園も

花をさかそう――
このような
人たちが
ソヴェトの
国に
いるかぎり！

二年半たつと、荒野には人口一〇万以上の都市がうまれ、コンビナートは銑鉄を出しはじめた。この工場と都市をたてたのは、ソヴェト国民であった。彼らは、建設しながらまなんだ。昨日までの土工、コンクリート工、組立工が、熔鉱炉工や精錬工になった。建設主任のイ・ペ・バルヂン――十月革命後、人民への奉仕とソヴェト鉄鋼業の創出に身をささげた、最初の大技術者の一人――は、アカデミー会員になった。

ソ連邦における社会主義の勝利の行進に、粉砕された搾取階級の残党とその受け売り屋は猛烈に抵抗した。包囲する資本主義の敵対勢力は、彼らを極力支援し、五ヵ年計画を失敗させようと懸命になった。一九三〇―一九三一年に、大規模な革命組織が三つ摘発された。「産業党」は、工業で妨害活動をしていた、旧ブルジョア技術インテリゲンツィアの上層を糾合していた。農業人民委員部を根城にしていた、いわゆる「勤労農民党」は、富農の利益を代表し、集団化の失敗をねらっていた。メンシェヴィキの反革命グループ「ロシア社会民主労働党全国ビューロー」は、国家計画委員会、最高国民経済会議、国営銀行、消費組合中央連合で暗躍していた。

これら反革命組織の一味は、公開裁判に付された。法廷の審理で彼らの犯罪が暴露された。妨

害分子は、亡命したロシアの資本家や白衛派と結託していた。ブルジョア諸国家の援助を得て、彼らは妨害活動や諜報活動をおこない、ソヴェト権力を倒してソ連邦に資本主義を復活させることをねらっていた。

反革命グループの犯行は、国民の憤激を買った。ソヴェト国民は、新しい社会の建設に必死になって抵抗する敵には、最大の警戒心をもち毅然たる態度をとる必要のあることを納得した。工場やコルホーズで多数の集会がひらかれ、参会者は裏切者を厳罰に処するよう要求した。プロレタリア法廷は、暴露された人民の敵を厳正に処罰した。労働者、コルホーズ員、インテリゲンツィアは、国内反革命派の残党と国際帝国主義の破壊活動にこたえて、共産党を中心にますます固く結束し、労働意欲と政治的積極性を一段とたかめた。

党は、党員の思想的水準を向上させるために大活動をおこなった。党は、ねばりづよく党内の規律を固め、異分子を一掃し、もとの日和見主義者には社会主義建設に積極的に参加するよう要求した。中央委員会と中央統制委員会は党の統一を断固としてまもり、日和見主義分子が党規律をみだし、社会主義建設を妨害しようとするあらゆるくわだてを、きっぱり阻止した。

一九三〇年一二月、中央委員会・中央統制委員会合同総会は、右翼反対派の指導者の一人であるルィコフを政治局から除名した。彼は人民委員会議議長の職務からも解任された。後任にはヴェ・エム・モロトフが任命された。

4　国民経済を技術的に装備がえするための党の闘争。コルホーズ運動の発展。コルホーズの組織的・経済的強化。第一次五ヵ年計画の成果

ソ連邦で社会主義が勝利しその建設が早められる最重要条件は、近代技術にもとづいて国民経済を再装備することであった。レーニンはこうおしえている。

「国土が電化されるとき、農工業と運輸が近代的大工業の技術的基盤のうえにすえられるとき、そのときはじめてわれわれは、最後の勝利をおさめるであろう」（全集、第三一巻、五二四ページ）。

レーニンのこの指示にしたがって、第一六回党大会は、国民経済のすべての部門を技術的に根本的に改造する課題をかかげた。改造期には技術が決定的に重要になった。国民経済を装備がえし、技術の欠乏を一掃することは、高度に発達した機械工業に立脚してはじめて可能であった。党は、機械工業に他を上回る発展速度を保障して、同工業の創出にねばりづよく取組んだ。とくに早められたのは、機械工業の基礎をなす、工作機械製作、工具その他の工業設備の生産の発展であった。古い工作機械工場の改造と新しい工作機械工場（モスクワ・ターレット旋盤工場、ゴーリキー・フライス盤工場、その他）の建設が急テンポでおこなわれた。工業の工作機械総台数は急増した。第一次五ヵ年計画のあいだに、五万台以上の金属切削工作機械が製作された。工作機械工業の発展と新しい工業設備の生産とで成功をおさめた結果、機械工業全体の根本的な改

造をなしとげ、機械工業の新しい部門である、重機械工業、トラクター工業、コンバイン工業、航空機工業をつくりあげることができた。これらの工業部門の技術的装備のためには、外国の先進的技術も広く利用された。

党と労働者階級の努力のおかげで、五ヵ年計画の機械工業に関する課題は、三ヵ年で遂行された。一九三一年以来、機械工業は工業で主導的な地位を占めるようになった。機械工業と金属加工工業の総生産額は、一九三二年に、一九二八年の四倍になり、一九一三年の七倍になった。ソ連邦はもっとも進んだ国の一つになり、世界の機械工業でアメリカについで第二位を占めた。第一四回党大会のかかげた課題——ソ連邦を機械の輸入国から自力で機械設備を生産する国にするという——は、大体において解決された。これは、工業化の戦線での最大の勝利であった。ソ連邦の国民経済には、国民経済の全部門の改造を保障する強大な技術的基盤がすえられた。

まず第一に工業自体が強固な基礎のうえにすえられた。工業のすべての部門が、新しい設備を受けとるようになった。きわめて重要な意義をもっていたのは、重機械工業の創出であった。一九三一年以来、強力な機械と大規模な設備の生産が、発電所のため（出力五万キロワットの最初のタービンが製造された）、鉄鋼業のため（ソヴェト最初の分塊圧延機が製造された）、石炭業のために展開された。

鉄道運輸の改造がはじまった。運輸の発展の問題は、一九三一年に二回（六月と一〇月）党中央委員会総会で討議された。運輸改造の主導的な一環は鉄道の電化であることがみとめられた。一九三二年には最初の電気機関車が出現した。ウラル、ドンバス、クズバスの鉄道の電化、線路の改造、積みおろし作業の電化がはじまった。蒸気機関車と車両の生産は、五ヵ年計画のあいだに

ほぼ倍増した。

建設業は新しい技術で装備され、その結果、古い都市の改造に着手し、新しい都市の建設を早めることができるようになった。一九三一年六月、全連邦共産党（ボ）中央委員会総会は『モスクワ市経済について、ソ連邦の都市経済の発展について』の問題を審議した。党がこの問題をこのように広い見地から提起したのは、これがはじめてであった。総会は、党モスクワ市委員会とモスクワ・ソヴェトに、科学的な根拠のあるモスクワ再建計画を立て、これによって正しい都市造りをおこない、新しい住宅と公益施設を建設し、熱供給発電所、地下鉄、モスクワ—ヴォルガ運河を建設することを予定するよう提案した。レニングラート、ハリコフ、バクー、ゴーリキー、ドネプロペトロフスク、ロストフ－ナ－ドヌーその他の都市の改造、ウラル、ドンバス、クズバス、モスクワ近郊炭田に都市を計画的に建設することも予定された。

農業の根本的な技術的改造も進捗した。五ヵ年計画中に、トラクター保有台数は一二万台ふえた。一〇万台のトラクターを農民に供給するというレーニンの夢は実現した。農業の技術を一新し農業の多年の立遅れを一掃する主な槓杆は、機械トラクター・ステーションとソフホーズであった。一九三二年の末までに、二四四六のエム・テ・エスが設置され、その保有するトラクターは七万五〇〇〇台を上まわった。

国民経済のすべての部門に新しい技術が続々と送りこまれるようになると、今度は別の困難がうまれた。新しい生産を組織立て複雑な技術を操縦する能力のある人々の、深刻な不足が表面化したのである。新しい工場は、技術にあかるい管理・経営要員、最新の科学技術の水準にふさわしい技術者、新しい技術を習得した熟練労働者を必要としていた。党がこれらの困難にはじめて

出会ったのは、「エフ・エ・ジェルジンスキー」トラクター工場でであった。同工場は一一ヵ月という記録的な短期間で建てられたが、その操業に習熟するには一年以上かかった。工場の多くの技術者と労働者は、新しい技術を取扱うことができず、流れ生産の整然とした進行を保障することができなかった。

新しい生産方法の習得の立遅れは、社会主義建設を阻害しかねなかった。危険な点は、共産党員の経営活動家の一部に技術の役割の軽視があり、自分の技術上の知識を高めることがさしせまって必要なことをさとっていなかったことにもあった。工業の指導者のあいだには、労働者出身で、すぐれた組織者ではあるが、専門的な素養に欠けた者がすくなくなかった。彼らの多くは、復興期の考え方にとらわれていて、十分な技術的知識をもたずには、新しい状況のもとで企業を指導することはできないことを理解していなかった。こうした経営活動家は、自分では企業の「総」指揮をとるだけで、技術的指導は「専門家」にまかせていることが多かった。専門家のあいだの党員数は、当時は大したものではなかった。技術要員のなかには、まだ古い専門家がたくさんいた。そのなかには、政治的にあやふやで、ときにはソヴェト権力に敵意をもつ者がいた。

党はいち早くこの危険に気づいた。技術習得に注意をむけさせるうえで重要な役割をはたしたのは、全連邦共産党（ボ）中央委員会の主唱で一九三一年一月に招集された、社会主義工業活動家第一回全連邦会議であった。党のかかげたスローガン「ボリシェヴィキは技術を習得しなければならない！」は、すべての党組織、労働組合組織、経済機関、コムソモール組織の注目の的になった。

企業の技術が更新され、一九三〇年の末までに国内の失業が一掃されたことは、工業にとって

新しい状況をつくりだした。党は、工業発展上の新しい現象を念頭におき、経営活動家の注意をこれらの現象にひきつけようとした。一九三一年六月、党中央委員会は、経営活動家会議を招集した。会議は、工業発展の問題を検討して、新しい状況のもとでの経営運営の重要な要件をさだめた。それは、労働者を組織だった仕方で募集すること、賃金体系を整備すること、労働の組織を改善すること、独立採算制を強固にすること、旧生産技術インテリゲンツィアを社会主義建設に積極的に参加させること、労働者階級の新しい生産技術インテリゲンツィアをつくりだすこと、であった。

党は、経営活動家の技術的知識を向上させ技術者を養成するために、一連の措置を講じた。工業の指導的要員のまなぶ工業専門学校網が拡大された。高等工業学校の数は、五ヵ年計画中に約一〇倍にふえ、職業技術学校の数は四倍にふえた。高等工業学校には労働者予備科があった。高等工業学校と職業技術学校の学生の四分の三ちかくが、労働者であった。学生の四人に一人は共産党員であった。大工業には、五ヵ年計画中に約一〇万の技術者が送りこまれた。それは新しい、ソヴェト生産技術インテリゲンツィアで、党とソヴェト権力は、大規模な社会主義建設活動で彼らを躊躇なくよりどころにすることができた。

党は、新しい技術の習得をめざす労働者の幅広い運動を組織した。党中央委員会は、新建設場の党組織に、労働者に新しい職種の教育を広くほどこすよう勧告した。労働組合とコムソモールはこれに積極的にくわわった。工場と新建設場には労働者の教育のために、技術学習のサークル・学校・講習会が設置され、技術学習日が実施された。新建設場の労働者は、稼動中の工場に実習にかよった。工場労働学校の数はふえた。党は、社会活動と技術知識についての試験をおこ

縦手になった。

農村では、一九三一年の春までに二〇万人以上のコルホーズ員がトラクター運転手や農業機械操職種を習得して、熟練した旋盤工や仕上工、熔鉱炉工や精錬工、コールカッター操縦手になった。者になるのを助けた。昨日まで新建設場で仕事をしていた何十万という不熟練労働者が、新しいならというコムソモールの企画を支持した。習得された技術知識は、労働者が自分の仕事の熟練

国民経済の改造にともなって、文化革命がおこなわれた。一九三〇年、ソヴェト国家は普通初等義務教育を実施した。国内には成年者の文盲と無学をなくそうとする全国民的な運動が広くおこなわれた。一九三〇―一九三二年に、文盲一掃学校でまなんだ者は三〇〇〇万人を上まわった。

技術的改造と、労働者の大衆的な新技術習得運動とは、工業化の速度を早めるのにあずかって力があった。一九三一年の工業生産実績は、五ヵ年計画を四ヵ年で遂行するのを保障していた。第二次五ヵ年計画を作成する課題が生じた。この問題は、一九三二年の一月末から二月初めにかけておこなわれた全連邦共産党（ボ）第一七回協議会で検討された。

党は、農村の社会主義的発展を計画的に指導していた。中央委員会・中央統制委員会一二月（一九三〇年）合同総会は、一九三一年中に全国平均で農民経営のすくなくとも半数に集団化をおよぼし、ウクライナのステップ地帯、北カフカース、ヴォルガ左岸の中・下流地方の集団化を大体において完了し、その他の穀作地区と綿花・甜菜栽培地区では農民経営のすくなくとも半数を、消費地方ではその約四分の一を集団化する、という任務をかかげた。

党組織は、コルホーズの活動分子を参加させて、個人農のあいだで説明活動を広くおこなった。コルホーズ運動の新たな、力づよい盛りあがりがはじまった。第一六回党大会後の一年間に、七

〇〇万以上の経営がコルホーズに加入した。北カフカース、ヴォルガ中・下流地方、ウクライナ（ステップ地帯とドニエプル河左岸地方）、クリミアでは、またウラルとモルダヴィアの穀作地区では、コルホーズが経営の六八％から九〇％を統合していた。これらの地区の集団化は大体において完了した。それ以外の穀作地区、綿花栽培地区、甜菜栽培地区では、農民経営の半数以上が集団化された。

全面的集団化のおこなわれた地区では、富農は絶滅された。集団化に反抗した富農は、定住地から移住させられた。一九三〇年の初めから一九三二年の秋までに、富農の二四万七五七世帯が、すなわち、農民経営総数の約一％が移住させられた。ソヴェト権力は、富農だった者が新しい居住地で働けるよう万全の措置を講じ、正常な生活環境をつくってやった。移住した富農の大多数は、林業、建設業、鉱山業で働き、また西シベリアやカザフスタンのソフホーズで働いた。党とソヴェト権力は、これらの人々の再教育に当たり、彼らが完全な公民権をもつ市民となり、社会主義社会の積極的な働き手となるのに力をかした。

一九三一年の夏、国内には二一万一一〇〇のコルホーズがあって、一三〇〇万（五二・七％）の農民経営を統合していた。これらのコルホーズは、穀物、綿花、甜菜、ひまわりの種子その他の農産物の主要生産者になった。コルホーズ農民は、農業の主役になった。党は、集団化のための闘争で決定的な勝利をおさめた。いまや前面に出てきたのは、新しいコルホーズを組織することではなく、すでにつくられていたコルホーズの基礎を固め、残っている個人農民をこれに引きいれる、という課題であった。

党は、個人農民をコルホーズに引きいれる活動はよわめずに、コルホーズの組織的・経済的強

化に主として気をくばった。

大規模な社会主義経営であるコルホーズは、労働生産性とコルホーズ農民の生活水準を大幅に高める可能性をもたらした。だがこの可能性を生かすことは、面倒でむずかしい事柄であった。集団化は、多年にわたる農村生活様式の急激な破砕を意味していた。何百年というもの個人経営で「各人各自」に暮らすのになれていた農民は、コルホーズに加入しても、新しい、不慣れな環境にすぐにはなじめなかった。コルホーズ員には、個人で私的所有者として経営する習慣がのしかかっていた。コルホーズ内では、昨日まで個人経営主であった農民の心理を社会主義の精神に立ってつくりかえる仕事がやっとはじまろうとしていたところであったし、新しい社会規律がやっとうまれかけたところであった。

コルホーズの活動にはいろいろな欠点があり、それがコルホーズの長所を生かすのを妨げていた。コルホーズ員大衆とコルホーズの指導的要員は、大規模生産を運営する経験をまだもたなかった。多くのコルホーズでは、労働の組織がまずかった。記帳は整備されていなかった。頭割りの分配が広くおこなわれていた。その結果、仕事にたいする関心と労働規律がさがり、多くのコルホーズ員が仕事に出なかった。収穫期間がのびのびになって、大きな損失をまねくことがしばしばあった。家畜、機械、その他の財産の保全にたいする個人的責任制がなかったので、コルホーズの財産に大損害をこうむらせた。コルホーズにもぐりこんだ旧富農その他の敵対分子は、財産を横領し、機械をこわし、馬や用畜を殺し、仕事をするさいきず物を出し、誠実なコルホーズ員がコルホーズの生活を軌道にのせようとするのをことごとに妨害した。

コルホーズ内に新しい社会的労働規律をつくりあげるには、時間と多大の労力が必要であった。

コルホーズ員を物質的にはげますのに必要な措置と方法を見つけ出し、共同経営を正しく組織する必要があった。これについて十分な経験は、党にはなかった。コルホーズ員自身の創意工夫があってはじめて、労働を組織立て労働規律を確立する新しい形態、コルホーズの収益を労働に応じて分配する、という社会主義的な分配原則を実行する新しい形態を生み出すことができた。この形態は見出された。

コルホーズ建設の実地の経験は、コルホーズ内の社会的労働を計算するまったく新しい形態を生み出した。労働と所得分配の基準としての作業日がそれであった。

優秀な農業アルテリの経験にもとづいて、一九三一年の全連邦共産党（ボ）中央委員会六月総会は、すべての作業を出来高払いで組織し、作業日による労働評価を実施し、所得（現物と貨幣の）を作業日によって分配するよう、コルホーズに勧告した。

コルホーズの党組織とコムソモール組織は、地区の党活動分子の助力をえて、コルホーズで出来高払い制を実施し労働の計算を改善するためのたたかいの先頭に立った。コルホーズ農民の先進分子は、コルホーズ内の労働を秩序立て規律を強化することを歓迎し、積極的に彼らを支持した。一九三一年中に、コルホーズは全部、出来高払い制と作業日制に移った。

コルホーズの労働を組織するうえでの次の措置は、常任のコルホーズ員からなる作業班をつくったことである。各作業班には、特定の地所、役畜、機械、各種農具が割り当てられた。畜産班では、搾乳係や豚飼育係にそれぞれ家畜を割当て、その作業成績に応じて報酬を支払うよう勧告された。

コルホーズ制度の確立とともに、ソヴェト国家の計画化し、規制する役割は農業で高まった。国家は農業の発展を左右することができるようになった。一九三二年五月、党と政府は、コルホ

ーズ商業の展開に関する決定を採択した。コルホーズの国家にたいする穀物義務供出量がへらされ、計画を遂行し予備の種子を貯蔵したあと、余剰穀物をコルホーズ市場で売ることが許された。一九三三年の初め、粒穀作物の調達の契約制度（予約買付制）が廃止された。コルホーズには、公定価格で穀物を国家に供出する義務がさだめられた。供出基準量は、作付計画で予定された面積の一ヘクタール当たりの収穫予想にもとづいて計算された。

コルホーズ制度の基礎の強化を促進したのは、一九三二年八月七日の社会主義的所有の保全に関するソヴェト政府の法律であった。この法律によって、コルホーズの財産は国家の財産とひとしい重要性をもつものとされた。コルホーズ的所有は、国家的所有と同じく、神聖不可侵なものと宣言された。

コルホーズの生活を建設しようとするコルホーズ員の積極性を高めるのに役立ったのは、一九三三年二月にひらかれたコルホーズ突撃隊員第一回全連邦大会であった。大会は、すべてのコルホーズをボリシェヴィキ的なものにし、コルホーズ員を裕福にしよう、という党のかかげたスローガンのもとでおこなわれた。

大成功はソフホーズ建設でもおさめられ、その数は一九三二年の終りに四五〇〇を上まわった。ソフホーズの作付面積は、約一三五〇万ヘクタールに達した。一九三二年、ソフホーズは商品穀物を一億プード以上供給した。これは国家の調達した穀物総量の約一〇%に当たっていた。

一九三三年の初め、吉報が国中に広がった。第一次五ヵ年計画が期限前に、四年三ヵ月で遂行されたのである。五ヵ年計画の実績は、党中央委員会・中央統制委員会一月（一九三三年）合同総会で総括された。総会は、第一次五ヵ年計画を遂行した結果を、つぎのように指摘した。

ソ連邦は農業国から工業国になった。工業で社会主義制度は資本主義的分子を完全に駆逐して、唯一の制度になった。一九三二年の大工業の総生産高は、戦前水準の三倍以上、一九二八年の二倍以上になった。国民経済の総生産高に占める大工業の比重は、七〇%に増大した。ソ連邦には、国民経済のすべての部門の改造を保障する自分自身の先進的な技術的基盤がつくりあげられた。一五〇〇の新しい工業企業が操業をはじめた。近代的な製鉄業、トラクター工業、自動車工業、化学工業、航空機工業が新規につくりだされている。電力生産は五ヵ年計画中に二倍半以上にふえた。東部地方に新しい石炭＝製鉄基地であるウラル＝クズバスがつくりだされている。ソ連邦は、必要な工業設備の大部分を自国の企業で生産するようになった。ソ連邦の経済的独立は強固になった。ソ連邦の国防力は向上した。赤色陸海軍のために近代兵器を生産できる企業がつくりだされた。

農業では、貧中農大衆が社会主義にきっぱりと転換した結果、コルホーズとソフホーズが支配的な地位を占めている。農村には社会主義的大規模農業であるコルホーズ制度がつくりだされた。ソ連邦は、小農民的な国から、世界でもっとも大規模な農業の国になった。全面的集団化にもとづいて富農階級は絶滅された。農業の社会主義的改造の重要な槓杆になったのは、機械トラクター・ステーションであった。コルホーズ建設の基本形態として、農業アルテリが確立した。

国民経済のすべての部門で社会主義が成功をおさめた結果、勤労者の生活状態を根本的に改善することができた。資本主義諸国の労働者階級の災厄である、都市における失業はなくなった。コルホーズ制度は、勤労農民大衆の富農への隷属と彼らの困窮とを一掃した。貧農と中農下層とは、コルホーズにはいって、生活の不安におびやかされないようになった。国民所得の増大と勤

労者の福祉の向上にともなって、彼らの文化水準は大幅に引き上げられ、新しいソヴェト・インテリゲンツィアの基幹分子が激増した。

ソ連邦には社会主義の基礎が建設された。ソヴェト社会の階級構造には、根本的な変化が生じた。国内の資本主義的分子は、大体において一掃された。プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）の社会的基盤は拡大し強固になった。コルホーズ農民は、ソヴェト権力の強固な支柱になった。これはすでに新しい階級で、生産手段の集団的所有にもとづいて自分の生活をきずいていた。労農同盟は形をかえ、新しい内容をもつようになった。労働者階級および貧農と中農との同盟というレーニンの賢明な政策は、農民大衆を社会主義建設に引きいれ資本主義的分子に打ち勝つのを保障した。労働者階級とコルホーズ農民との同盟は、都市と農村で社会主義を建設し、強化し、発展させるうえで両者の利害が共通しているという、新しい基礎に立脚していた。

これは、ソ連邦の労働者階級、勤労農民、インテリゲンツィアが、共産党の指導のもとでかちとった世界史的な勝利であった。

五ヵ年計画の成果は、きわめて大きな国際的意義をもっていた。

ソ連邦は、社会主義計画経済制度が資本主義制度よりすぐれていることを世界にむかって示し、自国の経済力と独立を強化し、国際生活の重要な勢力となった。

五ヵ年計画の遂行は、資本主義諸国の勤労大衆を革命化した。階級間の力関係には社会主義に有利な大変動が生じた。五ヵ年計画の成果は、全世界の労働者階級の革命的志気をたかめ、彼らの必勝の信念をつよめた。

五ヵ年計画の成功は、ソ連邦の敵もみとめざるをえなかった。五ヵ年計画の失敗するのは必至

だという、世界ブルジョアジーとその手先の予言ははずれてしまった。ソ連邦の労働者階級と勤労農民は、地主や資本家や富農がいなくても自分たちが立派にやって行けること、恐慌も失業もなく、勤労者の福祉の不断の向上を保障する、新しく、よりよい社会主義制度をつくりだすことができることを、証明したのである。

要　約

一九二九—一九三二年に、ソ連邦では全戦線にわたって社会主義の攻勢が展開された。

課題が重要で複雑であったこと、社会経済過程が新規かつ深刻であったことからみて、また社会主義建設の速度と規模からみて、この時期は、党の活動上きわめて困難な時期の一つであった。構想の大胆なこと、実践的な問題が創造的に解決されたこと、党の政治活動と組織活動が大規模であったこと、党の活動の形態と方法が多種多様であったこと、社会主義の建設に勤労大衆が高度の積極性と比類のない献身性とを発揮したことからみて、それは、党とソヴェト国民の歴史上の真の英雄時代であった。

党は、その創造的な活動に当たって、レーニンの社会主義建設計画を終始一貫指針にしていた。党は、トロツキー主義の残党を徹底的に粉砕し、右翼降伏主義者を暴露して孤立させ、党の隊列の統一を固めた。党は自己の陣容を建てなおすとともに、勤労者のすべての大衆団体を建てなおし、そのなかに積極的で創意にとむ働き手の堅固な中核をつくりあげ、党機構、ソヴェト機構、経済機構、労働組合機構の各級機関を大衆に、生産に近づけた。党は、勤労大衆のあいだにすば

らしいエネルギーを呼びさまし、全国民の社会主義競争を組織した。

大衆の労働意欲の力づよい盛りあがりにささえられて、党は、首尾よく多くの困難をきりぬけ、社会主義建設の速度を早めて第一次五ヵ年計画を期限前に遂行することができた。

かつてない短期間に、ソ連邦は先進的な工業大国になった。高度に発達した機械工業をそなえた重工業が創出された。国民経済のもとには強力な物質的・技術的基盤がすえられ、新しい技術にもとづく国民経済のすべての部門の技術的改造をなしとげるのを保障した。

党は、レーニンのすばらしい協同組合計画を実現するための闘争をくりひろげた。幾百万の小所有者的農民経営をコルホーズの道、つまり社会主義の道に転換させるという、労働者階級が権力を獲得したのちに当面する、社会主義革命のもっともむずかしい課題は、首尾よく解決された。これは、社会関係における、農民の全生活様式における大革命であった。この革命は、農業でソヴェト権力に強固な基盤をあたえ、社会主義的国民経済を建設する決定的な条件をつくりだし、農村でソヴェト権力を最終的に固め、労農同盟を強化して、これを新しい、いっそう高い段階に引き上げた。

社会主義の全面的な攻勢は、完勝におわった。工業からは資本主義的分子が完全に駆逐されて、社会主義的生産形態が完全に支配する形態になった。全面的集団化にもとづいて、国内の最後の搾取階級であり、資本主義復興の拠点である富農が粉砕され、大体において絶滅された。商品取引全体が、国家と協同組合の手に集中された。

都市の失業と農村の貧困はなくなった。国内では真の文化革命が実現された。新しいソヴェト・インテリゲンツィアの多数の基幹分子がうまれた。

ソ連邦における社会主義建設の成功は、ソ連邦の国内情勢と国際的地位を強固にし、その国防力をつよめた。

社会主義建設の困難とのたたかいをつうじて共産党は思想的にきたえられ、組織的に強化し、新しい豊かな経験をつんだ。

第一三章　国民経済の社会主義的改造の完成をめざす党の闘争。ソ連邦における社会主義の勝利（一九三三—一九三七年）

1　ファシストの侵略の始まり。戦争の危険が高まるなかでのソヴェト対外政策

一九三三—一九三七年の国際情勢の特徴は、資本主義世界に経済不況がつづいたこと、資本主義社会のすべての矛盾がさらに激化したこと、ドイツにファシスト独裁が樹立されたことであった。失業者数は依然としてきわめて高かった。一九三五年にアメリカの失業者数は、約一〇〇〇万であった。資本主義諸国と植民地諸国には革命的高揚がみとめられた。

独占体は、自分の支配をすくう道はファシスト政権、すなわち、公然たるテロル独裁を打ちたてることであると考えていた。独占体は、労働運動を鎮圧するため、世界の新しい再分割をめざす戦争をはじめるために、ファシズムを利用するつもりでいた。

とくに緊迫した情勢の生まれたのは、ドイツであった。ドイツ帝国主義は、アメリカのクレジットの助けで、経済力を回復していた。ドイツ帝国主義は、ヴェルサイユ条約の軛をたちきるだ

けでなく、アルサス、ロレーヌ、ポーランドの領土、植民地を、つまり世界大戦でうしなったものを全部取り返すことをねらっていた。ドイツ帝国主義者は、自分に有利な形で世界を根本的に再分割する計画を練っていた。これは戦争への道であった。同時にドイツには、労働者階級の革命的気運がもりあがっていた。ドイツ・ブルジョアジーは社会主義革命を恐れていた。

ヒトラーにひきいられて、デマゴーグ的に国家社会党と自称していたファシスト党は、ゲルマン人種の支配をめざす戦争という排外主義的なスローガンを公然とかかげ、他国民にたいする憎しみを説き、共産主義者を容赦なく弾圧し労働運動を鎮圧するよう要求していた。

ドイツ帝国主義の指導層は、一九三三年一月、ヒトラー党を政権につけた。ヒトラー政府は、ドイツのすべての進歩勢力、まず第一に共産主義者に制裁をくわえた。同政府は、あらゆる民主主義的な権利と自由を一掃し、ドイツの世界支配を樹立するという妄想を宣言した。ヒトラー一味は、戦争を準備して猛烈な速度で軍備にとりかかった。一九三六年、彼らは軍隊をライン地方にいれ、フランス国境の間近まで進出した。こうして、帝国主義日本が中国を侵略して極東に戦争の危険の火元が生まれたのにつづいて、ヨーロッパの中心に戦争の火元がもう一つ生まれた。ソ連邦は、西部国境でも国防の強化に気をくばらなければならなくなった。

世界の再分割を利益としていた第三の大国は、ファシスト・イタリアであった。一九三五年、同国はエチオピア侵略戦争をはじめた。一九三六年、ドイツとイタリアは、共和国政府にたいするファシストの反乱を支援して、スペイン内乱をたきつけた。ドイツとイタリアのファシストは、スペインで地歩を固めて、フランスを背後からおびやかし、大西洋と地中海におけるイギリスとフランスの重要交通路を遮断するつもりでいた。日本、ドイツ、イタリアの侵略者の侵略行為は、

アジア、ヨーロッパ、アフリカの諸国民をおびやかし、ひいてはアメリカ国民をもおびやかしていた。

これらの三侵略国家は、アメリカ、イギリス、フランスの帝国主義的な利益をそこなっていた。最大の脅威は、最強の侵略者であるドイツからきていた。以上の結果、一方では、世界再分割の戦争を準備していたドイツ、日本、イタリアと、他方では、自分の地歩をまもろうとしていたアメリカ、イギリス、フランスとのあいだの、帝国主義的対立は激化した。

共産党は、第二次世界大戦のさしせまっていることを理解していた。侵略は、ヨーロッパでも極東でも、ソヴェトの国をおびやかしていた。ヒトラー一味は、ウクライナその他のソヴェト領土を奪取するため、「共産主義を絶滅する」ために対ソ戦争を呼びかけた。一九三六年、ドイツと日本はいわゆる「防共協定」を結び、一年後にイタリアもそれに加盟した。これは三侵略国のブロックであった。反共「十字軍」の呼びかけでカムフラージュして、ヒトラー一味は世界再分割のための世界戦争の準備をおこなっていた。実際には三侵略国のブロックは西側列強にも鋒先をむけていたのである。

ファシスト侵略の進展に直面して、全連邦共産党（ボ）は、この侵略の犠牲になって自国の独立のためにたたかっている諸国民を支援することを、ソ連邦の対外政策の目標にした。党とソヴェト政府は、侵略者を集団的に反撃する体制をつくりあげることに尽力した。一九三三年一二月、党中央委員会は、ソ連邦が国際連盟に加入してもよいとみとめ、また侵略にたいする相互防衛についての多数のヨーロッパ国家のくわわる協定を締結してもよいとみとめた。間もなくソ連邦は国際連盟加入の招請をうけ、ソヴェト政府はこれに同意した。これは、侵略とたたかうために、た

とえ不完全なものではあっても武器として国際連盟を利用するためであった。ソ連邦は国際連盟内で、中国、エチオピア、スペインの人民をまもるために、さらに侵略の犠牲になったその他の国民をまもるためにも、精力的に活動した。

ヨーロッパの大きな国のなかでは、ドイツの隣接国であるフランスが、ファシストの攻撃の危険にとくにさらされていた。その結果、ソ仏両国の接近が計られた。一九三四年、両国は、侵略にたいする集団的反撃に関する条約の締結を共同で主張した。集団安全保障体制には、ドイツをふくめた、中央および東ヨーロッパの国家がふくまれるはずであった。だがイギリス政府は、ヒトラーがこの体制を組織するのをぶちこわすのに手をかした。ポーランドのブルジョア・地主政府も、この体制に反対した。

広範な協定に達することができなかったので、ソヴェト政府は、一九三五年、フランスおよびチェコスロヴァキアと相互援助条約を結んだ。チェコスロヴァキアとの条約によれば、侵略をうけたばあい同国に援助をあたえるソ連邦の義務は、フランスも同様な援助を同国にあたえることを条件として発効することになっていた。これらの条約は、侵略者にたいする反撃の基礎になることができた。だがそうはならなかった。ロンドンにつづいて、パリとプラハの支配層のあいだでも、ヒトラー一味と結託する政策の支持者が優勢を占めていた。それは、ドイツ・イタリアのスペイン干渉のさいとくにはっきりあらわれた。英仏両国政府は、自国の国益に反して、「不介入」の立場をとっていたが、これは実際にはファシスト侵略のほう助を意味していた。反動的な支配層は、ドイツ・ファシストを社会主義の国に対抗するために利用するつもりでいた。

一九三三年、ソ連邦とアメリカ合衆国間に外交関係が樹立されたことは、重要な政治的出来事

であった。アメリカは、これによって、ソ連邦のような大国にたいして同国が多年とってきた「不承認」政策の破産を証明したのである。国交が正常化したのち、ソ米両国間の貿易は大幅に拡大した。

しかし、全体としては、アメリカの政策は、侵略者を放任するもので、他国民をつぎつぎに隷属させる自由を侵略者にあたえていた。一九三五年にアメリカ議会は、エチオピア、ついで共和制スペインが、両国の緊急に必要とする武器をアメリカで購入することが事実上できなくなる法律を採択した。この法律は、事実上、ファシストの侵略を助長するものであった。

国際情勢は、国防力を強化するために全力をあげることを党と国民に要求していた。この強化を助けたのは、ソヴェト国家の経済力と政治的威力が高まったこと、その武装兵力の強化、ソ連邦諸民族の友好、平和維持の必要を痛感していた、すべての国の勤労者の精神的支持であった。

全連邦共産党（ボ）は、他の共産党とともに、ファシズムと新しい世界戦争の危険とに反対し、労働者階級の統一と全民主勢力の反ファシスト戦線への結集のためにたたかう人々の第一線に立っていた。

ドイツにファシスト政権が樹立されるとともに、全世界の人々は、政権をにぎったファシズムは独占資本の最も反動的な、最も排外主義的な、最も侵略的な層の公然たるテロル独裁であることを、納得するようになった。ファシズムは労働者階級、全勤労者、平和を愛する人々にとってきわめて大きな危険を呈していた。ファシズムはいたるところで、共産主義との激闘をはじめた。ファシストは、反共主義の旗をかかげて、自分たちの権力への道をはばむ最大の障害である共産党をまず第一に粉砕しようとつとめていた。彼らは、プロレタリアートの勢力を細分して各個撃

破しようとねらっていた。共産主義者を粉砕すると、ファシストは、その攻撃を社会主義者に、すべての民主主義政党・団体にむけた。反ファシズム闘争と侵略者の手を抑えることとは、国際共産主義運動・労働運動全体の最大の課題になった。

共産党は、当時労働者の大多数が追随していた社会民主党の指導部に、協力してファシズムとたたかうよう、ねばりづよく、また忍耐づよく申しいれた。しかし多くの国で、まず第一に、ファシストの脅威がとくに大きかったドイツで、社会民主党の右翼指導者は、共産主義者と協力するのを拒否し、労働者の統一をぶちこわした。彼らの裏切り政策は、ファシスト独裁の樹立をいちじるしく助けた。何千人という共産党員その他の反ファシスト――ドイツ人民のすぐれた子弟――が責め殺され、何万という者が、監獄と死の収容所で苦しんでいた。ヒトラー徒党は、共産党とドイツ労働者階級の指導者であるエルンスト・テールマンを投獄した。多くの共産党員が労働者階級の利益をまもるためのたたかいに生命をささげた。だが彼らの意志をくじき、党をなくすことはファシストにはできなかった。テールマンの戦友であるヴィルヘルム・ピーク、ヴァルター・ウルブリヒトをはじめとする、ドイツの共産主義者は、ファシスト独裁の困難な状況のもとで敢闘をつづけた。ドイツ社会民主党右翼指導者は、共産主義者を裏切って、自党をまもるつもりでいた。だがそれは彼らの救いの手にはならなかった。社会民主党は禁止されて、事実上存在しなくなったのである。

ドイツにおけるファシズムの勝利は、いろいろな国で、社会民主党に追随していた広範な労働者大衆の左翼化をもたらした。農民・都市小ブルジョアジーのかなり大きな部分も、また大中ブルジョアジーの若干の層すら、反ファシズム行動をとった。情勢は、平和と民主主義のための闘

争にすべての反ファシスト勢力を団結させることを是が非でも必要としていた。

ファシズム反対に大衆を動員するうえで重要な意義をもっていたのは、一九三三年にドイツ政府のでっちあげたライプチヒ裁判でゲオルギー・ディミトロフのおこなった闘争であった。彼は国会に放火したという無実の罪をかけられていた。この放火はヒトラー一味自身のおこなったものであった。ディミトロフは、並はずれた大胆さでファシズムとその犯罪を暴露した。ファシスト挑発者にたいする世界の多くの国の人民の憤激の嵐、この英雄的な共産主義者をまもろうとする大衆行動はきわめてはげしかったので、ヒトラーの無頼漢どもにもディミトロフを処刑する勇気はなかった。彼はファシストの拷問部屋から奪還されて、ソ連邦に着いた。

労働者統一戦線と人民統一戦線の結成にもとづいて、反ファシスト運動を、ファシズムおよび戦争の危険との闘争を激励し組織したのは各国共産党であり、これらの党はオーストリアではヨハン・コプレニクに、ブルガリアではゲオルギー・ディミトロフとヴァシル・コラロフに、ハンガリーではベラ・クンに、イタリアではアントニオ・グラムシとパルミロ・トリアッチに、ポーランドではユリアン・レンスキに、日本では片山潜に、スペインではホセ・ディアスとドロレス・イバルリに、フランスではモリス・トレーズとマルセル・カシャンに、チェコスロヴァキアではクレメント・ゴットワルトに、イギリスではウイリアム・ガラチャーとハリー・ポリットに、アメリカではウイリアム・フォスターにそれぞれ指導されていた。

一九三四年二月、フランスの労働者階級は、ファシスト・クーデターのくわだてを挫折させた。国内には、共産党が先頭にたつ、反ファシスト勢力の強力な運動が展開した。労働者の圧力をうけて、社会党指導部は、一九三四年の夏、共産党の申しいれた反ファシズム行動の統一について

裁の樹立を未然に防ぐために蜂起した。ウィーン・プロレタリアートのバリケード戦のなかで共産主義者の提唱で、共産主義労働者と社会民主主義労働者の行動の統一が実現した。蜂起は敗北におわったが、労働者階級の革命的統一が重要であり必要であることをあきらかにした。一九三四年、イタリア共産党は、社会党との協力を打ちたてることに成功した。

こうした情勢のもとで、一九三五年の夏、共産主義インタナショナル第七回大会がひらかれた。大会には六五ヵ国の共産党の代表が出席していた。大会は、国際プロレタリアートの革命勢力の成長とマルクス＝レーニン主義の原則にもとづく共産党の思想的結束とを立証するものとなった。各国共産党内の反レーニン主義的グループは、思想的に粉砕され、孤立させられた。トロツキー主義、右翼日和見主義、セクト主義との闘争をつうじて、各国共産党の内部には、確固としたマルクス＝レーニン主義的基幹活動家がきたえあげられた。

大会の討議の主眼は、ファシズムおよび新しい戦争の準備とたたかう問題であった。『ファシズムの攻勢とファシズムに反対して労働者階級の統一をめざす闘争における共産主義インタナショナルの任務』という主報告をおこなったのは、ディミトロフであった。大会は、社会民主党系労働者との協力を土台にして、ファシズムの脅威と戦争の危険とに反対する労働者階級の行動の統一をねばりづよくもとめるよう、各国共産党に呼びかけ、また労働者階級を中心として農民、小ブルジョアジー、インテリゲンツィアの団結する反ファシズム人民戦線を、プロレタリア統一にもとづいて結成するよう訴えた。大会は、植民地・従属国で反帝統一戦線を結成することも必要であるとみとめ、またすべての国の人民に、自国の独立のために侵略と帝国主義的抑圧にたい

してたたかっている国々を全力をあげて援助するよう呼びかけた。

第七回大会は、ファシズムとたたかい戦争の脅威とたたかう戦闘的綱領で、共産党、労働者階級を武装した。大成功をおさめたのは中国共産党であった。同党は反帝統一戦線を結成し、この戦線は日本侵略者にたいして活発な闘争をくりひろげた。フランスでは、一九三六年、共産党の指導する人民戦線が選挙で勝利をおさめた。人民戦線政府がつくられて、この段階でフランスをファシスト独裁からまもった。人民戦線政府は、スペインでもつくられた。この政府は、共産党をはじめとする民主勢力の結集を助け、ファシスト反乱にたいする民主勢力の抵抗が高まるのを助けた。しかし大多数の国では、社会民主党右翼指導者が労働運動の統一の樹立を、人民戦線の結成をぶちこわした。

コミンテルン第七回大会の決定は、ファシズムと戦争の脅威とにたいしてかなりの勢力を動員した。いくつかの国で人民の幅広い反ファシスト・反戦運動が展開された。だが、その後の事件が示したように、この勢力は戦争を未然に防ぐにたるほど強力ではなかった。

2　社会主義経済の強化と発展をめざす党の闘争。大衆のなかでの党の政治活動の強化。第一七回党大会

一九三三年、ソヴェト国民は、第二次五ヵ年計画の実現に着手した。国は、国民経済の社会主義的改造の完成期にはいった。この時期には独自の特殊性と困難があった。

工業では、基本建設の展開とならんで、新しい企業の運営に習熟する課題が前面に出てきた。これは、在来の工場を利用することよりもはるかに困難なことであった。技術者・熟練労働者の必要不可欠な基幹分子を養成するには、彼らを新しい技術の利用に習熟させるには、何千人という労働者から成る、形成の緒についたばかりの集団の正確な作業を軌道に乗せるには、一定の時間が必要であった。

農業で主要なものになったのは、コルホーズを組織的・経済的に強化することであった。一九三一―一九三二年に、党はこの面で非常に大きな仕事をした。しかし経験が示したように、これはむずかしい課題であった。第二次五ヵ年計画のはじめに、農民経営の約三分の二（六一・五％）は、コルホーズに統合されていた。だがコルホーズの大多数は、経済的にはまだ弱体であった。コルホーズの財産は、当時は、農民が共有にした生産手段――役畜、プラウ、木すき、まぐわ――と、さらにいくつかの経営用建物から成っていた。コルホーズ財産のなかでもっとも重要な部分である不分割資産は、一九三二年に、一コルホーズ当たり平均二万二〇〇〇ルーブルであった。コルホーズの四分の三は、牛の飼育場をもっていなかった。コルホーズは、共同経営を軌道にのせ、かつ発展させ、これに新しい農機具を供給し、経験にとんだ基幹要員で経営を強化するために、党とソヴェト国家の援助を必要としていた。

社会関係の面では、党は第二次五ヵ年計画中には、ソ連邦で資本主義的分子を完全に絶滅する課題の解決に当たっていた。これは、搾取階級の残党の必死の反抗をひきおこさずにはいなかった。彼らはもはや公然と行動することはできなかった。そうするだけの力がなかったからである。しかし彼らはたたかいをやめず、妨害活動をおこない、国家とコルホーズの財産を着服し、ソヴ

ェト制度の基礎である共有財産の毀損をねらっていた。これが階級闘争の最も広くゆきわたった形態であった。新しい社会主義的経営形態を定着させ、国家とコルホーズの財産を厳重なうえにも厳重に保全し、資本主義的分子の絶滅を最後までおしすすめることが必要であった。

イデオロギーの面でとくにさしせまっていたのは、ソヴェト人の意識のなかにある資本主義の遺物を排除して、彼らを社会主義の積極的な建設者にするという課題であった。党は、この課題が面倒なもので、その解決には長期を要することを理解していた。人々の意識は社会的生産内で彼らの占める地位より立遅れる、とマルクス＝レーニン主義はおしえている。第一次五ヵ年計画の期間に工業には四〇〇万人以上の労働者と職員が流入したが、彼らは大規模生産の訓練をうけていない、小所有者的な気分にいちじるしくとらわれた人々であった。コルホーズ員の私的所有者としての習慣はとくにつよかった。過去の遺物は、国家とコルホーズの財産にたいする投げやりな態度に、その着服や損傷に、我利我利根性や社会主義的労働規律の違反にあらわれていた。

労働にたいする自覚した態度を教えこむためにとくに大きな意義をもつようになったのは、物質的奨励の原則の厳守、正しい労働組織、新しい社会主義的規律の形成、についてのレーニンの指示であった。レーニンは、農民の心理を改造する最重要手段は、機械化と電化にもとづいて農業を再装備することであると考えていた。彼はこう言っている――

「小農耕者をつくりかえ、その心理と習慣のすべてをつくりかえることは、幾世代もかかる仕事である。小農耕者についてこの問題を解決し、彼らの心理全体をいわば健全にすることのできるのは、物質的土台だけ、技術だけであり、農業で大々的にトラクターや機械を使用し、大規模に電化することだけである」（全集、第三二巻、二二九ページ）。

社会主義的生産を組織し、勤労者のあいだに社会主義の精神をそだてることが、党の活動の眼目になった。社会主義的改造を完了するには、勤労大衆にたいする党の政治的影響をつよめ、経済建設の組織的・実践的指導を改善し、活動の仕方をさらに改善することが必要であった。

社会主義的生産を強化し発展させるに当たって、党は国民経済の決定的な部門に専念した。農村にコルホーズ制度が確立するとともに、農業の発展にたいする党の責任は高まった。党は、コルホーズとコルホーズ員が科学技術の成果を利用しながら経営を計画的に運営するのに、日常的な援助をあたえなければならなかった。この点で重要な意義をもっていたのは、一九三三年の冬、全連邦共産党（ボ）中央委員会一月総会の決定にしたがって、エム・テ・エスとソフホーズに設けられた政治部であった。党中央委員会は、エム・テ・エスの政治部に一万七〇〇〇人、ソフホーズに八〇〇〇人の経験にとんだ党活動家を派遣した。エム・テ・エス政治部長の約八〇％は、一九二〇年までに入党した党員であった。

政治部の設置とともに、エム・テ・エスはコルホーズを組織的・経済的に指導するだけでなく、政治的にも指導する中心となり、党の影響を広範なコルホーズ員大衆に広めるものになった。

政治部は、エム・テ・エスの共産党員とコルホーズの共産党員とを結束させた。第一六回大会から第一七回党大会までの期間に、農村党員の数はほとんど倍加し、七九万人に達した。農村党組織の生産単位別の改組は完了した。一九三三年の秋、コルホーズには三万の党細胞、二万の党員候補グループ、二万二〇〇〇の党＝コムソモール・グループがあり、三万八〇〇〇人の個人党員がいた。コルホーズの党組織は、コルホーズ生産の真の組織者になっていった。

政治部は、コルホーズの党外活動分子を政治的に教育し、団結させた。どのコルホーズにも、

コルホーズ活動分子の強固な中核がつくりだされ、政治部の指導のもとに、共同経営を軌道にのせ労働規律を強化するためのたたかいの先頭に立った。

政治部は、エム・テ・エスとその作業供与を受けるコルホーズとの仕事ぶりにたいする党の監督を実現し、コルホーズ制度の敵の策略を暴露ないし阻止し、コルホーズとコルホーズ員が国家にたいする義務を遅滞なく遂行するのを保障した。コルホーズにもぐりこんでいた富農その他の敵対分子はコルホーズから一掃された。

政治部が注意をはらっていたのは、主として、コルホーズの指導的要員を選抜し、養成し、教育することであった。何十万人というコルホーズの議長、経営主任、作業班長、農事主任、畜産主任、会計係が、エム・テ・エスの講習会で養成された。コルホーズの指導的な仕事には二五万人以上の先進的なコルホーズ員が抜擢され、そのうち約三万はコルホーズの議長であった。政治部の働き手は、コルホーズ員大衆と直接接触していて、彼らとともにコルホーズ建設の実際問題の解決に当たり、労働を正しく組織するのを助け、労働に誠実な態度をとりコルホーズの財産を大切に取扱うことをコルホーズ員におしえた。

エム・テ・エスに政治部を設置することによって、党はコルホーズに大きな援助をあたえた。コルホーズは強化した。コルホーズ員の労働規律は向上した。一九三三年の春の作付、収穫の取りいれ、穀物調達カンパニアは、これまでの年よりも協力一致して整然とおこなわれた。

党は、国の工業化というレーニンの基本方針を励行し、欠陥をいち早くあばき出し、個々の産業部門、とくに石炭産業と鉄道運輸の立遅れの克服に当たった。第一次五ヵ年計画の時期に、運輸の技術的再装備と採炭の機械化にはいろいろなことがやられていた。だが運輸と石炭産業は、

急成長する国民経済の需要を充たしていなかった。両者の活動が不満足なものであった主因は、経済指導上の欠陥と、物質的奨励の原則がやぶられていたことにあった。そのため、賃金画一主義と労働力の流動が生じ、新しい技術の習得はおくれ、その利用の仕方はまずかった。

中央委員会は、党組織や経済機関がこれらの欠陥を取除くのを助けた。トラストや管理部の機構は縮小され、簡素化され、技術者の大多数が生産に配置転換された。炭鉱労働者と鉄道従業員の労賃支払は整備されて、標準ノルマが制定され、累進割増金制度が実施された。後者によって、主要職種の労働者が新しい技術を立派に習得するのをはげますことができるはずであった。

党の政治活動を活発にし党組織の組織者としての役割を高めるために、党中央委員会は、一九三三年の夏、鉄道運輸に政治部を設け、ドンバスその他の炭田の鉱坑に党オルグ制を設けた。党オルグは、党活動と大衆のあいだでの政治活動とをてきぱきと指導し、経営活動家が生産計画を遂行し労働規律を強化するのを助け、労働者のあいだに新しい技術を習得し労働生産性を高める運動を発展させた。

政治部は、臨時の組織形態で、党の力と権威にささえられていた。それは、社会主義建設の諸部門のうちで、国民経済にとって特に重要であるのに立遅れていた部門につくられた。政治部は使命をはたした。政治部のおかげで、農業と鉄道運輸における党指導の水準は向上し、共産党員の指導的役割は生産間で高まった。

そのころおこなわれた党の大量粛清も、党組織の戦闘能力を高めるのにあずかって力があった。それは、たまたま党内にまぎれこんだあやふやな分子を一掃するのを助けた。党への採用は一時中止された。粛清の過程では、誤りが、とくにいわゆる「不活動分子」の不当な党除名という形

でおかされはしたが、全体としてはそれは、党の隊列を固め社会主義の建設ではたす党組織の指導的役割を高めるのに役立った。

ソヴェト国民の政治意識と労働意欲が大きく盛りあがっているなかで、一九三四年一月二六日から二月一〇日にかけて、全連邦共産党（ボ）第一七回大会がひらかれた。当時党には約一八七万二五〇〇名の党員と九三万五〇〇〇名以上の党員候補がいた。大会は、中央委員会、中央監査委員会、中央統制委員会――労農監督部、コミンテルン執行委員会全連邦共産党（ボ）代表団の各報告、第二次五ヵ年計画、組織問題（党建設とソヴェト建設）を審議した。大会で活動報告をおこなったのはイ・ヴェ・スターリン、エム・エフ・ヴラヂミルスキー、ヤ・エ・ルズターク、デ・ゼ・マヌイリスキーであった。

中央委員会の報告には、党のレーニン的基本方針を実行した結果、ソ連邦に生じた根本的な変化が述べられていた。ソ連邦は立遅れと中世の遺物を一掃して面目を一新し、先進的な工業＝コルホーズ大国になった。社会主義の成功の結果、ソ連邦の国民経済の構造にはいちじるしい変化が生じた。工業では社会主義部門が九九・五％を占めていた。商業からは資本主義的分子が完全に駆逐された。農業ではコルホーズとソフホーズの粒穀作付面積は八四・五％を占めていた。これらの事実は、ソ連邦で資本主義経済が一掃されたこと、国民経済のあらゆる部門で全人民的所有と協同組合＝コルホーズ的所有の形態をとった社会主義的経済制度が支配的になったことを、はっきり示していた。

ソ連邦では徹底的な文化革命がすすめられていた。ソ連邦は、革命前のロシアがそうであった無学・文盲で非文化的な国から、先進的な文化の国になった。ソヴェトの各民族の言葉でおしえ

る初等・中等・高等学校網が全国に広くはりめぐらされた。ソヴェト・インテリゲンツィアの基幹分子が生まれた。専門家の数は、第一次五ヵ年計画中にほぼ二倍になった。文化建設の躍進は、出版物、映画、ラジオがかつてない勢いで普及し、クラブ、劇場の数が急増したことに反映していた。

大会は、党の各級機関でイデオロギー活動をつよめ、科学的共産主義の思想をうまずたゆまず宣伝し、国際主義、マルクス＝レーニン主義の精神を党員と党外の人々のあいだに育てるよう呼びかけた。

第一七回党大会は、一九三三―一九三七年度ソ連邦国民経済発展第二次五ヵ年計画についての決議を可決した。第二次五ヵ年計画の基本的な政治課題としてかかげられたのは、資本主義的分子を最終的に一掃し、人間による人間の搾取と搾取者と被搾取者への社会の分裂とを生む原因を完全になくすことであった。基本的な経済課題は、国民経済全体の技術的改造を完了することであった。技術的改造は基幹要員の養成、新しい技術の習得、ソヴェト科学技術の発展と切っても切れない関連のあることが強調された。

基本建設は総額一三三〇億ルーブル、すなわち第一次五ヵ年計画の二倍とさだめられた。一九三七年の鉱工業総生産高は、一九一三年の約八倍になることが予定された。大会は、新しい技術の習得と新しい生産部門の運営の習熟、労働者の技能の向上と技術要員の養成に専念するよう指令した。農業の主要課題は、コルホーズ、エム・テ・エス、ソフホーズを組織的・経済的に強化すること、農業の機械化を大体において完了し、新しい農耕法をとりいれること、家畜頭数をふやしその生産性を高めることにあった。交通・通信の改造、科学・文化の発展に大々的に取組む

ことが見こまれていた。

大会は党建設とソヴェト建設についての決議を採択したが、そのなかでは、組織活動の主眼は人の選抜と遂行の点検であると指摘してあった。中央統制委員会——労農監督部は改組されて、全連邦共産党（ボ）中央委員会所属の党統制委員会とソ連邦人民委員会議所属のソヴェト統制委員会とになった。

第一七回党大会は、改訂した党規約を採択した。その前文には、共産党について簡潔な定義がくだされ、社会主義の勝利をめざす労働者階級と全勤労者の闘争にとって党のもつ意義、プロレタリアートの独裁（ディクタトゥーラ）の体系のなかで党の占める地位がさだめられていた。党細胞は、初級党組織と呼ばれるようになった。党規約には、党内民主主義と党規律についての特別な一章がくわえられた。

党は、団結し統一された組織として大会を迎えた。党内にはどんな反対派もなかった。大会で、反対派のかつての指導者、ジノヴィエフ、カーメネフ、ブハーリン、ルィコフ、トムスキーは懺悔の演説をおこない、党の成功をみとめた。

達成された成功は、社会主義の完全な勝利にたいする共産党員と全勤労者の信念を固めた。ソヴェト国民とともに、資本主義諸国の何百万という勤労者もその成果をよろこんだ。外国の共産党は、大会にあてたあいさつのなかで彼らの気持を表明した。

ソヴェト国民は、第二次五ヵ年計画についての第一七回党大会の決定を感激して迎えた。ソヴェト国民は、多くの困難を切りぬけながら、一路邁進した。だが一九三四年末、彼らの喜びは悲しむべき事件でくもらされた。

一九三四年一二月一日、レニングラートでエス・エム・キーロフが暗殺された。彼は、共産党とソヴェト国家の有数な活動家であり、党中央委員会の政治局員、同書記であり、党レニングラート州委員会の書記であった。彼の死は、党と国民の大損失であった。

犯行現場でとらえられた暗殺者は、ソ連邦における社会主義の勝利をめざすレーニンの基本方針を堅持していた党とその指導的活動家にたいする敵意と憎悪にみちていた。怨みにもえていたこの脱落者は、以前に党を除名されていたのに、党員証をカムフラージュにして、凶悪な犯罪をおこなったのである。党の敬愛する活動家、共産主義をめざし、国民の幸福をめざす不撓不屈の闘士にむかって手をあげた犯罪者は、当然の罰をうけ、極刑を宣告された。

キーロフ暗殺事件は、党とソヴェト国民への警告であった。それは、革命的警戒心を高める必要をあらためて思いおこさせた。異分子から党をまもって、何でカムフラージュされていようと、社会主義とソヴェト国家の利益とに敵対する行動を不可能にする必要があった。

党を強化した措置の一つは、党員記録の点検と党員証の書換えであった。点検はすでに一九三四年一〇月に予定されていた。全連邦共産党（ボ）中央委員会は、党員の登録、党記録文書の作成と保管がはかばかしくないことを示す多くの事実をにぎっていた。この重要事項が純技術的なものとみられて、地区委員会や地方委員会の指導的な働き手の監督をまぬがれていることがめずらしくなかった。党務のなおざりはゆゆしい結果につうじていた。党員証の盗用、党員記録の偽造と抹消は、危険なものになっていた。これはぺてん師や詐欺師の仕業(しわざ)であるだけではなく、妨害することをねらっていた、ソヴェト制度の直接の敵の仕業でもあった。

党文書の点検と書換えは、一九三五—一九三六年におこなわれた。全体としてはこの措置は効

果をあげた。党は、党内にまぎれこんでいた異分子を徹底的に粛清し、その隊列を固め、その戦闘能力を高めた。党員の登録の仕方、党文書の保管と交付は秩序立てられた。しかし点検の過程では、いわゆる「不活動分子」が不当に党から除名されるようなこともおこった。

中央委員会には、党から不当に除名された党員の多数の上申書がきはじめた。そこで、党文書の点検と書換えの途中ですでに中央委員会と地方組織は、おかした誤りをただすことに着手した。この問題は、一九三五年一二月と一九三六年六月の党中央委員会総会で検討された。一九三六年一一月一日から党への採用は再開された。中央委員会は、党へ採用するさいには個人的に審査する必要があること、「真に先進的で、労働者階級の事業に献身的な、社会主義のための闘争のいろいろな部面で試験ずみの、わが国の優秀な人々を、まず第一に労働者のなかから、同じく農民と勤労インテリゲンツィアのなかから」選抜して党の隊列にくわえる必要があることに、党組織の注意をうながした。

それと同時にキーロフ暗殺後には、社会主義的法秩序に違反した措置がいくつか取られた。

3　第二次五ヵ年計画の期限前遂行をめざす闘争。ソ連邦における社会主義の勝利。新しいソヴェト憲法

第一七回党大会後、第二次五ヵ年計画の期限前遂行をめざす党と国民のたたかいはつよまった。生産能力がとくに急増したのは、動力産業と鉄鋼業であった。大規模な発電所、高炉とマルチ

ン炉が操業をはじめた。党のとった措置の結果、燃料産業の事態は改善された。国の機械化が急速にすすむのを見るのは、よろこばしいことであった。

農業では、党は、コルホーズ員大衆の積極性の向上にささえられて、再編成期の結果を急速かつ精力的に克服していった。コルホーズ制度が勝利したのち、党は、コルホーズ制度の強化と発展にもとづいて、農業生産の新しい高揚を組織した。一九三四年の末、コルホーズは農民経営の約七五％を統合していた。粒穀作物と工業用作物の生産はふえた。この年、国家は、国民への供給を保障するに十分な量の穀物その他の農産物を手にいれた。一九三四年、全連邦共産党（ボ）中央委員会一一月総会は、第一次五ヵ年計画の初めに実施された、パンその他の食料品の配給制度を廃止することを決定した。中央からの割当てにかわって、各地でソヴェト商業が広く発展しはじめた。

コルホーズ制度が強固になったので、党はエム・テ・エスの政治部を普通の党機関に改組することができるようになった。政治部は、党の地区委員会に併合された。エム・テ・エスの政治部は、立派に使命をはたした。政治部を改組することによって、党は、コルホーズ農村での全活動——政治、行政、経済、文化、教育、日常生活にわたる活動——を指導できる党機関とソヴェト機関を強化した。これは、党の組織指導に柔軟性があること、現地で党の基幹活動家が成長してきたことを立証していた。

国民経済の技術的改造を完了するという、五ヵ年計画の基本的課題は着々と解決されていった。第二次五ヵ年計画のはじめの二年間だけでも、鉱工業、運輸、農業が受け取った工作機械、一般機械、その他の技術設備は、第一次五ヵ年計画の全期間に受け取った量とほぼひとしかった。国

の生産力の今後の増大は、いまではこの技術をたくみに利用することにかかっていた。
技術を習得してそれを十分使いこなす力のある基幹要員の問題が、決定的な重要性をもつようになった。党は「基幹要員がすべてを決定する！」というスローガンをかかげた。このスローガンは、党が改造期の初めにかかげた「改造期には技術がすべてを決定する！」というスローガンを補足するものであった。いま問題になっていたのは、工業であれ、運輸であれ、農業であれ、軍隊であれ、新しい技術のはいってきたところではどこでも、この技術を動かし、これを十分つかいこなす能力のある人々が、数万、数十万ではなく、数百万必要だということであった。
新しいスローガンをかかげるさい、党は、新しい技術の習得が実践ですでに解決されようとしていることを知っていた。国民経済のあらゆる分野で、古くさくなった技術ノルマを改訂しようとする先進的労働者の運動が広がっていた。この運動は、古い技術ノルマを乗りこえた多数の労働者の現われた石炭産業と鉄鋼業ではじまった。一九三四年、ドンバスの第一号炭鉱（ゴルロフカ）の先山（さきやま）ニキータ・イゾトフは、採炭突撃作業をした功によりレーニン勲章を授与された。多くの炭鉱労働者が彼につづいた。第一次五ヵ年計画の特徴であった、新建設の熱情は、いまや、新しい技術の習得の熱情、高い労働生産性をめざすたたかいの熱情でおぎなわれた。
一九三五年に、新しい技術を習得し古い技術ノルマを改訂しようとする運動は、スタハノフ運動と呼ばれるようになった。それは、一交代に一〇二トンを採炭して普通のノルマを一四倍も突破した先山アレクセイ・スタハノフの名にちなんだものであった。彼の後につづく者は国民経済のすべての部門に現われた。党は生産革新者の創意を支持した。党は、先進的労働者のこの運動に高い政治的評価をくだし、この運動の先頭に立った。

党は、「共産主義とは、自発的な、自覚した、団結した、先進的技術を利用する労働者の、資本主義的労働生産性よりも高い労働生産性である」というレーニンの教え（全集、第二九巻、四三二ページ）にしたがっていた。高い労働生産性をめざす生産革新者の運動は、大衆の社会主義競争の新しい段階であった。この運動は、第一級の技術と、この技術を習得した基幹要員とをよりどころにしていた。それは、国民経済のすべての部門に社会主義的生産関係が確立したこと、人々の労働にたいする考え方が根本的に変わったことと切りはなせない関連があった。運動をおしすすめた主な動機は、労働生産性の高い指標を達成し、社会主義の祖国の富をふやし、ソヴェト国民の福祉を向上させることであった。社会の幸福のために働くこと、社会主義国家の繁栄と威力の強化のために働くことが、生産革新者の運動の基礎となっていた。同時に、彼らの労働の高い指標は、労働者・職員の賃金が全般的に引き上げられることにつうじていた。この運動は、労働者の文化的・技術的水準の向上の反映であるとともに、社会主義的鉱工業の組織者の新しい部隊が輩出するのを促進した。

一九三五年一一月、鉱工業および運輸のスタハノフ運動者全連邦会議の席上、参会者は新しい技術を利用する経験を分かちあった。ここには、社会のために自分の個人的な成果を全員の資産にしようとするソヴェト人の新しい特徴が現われていた。

党は生産革新者の運動の先頭に立って、この運動を大衆的なものにしようと努力した。党組織は、新しい技術を習得し、古くさくなった低いノルマをもっと高いノルマに代えようとする貴重な創意を、なににもよらず取上げ、この創意を共同の財産にした。革新者の経験を広めるために、生産技術会議が招集されて、すすんだ作業方法が審議され、作業経験を交流するための工場同士

の情報公開がおこなわれ、先進的労働者はおくれた労働者の後援を、古参労働者は若い労働者の後援を引きうけた。先進的な経験をつたえる学校がつくられた。主導的な役割をはたしていたのは共産党員とコムソモール員であった。彼らは、通信教授や夜間講習会で、学校や職業技術学校や高等教育施設で、自分の技術的水準を高めていった。労働者の全大衆が彼らの範にならった。労働者階級の文化的・技術的水準を引き上げることは、党組織の関心のまとになった。

新しい進歩的な運動はすべて、古いものとの闘争をつうじて進路をひらいてゆくものである。生産革新者の運動もそうであった。労働者の一部には、高い出来高ノルマが単価の引き下げ、賃金低下をもたらすのではないかとあやぶむ者もいた。一部の技術要員は、技術ノルマについてのこれまでの観念にとらわれていて、運動を支持し組織することができなかった。この障害を乗りこえることに取組んだのは、あらゆる先進的なもの、進歩的なものの担い手である共産党員であった。

生産革新者の運動に大きな支持をあたえたのは、一九三五年の党中央委員会一二月総会であった。同総会は、スタハノフ運動の発展と関連して、鉱工業と運輸の活動状況を審議した。総会には、約三〇〇〇名の経営活動家、党活動家、技術者、先進的労働者が出席していた。総会は、古くさくなった出来高ノルマをもっと思いきって改訂し、先進的な労働者の経験にしたがって新しいノルマに代えるよう、呼びかけた。とくに重視されたのは、すべての男女労働者の技術的知識を高めることであった。

生産革新者の運動の結果、鉱工業の労働生産性は、第二次五ヵ年計画中に、計画されていた六三%ではなく八二%向上した。

農村では、耕作を改善し、粒穀作物と工業用作物の収穫率を高め、畜産業の立遅れを一掃するための闘争がくりひろげられた。農業生産の組織者の基幹分子が成長してきた。

コルホーズ制度の基礎を固めるうえで重要な意義をもっていたのは、一九三五年二月にひらかれて、農業アルテリの新しい定款を採択したコルホーズ突撃隊員第二回全国大会であった。この定款は、コルホーズの蓄えた経験を概括していた。定款によると、コルホーズの耕作する土地はそのコルホーズに永久の用益地として割当てられたが、これはコルホーズの発展の強固な基礎をつくりだすものであった。定款には大規模な集団経営を組織し運営する主要原則が述べられていた。定款は、社会的生産の利益にかなうとともに、コルホーズ員一家の個人的な必要を充たすに十分な、個人経営の規模をさだめた。定款は、コルホーズ民主主義の幅広い発展にそなえて、コルホーズ員の権利をさだめていた。

コルホーズ定款の実施は、農業に、労働規律の強化と労働生産性の向上に、よい影響をおよぼした。しかしこの強化と向上には、党と国民の奮闘努力が必要であった。党は、うまずたゆまずコルホーズの基礎を固め、農業生産の不断の発展につとめた。一九三五—一九三七年にひらかれた中央委員会諸総会では、作付と収穫の取りいれの準備と実施の問題、基礎の固まっていないコルホーズを援助する問題、穀物の国家調達と国家買付の問題が、たえず審議された。これらの問題は、党の地方委員会と地区委員会、コルホーズの党組織の注目の的になっていた。

農村の党地区委員会は、コルホーズがコルホーズ内の労働と労働報酬の支払いを正しく組織し、労働規律を強化し、指導的要員を選抜し、生産の決定的な部門に共産党員を正しく配置し、コルホーズの党組織を固めるのを助けた。この面でとられた措置はいずれも、党にとって貴重な成果

であった。コルホーズの共産党員は、新しい農業アルテリ定款を適用して、コルホーズの共同経営の基礎を固め、生産をたかめ、コルホーズ員のあいだに労働にたいする社会主義的な態度を育てていった。

党は、コルホーズを強化するとともに、これに新しい農民層を引きいれることに努力した。定款が採択されたとき、コルホーズにはいっていない農家は約四〇〇万戸あったが、第二次五ヵ年計画の終わりには約一五〇万戸になっていた。

第二次五ヵ年計画は、第一次五ヵ年計画と同じく、期限前の一九三七年四月一日に、四年三ヵ月で遂行された。

一九三七年に、大工業の総生産高は一九三二年にくらべて二倍以上に、一九一三年にくらべて八倍にふえた。大工業、とくに機械工業の成長は、国民経済のすべての部門の技術が更新されたことに現われていた。工業総生産高の八〇％以上が、二次の五ヵ年計画中に新設されたか、すっかり改造されたかした企業から得られていた。農業では、一九三七年に、トラクター四五万六〇〇〇台、コンバイン約一二万九〇〇〇台、トラック四五万六〇〇〇台が働いていた。国民経済の技術的改造は大体において完了した。

五ヵ年計画は、農業についても順調に遂行され、農業の集団化が完了した。コルホーズは、農家総戸数の九三％に当たる一八五〇万戸を統合していた。コルホーズの粒穀作物作付面積は、農民の全作付面積の九九％あまりを占めていた。

一九三七年はめぐまれた年で、粒穀と工業用作物の収穫は、これまでのどの年をも上回っていた。だが畜産業の復興は依然として遅々としていた。これを復興するには、穀物の生産を急増さ

せ、飼料基盤を大幅に広げ、コルホーズ員を物質的にはげます必要があった。

第二次五ヵ年計画中に、国民の生活状態は大幅に改善された。ソ連邦の国民所得は二倍以上にふえ、労働者・職員の賃金のフォンドは二倍半にふえた。コルホーズの貨幣所得は三倍以上にふえた。

文化革命も着々とすすんでいた。小・中学校の生徒数は、五ヵ年計画中に八〇〇万人以上ふえた。一九三七年に、高等教育施設では五〇万人以上の学生がまなんでいた。中等および高等専門教育をうけた専門家の卒業は、第一次五ヵ年計画にくらべて二倍以上にふえた。ソヴェト・インテリゲンツィアは、約一〇〇〇万人に達していた。

第二次五ヵ年計画は、レーニン的民族政策が大成果をおさめた点で特筆すべきものであった。民族諸共和国には、大規模な工業建設がくりひろげられ、多数の技術要員が生まれた。いくつかの民族――カザヒ人、キルギス人、トゥルクメン人、タジク人、北部地方とダゲスタンの諸民族、その他――が、苦しい資本主義的段階をとおらずに、社会主義に移った。全連邦共産党（ボ）は、この面倒な問題を理論的にも実践的にも解決することによって、前資本主義的発展段階にある、世界の多くの民族に社会主義への道を示した。

ソ連邦で社会主義が勝利した基本的な結果は、社会主義的生産関係が国民経済のすべての部門に確立したことである。新しい社会主義経済を創出するという、社会主義革命の根本的課題は解決された。

ソ連邦における社会主義の建設は、レーニンの立てた計画にしたがい、レーニン的党綱領にもとづいておこなわれた。共産党は、社会主義の建設における最大の主導勢力であった。社会主義

の勝利をめざす闘争の重荷をになったのは、主として、共和国、地方、地区の党組織と初級党組織にいた、多数の党基幹活動家であった。労働者階級、勤労農民大衆、ソヴェト・インテリゲンツィアは、こぞって党の政策を支持し、自分たちの懸命な努力で社会主義の勝利を確保した。

ソ連邦の実生活に生じた深刻な変化、国の経済と社会制度で社会主義のおさめた決定的な成功は、一九三六年一二月、第八回臨時全連邦ソヴェト大会で採択された、新しいソ連邦憲法で法的に確認された。憲法は、ソ連邦で社会主義の勝利した事実を反映していた。それには、社会主義制度は国民経済のすべての部門で確立したとのべてあった。生産手段の社会主義的所有は、社会の強固な経済的基礎になった。「各人は能力に応じて、各人には労働に応じて」という社会主義的分配原則が実現しはじめた。この原則は、自分の労働の結果を改善するよう社会成員をはげまし、個人の利益と社会の利益を調和させることを可能にし、労働生産性の向上、国の経済の振興、国民の福祉の向上を強力に鼓舞するものになっていた。

住民の階級構成は一変した。搾取階級はすべて一掃された。ソ連邦にのこったのは労働者階級、農民階級、インテリゲンツィアだけであった。だが彼らも、社会主義をめざすたたかいをつうじて根本的な変化をこうむっていた。

ソヴェトの国の労働者階級は、資本主義を一掃し、生産手段を社会主義的社会的所有にかえて、本来の意味、古い意味でのプロレタリアートではなくなった。ソ連邦のプロレタリアートは、あらゆる搾取から解放された労働者階級になり、社会で主導的な地位を占め、社会の共産主義への前進を指導している。

農民階級は、自分の一かけらの地所にしばりつけられて、地主・富農・商人・高利貸に搾取さ

れる小生産者の階級ではなくなった。コルホーズ制度が勝利するとともに、農民はあらゆる搾取から解放された。農民の労働は、社会的所有にもとづいた集団的労働になった。

社会主義的所有の二つの形態（全人民的形態とコルホーズ＝協同組合的形態）の共通性は、労働者階級とコルホーズ農民を近づけ、労農同盟を固め、両者の友誼を揺ぎないものにした。ソ連邦のインテリゲンツィアも変化した。国民のあいだから出て、社会主義に献身的な新しいインテリゲンツィアが生まれた。

労働者、農民、インテリゲンツィアの利害が共通なため、ソヴェト国民の揺ぎない社会的・政治的および思想的な統一が生まれた。

社会主義建設の時期に、ソ連邦のすべての民族の面目は一新した。彼らは最終的に社会主義的民族になった。かつての相互不信感にかわって、相互の友情が生まれた。単一の連邦社会主義国家の体制のなかでの彼らの兄弟のような協力関係が打ち立てられた。

憲法は、ソヴェト民主主義の全面的な発展とソ連邦諸民族間の関係における真の国際主義とをめざして、国家機構を大幅に改善した。憲法は、ソヴェトの選挙のさいの制限の遺物をすべて廃止し、多段階選挙を直接選挙に代えた。すべての勤労者代議員ソヴェトの秘密投票による普通・直接・平等選挙がさだめられた。ソヴェトの国のすべての市民はソヴェトへの平等な選挙権と被選挙権を得た。

憲法は、ソ連邦のすべての市民が労働し、休息し、教育をうけ、老齢に達した場合、同じく病気や労働能力を失った場合に物質的保障をうける権利を、法的に確認した。

人類の多年のたたかいの目標であった諸権利をすべての市民にみとめるとともに、憲法は、彼

らに重大な義務をおわせた。それは、ソヴェト国家の法律を厳守すること、労働規律をまもること、自分の社会的責務に忠実であること、社会主義的共同生活のおきてを尊重すること、社会主義的公共財産を大切にし堅固なものにすること、ソヴェト国家の軍隊で兵役に服するという名誉ある義務を忠実にはたすこと、社会主義の祖国を献身的にまもることである。憲法は「祖国をまもることは、ソ連邦の各市民の神聖な責務である」と宣言した。

ソヴェト市民の権利と義務には、社会主義的民主主義の諸原則が具現されている。社会制度と国家制度をさらに民主化することは、社会主義的民主主義を強化し発展させるのに貢献した。

ソ連邦憲法には、ソヴェト社会で共産党の占める指導的な地位が強調されている。憲法にはこう書きこまれている。「労働者階級とその他の勤労者層の隊列のなかの最も積極的で自覚した市民は、社会主義制度の強化と発展をめざす勤労者のたたかいの前衛部隊であり、社会的団体であれ国家的団体であれ、勤労者のすべての組織の指導的中核をなす全連邦共産党（ボリシェヴィキ）に結集する」。

勝利した社会主義の国の憲法は、歴史上知られるすべての憲法のうちで最も民主主義的な憲法であった。

ソ連邦憲法は、資本主義諸国で民主主義のためにたたかっているすべての闘士への力づよい支援であった。この点にこの憲法の巨大な国際的意義があった。

要　約

一九三三―一九三七年の特徴は、ソヴェトの国の国内生活では、国民経済のすべての部門の社会主義的改造が完了し、社会主義社会が大体において建設されたことである。「誰が誰を」という問題は、国内では社会主義に有利に解決された。ソ連邦で社会主義が勝利したことは、世界史的な意義をもっていた。世界のすべての国民にとって社会主義への大道がきりひらかれた。ソ連邦における社会主義の建設は、偉大なレーニンの遺訓の遂行であり、共産党の組織し方向をさししめす活動、その賢明な指導の結果であり、党の政策をこぞって支持した労働者、農民、インテリゲンツィアの懸命な努力の結果であった。

ソ連邦は、自国の経済と国防上の必要に設備と兵器をすべて保障する、強大な社会主義的工業＝コルホーズ大国になった。農業の集団化は完了した。

第二次五ヵ年計画の時期に、党は国民経済の社会主義的改造を完了するうえでの重要課題に専念した。それは工業における新しい企業の運営に習熟し、新しい技術を習得すること、コルホーズを組織的・経済的に固めること、都市と農村のために技術的インテリゲンツィアの多数の基幹分子をつくりだすことであった。

国の経済で社会主義的生産関係が勝利した結果、ソヴェト社会の階級的構造は一変した。搾取階級はすべて一掃された。のこったのは、友好的な二階級――労働者階級と農民――、これと固く結びついた勤労インテリゲンツィアであった。ソ連邦の社会主義的民族のあいだの友好と兄弟

のような協力関係は強固になった。国民の社会的・政治的および思想的統一が生まれた。党の提唱でソヴェト国民は、ソ連邦の政治経済生活に生じた変化を反映した第二のソ連邦憲法——世界で最も民主主義的な憲法——を採択した。

社会主義が勝利するとともに人間による人間の搾取は一掃され、勤労者の生活状態は根本的に改善された。国の経済に社会主義制度が確立したことは、高度の技術にもとづいて社会的生産を不断に、かつ急速に拡大するための、社会の富をふやし勤労者の福祉を不断に向上させるための条件をつくりだした。

ソ連邦における国民経済の社会主義的改造は、騒然たる国際情勢のもとで完了した。ドイツでファシズムが権力をにぎり、ドイツ・ファシズムがヨーロッパで、日本帝国主義が極東で侵略行動に出るとともに、ソ連邦にとって戦争の脅威は高まった。そこで、党と国民は、平和な社会主義建設に取組むとともに、国防を強化した。

敵対する資本主義に包囲され、外部からの攻撃の危険にたえずさらされながら、ソ連邦で社会主義を建設したことは、共産党に指導されるソヴェト国民の比類ない世界史的な偉業であった。

第一四章　社会主義社会の強化のためにたたかう党。国防の強化

（一九三七—一九四一年六月）

1　一九三七—一九三八年にファシストの侵略が拡大するなかで平和と諸国民の安全のためにソ連邦のおこなった闘争

一九三七年の秋、資本主義世界には長い不況ののち、新しい恐慌が突発した。恐慌が波及しなかったのは、自国の経済を戦時態勢に再編成していた日本とドイツだけであった。両国工業の好況は、戦争準備の結果であった。

販売市場と原料資源をめざす主要資本主義国間の闘争は激化した。経済発展の不均等性は、戦争によって世界を暴力的に再分割しようとする、侵略諸国家の野望に拍車をかけた。中国の東北諸省で地歩を固めた日本は、一九三七年、中国を自国の植民地にしようとして中国全土を侵略するための戦争をはじめた。ドイツは、一九三八年、オーストリアに軍隊をいれて、同国を占領した。イタリアとドイツは、スペインへの軍事干渉をつづけていた。

地球上のいくつかの地域が戦火につつまれた。それは、帝国主義諸国家については侵略戦争であり、中国、エチオピア、スペインの侵略をうけた国民については正義の民族解放戦争であった。日本の侵略がつよまるとともに、中国人民は、内外の反動勢力にたいする戦争をおこなっていた。日共産党を先頭とする革命的な中国共産党は「内戦を停止し、一致して抗日せよ！」というスローガンをかかげた。中国共産党は、自国を隷属させようとする日本帝国主義者にたいする国民の英雄的な抵抗の先頭に立った。

戦火はますます広がっていった。こうした状況のもとで党とソヴェト国家は、集団的に安全を保障し侵略者に反撃をくわえるために、新たな努力をこころみた。ドイツのオーストリア占領後の一九三八年三月、ソヴェト政府は、ファシスト侵略の拡大を阻止し、新しい世界戦争を未然に防ぐために、ソ連邦には集団的な行動にくわわる用意がある、と声明した。ソヴェト政府は、国際連盟の内外の大国とともに適当な実際措置をただちに検討するよう、提案した。「明日ではもうおそすぎるかもしれない、だが今日なら、もしすべての国家、とくに大国が平和の集団的保障の問題について確固とした明確な立場を取るなら、手おくれではない」と声明にはのべてあった。

ヒトラー一味がチェコスロヴァキアをおびやかしはじめると、ソヴェト政府は、一九三五年のソヴェト・チェコスロヴァキア条約の義務にしたがって、すなわち、フランスが侵略者に反対することを条件として、同国の救援におもむく用意のあることを声明した。ソヴェト政府は、ソ連邦、フランス、チェコスロヴァキアの軍の代表者の会議をひらいて、ヒトラー侵略の新しい犠牲者をまもる必要措置を討議するよう提案した。ソ連邦には、チェコスロヴァキアがこの援助を受諾して、自分でも侵略者に抵抗するならば、フランスがくわわらなくても同国に援助をあたえる

用意があった。

平和を維持することは、共同して侵略者に反撃をくわえようとするソ連邦の努力を西側列強が支持するかどうかに、多分にかかっていた。ヒトラーは、ソ連邦、イギリス、フランス、アメリカその他の国からなる連合にあえてはむかいはしなかったであろう。

だが西側列強の支配層は、ファシスト侵略者がこれら大国の利益を、それどころかその存立すら、はなはだしくおびやかしていたのに、集団的安全保障政策をまたしても拒絶した。彼らは、侵略者と話合いをつけることを当てにして、侵略者に譲歩する政策のほうをえらんだ。彼らの目算は、自分のうける打撃をそらせて、これをソ連邦にむけることにあった。彼らは、ドイツと日本をソ連邦にけしかけて、社会主義国家をほろぼすついでに自分たちの競争者をもよわめよう、とねらっていた。こうしたずるがしこい政策によって、イギリス、アメリカ、フランスの独占資本家たちは、自分たちの世界支配を打ちたてるつもりでいた。ヒトラー一味がチェコスロヴァキア侵略を準備していた一九三八年九月、英仏独伊の政府首脳は、ミュンヘンで会合し、チェコスロヴァキアを分割すること、同国のいくつかの国境地区をドイツに引渡すことを取りきめた。チェコスロヴァキアは、英仏両国の支配層によって売渡されたのである。そのときいらい「ミュンヘン政策」という言葉は、侵略者をほう助し、他国民を裏切って侵略者と取引きする、恥さらしな政策の代名詞となった。西側列強の圧力をうけて、チェコスロヴァキアのブルジョア政府は降伏し、国をまもる余地が十分にあり、ソ連邦が同政府を援助するはずだったにもかかわらず、ヒトラー一味にたいする抵抗を断念した。アメリカ政府は正式にはミュンヘン会談にくわわらなかったが、その招集を支持し、またその取決めを完全に承認した。ミュンヘンの裏切りを非難した

のは、ソ連邦だけであった。フランスがチェコスロヴァキアを裏切ったので、一九三五年のソ仏相互援助条約は、事実上無効になった。

いわゆる「不介入政策」の美名にかくれて、ミュンヘン政策派はスペインにおけるファシズムの勝利にも力をかした。もっとも、この勝利の結果、当の西側列強の戦略的地位はよわまったのである。一九三九年のはじめ、スペインの共和政府は敗北をこうむった。国内にはファシスト政権が樹立された。

党とソヴェト政府は、西側列強のミュンヘンでの裏切りから必要な結論を引きだした。侵略者とたたかううえでこれら列強の協力を期待できないことが、ますますはっきりしてきた。

2　社会主義の建設を完了するなかでの党の政治活動。第一八回党大会

ソ連邦には、政治経済的激動はなかった。国内では建設活動がつづいていた。第二次五ヵ年計画が遂行されるとともに、過渡期の主な課題は解決された。一九二一年に実施された新経済政策は、使命をおえた。ソ連邦には大体において社会主義社会が建設された。

社会主義は共産主義の最初の段階である。完全な共産主義は、社会主義の強化と発展にもとづいて、社会主義から成長する。

「社会主義は」とレーニンは言っている。「資本主義から直接に成長してくる社会である……共産主義は、より高度な社会形態であって、社会主義が完全に確立したときにはじめて

発展することができる」(全集、第三〇巻、一八五ページ)。

ソ連邦は、大体において社会主義を建設したのち、第一八回党大会の規定したように、社会主義社会の建設を完了して社会主義から共産主義に徐々に移っていく段階にはいった。

社会主義は、自分の出てきた旧社会の特徴をまだ多くの点でのこしている。社会的生産の発展水準は、すべての社会成員の欲望を十分みたすにたる量の財貨をまだ保障してはいない。消費資料の分配にはある種の不平等がのこっている。社会主義的生産関係は、農業のような重要経済部門では生まれたばかりである。社会的労働の生産性は向上はしたが、社会主義制度にそなわる可能性にまだふさわしいものではない。人々の意識には私的所有者心理がのこっている。

党は、社会主義社会の建設を完了しこの社会を強固にすることに主として専念した。必要なことは、社会主義の物質的・技術的基盤を広げ強固にすること、社会主義的生産関係を改善することであった。労働に応じる分配という社会主義の原則を厳守し、労働の結果を改善するよう勤労者の物質的奨励をつよめ、労働の基準と消費の基準とを社会と国家が統制すること、また誠実に働く意思のない者には強制をくわえることが、重要な意義をもっていた。勤労者のあいだに労働と社会的所有とにたいする社会主義的な態度をやしなううえで大きな課題がひかえていた。

ソ連邦で社会主義が勝利したことは、ソヴェト国家の政治経済的威力をつよめ、国家の社会経済的基盤を広げた。社会主義国家は新しい発展段階にはいり、プロレタリアートの独裁(ディクタトゥーラ)の国家が全人民的国家に徐々に成長転化する過程がはじまった。このことは新しい憲法に言い表わされていた。社会主義国家の政治的基礎――労農同盟、ソ連邦諸民族の友好、ソヴェト国民の統一――を今後とも強固にし、社会主義的民主主義を発展させることが必要であった。社会主義の利

益は、社会主義的法秩序と社会的所有とをまもり、国の防衛と安全を確実に保障することを必要としていた。

社会主義のもとでは、社会の生活ではたす党の指導的な役割は高まった。新しい環境は、党活動に新しい態度をとり、大衆のあいだでの組織活動を改善し、各党員の政治的積極性と労働意欲を高めることを必要とした。党は党内民主主義を拡大する方針をとった。

社会主義のためにたたかうなかで、党はいちじるしく強固になり、経済指導のうえでも、党の大衆活動のうえでも大きな経験をつんでいた。しかし、党組織の活動には重大な欠陥があった。人を納得させ教育することが、上からの命令や行政的処理にすりかえられることが往々あった。一部の党組織では、党規約がまもられずに、党機関の選挙制に違反することが珍しくなく、党会議が長いあいだひらかれず、互選のやり方が広く広がっていた。そのため、民主主義的中央集権主義の原則がはなはだしく犯される結果になった。これらの欠陥は、ソ連邦最高会議の選挙の準備を党組織にととのえさせる問題が審議された、一九三七年二月下旬から三月上旬にかけての党中央委員会総会で批判をうけた。

新しい憲法が施行され、選挙制度がさらに民主化されたことは、国の政治生活に転換の生じたことを意味していた。党はこの転換にそなえていなければならなかった。党自身が民主主義的なやり方を一貫して実行し、党生活で民主主義的中央集権主義の原則を厳守する必要があった。中央委員会は、党組織に活動を建てなおすよう指令した。党機関を互選するのをやめるよう指示され、選挙のさい名簿にもとづいて投票することが禁止され、秘密投票制が実施された。

党は、非党員とブロック、同盟を結んでソ連邦最高会議の選挙にのぞみ、彼らといっしょに共

通の代議員候補を立てた。共産党員と非党員との選挙ブロックは、勝利した社会主義の国では完全に理にかなった当然なことであった。それは、ソヴェト社会の社会主義的統一を言いあらわしていた。最高会議の選挙は、一九三七年一二月一二日におこなわれた。投票には、全有権者の九六・八%が参加した。党員と非党員とのブロックの候補者には、投票者の九八・六%の票が投じられた。ソヴェト国民は、共産党員に完全な信頼を表明し、党の政策に賛同したのである。

社会主義の勝利は、党内民主主義とソヴェト民主主義を展開するのに有利な環境をつくりだしていた。党がのちにスターリンの個人崇拝と規定したものにともなう、党内民主主義とソヴェト民主主義へのあからさまな違反はこれに反するものであった。階級敵およびその手先との激闘のもとでは避けられなかった、民主主義の若干の制限を、スターリンは党指導と国の指導の規範にした。彼は、レーニンの仕上げた、党生活の規範、集団指導の原則に違反した。党と国家の多くの重要問題が彼によって個人的に解決されていた。スターリンの活動には言行の不一致が生じた[9]。彼の著作には、歴史の創造者としての人民について、党と党中央委員会の集団的指導者としての役割について、基幹活動家への配慮について、党内民主主義の展開について、正しいマルクス主義的な命題がふくまれていた。しかし実際にはこれらの命題はおかされていた。

社会主義が勝利したのちにも、ソヴェト国家を極力強化し、敵の陰謀、まず第一に包囲する資本主義の陰謀にたいする警戒心を高めることは、依然として必要であった。一掃された搾取階級出の敵対分子やその手先にたいして警戒心を発揮することも必要であった。だが、ソ連邦ですでに社会主義の勝利していた一九三七年の中央委員会二月—三月総会で、スターリンが、社会主義の地歩が強固になりソヴェト国家がさらに前進するにつれて、国内の階級闘争はますます激化す

るだろう、という命題をかかげたのは誤りであった。実際には、ソヴェトの国で階級闘争がもっとも激烈だったのは、「誰が誰を」の問題が解決されて社会主義の基礎がつくられる時期であった。だが社会主義が勝利し、搾取階級が一掃され、ソヴェト社会に社会主義的統一が打ちたてられたのちには、階級闘争の激化が避けられないという命題は誤ったものであった。実際には、この命題は、党と国家の有力な活動家、中央委員と同候補、すぐれたソヴェト軍司令官、その他なんのとがもない多くの党員と非党員にたいする大量弾圧の論拠になった。モロトフとカガノヴィチにもその責任がある。党規約とソヴェトの法律ははなはだしく犯された。中央委員、同候補にたいして内務人民委員部の諸機関が、エジョフやベリヤの指図をうけておこなった、ほしいままな告発は、中央委員会諸総会で検討されなかった。

党と内務人民委員部諸機関との相互関係のレーニン的原則はやぶられた。国家保安機関は、革命の獲得物をまもるうえで疑いのない功績を立てていたので、大きな信頼を博していた。だがこれらの機関にたいする党と国家の監督がスターリンの個人的な監督にすりかえられ、正常な裁判がスターリンの個人的な決定にすりかえられることがめずらしくなくなると、事情は一変した。彼の指示で内務人民委員の部署には最初にエジョフ、ついでベリヤが任命された。彼らはその犯罪的な活動によって党と国民にとくに大害をおよぼした。彼らの首謀で、多くの誠実な党員や党外のソヴェト人が中傷され、無実の苦しみをなめた。

党と国民には、その当時はスターリンの権力乱用が分かっていなかった。ソヴェト国民は、スターリンを社会主義の勝利をめざす積極的な闘士として知っていて、彼を信頼していた。弾圧は社会主義のために真の敵にたいしておこなわれているのだという確信があった。だが、党のレー

ニン的基本方針のために積極的に一貫してたたかっていた共産党員にたいしても、無根拠な告発がおこなわれた。当時、党内の異常な現象を懸念した有力な党活動家のいくたりか（ゲ・カ・オルヂョニキッゼ、ゲ・エヌ・カミンスキー）は、社会主義的法秩序と党生活のレーニン的規範の侵害に反対し、権力乱用に反対した。

社会主義的法秩序の侵害と大量弾圧は、共産党に、共産主義建設に大害をおよぼした。しかしこうした不正常な現象も、社会主義的社会制度の性格と本性、社会主義国家の本性と本質を変えることはできなかったし、また変えもしなかった。また党の政治的基礎と組織的基礎をぐらつかせることもできなかった。党のレーニン的基本方針はゆるがなかった。

党と地方党組織は、積極的で自主的な生活をつづけ、社会主義建設をはばむあらゆる障害をのりこえていった。国民大衆の力づよい創意は歴史的な大事業をなしとげた。ここにソヴェト社会主義制度の民主主義的性格が現われていた。党全体は、中央委員会の指導のもとに、国民の利益のため、ソ連邦における社会主義の建設のために献身的な闘争をつづけていた。ソヴェト国民は、党を完全に信頼し、党の指示にしたがって、社会主義の大事業をおしすすめていた。社会主義建設はつぎつぎに新しい勝利をおさめた。ソ連邦の威力はつよまった。

社会主義の勝利を端的に示したものは、新入党員がふえ、インテリゲンツィアが激増したことであった。党、ソヴェト、経済機関の指導的な活動には、若くて、往々経験や必要な思想的・政治的素養に欠けた要員が抜擢されていた。インテリゲンツィア、党基幹活動家の思想教育と政治教育をつよめる必要があった。全連邦共産党（ボ）中央委員会は、党の宣伝・扇動を改善するためいくつかの措置を講じた。中央でも地方でも党のイデオロギー活動を担当する機関が強化され

た。いろいろな学校や講習会をつうじて党の基幹活動家を養成し再教育する制度が設けられた。

党と国民の生活のうえで重要な意義をもっていたのは、一九三九年三月一〇日から二一日までひらかれた全連邦共産党（ボ）第一八回大会であった。大会には、約一五八万九〇〇〇人の党員と八八万八〇〇〇人以上の党員候補を代表する代議員が出席していた。大会で活動報告をおこなったのは、イ・ヴェ・スターリン、エム・エフ・ヴラヂミルスキー、デ・ゼ・マヌイリスキーであった。大会は、ソ連邦国民経済発展第三次五ヵ年計画と党規約の改正とを討議し、承認した。

党大会は、ファシスト諸国家が自由を愛する諸国民に戦争をしかけたことは世界平和をおびやかすものである、と指摘した。そのころ戦争には約五億の人口をもつ国々がまきこまれていた。大会では、西側列強のミュンヘン政策、侵略者を放任する政策がこれら列強にとって大失敗におわるかもしれないことが暴露された。

ソヴェト政府の対外政策に賛同して、第一八回党大会は、つぎの指令をあたえた。それは、平和をまもりすべての国と実務関係をつよめる政策を今後も堅持すること、警戒をおこたらず、戦争挑発者がソヴェトの国を紛争にまきこむのを許さないこと、赤色陸海軍の戦力を極力強化すること、平和と諸国民間の友好とに関心をもつ、すべての国の勤労者との国際的なつながりを強めることであった。

大会は、ソ連邦の基本的な経済課題——人口一人当たりの生産高で主な資本主義諸国に追いつき、これを追いこすという——の問題を提起した。この課題は、すでに十月革命の前夜に、レーニンが社会主義国の展望としてかかげたものであった。ソ連邦で社会主義が勝利するとともに、それは党と全ソヴェト国民の実践的な課題になったのである。

党大会は、マルクス＝レーニン主義理論の若干の問題を検討した。スターリンは、レーニンの思想にしたがって、中央委員会の活動報告のなかで、一国、すなわちソ連邦で共産主義を建設する可能性があるという命題をかかげた。このことは、ソヴェト社会主義社会が共産主義の道を前進する展望にとって重要な意義をもっていた。大会は、社会主義のもとで国家が死滅するとか、国家機関が縮小し弱まるとかいう、有害で誤まった命題を非難した。こういう見解の広がることは、ソ連邦が世界でただ一つの社会主義国で敵対する資本主義国家に包囲されているという状況のもとでは、非常な危険をはらんでいた。

党中央委員会の活動報告と大会代議員の発言では、社会主義国家の発展の主な段階と、この国家の基本的な機能との特徴があきらかにされた。ソヴェト国家は二つの主な発展段階をとおった。最初の段階は、十月革命の勝利から搾取階級の一掃されるまでの時期をふくむ。ソ連邦で社会主義が勝利するとともに、第二の段階がはじまった。最初の段階の社会主義国家の機能は、国内の打倒された階級の反抗を鎮圧すること、外部からの攻撃から国をまもること、経済組織活動と文化教育活動をおこなうことである。第二の段階では、搾取階級は一掃されているのでこれを鎮圧する機能はなくなるかわりに、社会主義的所有を保護する機能が大きくなり、経済組織機能と文化教育機能があらゆる面で発達し、外部からの攻撃から国を軍事的にまもる機能は完全にのこっている。社会主義が勝利するとともに社会主義国家の機能に変化がおこっても、それはこの国家が弱体化したり死滅したりすることを意味するものでは全然なかった。党大会は、すべての国家機関、とりわけ、社会主義の国をまもる機能をはたしている国家機関を極力強化するよう呼びかけた。

大会で目立った地位を占めていたのは、ソヴェト・インテリゲンツィアと彼らにたいする正しい態度の問題であった。社会主義のもとでインテリゲンツィアは真に人民的な、労働者階級・コルホーズ農民と固く結びついたものになり、ソヴェト社会の重要勢力になった。大会は、インテリゲンツィアに適切で注意ぶかい態度をとること、彼らにたいしてまだのこっている不信を、古いインテリゲンツィア観の遺物をきっぱり片づけることを、党組織の義務であるとした。

大会は、ソ連邦国民経済発展第三次五ヵ年計画(一九三八―一九四二年)を検討した。計画は、国の工業力を増強し、コルホーズ制度を強固にし、国民の生活水準と文化水準を高め、国防力を強化することを予定していた。第三次五ヵ年計画は、ソ連邦にうちたてられた社会主義の最初の長期国民経済計画であった。一九四二年には鉱工業生産高を一九三七年にくらべてほぼ二倍にすることが予定されていた。これは化学と特殊鋼の五ヵ年計画であった。五ヵ年間に電力の生産を二倍、機械工業の生産高を二・三倍、化学工業の生産高を二・四倍にふやすことが予定されていた。鉄鋼業では、関心は、機械工業と国防工業とに必要な、特殊鋼の生産にむけられていた。

国防工業の発展を早めること、燃料、電力、その他の生産部門の生産物について国家の大量の予備をつくりだすことが見込まれていた。国の主要経済地区を総合的に発展させること、ウラル、ヴォルガ沿岸地方、シベリア、中央アジアに代替企業を建設すること、国の東部の石炭=製鉄基地を拡張すること、ヴォルガとウラルのあいだの地区に石油基地を、ソ連邦の東部地区と東南地区に新しい穀物基地をつくりだすことが予定されていた。

大会は、党規約の改正についての決議を採択し、改訂された規約を承認した。党に採用するさい、どの社会的グループに属するかにしたがっていろいろな部類に分けていたのが廃止され、す

べての入党者に、単一の採用条件と同じ候補期間がさだめられた。しかし、このことは、入党者にたいする厳格さを低めることや、採用される者の構成にたいする党組織の責任をよわめることを意味するものではなかった。規約には、党員の権利について追加がおこなわれた。各党員は、党政策の実際問題について党会議や出版物紙上で自由かつ実務的な討議にくわわる権利、党の会議で党のどんな働き手をも批判する権利、党機関を選挙し、またこれに選挙される権利、自分の活動または行動について決定がくだされるあらゆる場合にみずからくわわることを要求する権利、党中央委員会をもふくむどの党機関にも任意の質問や上申書を提出する権利をもつ、と。

『全連邦共産党（ボ）規約の改正』という決議では、党員の運命についての形式的な、無関心で官僚主義的な態度が非難され、党の基幹活動家を誹謗する中傷者・出世主義者の行動に手きびしい批判がくわえられていた。規約には、党からの除名や被除名者の復党の問題を解決するさい、注意ぶかい態度をとること、提起された告発を慎重に検討することを保障する、一連の条項が追加された。

規約は大量粛清を廃止した。これは過渡期には党の構成を改善する手段であったが、社会主義が勝利するとともに、無意味になっていたからである。規約では、経済建設・文化建設ではたす初級党組織の役割が強調されていた。コルホーズ、ソフホーズ、エム・テ・エスをふくめて、生産企業の党組織には、管理部の活動を監督する権利があたえられた。これはこの党組織の責任を高めるものであった。

規約はこう指摘した。コムソモールは国家建設および経済建設における党の積極的な助力者である、初級党組織のないところではコムソモール組織は、党の決定の遂行に完全な責任を負う、

と。

大会が党規約にくわえた改正と追加は、党内民主主義の発展、党内活動全体の改善、党と党外大衆との結びつきの強化を促進し、国民のあいだでの党の権威を高めた。

第一八回党大会は、社会主義の建設を完了して共産主義に徐々に移っていくことに、党の目標をむけさせた。大会の決定は、戦争の切迫を見こして国防を強化するうえで重要な意義をもっていた。

3　一九三九年のファシストの侵略にたいする集団的反撃を組織するための党とソヴェト国家の闘争。第二次世界大戦の始まり

第一八回党大会後に世界の舞台でくりひろげられた事件は、大会が国際情勢にくだした評価を完全に確証した。ヒトラー・ドイツは、戦争準備を早急におえて、ドイツ帝国主義の世界支配をめざす戦争をはじめようといそいでいた。

西側列強のミュンヘン政策は、列強間の帝国主義的対立がファシスト国家の対ソ戦争によって切抜けられるだろうという推測にもとづいていた。だが、すくなくとも当分はこの計画どおりにはならないことを示す兆候が現われていた。一九三九年三月、ヒトラー一味は、英仏の同意を取りつけもせずに、チェコスロヴァキア全土を占領した。チェコスロヴァキアを片づけると、ヒトラー一味はただちにポーランド侵略の準備に着手した。ポーランド政府には、領土の割譲やポー

ランド在住ドイツ人の地位の改善などの、厚かましい要求がつきつけられた。同時にドイツには、旧ドイツ植民地の返還要求を放棄するつもりはさらさらなかった。西側列強にはミュンヘンの裏切りによって自分の利益をまもることも、ヒトラーとしっかりした協定に達することもできなかったことが、あきらかになった。

こうした情勢のもとで、イギリスとフランスは、一九三九年の春、ファシスト侵略者におびやかされていたポーランド、ギリシア、ルーマニア、トルコに国家的独立の保障をあたえると声明した。それと同時に両国は、ドイツの侵略に対抗する措置についてソ連邦と話合いをはじめた。

イギリスとフランスの政府は二またをかけていた。両者は、ソ連邦を犠牲にしてヒトラーと取引きすることをこれまでどおり求めていて、戦術を変えたにすぎなかった。両国の民主的世論は、ソ連邦と緊密な協力を打ちたてるよう、政府に要求していた。イギリスとフランスの支配層は、自分たちの本心をカムフラージュするために、ソ連邦との交渉に応じたのである。だが彼らはこの交渉をヒトラーに圧力をくわえるための槓杆とみていて、ソ連邦をくわえた連合の生まれる可能性のあることでヒトラーをおどし、こうしてヒトラーを西側列強との協定にかたむかせ、ドイツの軍隊をソ連邦にむけるつもりでいた。

ソヴェト政府は、イギリスとフランスのこの駆引きを念頭においていた。それにもかかわらず、ソヴェト政府は交渉をはじめることに同意した。ソ連邦は、侵略者にたいする集団的な反撃を組織して、新しい世界戦争を未然に防ぐために、どんな小さな機会も取りにがすまいと考えていた。だが交渉の経過は、英仏両国政府にはこの目的を達するためにソ連邦と協力する意向のないことを確証した。

英仏両国政府がソ連邦に持ち出した提案は、まったく受諾できないものであった。両者の意図は、自分はなんの義務も負わずに、ソ連邦だけを参戦義務でしばり、ソ連邦をドイツとの戦争にまきこみ、自分は局外に立つというのであった。

ソヴェト政府は、双務性の原則にそわないものとして、この提案を拒否した。ソヴェト政府は対案を出したが、それは三国間に相互援助条約を締結することを予定していた。この条約は、ソ連邦、イギリス、フランス三国のどれかにたいする侵略がヨーロッパでおこった場合、さらに、ポーランド、ルーマニア、バルト海沿岸諸国、トルコ、ベルギーにたいする侵略がおこった場合には、互いに救援におもむく義務をこれら三国におわせるはずであった。ソヴェトの提案が採択されたなら、列強の強力な連合をドイツに対立させることができ、侵略者を阻止することができたであろう。

これに答えて、英仏両国政府は、ソ独戦争の挑発をねらった新しい条約案をつぎつぎに持ち出してきた。両者に必要なのはソ連邦との協定ではなく、なにか別の目的のためにこうした協定についておしゃべりすることであることがあきらかになった。交渉は一九三九年の三月から八月までつづいた。

ドイツが戦争をはじめた場合にイギリスとフランスがソ連邦との連合を結成するつもりのないことは、ソ連邦の提唱で一九三九年八月にモスクワで三国の軍事代表の交渉がひらかれたときに、決定的にあきらかになった。

赤軍がドイツ軍にたいして戦闘行動をはじめるためには、両者をへだてるポーランドの領土をとおらざるをえなかった。だがポーランド政府はソヴェト軍の自国領土通過を拒絶し、イギリス

とフランスは、同政府に態度を変えるようせまるのをしぶっていた。あきらかにイギリスとフランスは、ソ連邦と交渉をはじめながらも、ソ連邦とともに武器をとってヒトラーの侵略に反対することなど全然考えていなかったのである。ソヴェト司令部と交渉をおこなっていたイギリス軍事使節団あての秘密指令には、「イギリス政府は、ソ連邦にたいして一定の義務を負うつもりはまったくない」とあけすけに言われていた。

イギリス政府は、ソ連邦と交渉をおこなうと同時に、ドイツ政府と秘密交渉をはじめ、不可侵条約と世界的規模で勢力圏を分割する協定を結ぶようヒトラーに申しいれた。そのさい、分割すべき国のなかにソ連邦をいれるという、途方もない提案がなされていた。イギリス政府は、ヒトラー一味に対ソ交渉を打ちきることを約束した。同政府は、ポーランドの独立の保障を放棄することにも同意し、チェコスロヴァキアのばあいのように、ポーランドをヒトラーに引きわたした。

戦争の危険は西からだけでなく、東からもソ連邦をおびやかしていた。ソ連邦は、日本帝国主義とたたかう中国人民に物質的および精神的な援助をあたえていたが、アメリカとイギリスは日本侵略者をはげまし、戦略物資を供給して彼らを気前よく助けていた。毛沢東はこう書いている。「抗日戦争以来、帝国主義の政府でほんとうにわれわれを援助したものは一つもないが、ソ連邦だけは、空軍と物資でわれわれを援助した」と（毛沢東選集、第三巻、一九〇ページ）。ソ日関係はますます緊迫したものになった。一九三八年、日本軍閥は、ハーサン湖地区でソヴェト領土に武力攻撃をくわだてた。彼らは、ソ連邦の実力とその反撃態勢に銃剣でさぐりをいれようとしたのである。一九三九年の夏、日本軍のかなりの兵力がハルハ川地区でモンゴル人民共和国に侵入した。ソ連邦と同国は相互援助議定書で結ばれていた。攻撃は二つながら、日本軍が大損害を

こうむって、撃退された。

ミュンヘン政策派は、ソ連邦を日独との戦争にまきこみ、自分たちは局外に立って戦争で疲弊した三国に自分の要求をおしつける時機をまちながら力をたくわえるつもりでいた。不都合きわまる状況が生じた。ソ連邦は、政治的にまったく孤立しながら西欧と極東の二正面で同時に戦争をする危険に、頻していたのである。ソ連邦にたいして生じていた情勢を変え、できるかぎり帝国主義者の攻撃を引きのばし、彼らの目論見を狂わせることが是が非でも必要であった。最初の、しかもその当時はただ一つの社会主義国家をまもることは、国際社会主義とすべての国の勤労者にとって必要であった。

党中央委員会とソヴェト政府は、第一八回党大会の指示——警戒をおこたらず、戦争挑発者がソ連邦を紛争にまきこむのを許してはならないという——にしたがっていた。これにしたがって党と政府は、一九三九年八月、ドイツ政府の提案してきた不可侵条約をドイツと締結するという、責任ある決定をくだした。この決定は、イギリス、フランス、ポーランドがヒトラーの侵略にたいして共同でたたかう協定をソ連邦とむすぶ意向のないことが完全にあきらかになり、ソ連邦の安全をまもる可能性がそれ以外にはまったくなくなったのちに、くだされたのである。

党とソヴェト政府には、ヒトラー政府が条約を結んでも、対ソ侵略戦争を断念したのでは全然ないことがはっきりしていた。ソ連邦は、この条約によって、防衛準備のために若干の時間をかせぎ、自国にきわめて不利な情勢のもとで二正面で戦争にまきこまれる危険をまぬがれた。イギリス、フランス、アメリカの反動的な支配層は、ソ連邦を孤立させ、資本主義列強の対ソ統一戦線をつくろうとしていた。そのさい、日本とドイツには、対ソ戦争で突撃隊の役割が割当てられ

ていた。

ソ連邦がただ一国で資本主義に包囲されており、国際労働者階級が右翼社会主義者によって分裂させられていた当時、戦争を未然に防ぐことは解決できない課題であった。だが、最初の社会主義国を戦争からまもる――この国にきわめて不利な状況のもとでも――ことはできたし、またそうしなければならなかった。ソヴェト政府には、自国民にたいしても、全世界における社会主義の事業のためにも、ミュンヘン派の反動的な策謀を打ちやぶる責務があった。ドイツとの不可侵条約締結は、その一助となった。

ミュンヘン派は、資本主義世界と孤立したソ連邦のあいだの戦争を誘発するつもりでいた。だが実際には、戦争は資本主義世界そのものの内部ではじまった。

一九三九年九月一日、ドイツはポーランドにおそいかかった。ポーランド国民は、ファシスト侵略の犠牲になった。彼らはこの侵略に頑強な抵抗をおこなったが、そのさい英雄的な役割をはたしたのは、共産党員と彼らを中心として団結した労働者と農民であった。だがブルジョア・地主政府がソ連邦の援助を拒否して売国行為を働いていたので、ポーランドはドイツの強襲に対抗することができなかった。

ヒトラー軍のポーランド攻撃後、イギリスとフランスの政府には、ポーランドを片づけたらドイツが自国とその植民地に進撃してくることがわかった。それがわかると、両国政府は一九三九年の九月初め、ドイツに宣戦を布告した。

第二次世界大戦がはじまった。

イギリスとフランスがドイツとの戦争をはじめたのは、ポーランドのためではなかったし、フ

ァシズムを倒すためでも全然なく、自分の利益と地歩をまもるためであり、自分の大国としての地位を維持するためであった。両国はポーランドを実際に援助するために何もしはしなかった。ドイツ軍は、ポーランド領を東にむかって急進撃して、ソ連邦の国境に近づいた。

党とソヴェト政府は、ドイツが条約上の義務を長くまもると当てにするわけにはいかないのを知っていた。国をまもるためには、ヒトラー軍をソ連邦の枢要な中心地からできるだけ離れたところで停止させ、ドイツ軍に戦略的境界線をソヴェト国境までおしすすませないようにすることが必要であった。ソ連邦は、西ウクライナと西ベロルシアの住民である同胞の運命にも無関心でいることはできなかったし、彼らをファシストの軛のもとにゆだねることもできなかった。一九三九年九月一七日、赤軍は国境をこえて、短期間に西ウクライナと西ベロルシアを占領した。これらの地方はソヴェト・ウクライナおよびソヴェト・ベロルシアと再統合して、ウクライナ国民およびベロルシア国民の単一の国家をつくった。

ドイツと英仏帝国主義との戦争は、初めのうちは、どちらの側についても、帝国主義的性格をもっていた。ポーランド国民は、侵略の他の犠牲者と同じく、自国の独立のためにたたかったが、列強についていえば、交戦するどちらの側も帝国主義的な目的をもとめていた。ドイツは自分に有利に世界を再分割するためにたたかっていた。イギリスとフランスは、自分の植民地帝国と隷属諸民族支配とを維持するため、競争国としてのドイツを排除するためにたたかっていた。

だが結果的には、イギリスとフランスは、ファシスト侵略の犠牲になったすべての国民と共通の敵をもつことになった。そのうえ、一九四〇年にヒトラー軍から手いたい敗北をこうむった結果、両国は自分の帝国主義的な意図の実現を考えるよりも、むしろ自国の国家としての存続を考

えなければならなくなった。同時にイギリス、フランスでも、同じくアメリカでも、積極的な反ファシスト解放戦争を自国政府に要求する民衆の圧力がつよまった。国民の圧力をうけて、イギリスとフランスのヒトラー・ドイツとの戦争は、時とともに性格を変えていった。この戦争は、自由を愛する諸国人民のファシスト侵略にたいする戦争に事実上合流し、解放的性格をおびるようになった。

第二次世界大戦がはじまってから最初のうちは、ミュンヘン政策派はイギリス、フランスでも、アメリカでも、戦争の戦線をソ連邦にむけかえようと考えていた。西部戦線の英仏両軍はほとんど行動に出なかった。同時にイギリスとフランスは、ソ連邦の隣接国を対ソ戦争にひきいれようとやっきになった。ラトヴィア、エストニア、リトワニアでは、帝国主義者の策謀は失敗した。この策謀はこれらの国で全民主勢力の憤激を買ったので、これら三国の政府は、一九三九年の秋、ソ連邦と相互援助条約を結ばざるをえなくなった。だがその後も、バルト海沿岸諸国で反ソ陰謀は止まなかった。これらの国が対ソ冒険にまきこまれる危険がのこっていた。そこで勤労大衆は、一九一九年に協商国によって倒されたソヴェト権力を即時復活させ、ソ連邦と再統合することを要求した。民衆の圧力をうけて、一九四〇年六月、リトワニア、ラトヴィア、エストニアでは政変がおこった。権力は進歩勢力の手に帰した。議会選挙がおこなわれた。改選された議会は、ソヴェト社会主義共和国連邦への加盟をみとめるよう、ソヴェト政府に要請した。一九四〇年八月、ソ連邦最高会議は、この要請をいれて、リトワニア、ラトヴィア、エストニア各ソヴェト社会主義共和国をソ連邦に編入した。

ベッサラビアと北ブコヴィナもソ連邦と再統合した。前者は一九一八年ソ連邦から暴力的に引

き離されたものであり、後者のウクライナ住民はソヴェト・ウクライナに心を寄せていたのである。バルト海沿岸諸共和国やベッサラビアとソ連邦との再統合は、ソ連邦の安全を強化した。なぜなら、これらの地域は、敵の軍隊をソヴェトの国の枢要な中心地に近づける足場として、敵に利用される恐れがあったからである。

帝国主義者が一時いくらか成功をおさめることができたのは、フィンランドであった。彼らは、一九三九年の末、フィンランドの反動派に対ソ戦争をいどませることができた。イギリスとフランスは、武器を供給してフィンランド軍を積極的に助け、彼らの救援に自国軍隊を派遣しようと準備中だった。ドイツ・ファシズムも、フィンランド反動派をこっそり援助していた。フィンランド軍の敗北は、英仏帝国主義者の計画を失敗におわらせた。一九四〇年三月、フィンランド・ソ連邦間の戦争は、モスクワで平和条約に調印することでおわった。

一九四〇年四月、ヒトラー軍はスカンディナヴィアに侵入し、デンマークとノルウェーを占領した。五月、同軍は西部戦線でも攻勢に移って、オランダとベルギーをす早く占領した。イギリス派遣軍は、フランスとベルギーで敗北をなめ、兵器を棄てて、いそいでイギリスに撤退した。撃破されたフランス軍は、国内深く退却した。一九四〇年六月二二日、反動的なフランス政府は降伏した。パリをふくむ、フランス領土の大半がヒトラー軍に占領された。

これがミュンヘン政策のみじめな結果であった。フランスは撃破され、イギリスはドイツと一対一の戦争をしなければならなくなった。

ヨーロッパで戦争が拡大したので、党とソヴェト国家には新たな対外政策上の措置をとる必要があった。戦争とファシストの侵略がさらに広がるのを阻止する必要があった。一九四〇年四月、

ソヴェト政府はヒトラー・ドイツがスウェーデンの中立を犯さないよう警告を発し、こうして同国がドイツの侵入をまぬがれるのを助けた。

ソヴェト政府は、フィンランド、ブルガリア、トルコ、ユーゴスラヴィアがドイツの勢力下におかれるのを防ぐために、措置を講じた。しかしフランスの敗北後、ドイツは非常につよくなり、その侵略行為を阻止することはますますむずかしくなった。ヒトラー一味は軍隊をフィンランド、ルーマニア、ブルガリアにいれ、これらの国の反動政府はドイツの家来になった。一九四一年四月、ヒトラー軍はユーゴスラヴィア、ギリシアを攻撃して、これを占領した。

一九三九年一一月、コミンテルンと兄弟諸党は、ファシズムとたたかうために全革命勢力を結集するという、共産党の新しい任務をさだめた。ヒトラー軍がチェコスロヴァキア、ポーランド、フランス、ベルギー、デンマーク、ノルウェー、オランダ、ユーゴスラヴィア、ギリシア、アルバニアを占領したのち、これらの国の共産党員は愛国勢力の組織者となり、反ファシスト民族解放運動の組織者となった。一九四一年、この運動は、最初にユーゴスラヴィアで、武力闘争に転化しはじめた。

ファシスト・ドイツは、すでに一九四〇年の後半いらい、自国の侵略計画の実現をはばむ主な障害を取りのぞくために、対ソ戦争の直接の準備をすすめていた。ついでドイツはイギリス占領をもくろんだが、ドイツの背後に赤軍がひかえているかぎり、これを攻撃する決心はつかなかった。ドイツは日本と協同してアメリカをも撃破するつもりでいた。

ソヴェトの国に重大な危険がせまったので、党と全ソヴェト国民には、国防力を高め、防衛態勢を強化するために、以前にもまして熱心に働く必要があった。

4　鉱工業の分野での党の組織活動。国の工業力の増強と国防態勢の強化

党は、ソ連邦国民経済発展第三次五ヵ年計画を社会主義社会の建設を完了するうえで巨歩をふみだすものとみていた。

だが鉱工業の分野の計画の遂行は、多大の困難をともなっていた。国際情勢は、ファシスト侵略者が第二次世界大戦をひきおこした結果、ますます緊迫したものになった。ファシスト侵略者の攻撃をいつでも撃退できる態勢に国民をおき、大量の資金・資材を国防力の増強にむける必要があった。

この時期の党の経済政策の目標は、生産力をいっそう合理的に配置し、新建設の速度をあげ、各企業の生産設備の利用に十分習熟することであった。新しい工場は、原料資源にできるだけ近いところで建設された。国の東部地区——ヴォルガ沿岸地方、ウラル、西シベリアと東シベリア、中央アジア、極東——のさかんな開発がおこなわれた。ヴォルガとウラルのあいだには新しい石油基地——「第二のバクー」——が建設途上にあった。マグニトゴルスク製鉄コンビナートの拡張がすすめられ、ニジニ−タギル製鉄所の建設はおわろうとしていた。大製鉄所がザバイカル地方（ペトロフスク−ザバイカリスキー製鉄所）と極東（「アムールスターリ」）に建設中であった。党は機械工業、化学工業、石油精製業では代替企業が建設された。企業の協業関係が広げられた。党は厳重な節約方策に気をくばっていた。資金、建設資材、設備は、まず第一に以前はじめられて

いた建設を完成することにむけられた。

党の関心のまとは以前と同じく鉱工業の指導的部門である、石炭産業と鉄鋼業であった。石炭と金属にたいする国の需要は、年ごとに増大していた。金属は国防工業に大量に必要であった。ところが一九三九年に、銑鉄と粗鋼の生産は増大しないばかりか、いくらか低下し、石炭産出高の増加は取るにたりなかった。これは国民経済全体の発展にとって重大な脅威であり、戦争の危険が高まっているさいにはなおさら我慢ならないものであった。

石炭産業と鉄鋼業の立遅れの原因があきらかにされた。石炭産出計画の遂行にわるい影響をおよぼしていたのは、ドンバスの仕事にはなはだしい欠陥のあったことであった。大害は、労働力の流動であった。一年間に炭坑の労働者がほとんど全部いれかわることも珍しくなかった。炭鉱労働者の賃金体系と労働組織には欠陥があった。出来高ノルマは低すぎた。技術要員がトラストや管理部の事務所にすわっているばあいが多かった。そこで炭坑は十分な技術的指導をうけず、新しい進んだ採炭方法の採用は遅々としており、労働生産性はほとんど足ぶみしていた。

こうした欠陥は鉄鋼業にもあった。マグニトゴルスクとクズネツクのコンビナート、南部地方の製鉄所では、ドンバスとおなじく、党組織は、指導的要員の選抜と教育、熟練した鉄鋼労働者の養成、正しい労働組織にはあまり取り組んでいなかった。新しい高炉やマルチン式熔鉱炉の建設が遅々としていたこと、鉱石の産出が立遅れていたことも、鉄鋼業の発展にひびいていた。

この時期に鉱工業の発展にわるい影響をおよぼしたのは、基幹活動家にたいする弾圧、彼らの頻繁な更迭、往々経験のとぼしい者が経験にとんだ指導者に代わったことである。弾圧は党組織を消耗させた。だが党員は、鉱工業の発展にたいする地方党組織の責任を理解して、自分たちの

なかから新しい指導的要員を選抜して、彼らが経営上の経験をつむのを助けた。これらの要員の肩には、国の経済を戦争にそなえる主な負担がかかっていた。彼らのなかからは、党と国家のすばらしい活動家がすくなからず生まれた。

一九四〇年の前半、党中央委員会は、ドンバスの石炭産業と鉄鋼業とにおける活動の改善についての決定をいくつか採択した。

党組織は、生産組織の問題や党基幹要員・経営要員・技術要員の選抜や彼らの生産への配置にいっそう、またより具体的に取り組むようになった。党組織の目標は、経営活動家が党と政府の指令の遂行にたいする責任感を高めることであった。党の政治活動は、生産課題の解決、新しい技術を習得するためのたたかい、労働規律の強化のためのたたかいといっそう固く結びつくようになった。複数機械の受持ち、スピード作業法、職種の兼任、原料・資材・電力の節約、不生産的支出の節減といった、新しい競争形態が現われた。石炭産業と鉄鋼業の状態は、いくらか改善された。一九四〇年の石炭産出高の増加は、約二〇〇〇万トンに達した。

戦争の危険が高まるなかで鉱工業の振興を大幅に促進したのは、一日七時間労働制から一日八時間労働制、週七日労働制に移ったこと、労働者・職員が企業や施設から勝手にやめていくのを禁止したことであった。国防を強化する必要からきたこれらの措置のおかげで、労働規律は強固になり、生産高は増加した。

党の指導のもとに、鉱工業に熟練した労働力を確保する問題は国家労働予備軍制度を設けることで首尾よく解決されていった。青年を職業学校と工場実習学校に毎年募集（動員）することが告示された。その卒業生は国有企業にむけられた。鉱工業と運輸に熟練労働者がたえず確実に流

入するようになり、それが国の経済力と軍事力をつよめた。ソヴェト国民、まず第一に青年は、労働予備軍創出に関する法律を大歓迎した。

工業で大きな役割をはたしていたのは、婦人であった。一九四〇年の初め、婦人は全労働者・職員の四一%を占めていた。婦人労働者は新しい技術を着々と習得していった。すでに平時に男子の職種を習得しているので、彼女らは、戦争のばあいには軍隊に召集された男子にかわって、立派に生産にたずさわることができた。

党と労働者階級の努力のおかげで、戦前の時期にソ連邦の鉱工業は躍進した。一九四〇年には石炭の産出は一億六六〇〇万トン、銑鉄の生産高は約一五〇〇万トン、粗鋼の生産高は一八〇〇万トン以上に達した。電力の生産は四八三億キロワット時になった。一九四〇年に鉱工業全体の総生産高は一九一三年にくらべて七・七倍にふえ、生産手段の生産は一三・四倍にふえた。これこそ、ソ連邦が大祖国戦争にはいったさいの工業的・経済的な基盤であった。

戦争の脅威が高まるなかで、鉱工業の活動の問題は党活動の中心問題になった。一九四一年二月、第一八回党協議会は、鉱工業と運輸の分野での党組織の任務を審議した。はじまった世界戦争は、技術・経済の面からすればモーターの戦争であり、ストックの戦争であった。党は、このことを念頭において、国防の強化上是非とも必要な水準に産業を引き上げようとつとめ、鉱工業の指導を改善した。

指導を企業に近づけるために、一九三九年に多くの人民委員部が細分された。これまでよりせまい工業部門を指導する新しい人民委員部が創設された。しかし人民委員部の仕事ぶりには重大な欠陥があった。人民委員部が総括資料にもとづいて年間の生産計画が遂行されたと考えていた

のに、製品の主な品目ではそれが遂行されていないことも珍しくなかった。ところが党組織である地方委員会や市委員会は鉱工業と運輸の問題に十分腰をいれて取り組んでいなかった。

協議会は、党組織の注意を、鉱工業と運輸の必要と利益に最大の配慮を払うほうにむけさせた。協議会の決定にはこう強調されていた。国民経済を計画的に運営する社会主義のもとでは、鉱工業は格段に秩序整然とできるだけ生産的に活動しなければならない。鉱工業の発展の成否は、各企業のリズミカルな活動にかかっている、と。

協議会は、一連の具体的な政治経済的課題を党組織に負わせた。確実に企業の仕事ぶりを不断に監督し、企業に党の指令を遂行させること、設備・資材・全財産の厳重な記帳と保全をおこなうこと、正しい設備利用と器具・原材料・燃料・電力の経済的な使用とを保障すること、企業で模範的な秩序と清潔をたもつこと、企業のリズミカルな仕事ぶりと生産計画の正確な遂行とを保障すること、製造工程で厳重な規律をまもらせ、不良品や不完全品を作らないようにすること、新しい技術をたえず改善し、習得していくこと、原価の系統的な引き下げ、独立採算制の強化、浪費の根絶につとめること、がそれであった。

協議会は、労働者を物質的にはげまし、好成績をおさめた指導者に報賞をあたえるという原則を一貫して実行すること、単独責任制を強化すること、生産の技術的指導を改善することを要求した。党指導をつよめるために、市委員会、州委員会、地方委員会、連邦構成共和国共産党中央委員会内に、工業・運輸担当書記制度が設けられた。

協議会は、国の経済力と防衛力の強化を目標とした一九四一年度国民経済計画を採択した。

協議会の決定は、国民経済のすべての部門、まず第一に鉱工業と運輸の新たな高揚に拍車をか

けた。緊張した闘争の結果、一九四一年の中ごろ、ソ連邦の鉱工業総生産高は、第三次五ヵ年計画が一九四二年に予定していた水準の八六％に達した。協議会がおわって間もない一九四一年五月、ソ連邦人民委員会議議長にはイ・ヴェ・スターリンが任命された。彼は同時に全連邦共産党（ボ）中央委員会書記の職にあった。

戦争の危険が高まるなかで、党は国防工業の発展にますます専念した。革命前ロシアの軍需工業は国全体の経済的立遅れの特徴をおびていた。ソヴェト権力は状態を一変させた。工業化にもとづいて、先進資本主義諸国の軍需工業にひけをとらない新しい国防工業が創出された。国防工業は、総生産高の伸び率では他の工業部門を大幅に追いこしていた。第三次五ヵ年計画の三年間に、鉱工業全体の毎年の生産の伸び率は平均一三％であったのに、国防工業のそれは三九％であった。国防工業の企業は原料、設備、燃料、電力の供給を優先的に受けていた。

一九三九年の初めに、航空機工業、兵器、弾薬、造船の各人民委員部が創設された。国防工業の企業では党中央委員会の党オルグが働いていた。党オルグに任命されたのは、熟練した技術者やすぐれた組織者のなかの経験をつんだ党活動家で、党活動と生産課題の解決とを正しく結びつけることを心得ている人たちであった。

国は戦前にかなりの数にのぼる国防企業その他の軍需産業工業をもっていて、これらの企業が戦時中に戦車、飛行機、大砲、弾薬、その他の兵器の大量生産を広くおこなうことを可能にした。だが国防工業の発展で成功をおさめたことは疑う余地がなかったにもかかわらず、国防工業の仕事ぶりには重大な欠陥もあった。航空機工業は、国家のさだめた目標の達成で立遅れていた。国防工業の一部の部門は、新型兵器の大量生産にいち早く移ることができなかった。これは、戦争

の初期に赤軍に最新兵器を供給するのをおくらせた。
戦前の時期に、軍の再編成がおこなわれた。地域別民兵制の原則にしたがってつくられていた部隊や編隊は改組され、軍隊はのこらず正規軍の地位に移された。軍隊の兵員数は大幅に増加した。正規軍を建軍の原則とすることは、一九三九年九月ソ連邦最高会議の採択した法律『一般兵役義務について』で確認された。ソヴェト国家は、自国の軍隊の威力が資本主義諸国家の軍隊のそれを上回ることを目標にしていた。社会主義の獲得物の防衛も世界平和のためのたたかいの成功も、ソ連邦とその武装兵力の威力に多分にかかっていたからである。

5　コルホーズ制度の強化と農業生産の振興をめざす党の闘争

農業は、五ヵ年計画中に国民の消費を一倍半ないし二倍にふやすうえで、大役をはたさなければならなかった。軽工業と食品工業の原料基盤を広げることも、農業の振興にかかっていた。
だが戦前の時期に農業はかなり大きな困難をなめていた。農業を総合的に機械化するためには、コルホーズとソフホーズは大量のトラクター、コンバイン、その他の農業機械を必要としていたが、その生産に予定されていた金属の一部は、国防の必要にふりむけなければならなかった。第三次五ヵ年計画中に、トラクターの製造は第二次五ヵ年計画にくらべて半減した。
だがこうした苦しい事情のもとでも、農業はたえず発展していた。コルホーズ制度の長所が現われてきた。それに社会主義農業には新しい農機具もすでにかなりあった。一九四〇年、コルホ

ーズは全農家の九六・九％を統合していた。七〇〇〇のエム・テ・エスがコルホーズを受けもっていた。国内にはソフホーズが四〇〇〇あまりあった。耕地ではトラクターが五三万一〇〇〇台、穀物コンバインが一八万二〇〇〇台、トラックが二二万八〇〇〇台働いていた。その運転手や操縦手は一四〇万人を上回っていた。

コルホーズ生産のためには、党が注意をおこたらず日常的に気をくばることを必要としていた。コルホーズを組織的・経済的に強固にすることは、農村の党組織の活動の最重要課題であった。農業の働き手はみな、このことを理解していた。だがコルホーズ制度を強固にする方法について全員が正しい考えをもっているわけではなかった。往々にして、コルホーズ員を物質的にはげます原則が軽視され、コルホーズの共同経営の拡大と強化についてしかるべき配慮がなされず、私的所有者的な我利我利根性にたいする妥協的な態度がみとめられた。すべてこうしたことは、コルホーズ生産の発展にわるい影響をあたえていた。コルホーズ制度の強化と発展のための闘争にあたって、党は、コルホーズ員の労働を物質的にはげます原則を一貫して実行し、共同経営に損害をあたえる私的所有者的我利我利根性ときっぱりたたかわなければならなかった。党は、農業を指導するさい、コルホーズ、エム・テ・エス、ソフホーズの党組織をよりどころにしていた。一九四一年の初め、農村の党組織は、六万二三〇〇あった。党組織にコルホーズ管理部の活動を監督する権限があたえられるとともに、コルホーズ生産の発展にたいする党組織の責任はいっそう重大になった。当時農村に二〇〇万人以上いたコムソモール員も、コルホーズ建設に積極的にくわわった。

戦前の時期に、党はコルホーズ制度を強固にするために一連の重要な措置をとった。一九三九

年五月、全連邦共産党（ボ）中央委員会総会は、同中央委員会とソ連邦人民委員会議の決定案『コルホーズの共有地の乱用防止策について』を審議し可決した。この決定には、コルホーズ員の宅地付属地の基準について農業アルテリ定款に違反している事実や、宅地付属地の不法な拡張、コルホーズの土地の乱用や横領の事実が数多くあげてあった。

党中央委員会と政府は、党機関とソヴェト機関に、コルホーズの土地用益を整理するよう呼びかけた。コルホーズの共有地は侵してはならないものと宣言された。宅地付属地を賃貸することは禁止された。宅地付属地をアルテリ定款に規定された地積以上に拡大することも、いっさい禁止された。コルホーズ員に私的に用益されていた余分の土地は全部、コルホーズに返還された。ソ連邦各地域の農業生産の性格に応じて、年間最低義務作業日が労働能力のある各コルホーズ員にさだめられた。その結果、コルホーズの土地用益は改善され、労働規律が強固になり、一年間に必要作業日数を働くコルホーズ員の数がふえた。

一九三九年七月、党中央委員会と人民委員会議は、決定『コルホーズにおける共同畜産の発展措置について』を採択した。畜産の発展は、肉の供出量がコルホーズの畜産場の家畜頭数にしたがって計算されるのではなく、コルホーズの農地面積にしたがって計算されることで奨励された。その結果、一九三九年の一年間だけでコルホーズには約二〇万の畜産場が設けられた。ところがそれ以前の七年間に設けられたものは三四万三〇〇〇にすぎなかった。コルホーズの牛の頭数は、一九三九年から一九四〇年にかけて一五六〇万頭から二〇一〇万頭にふえた。

畜産物調達の経験を念頭において、党中央委員会は、一九四〇年三月、農産物の国家供出をすべてヘクタールについて算定する方式に移ることを必要とみとめた。実際の作付面積しか考慮し

ていなかった旧来の調達方式は廃止された。この方式は、先進的なコルホーズを不利な立場におき、共同経営の発展にこれらのコルホーズが関心をもつのを阻害していた。新しい調達方式はコルホーズの作付面積の拡大、すべての面での農業生産の発展をうながした。この方式によって、コルホーズ生産の計画化を下から、コルホーズ自身が改善する条件もつくられた。

農業の発展にはたすソヴェト国家の計画的・規制的役割はつよまった。農作物の作付けを地域的にいっそう適正に配置し、農作物のうち全国家的利益から是非とも発展させなければならないものを奨励することができるようになった。

工業用作物、とくに綿花の生産では大成功がおさめられた。一九四〇年に綿の作付面積は二〇〇万ヘクタールをこえ、綿花の収穫高は二二三万七〇〇〇トンと、一九一三年の三倍になった。ソ連邦の繊維工業は主として国内産の綿花を供給されていた。麻、ヒマワリ、甜菜の作付面積もふえた。

粒穀作物が国の南部地区から東部地区（南ウラル、シベリア、カザフスタン）に移りはじめたことも、工業用作物の作付面積の拡大を促した。国の東部地区には、個人経営のもとでは開墾できなかった肥沃な土地が、未墾地や長期休閑地をもふくめて、大量にあった。かなり多くの農機具をもっていたコルホーズが、この土地をそここで開墾しはじめていた。党中央委員会は、東部地区がソ連邦の主要な穀倉の一つになることができるし、またならなければならない、と強調した。

党は、農業の基礎は穀物生産であり、穀作を発展させれば、農業振興上のその他の課題はすべて解決できる、と強調した。党、地方党組織は、粒穀作物の収穫率の向上につとめていた。東南

諸地区の旱魃とたたかう措置、国の東部地方に新しい穀物基地をつくる措置が立てられた。一九四〇年の末、全連邦共産党（ボ）中央委員会とソ連邦人民委員会議は、決定『ウクライナ社会主義ソヴェト共和国の農作物の収穫率と畜産業の生産性を高めたコルホーズ員の労働にたいする追加支払について』を採択した。この労働報酬支払い方式は、労働生産性を高める刺激となり、ソ連邦の他の共和国、州、地区にも広げられた。

戦前の時期に党のおこなった活動の結果、コルホーズは穀作の発展で一定の成功をおさめた。だが、国内の穀物問題はまだ解決されてはいなかった。一九四〇年の穀物の総収穫高は、一九一三年よりいくらか多かったが、それにもかかわらず国は、生産された量よりもはるかに多くの穀物を必要としていた。穀物の需要は、いろいろの理由から増大していた。都市の住民は一九四〇年には一九一三年にくらべて二倍以上にふえていたし、畜産業の発展も穀物の生産に直接かかっていたし、戦争の場合にそなえた穀物ストックも必要だったからである。穀物の国家調達と買付けの査定がきわめて高いものであったにもかかわらず、両者は国の穀物需要を完全にみたしてはいなかった。

穀作の指導と現にある欠陥とにもっと批判的な態度をとっていたなら、コルホーズ制度のもとで、穀作はいっそう順調に発展することができたであろう。いわゆる生物学的収穫率〔一メートルの正方測定枠で立毛を測定してえた収穫率〕の資料にもとづいて、国内では毎年七〇億プードあまりの穀物総収穫量があげられているものと考えられていたが、実際に倉庫に集められたものはそれよりすくなかった。穀作でおさめた成功の過大視は、粒穀作物の収穫率の向上に奮起させずに、逆に自己満足の気分を生んだ。

だが、農業にはいろいろな欠点があったにもかかわらず、党と地方党組織は、戦前の時期に国民経済のこの重要部門をいちじるしく強化した。ソ連邦の農業は、戦時にも苦しい試練にたえることができ、軍隊と国に食糧と原料を必要なだけ供給することができた。

6　勤労者の物質的および文化的生活水準の向上。ソヴェト国家の政治的威力の強化。党勢の拡大

社会主義が勝利して搾取階級が一掃されるとともに、国民の物質的生活水準は不断に高まった。それは、国民所得と労働者・職員の賃金の増大に、コルホーズ員の収入の増大に、商品売上げ高の増加に、住宅建設の拡大に、都市と農村の環境整備に現われていた。国民所得は、一九三七年の九六三億ルーブルから一九四〇年の一二八三億ルーブルにふえた。この期間に賃金フォンドは一・五倍にふえた。

コルホーズとコルホーズ員の貨幣収入と現物収入はふえた。コルホーズ員は、かなりの収入をコルホーズ市場で農産物を売ることで得ていた。

ソ連邦諸民族の文化水準は向上した。一九四〇／四一教育年度に、普通教育学校では三五〇〇万人以上が、高等教育施設では八〇万人以上が学んでいた。

勤労者の物質的および文化的生活水準の不断の向上は、国民のすべての層を党と政府を中心にますます結束させ、労働者階級とコルホーズ農民の同盟を強固にした。ソヴェト国家の政治的威力はますます増大した。

ソヴェト社会主義国家の強みの力づよいよりどころは、ソヴェト愛国主義であった。党は真に、愛国的な力であった。祖国への、自国民への党の奉仕と、共産主義社会の建設のためのたたかいとは切っても切れない関連をもっていた。

祖国愛、自国民を誇り自国を誇りに思う気持、自分の献身的な行為で祖国の名誉を高めようと願うこと、——すべてこうしたことがソヴェトの国で、とくに社会主義になってから、並はずれた勢いで現われた。史上はじめて人間は、自分が自分の運命の真の主人公であると感じるような祖国をもったのである。自分の献身的な行為で社会主義の祖国を強化し、外部の敵からこれをあくまでまもることは、ソヴェト人の一人ひとりの神聖な責務であった。

ソヴェト愛国主義は、ソ連邦のすべての民族の民族的な伝統および利害と多民族ソヴェト国家の、すなわち、すべての民族にとって単一な社会主義的祖国の共通の利害とを調和のある仕方で結びつける。これは、同権を原則として単一の連邦国家に統合した新しい社会主義諸民族の愛国主義である。ソヴェト愛国主義は、プロレタリア国際主義と有機的に結びついている。ソヴェト国民の愛国的な功業は、諸民族間の友好を強固にしており、解放をめざしてたたかうすべての国の勤労者に援助をあたえることを目標にしている。

戦前の時期に、労働戦線ではソヴェト国民の幅広い愛国的運動がくりひろげられた。党と政府は、この全国民的な運動を支持した。一九三八年、労働上の功績を顕彰する最高級のものとして社会主義労働英雄の称号がさだめられ、「労働功労」章と「労働勲功」章が設けられた。熱意にもえる人たちは、自分の愛国的功業によって他の人々もそれにつづくよう奮い立たせた。一九三八年、有名な婦人トラクター手、パーシャ・アンゲリナは「一〇万の友人のみなさん——トラク

ターへ！」という愛国的な呼びかけをソヴェト婦人におこなった。彼女の呼びかけには約二〇万人の婦人が呼応した。

ソヴェト人は祖国の名誉を高めるために英雄的に行動した。一五名の英雄的な船員からなる、砕氷船「セドフ」号の乗組員は二年半以上北氷洋を漂流した。ヴェ・チカロフのようなソヴェト飛行士は、長距離無着陸飛行によって祖国の名誉を高めた。ソヴェトの極地探険隊は多くの偉業をなしとげた。赤色陸海軍、国境守備隊では、熱烈な愛国者、社会主義祖国の英雄的な防衛者が育っていった。レーニン・コムソモールは、共産党の指導のもとに、何千という大胆で、強く勇敢な愛国者を育てた。

ソ連邦の威力は、正しいレーニン的民族政策、民族諸共和国の全面的な発展によっても保障されていた。以前ザカフカース連邦をつくっていた、アゼルバイジャン、アルメニア、グルジアの社会主義ソヴェト諸共和国は、新しい憲法によって連邦構成共和国に改組されて、直接ソ連邦に加盟した。カザフ、キルギスのソヴェト自治共和国も連邦構成共和国に改組された。これらの共和国の地方党組織を基礎にして、カザフスタン、キルギジア各共産党が創立された。第三次五ヵ年計画中に社会主義諸民族の発達は巨歩をすすめた。これを助けたのは、連邦構成共和国と自治共和国の農工業・文化を極力発展させるために、ソヴェト国家のとった政治経済的および文化的施策であった。ウクライナ、ベロルシア、ザカフカースと中央アジアの連邦構成共和国は、経済・文化の発展で大きな成功をなしとげた。以前きわめて立遅れていた民族さえ、国の社会主義的工業化と農業集団化の有益な影響を感じとった。大工業の総生産高は、一九四〇年には一九一三年にくらべて、ウズベク社会主義ソヴェト共和国では七倍、カザフ社会主義ソヴェト共和国で

は二〇倍、グルジア社会主義ソヴェト共和国では二七倍、キルギス社会主義ソヴェト共和国では一五三倍、タジク社会主義ソヴェト共和国では三二四倍にふえた。事実上の不平等が一掃されたおかげで、ソヴェト国家の力と強固さのよりどころである、ソ連邦諸民族の友好はさらに強固になった。

この時期のソヴェト国家の政治経済力と防衛力の強化に、その国際的権威の向上にあずかって力があったのは、リトワニア、ラトヴィア、エストニアの新しい社会主義共和国がソ連邦に加盟したことであり、西ウクライナがソヴェト・ウクライナと、西ベロルシアがソヴェト・ベロルシアと、ベッサラビアがソヴェト・モルダヴィアと再統合したことである。これらの共和国や地方の諸民族にとっては、自由な諸民族の大家族であるソ連邦への加盟は、彼らの歴史的発展の根本的な転換を意味していた。

新しい共和国や地方にソヴェト権力が樹立された最初の日から、勤労者の生活の改善をめざす社会的大改革がはじまった。この改革は、ウクライナ、ベロルシア、モルダヴィア、リトワニア、ラトヴィア、エストニア各共産党の指導のもとに、ソ連邦の中央党機関と国家機関の積極的な支持を得ておこなわれた。これらの党は、資本主義の奴隷制から解放されて、自国にソヴェト制度を打ちたてた勤労者を思想的に教育するために大活躍をした。ソヴェト、党、経済機関の基幹活動家を現地住民のなかから養成するために大活動がおこなわれた。党機関とソヴェト機関は強化され、その活動は改善された。

新しいソヴェト共和国の共産党組織は、全連邦共産党に加盟させられた。一九四〇年一〇月、リトワニア、ラトヴィア、エストニア各共産党が全連邦共産党（ボ）に加入した。一九四一年二

月、モルダヴィア地方党組織がモルダヴィア共産党に改組された。西ウクライナ、西ベロルシア、ベッサラビアでは、これらの地方がソ連邦に加盟したのち、共産党組織が創立された。ポーランド、西ウクライナ、西ベロルシアの共産党員で、ウクライナ、ベロルシア各共和国の地域にのこっていた者は、全連邦共産党（ボ）に転籍した。

社会主義のおさめた成果は、党の生活によい影響をあたえた。党と国民の結びつきは強まり、ソヴェト社会の先進分子の入党がふえた。労働者、農民、インテリゲンツィアに同じ入党条件をきめたことは、党勢の拡大を促進した。一九三九年四月一日から一九四〇年六月一日までに、党員候補となった者は約一一二万八〇〇〇名、党員になった者は約六〇万六〇〇〇名であった。入党したのは、労働者階級、コルホーズ農民、インテリゲンツィアのもっとも積極的な分子であった。だがこのことは、党機関と初級党組織が優秀な人たちを選抜して党にいれる責任をよわめるものではなく、逆に高めるものであった。ところが一部の党組織には入党者の数を追う傾向があり、多くの地方委員会、市委員会、地区委員会は、党に採用される者の構成を十分検討せず、党の拡大を規制することにしかるべき注意を払っていなかった。都市の党組織では新入党者のなかに主導的な職種の労働者がすくなく、農村の党組織ではコルホーズ員、トラクター手、コンバイン手のすくないことが珍しくなかった。

党中央委員会は、党採用のさい個人的に選抜する原則を厳守するのを保障するために、いくつかの措置をとるよう指令した。入党申込書をいちいち慎重に検討し注意ぶかく審査すること、工業企業では主導的な職種の労働者と技術者、農村ではコルホーズ員、トラクター手やコンバイン手、インテリゲンツィアを選抜して入党させるようとくに注意することがそれであった。州委員

会、地方委員会、連邦構成共和国共産党中央委員会には、党組織の拡大を系統的に監督し、党員採用問題を定期的に審議する義務が負わされた。

党組織には、若い党員のボリシェヴィキ的教育をつよめ、入党希望者の真剣なテストとしての候補期間の意義を高めるよう、指令が出された。党組織は、候補者の政治的な資質と実務的な資質の点検を保障し、彼らが党の綱領、規約、政策を熟知するのを助けなければならなかった。

第一八回大会後、党組織は党員の思想的・政治的教育をつよめ、党の宣伝を改善した。党教育の基礎には、大会の決定や党史の研究がおかれた。とくに留意されたのは、党の指導的幹部の思想的・理論的養成であった。党の働き手の養成と再教育のために、学校・講習会網が大幅に拡大された。党史の研究は、マルクス＝レーニン主義の古典的著作にたいする関心を非常に高めた。党中央委員会は、これを考慮して、マルクス＝レーニン主義文献の出版を大幅にふやした。

戦争の直前に、党は約四〇〇万人を擁する強大な組織であった。党は、ソヴェト国家、ソヴェト国民の全生活と全活動を、社会主義の建設の完了をめざす彼らのたたかいを指導していた。

要　約

一九三七―一九四一年に、ソ連邦は、社会主義の建設を完了して共産主義に徐々に移ってゆく段階にはいった。

党、政府、国民は、ソ連邦の基本的な経済課題――人口一人当たりの生産高でもっとも先進的な資本主義諸国に追いつき、さらにこれを追いこすという課題の解決に着手した。このことは、

国の工業力の強化、コルホーズ制度の発展と強化、勤労者の生活水準および文化水準の向上となって現われた。

党は、新しい課題と、社会主義社会の建設を完了する状況にふさわしい組織上の活動形態をさだめ、第三次五ヵ年計画の遂行をめざすたたかいに国民を奮起させた。

ソヴェト国家を強化するために大活動がおこなわれた。労農同盟はさらに強固になり、ソ連邦諸民族の友好は強まった。ソヴェト国家の西部国境にソヴェト諸共和国が創設されて、それがソ連邦に加盟したことは、これらの共和国の国民が歴史的発展の新しい段階にはいったことを意味し、ソ連邦の政治経済力および軍事力の強化にあずかって力があった。この時期には、ソ連邦、とくに民族ソヴェト諸共和国で文化革命を実現するうえで大成功がおさめられた。

ソ連邦で社会主義が勝利したことは、社会主義の強化と発展をめざす、全国民の創意の大躍進を生んだ。党は、大衆の創造的積極性の先頭に立ち、新しいソ連邦憲法にもとづいてソヴェト民主主義を拡大するために一連の措置を講じた。国家の生活のあらゆる面で党の指導的役割はいっそう高まった。社会主義社会の発展と国防態勢は、党生活のレーニン的基準と社会主義的法秩序が無法に犯されなかったなら、もっと着実にすすんだであろう。

当時の国際情勢の特徴は、資本主義の一般的危機の激化、ファシスト国家の侵略の拡大、第二次世界大戦の始まり、対ソ戦争の危険の増大であった。党とソヴェト国家は、戦争を未然に防ぐために全力をつくした。ソ連邦は、ファシスト侵略にたいする集団的な反撃を組織するために積極的な闘争をくりひろげた。だが戦争を未然に防ぐことは、ソ連邦にかかっていただけでなく、他の多くの国家にもかかっていたのに、これらの国家はこの点でソ連邦を支援しなかった。対ソ

戦争の危険がましたので、国防を強化する課題がとくにさしせまったものになった。党と国民はこの課題を解決するために奮闘した。

ソ連邦共産党史（2）

一九七二年一二月一六日第一刷発行

定価はカバーに表示してあります

訳者© ソ連邦共産党史翻訳委員会

東京都文京区本郷二丁目十一番九号
発行者 小林直衛

東京都新宿区水道町二十九番地
印刷者 山元正宜

発行所 東京都文京区本郷二ノ十一ノ九 株式会社 大月書店
電話(813)四六五一(代表)
振替東京一六三八七

落丁・乱丁本はお取替いたします

三晃印刷・田中製本

学習文庫

マルクス=レーニン主義の古典で一番よく読まれている本

文庫名	文庫番号	定価
共産党宣言 共産主義の原理	1	90
空想から科学へ	2	110
経済学批判	4	300
ドイツ・イデオロギー	6	140
自然の弁証法(1)(2)	11ab	各240
家族、私有財産 および国家の起源	12	170
フォイエルバッハ論	14	100
ゴータ綱領批判 エルフルト綱領批判	15	100
婦人論	16	100
労働組合論	17	130
反デューリング論(1)(2)	19ab	各300
文学・芸術論	20	120
賃金、価格、利潤	21	80
賃労働と資本	22	70
フランスにおける 階級闘争	24	160
資本論(1)〜(9)	25	揃価 2850
資本主義的生産に 先行する諸形態	28	130
マルクス=エンゲルス= マルクス主義(1)(2)(3)	101 abc	a 150 b 200 c 180
国家と革命	102	120
帝国主義論	103	180

文庫名	文庫番号	定価
民族自決権について	104	140
共産主義における 「左翼」小児病	105	110
民主主義革命における 社会民主党の二つの戦術	106	180
プロレタリア革命と 背教者カウツキー	107	150
なにをなすべきか?	110	320
第二インタ ナショナルの崩壊	113	200
社会主義と戦争	115	200
唯物論と経験批判論(1)(2)	116ab	a 160 b 180
帝国主義と 民族・植民地問題	118	130
一歩前進、二歩後退	119	200
貧農に訴える	121	80
青年論	124	150
人民の友とはなにか	125	200
哲学ノート(1)(2)	127ab	各320
カール・マルクス	128	160
さしせまる破局、 それとどうたたかうか	129	180
宣伝・扇動(1)(2)	136ab	各240
弁証法の問題について	137	300
反ファシズム統一戦線	425	240



国民文庫
=
435b